女子文壇

第二巻第六號

明治三十九年五月一日發行（毎月一回）
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

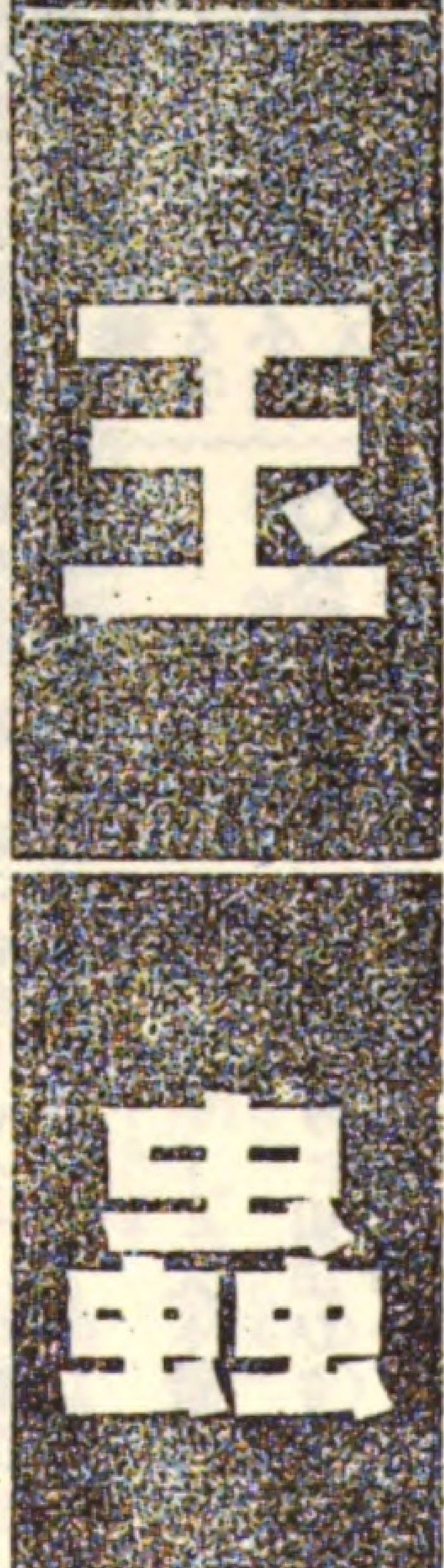


女子詩文の新模範

最新刊豫告

河井醉茗先生著

詩と美文



（五月五日發賣）

活きたる眼を開いて活きたる書物を讀めとは、古人も曰ひましたが、本書の如きは活きたる詩人の生命です。一字一句にも作者の胸に觸れた感興の響があつて、本書の何頁を開いても、感興の活動して居ない處はありません。作者が純潔なる理想を、淸らかな美文と、優しい詩とに表はしたもので、もと〳〵女性の讀み物として編輯したものですから、美文や詩に志ある女子には、此上新しい摸範はなく、單に家庭の讀み物としても、外に類はありません。新躰詩二十五篇、美文二十六篇を收めて、躰裁は本綴、最新式の意匠を用ゐ、諸孃の机上に飾られても、決してはづかしくない文學書です。

全一册　中判上等紙印刷　本綴金字入上製美本

正價六拾錢　直接注文に限り郵税申受けず

目次

發兌元　東京京橋大鋸町十一　電話本局＝六〇七番　**女子文壇社**

▲大賣捌＝東京堂、北隆館、東海堂、上田屋、良明堂、各店

家庭新讀本

毎號皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

第二巻第六號目次

來る十五日には女子文壇第七號(増刊たちばな月)發行す

●東北凶作地義捐金送達謝狀

諸嬢から御寄せ下さいました義捐金總額六十圓也を三縣下に等分して送達しました結果各縣知事から社主に宛ての謝狀が参りましたから其寫しを左に紹介し同時に本社からも厚く諸嬢に御禮を申上ます

女子文壇社

拜啓凶作地方窮民救恤トシテ貴社發行ノ雜誌購讀者中ヨリ寄贈セラレタル金貳拾圓也御取纏御送付相成正ニ受領致候御厚情ノ段縣下幾多窮民ノ爲メ塞ニ感佩ノ至ニ不堪候尚乍御手數寄贈者諸氏ヘ可然御傳聲被成下度御依賴旁受領證ヲ兼御挨拶迄如斯ニ御座候敬具

明治三十九年三月二十七日　宮城縣知事　龜井英三郎

女子文壇社主　野口竹次郎殿

拜啓凶作地方罹災民ニ對シ深厚ナル同情ヲ寄セラレ救濟ノ料トシテ貴社募集ニ係ル金圓(金貳拾圓也)御寄贈ヲ辱フシ御高志ノ程不堪感謝候夫々救濟ノ途ニ充テ以テ御寄贈ノ趣旨ニ副ヒ候樣取計可申右御挨拶迄呈寸楮表謝意候敬具

明治三十九年三月二十九日　福島縣知事　有田義資

女子文壇社主　野口竹次郎殿

拜啓陳者縣下非常凶歉ノ狀況ヲ御洞察ノ上窮民救恤トシテ汎ク女子文壇讀者ニ募集セラレタル金員(金貳拾圓也)御寄送相成貴社御斡旋ノ勞及篤志者ノ芳志忝ク存候目下縣ニ於テモ夫々救濟方法相立居候場合ニ付御趣意ヲ達スル樣可取計候間可然御致聲相煩ハシ度別紙受領證相添不取敢御挨拶迄如斯御座候敬具

明治三十九年三月三十日　巖手縣知事　押川則吉

女子文壇社主　野口竹次郎殿

○懸賞『新歌謠』募集

「咲いた櫻になぜ駒つなぐ、駒が勇めば花が散る」は何時に誰がうたひ初めたか知らぬが、今猶ほ人口に膾炙して詩味捨て難いものがある、俚歌童謠の類に我等を感服せしむる名作ある事は、往々見る處で、中には野卑淫奔な作もある爲に、俗謠として一概に排斥されるが、歌う處さへ高ければ決して捨てたものでない、記者茲に感ずる處あつて清く新しき新歌謠を讀者諸嬢に募る、形は右の咲いた櫻式でもよろしい、從來の都々逸や端唄を離れて別に一個の新詩國を拓きたいと思ひます、大體の規則を左の通り定めます。

▲懸賞方法は新躰詩和歌俳句などゝ同じこと▲必ず半紙に認めること▲一人三首以下に限る▲新歌謠と書き添へるのを忘れないこと▲紙上の變名匿名は凡て自由のこと等。

五月　女子文壇社編輯局

此新課題を御覽下さい……女子文壇愛讀者へ

女子文壇愛讀諸嬢の精讀を望む

國文學專攻 小森松風先生編著

全部十二冊每編讀切

女子文學

月一冊發刊洋装美本

根本を和漢洋の三文學に置き、體裁を最新式の編纂法に據り、女子の爲めに**文藝獨習**の心強き**手引**となるものは本書なり**全部十二卷之を座右に具へ置け**ば**文藝上の智識は嚢中に物を探るが如く、名作雄篇を成す**に**無比の重寶**たらむ、敢て天下の諸嬢に此良書を推薦す。

全部概目
（卅九年五月ヨリ出版）

◉全部拾二冊＝紙數二千五百頁以上＝每編大判二百頁以上各讀切

◉都合に依り豫告と多少の相違することあり、發刊都度新聞に廣告す

女子文學 正價 壹冊金參拾錢◉三冊前金八拾五錢◉六冊前金壹圓六拾錢外郵税一冊四錢◉全部拾二冊前金拂込は金參圓 郵税四十八錢不要

國文學專攻 小森松風先生著

女子文學＝第壹編（五月中旬發刊）

美文作法

全一冊 大判二百頁以上 價三十錢 郵税四錢

附錄 古今名家美文範

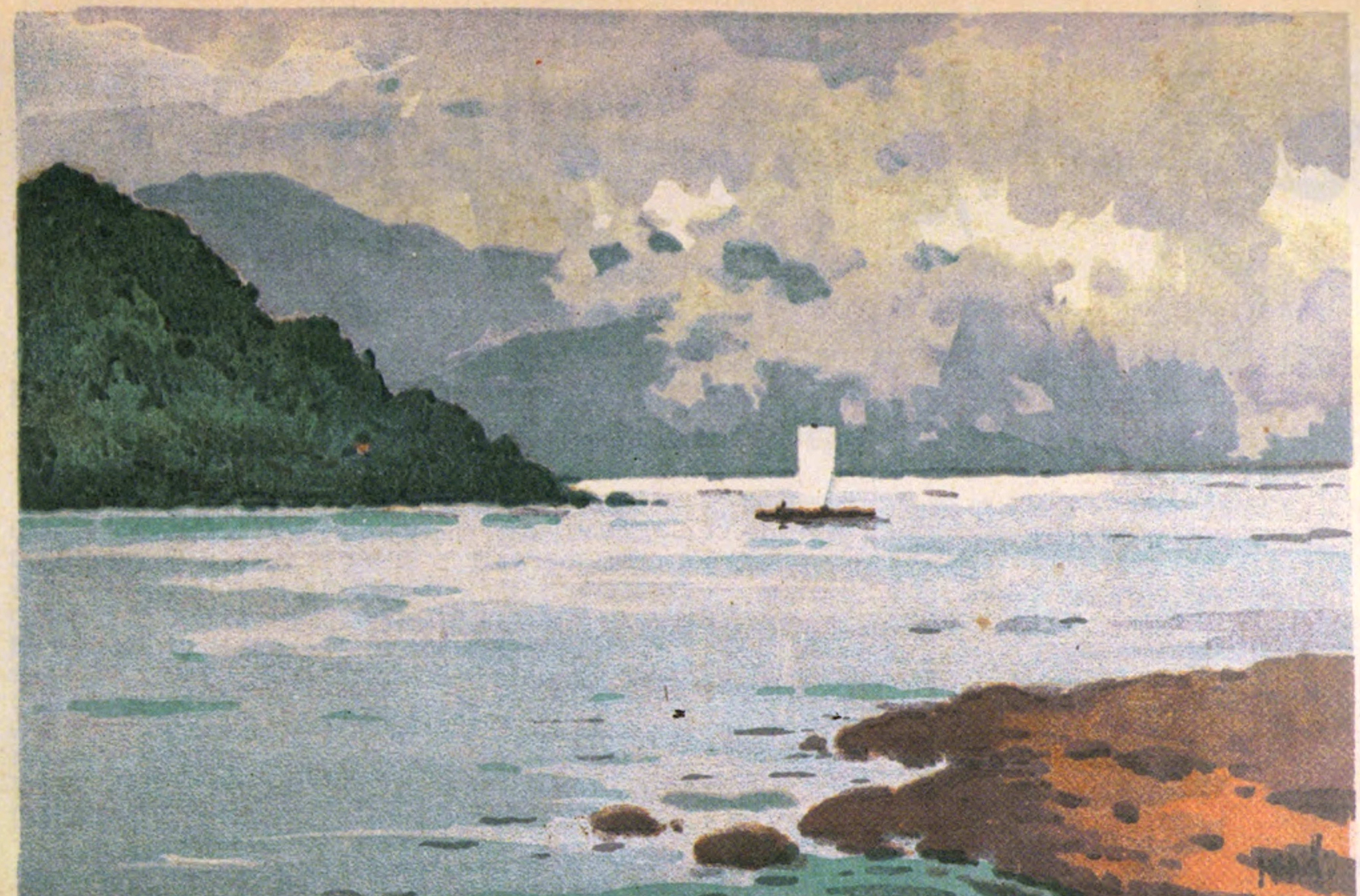
本書は著者が、現今の女子の文學趣味を鼓吹せんの考にて女子師範、高等女學校其他各種の女學校に於て、最も困難を感ずる文章の作法を懇切に説明指導せられたるものなれば明治の女學生に取りては、實に坐右の寶典なり

出版元 東京京橋大鋸町十 （電話本局六百七番） 女子文壇社

賣捌所 東京堂。北隆館。東海堂。上田屋。良明堂。其他全國雜誌書店

文藝獨習の良手引

駿州江の浦



三宅克己先生筆

小網工廠石印

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥顯る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグネシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的舊式賣藥)のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を强壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絕し無病強健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

(藥價) 壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入美容料 肉體

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に**變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製分壹圓七拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の**大盛**を奏み近時續々怪しき無効なる**類似偽藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢送金即刻送藥す
郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房** (電話下谷五四六番)



（所在　淺草區七軒町）

東京府立第一高等女學校卒業生並職員　（明治三十九年）



（所在 麴町區四番町）

三輪田高等女學校卒業生並職員 （明治三十九年）



（所在本郷區弓町二丁目）

女子美術學校卒業生並職員　（明治三十九年）



淑德女學校卒業生並職員　（明治三十九年）

（所在小石川區表町）

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

婦人實業の手引 （全一冊定價廿錢郵稅四錢）

新撰 女子就業案内

現時吾が國に於ける婦女子の境遇は舊來の男尊女卑の弊風を離れ徒食隨從の愚を採らず各自立の策を講ずるに勤めつゝあるやの觀ありこれ小にしては一家の基礎を固め大にしては富國の大本と成るべき極めて善美の現象と云ふべし、然れども未だ完全なる之れが手引を爲すべき良書あるなきが爲めに或は高等小學を了へ高等女學校を卒へ或は婦となり寡となり各實業に就かんと志すにも拘らず其途を講ずるに由なく遂に屈從の愚を弄ぶに至る弊堂夙に大に之を憂ひ客歳中より其專門の士に乞ふて材料を蒐集し加ふるに尾崎市長上田博士を初めとし其他知名大家の譚叢を卷尾に附して一編となし茲に漸く上梓するの運びに至る江湖の姉妹諸子よ願くは一本を購ふて此有益なる寶典を空ふするなからんことを

本書が收むる處の目次の大要左の如し

獨立的職業……看護婦、女敎師、女醫者、助產婦、
處女的職業……諸官衙事務員、銀行會社傭員、
副業的職業……編物、刺繡、造花、
新職業……婦人記者、寫眞師、速記者、音樂敎師、料理番、店賣子、其他

附錄名家叢論

女子と實業　尾崎行雄君
女子の新職業　上田萬年君
女醫修業　鷲山彌生君
女子海外渡航便宜法　安部磯雄君
附在米婦人成功者、女子渡米の獎勵

發兌元 東京本鄉 妻戀坂上 便利堂 電話下谷 二八七番 賣捌所 東京堂、至誠堂、上田屋 文榮閣、東海堂、北隆館

受驗者必携 （前編後編合本一冊金廿錢郵稅二錢）

新撰 歷史地理答案集

入學試驗の期迫れり機逸すべからず本書は現に東京府立第二中學に敎鞭を執る中原先生が三十餘校の最近年度に於ける試驗問題中地理歷史の兩科に對し懇切に解答を附し以て新なる受驗者の參考に供せんとせられたるものなれば此際必ず入學及第の榮を得賜はんことを座右に一本を供へて

發兌元 東京本鄉 妻戀坂上 便利堂 電話下谷 二八七番 賣捌所 東京堂、至誠堂、上田屋 文榮閣、東海堂、北隆館

便利堂新刊エハガキ御披露

水彩 四季の富士　三宅克己先生筆　四枚一組 金二十錢

水彩 東都の花　仝上　三枚一組 金十二錢

水彩 廣島　三宅克己先生筆　四枚一組 金二十錢

水彩 月と雲　仝上　六枚一組 金廿五錢

時局諷刺 ひさし髮　北澤樂天先生筆　四枚一組 金十六錢

音樂ハガキ　六窓隱士案　六枚一組 金廿五錢

右新刊此雜誌の廣告に仍り御注文被下候旨附記の御方樣に限り定價の壹割五分引を以て拜送仕候

御婦人樣方の御使用に最好適の繪はがき

日本 女裝沿革　梶田半古畫伯筆　六枚一組 金三十錢

婦人の半世　富岡永洗畫伯絕筆　六枚一組 金三十錢

日本四季美人　市川秀方女史筆　四枚一組 金二十錢

右此雜誌の廣告に仍り御注文被下候趣御附記の御方樣に限り定價の三割引を以て拜送仕候

內外各國繪はがき問屋 東京本鄉 妻戀坂上 便利堂エハガキ部 電話下谷 二八七

新學期開始

●會員大募集目下入會の最好機なり

四月廿日第一號發行

▲事情があつて高等女學校に入る事が出來ぬ人の爲めに『女學講義錄』を發行し僅に一ヶ年間に高等女學校程度の敎育を完全に正則に授けます

▲世間の講義錄は乾燥無味で面白味がありません。本會講義錄は此點に注意し、諸學科の講義何れも面白く極めて分り易いやうにし、且つ有趣有益なる數十頁の雜錄の外に、美くしい家庭小說を每號附錄とします

▲本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ敎育に充分經驗のある方のみです、講義は只親切と云ふ事を主とし丁寧懇篤に說いてありますから本會々員の親しく講師の膝下に在りて講義を聞かれると同じ事です

▲本會講義錄は右に述べし通り最も完全したものでありますが會費は極めて少額で都合一ヶ月の遊學費で優に全期を終はる事ができます。

大日本淑女學會

高等女學校程度の講義錄發行

批評一斑

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

▲每日新聞評　米國の通信敎授法を參酌せるもの文字平易說明懇篤を盡くせり

▲二六新聞評　高等女學校の全科程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

▲日々新聞評　講義は總べて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

▲都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

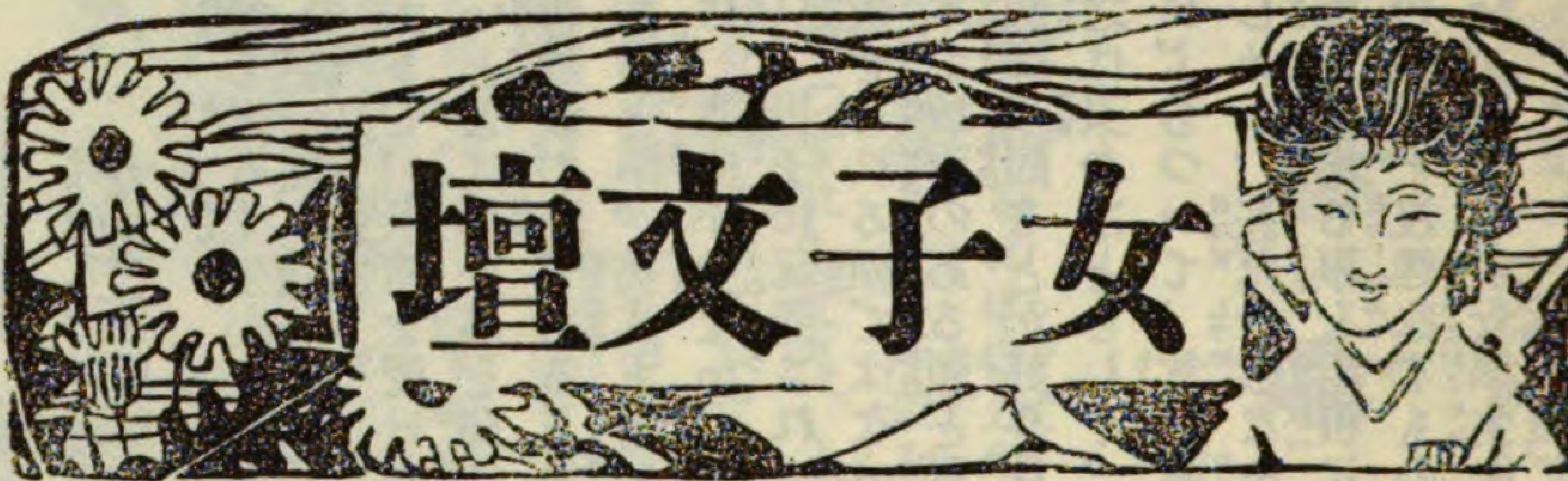
▲報知新聞評　講義錄多しと雖も實益と趣味と併て有する事斯くの如きは稀也

上揭の批評を御覽にならば本會講義錄の眞價がお分りになりませう

▲本會規則書▼

端書にて申越あれば直に郵送す可し

◎東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）　大日本淑女學會





動搖せる時代

能く過渡時代と云ふ事を言ひますが換言て見れば、動搖せる時代の事です。日露戰爭と云ふ日本初まつて以來の大動搖があつて、我國民の思想界にも甚だ變調を來しました、例へば死生問題と云ふ事から、引いて宗教問題に移り、彼方此方に自稱聖人や、自稱神佛が現はれるやうな風に、兎に角我思想界が甚しく動搖して居る事は事實です。其處で、諸孃に直接の關係ある女子の學問、乃ち女學生問題と云ふ事も、亦動搖せる思想界の一つの現象で、諸孃が何う云ふ風に學問をしたものか、誰の說に據つて方針を立てたものかと、迷うて居られるのも、之れ亦動搖して居る一つの證據で、斯う云ふ時代には、餘程確乎たる精神を抱いて居らぬと、其動搖の爲に眼が昏んだり、刎飛ばされたり、狼狽たりするものです。時代の動搖は進步を意味して居りますから、決して忌むべき譯はありません。只堅牢つてない線路を走る電車は、ぐらつき方が烈しいのと同じ道理で、時代の根本思想がぐら〳〵して居る間は、凡ての人の動搖も烈しい。諸孃は此間に處して、時代の動搖と云ふ事を能く頭惱に置て、一方の人の言ふ事ばかりを信じないやうに、大勢のある處を自覺して、進む方へは迷はずに進んで頂きたい。

女學生の表情

曾て或る先生から日本の女には意味の無い顔が多い、人形のやうな女ばかりで、教育を受けた顔は甚だ乏しいと言はれた事を聞きましたが、成程藝妓の顔であるとか、町娘の顔であるとか、美人と稱せられる女の顔は、意味が少ない。愛嬌はあつても只、男子に玩弄されさうな顔で、尊敬せられる顔ではない、其反對に日本で教育のある顔と言へば、先づ女教師の顔などが好き見本であらうが之は又わざとらしく、教育が鼻の先にぶらついて、尊敬する前に恐縮せしめる、甚だ失敬な申分ですが、實際教育ある事を看板に示して居る女の顔ほど沒趣味なものはありますまい。此からの女學生は何んな顔になりませうか、今の處では一寸判斷がつきかねますが、確かに明治式の女の顔が出來てくるに相違ありません意味があつて、女らしい愛嬌を失はないと云ふ、甚だむづかしい容貌ですが、諸孃が無理に表情方を研究なさらないでも、自然に一種の型は出來ます。只、表情は努めて自然に、態と男を避けるやうな顔や、學問が鼻の尖にぶらついて居るやうな顔は餘り感服は出來ません。

造花と花語

簪の外には餘り用ゐなかつた造花は、近頃諸種の粧飾用、又は花環、花束の贈答等に盛んに用ゐられるやうになりました、隨つて造花を賣る店も多くなり、造花の手際も追々上手になるやうです、只此花環や花束を贈答するに就いては、其意味を心得て貰ひたいと思ひます。例へば、橙花は貞操を意味し、白百合は清淨を意味すると云ふやうに、何等かの意味に依りて、花の贈答をしたいと思ひます。

派手やかなれ

男子が書生の間から家庭論を上下したり、夫妻論を試みたりする事の無益であるやうに、女學生のうちから餘り理想の家庭などを描いて居るのは宜しくないと思ひます。少女の間は花の如く派手やかに、わか〳〵しく少女々々して居るのが眞個です。

無邪氣なる旅行

加納子爵の令孃國子(十六)八重子(十五)治子(十四)夏子(十三)の四人が今春、日光へ旅行を試みられたのは誠に面白い企書であります。旅行から得る知識は、學校や家庭で教はる知識より遙に實際的で、社交的で、今の婦人に欠けて居る知識を補ふには、差當り旅行などが最もよろしい。

譬喩法（一）

文學士　吉岡向陽

文を作るには自分の表はさうとする思想を最も善く人に通徹させる手段を考へなければならぬ。即ち天然をうつすにしても、人事を描くにしても、うつさうとする所、描かうとする所を殘り無く活現して、其情景を眼の前にちらつかせるやうにする方法を考へなければならぬ。其方法を講ずるのが文の修飾法で、私のここに述べようとする譬喩法は其中で最も屢々つかはれる最も有要なものである。

譬喩法とは或物事をそれに類似した他の物事と比較していふので、容の美しいといふことを「眉目畫くが如し」といひ、頭髪の白いといふことを「頭に雪を戴く」といふ類である。普通之を直喩法、暗喩法の二つに分ける。

直喩法とは或物事を明かに他の物事と比較するので文章は之が爲に明瞭を加へ、趣味を添へることになる。次の例を見よ。

イ、妻子合ふこと琴瑟を鼓するが如し。（詩經）

ロ、始めは處女の如くあれ、敵人戸を開かむ、終は脫兎の如くあれ、敵拒ぐに及ばじ。（孫子）

ハ、萬株の樹木頂におほひかゝりて、老龍の雲を出づるが如く、千峰の巖石脚の下に立ちならびて、猛虎の風に嘯くに似たり。（京傳）

ニ、かう、はあ、皎々と澄みきつた夜になると、虫の這ふまでが見えさうで、それでゐて、何よなあ、何だか水の底でも渡るやうで、さうかと思ふと、夢に宙でもあるくやうで、變に娑婆ばなれがして、物すごく、心持がぽつとすらあよ。なあ音。（鏡花）

ホ、世の中を何にたとへむ、朝びらき、漕ぐなる

舟のあとなきごとし。(萬葉集)

へ、蒲團着て寢たるすがたや東山。(嵐雪)

直喩には此等の例のやうに、多くは「如し」「似たり」「やうだ」又は「譬へば」「さながら」「あたかも」其他之に類した語を入れるのである。「白雲のこなたかなたに立ち別れ、心をぬさとくだく旅かな(古今集)」の「の」及び「と」、「思ひ川あふせまでとや水沫なす脆き命も消え殘りけむ(續古今集)」の「なす」はいづれも「の如き」又は「の如く」の意で、「白雲の」「ぬさと」「水沫なす」は矢張直喩である。

併し、かくの如くあらはにはことわらなくても、譬喩の意のおのづから明らかなものはなほ直喩である。例へば、

イ、毛先生一たび至りて趙をして九鼎大呂よりも重からしむ。(史記)

ロ、秦王の國累卵よりも危し。臣を得れば則ち安し。(史記)

ハ、疲馬は鞭箠を畏れず、弊民は刑法を畏れず。(鹽鐵論)

ニ、鹿を逐ふものは山を見ず、金を攫むものは人を見ず。(虛堂錄)

ホ、淵に臨んで魚を羨まんよりは退いて網を結ばんには如かず。今政に臨んで治を願ふこと七十餘歲、如かず、退いて更め化せんには。(漢書)

直喩法を用ひるには次の諸條に注意しなければならぬ。

一、なるべく種類の違つたものを選ばなければならぬ。「心搖々として懸旌の如し(史記)」の心と懸旌、「其山盤紆として羊腸の如し(春秋)」の山と羊腸のやうに、類似の點の見出せさうもない物事の間に類似の點を見出すので趣味が深いのである。同じ種類のものごとを譬に採つたのでは、徒らに同じ事を繰り返すことになつて、説明上少しの利益もないのである。

二、種類の違つたものを選ばなければならぬと共に又類似の點の容易に見出せるものを選ばなければなら

ぬ。阿房宮の賦の「管絃嘔々市人の言語の如し」などはこの規則に反いたものといはれてゐる。

三、なるべく普通性のものを選び、或所、或時、又は或社會に限つて通ずるやうなものは之を避けなければならぬ。私はいつぞや或人の文に「喜怒哀樂によつて顔色を變ずること、恰もカメレオンの周圍の狀態によつて體色を變ずるが如し」とあるのを見てカメレオンといふものがどうしても分らぬ、字書を繰つてやつと熱帶地方に住むとかげのやうな動物といふことを知つた。近頃の學者には殊に此弊があるやうであるが、こんな風ではせつかくの修飾も其甲斐が無く、學を衒ふものといはれても仕方があるまいと思ふ。

四、陳腐な譬は用ひないやうにしなければならぬ。たとひ巧妙な譬でも多年用ひ古されたものは却つて人に厭惡の念をおこさせるものである。「光陰矢の如し」とか、「人生朝露の如し」とかいふのは夫である。

五、意味を高める場合と低くする場合には適宜な譬を採らねばならぬ。古事記に八岐の大蛇の目をたとへて、「目は赤かゞちなして」とある。赤かゞちとは酸漿のことであるが、大蛇の目にたとへるにはあまり小さ過ぎはせぬかと思はれる。又漢書に「令を出だす、汗を出だすが如し、汗は出てて反らざる也。出して之を反す、是れ反行也」とある。凛たる王者の令を穢らしい汗にたとへたるもすこしく如何と思はれる。

六、直喩には右漢書の例のやうに、注を入れることがある。併しそれは已むを得ない場合に限り、又極めて簡明でなければならぬ。次の諸例についてそれを悟れ。

イ、人の君たるものは猶ほ盂の如き也。民は猶ほ水の如き也。盂方なれば水方也。盂圜なれば水圜也。(韓非子)

ロ、君子の過は日月の食の如し。過ちては人皆之を見る。更むるや人皆之を仰ぐ。(論語)

ハ、惡の易きや火の原を燎くが如し。郷ひ邇づくべからず、其れ猶ほ撲滅すべし。(書經)

七、譬は澤山に用ひてはならぬ。澤山に用ひれば、

文が單調になり、迂遠になり、浮華になつて、讀んで何等の印象も殘さないことになる。次の馬琴の文などは此弊に陷つたものである。譬も甚だ適切でない。

衣裳は垢つき破れたれども、肌膚は殘んの雪より白く、鬟梳るに由なけれども、緑鬢春花より芳ばし。細腰いよ〳〵痩せて、風に堪へざる柳の如く、玉指ます〳〵細りて、色に惱める筝に似たり。

以上七つの外直喩を用ひるに注意すべきことはいろいろあらうけれども、主なものはこれで盡きて居ると考へる。之から次の暗喩法の説明にとりかゝらう。（未完）

かげろふ

（一女學生に示したる）

文學士　枯　林　生

かてひ朽ちたる塵塚の、
塵にまじりてあさみどり、
むらむら生ふる新草の、
葉末の露を命にて、
生ひ立ちそめしかげろふの、
なにうき事もあらなくに、
われと心につぶやきぬ、
『わが生ひたてる草村は、
たゞ一色のあさみどり、
なにの見るべきふしもなし、
かなたになびく雲の色、
近寄りて見ばさもこそは、
あるはくれなゐ或は青、
みどり紫こきまぜて、
げにうるはしきことならめ。
ダイアモンドと照りとほり、
彼處に光る數の珠、
黄金白金入りみだれ、
ルビーとひかり輝きて、
見る目まばゆきことならむ、
疾く行きて見むかの雲を、
いざ出でゝみむあの玉を』

＊　＊　＊　＊　＊

葉末にすがるかげろふは、
翅飛ぶべくはやなりて、
かよわき羽根をはぶきつゝ、
生ひたちにたる草村を、
浮かれ出てけりいろ〳〵の、
希望を胸に抱きつゝ、

＊　＊　＊　＊

焼けのこりたる切株の、
下に溜れる水吸ひて、
うち嘆きけりかげろふは、
『色よき雲と慕ひしは
塵埃を焼ける煙にて、
きらめく珠とながめしは、
糞溺を覆ふ死なり、
吹きくる風は塵にみち、
虚僞の香はみなぎりぬ、
あな厭はしのうつし世や、
雲と悦び珠とみし、
外觀の夢は醒めはてゝ、
清き草葉の露を吸ひ、
ゆたかなる日に生ひたちし、
昔の園ぞなつかしき、
塵に染まらぬ新草の、
生ひさきこもる淺みどり、
昔の園ぞなつかしき』

＊　＊　＊　＊

むかし慕ひてかげろふの、
ふたゝびもとの草村に、
かへらむものとあせれども、
時の御垣は隔てけり。

國文評釋

文學士　中内蝶二

土佐日記（三）

○

廿七日、大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。かくあるうちに、京にて生れたりし女子、こゝにして、俄に失せにしかば、この頃のいて立ち、いそぎを見れど、何事も

えいはず、京へ歸るに、をんな子のなきのみぞ悲しみ戀ふる。ある人々もえ堪へず。この間に、ある人の書きて出だせる歌、

都へとおもふも物のかなしきは
　かへらぬ人のあればなりけり

《釋義》　大津　土佐國長岡郡に在り○浦戸　同じく吾川郡にありて、大津よりは南の方三里ばかりこゝより外海に出づるなり○かくあるうちに　かく旅だゝんと支度する間に○京にて生れたる云々　貫之が土佐國に赴任する前、都にて生れたる女の子、この國にて、急病にて死去せしかばとの意にてこゝにしてとは、此大津にてと云ふ義にてはなく、この土佐國にてとの意なり○この頃いで立ち云々　都への旅立ちに準備は急げど、氣が欝して何事も手につかず○をんな子のなきのみぞ云々　女の子の死にたるばかりを嘆き慕ふ○ある人々もえ堪へず　其子の父母ばかりにてはなく、其處に在る人々、何れも哀れに思ひて、悲しみに堪へず○ある人の書きて云々　ある人とは貫之自身の事なり○都へとおもふも云々　此歌の意は、これより都へ歸らんと思ふにつけても、嬉しき事はなくして、かく悲しく感ぜらるゝは、死して歸らぬ女の子があればなりとなり。

また、ある時には、

あるものと忘れつゝ猶なき人を
　いづらと問ふぞ悲しかりける

《釋義》　あるものと云々　此歌の意は、最早死にて亡きものを、矢張り此世に在るものと思ひ、死にたる事を忘れて、彼の死にたる子の名を呼び、何處に居るぞと問ふ事のあるは、悲しき限りなりとの義にて、いづらとは、何處、いづれなど云ふに同じ。

《評論》　以上は、此日記の主眼とも稱すべきものなり。貫之任を南海の僻陬に受け、洛陽の天をあくがるゝ事茲に四歳任、漸く果てゝ、再び都に還らんとすその愉、その快いかばかりぞや。志かも貫之夫妻に取りては、この行さまでの愉快を感ぜず、却つて心欝

鬱として、悲嘆の極に沈淪するもの、これ全く愛女を失ひて伴ひ歸るによしなきが故のみ、こゝに擧げたる二首の歌の如き、すら〳〵として、辭句に彫琢の痕はなけれど、誦して之を味ふ時は、言外無限の情を含みて、一字一句、無量の涙を湛へ、子をおもふ人の親の感慨、そゞろに讀者をして同情の涙に禁へざらしむ。

○

かくて、宇多の松原を行き過ぐ。その松の數いくそばく、いく千歳經たりと知らず。本ごとに浪うちよせ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。おもしろしと見るに堪へずして、船人のよめる歌、

見わたせば松のうれ毎にすむ鶴は
千代のどちとぞ思ふべらなる

とや。この歌は、ところを見るにえまさらず。

（釋義） 宇田の松原 土佐國香美郡に在り、三島村久枝山より夜須村手結の磯近傍まで、凡そ二里ばかり打續きたる松原ならんと云へど、今は古松枯れ盡して、當時の面影を止めず○いくそばく 數の多き意にて、其數幾千本なるを知らずとなり○本ごとに云々 松の根本毎に浪がうちかゝる○飛びかふ 飛び違ふと云ふに同じ○船人 實は貫之自身なり○見わたせば云々 歌の大意は、宇多の松原を見わたせば、其松の梢々に住む鶴の、如何にも心のどかに睦ましげなり。これは蓋し、鶴も千年、松も千年、互に千歳の久しきを保つ友達同士とおもひ居れるによりてならんとの義にて、うれとは通俗うらと云ふに等しく、梢のこと、又どちとは互ひに同じ類、又、べらとはべきと云ふに同じ○とや 自分のよみたる歌を舟人のやうに書きたれば、わざととかやと書きたるなり○この歌は云々 此歌は景色の佳なるに比して、遙かに劣れりとなり。

（評論）文は極めて簡なれど、一帶の白砂青松連なる處、寄りては返る波、汀を洗ひ、千歳の鶴の梢に群れ飛ぶ、景致、僅かに『本ごとに浪うちよせ、枝ご

とに鶴ぞ飛びかふ』の二句の中に形容し盡されて、さながら一幅の畵圖を見るの感あり。

かくあるを見つゝ漕ぎ行くまに〳〵、山も海も皆くれ、夜更けて、西東も見えずして、天氣の事、楫取の心にまかせつ。男子もならはぬは、いとも心ぼそし。まして、女は船底に頭をつきあてゝ、音をのみぞ泣く。かく思へど、舟子楫取は、舟歌うたひて、なにとも思へらず。

《釋義》 かくあるを見つゝ　此樣に佳き景色を見ながら漕ぎ行くに隨ひ、山も海も殘らず暮れて○天氣の事云々　明日の事など氣にかゝれど、天氣の見定めなどは、楫取の心まかせにしたり○男もならはぬは云々　男さへも斯かる船路に慣れぬ人は、非常に心細く感ぜらる○まして女は云々　女は尙更ら心弱きものなれば、船底に打伏して、聲を立てて泣くばかりなり○かく思へど　男も女も斯く心細く思へど○なにとも思へらず　何とも思ひ居らず、平氣なものなり。

《評論》例の簡潔なる文字にて、海路の心細さ、舟中の苦しみ、いと巧みに寫されたり。『山も海も皆くれ』の一句、先づ暮色蒼然として船に迫り、山眠り海眠りて、次第に暗澹たる黑幕の裡に覆はれ行くを見るべく、更に進みて『夜更けて西東も見えずして』となりては、實に心細さの限りを言ひ盡せり。それより進みて、舟中の苦痛を記す、女の泣く音と、平氣なる舟子等の歌と對照して、一段の情致加はるを覺ゆ。

そのうたふ歌、

春の野にてぞ、ねをば泣く。わが薄にて、手をきるきる、つんだる菜を、親やまほるらん、しうとめや食ふらん。かへらや。よんべの菜を、そらごとをして、おぎのりわざをして、錢も持てこず、おのれだに來ず。

《釋義》そのうたふ歌　舟子楫取の歌ふ歌なり○春の野にてぞ云々　春の野に出てゝ、聲を立てゝ泣き居る○わが薄にて云々　自分が薄にて手を傷

けながら、苦しき目をして摘みたる菜を、人が來りて持ち行きたり○親やまほるらん　其子の親が食り食ふならんか○しうとめや食ふらん　又は姑が食ふならんか○かへらや　これは、船歌の音頭拍子にて、ヤンレナアなど云ふに同じ○よんべの菜を云々　折角摘みたる菜を、昨夜來りて、僞りを云ひて、代價も拂はず持ちゆきたるまゝ、今におき其錢を持ち來らず、又自分さへも來らず、さても憎い奴なりとの意にて、よんべとは、よべと云ふに同じく、昨夜の義。そらごととは虚言、または僞の義、おぎのりわざとは、代價を借りて物を買ふ事なり○此歌は、當時の鄙言にて作られ、言葉を省略したる處少なからねば、十分に其意を解し難き所あり隨つてまた、古來種々に解釋したる人あれども、先づは以上の解釋にて誤りなき考なり。但し土佐日記創見と云ふ書には『春の野にてぞ、音をばなくの發句は、其野に出てゝ、歎き居るさまなり。ねになくは、聲を立てゝ泣くことのみにあらず、當時は、打ちくどき歎くをも、皆、おしこめて云へり。さて其人の歎くを聞けば、若薄にて、斯くも手をきる〳〵辛うじて摘み來たる菜を、負にし置きて、もて歸りし、其うなゐが親や、うまき菜なりとたうべらん。其親の姑や食ふらん。ねたきものから、そはとまれ、其よべのうなゐ來れかし。彼のあたひの錢を乞ひとらん。今やがてと僞りて、そしらぬ顏に、今日も持て來ず。その錢なくば、來てもことわらんを、おのれだに來ずとなり。かへらやは、舟歌の拍子なるべし、まほるは、まゐほるにて、好み食ふ事にて、嗜むの字などにあたりて、粥をまゐる、菓子まゐりてなどのまゐにて、たうべる方のまゐなるを、まうほるとも、まほるとも云ひしなり。まゐほるのまほると約れるは、參出を、まてと云ふに同じ。さるはあがめたる語なれど、此句、親と云ふより云ひおろしたればまほるらんと謠はん、又似げなきにあらず。親やまゐらんの意なり。諸註、此まほるを、むさぼる意と思へるは非なり。おぎのりわざは、今も西國に

て、俗に乗打をするなど云ふ所を、沖を乗るとも云へり。もし此語むかしの儘の方言ならば、論なく此意をもて解くべし。さるは、よべのまゝにて、音もせず、よりつかぬを、沖のり業と云ひて、尤、舟子の歌にたよりある。貰、貸などの字を、おぎのりとよむ意ならんには、そら言をして、錢をもてこずと云ふにて足れるなり、殊更に、又、おぎのりわざをしてと重ね云ふべきにあらず。見わくべし云々』とあり、之も亦一説なれば、參考の爲に擧げ置く事とせり。

これならずおほかれど、書かず。これらを人の笑ふを聞きて、海はあれど、心はすこしなぎぬ。

〔釋義〕これならず云々　この他にも、歌ひし歌は多けれど、書き記さずとなり○これらを人の云々　是等の歌を、人々の面白がりて笑ふを聞き○海はあれど云々　海は浪高く立ち騷げども、懼ぢ恐れる心は、少しく靜まりたりとなり。なぎぬとは、普通風止み、浪平かになる時に用ふる言葉なれば、前の海はあれどと云ふ言葉に對して面白く用ひたるなり。

〔評論〕『海はあれど、心はなぎぬ』の一句、無量の妙味あり。宜しく味ふべし。（未完）

水繪の友（五）　かつみ

（色彩の說明）

『オヤ此度は水彩畵ですね。アー美いことこの色は何と申す色でしやう、何うもね繪を畵きませむと假令好い色だと思ひましても、第一色の名から知ら無いのですから何時も困るので御座います。本統に花野さん妾は御浦山敷のですよ、さうしてこの空の靑色は何と申すので御座いましやう』と艶子は今高子が描ける水彩畵を見て、一入羨望に堪へざるものゝ如し。高子は暫時微笑つゝありしが、艶子の問に對して次の如く親切に說明を與へたるなり。

『マー黑神さん貴女は左樣被仰いますが、色の事は誰方でも皆六ケ敷と被仰せいますよ。又妾が理窟張つた

事を申す樣で御座いますが、何うも今日迄の日本の人人は、色彩に付ての考は實に單純てありまして、赤と申しますれば唯紅と朱と位しか存じませむし、又青と申した處が綠色も青淺葱も又青て大變に雜駁なものでは御座いませむか。夫れが貴女水彩畫などて寫生を始めますと、その色の複雜なことは夫れは吃驚り致すばかりて、唯青と申しました處で其色彩の種類は、何程位あるか知れたものでは御座いません。今貴女が御尋になつたその色に致しましても解りますが、成程それも青には相違御座いませむが、先づ青にも一寸致した處で三通に分るとが出來ますね。日本の言葉では何うも申惡う御座いますから。原語(英語)て申しますとコバルト。プロシャンブルー。オルトラマリーン。この三通て御座います。勿論綠色は俗に一口に矢張青と申しますが、これは英語のブルーとは全く別てして、綠色は綠色て又この方にも澤山種類が御座います。

そこて前申上た三種の青に付て、簡單に説明を致ますすと、コバルトと申します色は青ても一番愉快な色で春の晴天の空の樣な色ですね、色が濃く深い樣でそれて何所にか輕い心持があるのですが、大層六ケ敷い面倒な色でしやう。次にオルトラマリーンと申す色は、先づ夏の空の色でコバルトより青味も餘程重く、濃く深い色なのです。日本繪具て群青とか申すのが此色ださうて御座います。夫れからプロシャンブルーと申すのは、淺葱色とても申すのでしやう、秋の稍深き季節から冬にかけての空合は、多くこの色て御座います。勿論これは唯その大體の區分に過ないのですが、未々詳細御話致せば隨分複雜なもので御座います。

エヽ、赤てずか、赤も隨分種類がある樣て御座います。同じ紅の內にも夫々と異た色があるやうてす。クリムソンレーキ。だのカーマイン。夫れから未だ其他にロースマダー。スカーレットレーキなどゝ、夫れは夫れは色の説明に六ケ敷のが御座います。クリムソンレーキ。とカーマイン。とは同樣な色て夫れて最早違ふので御座います。同じ紅てもクリムソンレーキの方は幾分か燻で居るかとも思ひます。未だ一々申上ると夫れは夫

れは容易ならぬことですから、最早この邊で止めますが、貴女緑色の内にも幾種類あるか知れたものでは御座いません、マー貴女その多くの色彩が原語で申すと一々其色の區別も解りますし、又其色の名を云へば直に眼に映つて來るのでありますが、何うも不便なのは却て日本語では何と申して宜敷やら、一向解らないので御座います。

日本などは昔から繪や模樣、マー圖案と云ふ樣な種類のものも隨分進むで居つたので御座ましやうが、夫れにも拘らず色彩の名稱も充分無いと云ふのは何と情け無いことでは御座いませむか。イヤ夫れはそれ〳〵專門の畫家圖案家の間には、何とか可然名稱もあるので御座いましやうが、世間一般の人々が一向夫等を心得ることの出來ぬと申しますのは、これは何うしても不都合かと存ます。大層理窟詰の樣ですが何うか貴女も一とつこれから繪を御始になつて、色彩のことは勿論のこと、其他未だ種々樣々な新しき事柄を御研究なさるやうに御勸め申します。』

食後夜話集（一）

矢田挿雲

はしがき

少女諸君、私は始めてお目に掛ります、皆さんは既に本誌に於て色々の先生方から色々の利益に成るお噺を聞いてお居でせうから私が今更ら入釜ましいお噺を申上げる必要は有りません、私は只だ皆さんが夜食後打寄りて樂しく話を成さらうと云ふ時分の話の種子を少しづゝ差上げやうと思ふのです、皆さんがお讀みに成つて幾分でも面白いと感じられゝば夫で宜しいのです、萬一面白い中に修身上の補助に成る點が有りましたなら夫こそ勿怪の幸と云ふものです

一、王樣と菓子

むかし〳〵英蘭に亞留布烈土と申す善い王樣が有りました、どんな王樣と云へども決して此の方の樣に國の爲めに盡された方は有りませんので其の國の人々は今日でも亞留布烈土大王と尊稱して居ります。

其頃は軍ばかり續いて居りましたが亞留布烈土は仲々

軍が上手で度々丁抹と申す强い國の兵士と戰ひました互に勝負が有りましたが遂々丁抹の方が勝を占めて英蘭の兵士は散り〳〵バラ〳〵に成りました、王樣も只一人で命から〳〵森や沼地を潜み乍ら何處と云ふ目的も無く落ちて行かれます。

其の日の暮れ方に樵小屋の前へ出られました時分にはモウ疲れ切つてお腹が空いて一歩も歩け無く成りましたから樵小屋のお髮さんに何でも宜いから喰べさして下さい、升して何處の隅でも宜いから私を一晩泊めて呉れませんかと賴みました、お髮は丁度曲突の上で菓子を燒いて居ましたが此樣子を見て憐れに思ひ王樣とは露知らず、

「オー佳し〳〵、此方へ這入つて此の菓子を見て、お呉れ、其の間にお前さんの晩飯を取つて來て上げるから」

と申して母屋の方へ參りました、亞留布烈土大王は始めは菓子の番をする積りで有つたが何時か知ら種々の事を考え出しました、如何して以前の樣に自分の軍隊を集めやうか、如何して丁抹人を英蘭から追ひ出して遣らうか、抔と飢も疲れも忘れ、自分は今樵小屋に居るのだと云ふ事も忘れ菓子の焦げるのも忘れ何も彼も忘れ果てゝ唯だ〳〵夜が明けたらアヽ爲やう斯う爲やうと云ふ事のみ考えて居ました。

暫くするとお髮さんが戾つて來て菓子が燻ぶつて居るのを見るや否や非常に立腹して、

「此の怠慢者奴！お前は飯を喰はして貰ふのは好いが働くのは厭だと云ふのだらう」

と焦げた菓子同樣まッ黑に成つて怒鳴り散しました、書物に依つては其の時お髮さんが腹立ち紛れに此の王樣をば棒で叩いたと書て有りますが、マサカ夫れ程でも無いにしても怒つた事は非常に怒つたのでせう、王樣も始めて氣が附いて心中おかしくて堪りません、一寸した不注意から王樣は其晩樵の家を追出され寐牀も無い所で物も喰はずに一夜を明されました、併し間も無く手下の軍勢を集て大戰爭の結果丁抹人に勝ました。

二、王樣と乞食

矢張り此王樣が丁抹人と戰つて負けた時分暫く或る川の中島へ隱れて居た事が有ります、此の中島と申すは漁村で有つて或る日例の如く島の者は皆な獵をしに川へ出て終ひました、王樣の家には皇后と從僕とが居るのみで何と無く物淋しく思はれましたが晝頃に一人の

乞食が遣つて來て何か下さいと賴みますので、王樣は從僕を呼んで、

「何か喰べ物が有つたらうか」

とお尋ねに成りますと、從僕は、

「麵麭が一と塊に酒が少々有る許りです」

と申しました、王樣は大層悅んで、

「ぢやア麵麭も酒も半分づゝ此の哀れな者に遣れ」

と申されました、從僕は吩附られた通り半分づゝ乞食に配けて遣つたところ乞食は幾度も〱禮を述べて歸つて行きました。午後には漁舟が皆戾つて參りましたが其の日は是迄に無い大獵だと申す事で島中の大悅び王樣も是を見て心から嬉しく思はれました。

夜床に入つてから王樣は永いこと睡らずに其日の出來事を考へ始めましたが終に夢とも現とも別かず眼の前に太陽の樣な大きな火の玉が顯れました、能く見ると火の玉の中に髮の毛の眞ッ黑な老人が手に讀みかけの本を開いた儘突ッ立て居ます、多分夫は夢で有つたのでせうけれど王樣は自分が未だ睡りはしない積りですから實際其の樣な老人が出て來た事と思ふて不思議で堪りません。

「貴方は誰ですか」

と聞くと老人は

「我子亞留布烈土よ、大膽なれ、我は先刻乞食と成りて汝の家に行きし者なり、心を落ち着けて我が云ふ事を聞け、明朝早く起き出で丶丁抹人の耳も裂けん許りに角笛を吹けよ(角笛は昔の軍隊の喇叭です)然る時は九時に汝の兵士五百人集まり來る可し、進め、七日を出でずして汝の敵は破れ汝は安全に故の王國に歸るを得べし」

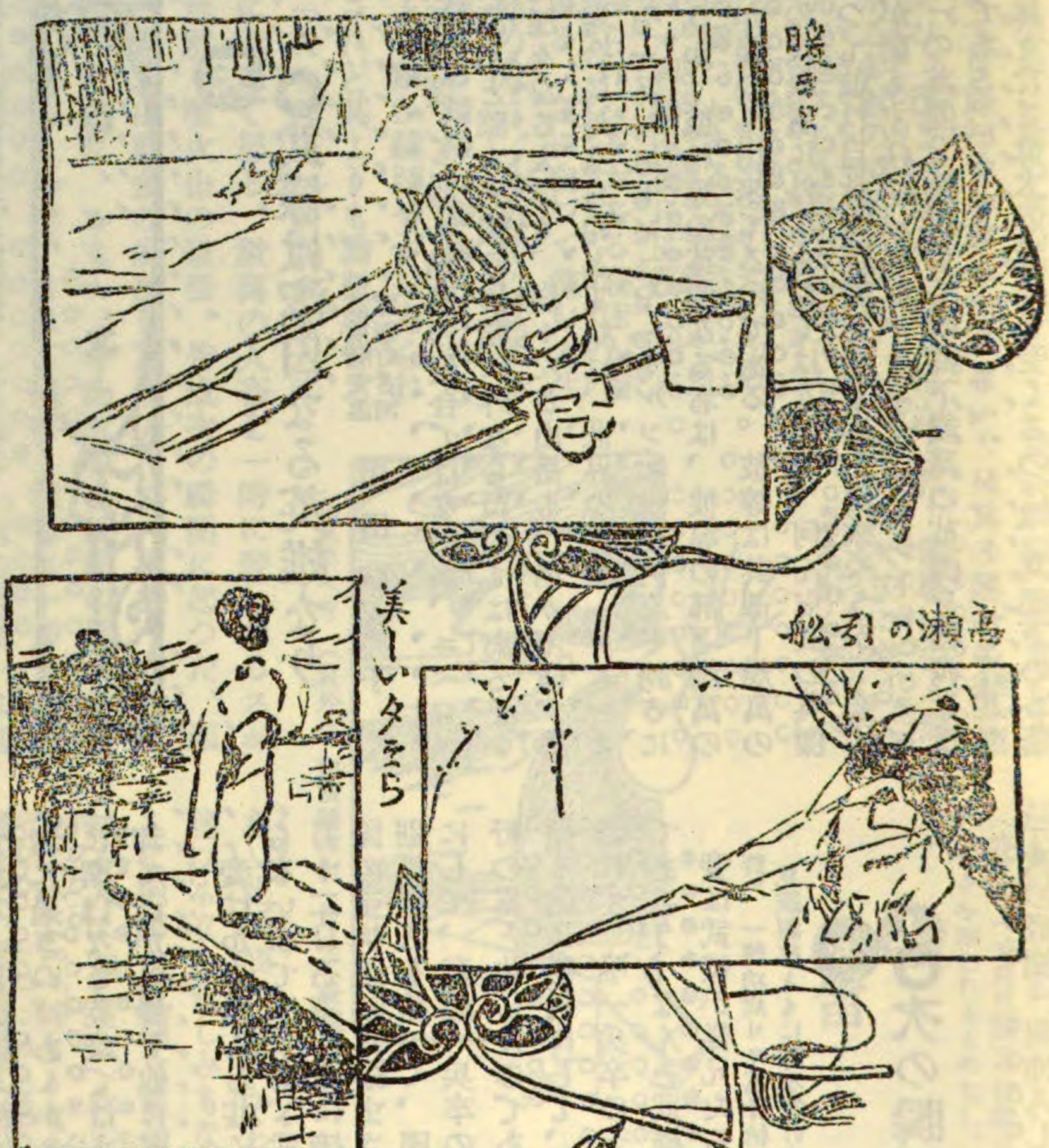
と云かと思ふと火は消て人も見えなく成ました。

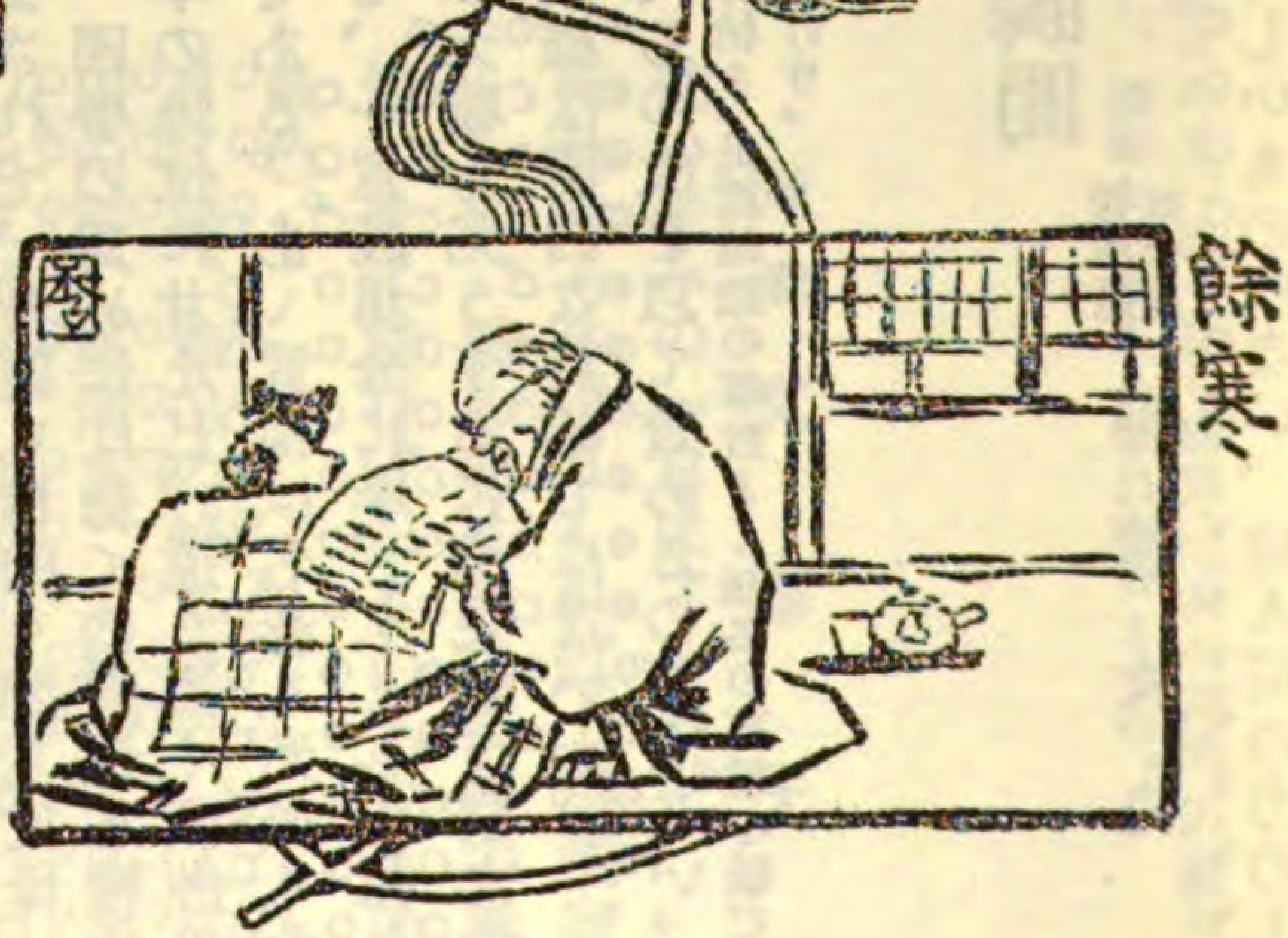
王樣は翌朝早く起きて向ふ岸に渡り角笛を取つて朝風に高々と三度まで吹き鳴しました、其の音を聞くや以前の王樣の家來は大に勇み悅び丁抹人は早くも臆病風に誘はれました、不思議や九時に成りますと五百人の勇猛なる兵士が王樣のグルリに集まつて來ました、王樣は昨日の乞食の話と火の玉の中に顯れた老人の話とを詳しく語つて聞かせました處、皆益々勢が附いて力の有らん限り王樣の爲めに働かうと申しました。

其の如く彼等は非常に勇壯に戰ひましたので丁抹人も抵抗する事が出來ずして本國へ逃げて歸りました、亞留布烈土大王は再び王樣の位に即いて人民の爲めに手落無く盡されました。

（未完）

古洞先生選　**懸賞圖畫**　（其五）





○暖き日（特別三賞）
三重縣一志郡中原村大字田村
內藤方　片山よし枝

○高瀨の引船（天賞）
京都市萬壽寺通高倉西奥村方
林　きよ子

○美しい夕ぞら（地賞）
岩代國郡山町小田島方
關　美枝子

○餘寒（人賞）
府下南多摩郡八王寺停車場前
乙幡　秀江

文學士　沼波瓊音先生選

論文

（天）

○武樣は潔白なる英雄なり

三重縣安濃郡新町古河　山田ひさ子

太平洋廣しと雖も點滴の聚合ではないか、エベレスト山高しと雖も砂礫の累積に外ならぬのではあるまいか、汪々たる太洋も、巍々たる山岳も、涓々の微、砂礫の聚合に外ならぬとすれば、世界の英傑「ナポレオン」や「ワシントン」や「チルソン」や何んぞ誇るに足らうか。彼れ等の英傑なる者は、彼等の部下幾萬の英傑が聚つて出來てるのである。彼等は其部下幾萬の英雄の代表者に外ならぬてはないか、何んぞ其の英傑を以つて彼れ自身の英傑とする事が出來やうか。妾は世人が動もすれば「ナポレオン」「ワシントン」「チルソン」の英傑を稱贊して其部下幾萬の英傑を顧ぬを恨むのてある。「ナポレオン」も「ワシントン」も皆其歷史上赫々たる偉大の光榮を受くるのは、其部下のお蔭てある。言ひ換ふれば彼れ等は其の部下の勳功の代表者に過ぎぬ。あゝかう思つたなら其部下なるものは實に潔白なる英雄ではあるまいか。榮譽も何も希はず、却て己が名譽を他に歸して滿足して居るのだもの…………。

妾はかく思ふと共に我從兄武樣の事が聯想されてならないのてす、あゝ武樣は……忘れもせぬ卅七年の三月十二日召集の命に接せらるゝや、平生蓄へられた愛國の至情至誠に勵まされて、希望も目的も擲ち父母に別れ戀人を捨てゝ、國事の爲めには總ての愛情も犧牲にして、奮然一兵卒の地位に甘んじ、遠く遠く滿洲の野の露と化したのてある。あゝ武樣は名譽も光榮も希望も遂に犧牲にして、一意義勇公に奉ぜんとして死を恐れず、唯一兵卒の天職を完うするに滿足して居たのであらう、なんと武樣は潔白な英雄てはないか。

妾は武樣が從兄たるの故を以て贊めるのではない。

（評）一將功成りて萬骨枯る、此篇雄勁の筆致よく無名の英雄を論じ、見識觀察ともに群を拔けり。

（地）

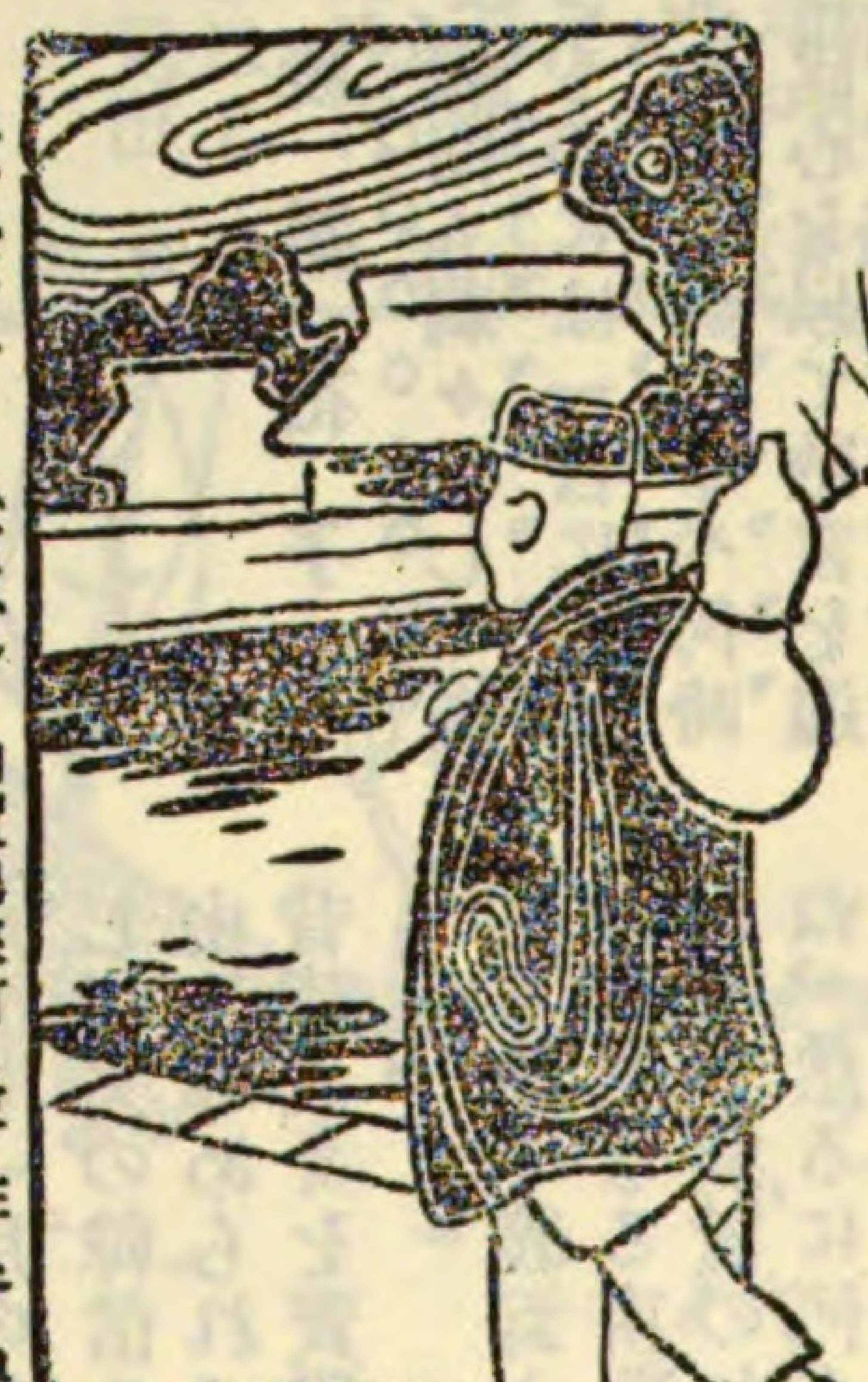
○次の瞬間

豐前扇城の里　南溪女史

「次の瞬間」程怖ろしいものはない、嗟人間の力のよ

わさ！彼れは此の次の瞬間……只一瞬間、が齎らす運命をすら豫知する事が出來ない、只其の運命に弄ばれて笑ひ、泣き、恨み、怒るばかりだ！無事に去り無事に來る多數の瞬間に慣れ〳〵ては、此次ぎに來るべき瞬間の恐ろしき事を忘れてしまひ、さながら來るべき運命を充分に豫知したるかの樣に振舞つゝある大膽さ、さはれ此の一刹那の後には唯上帝にのみ知られたる大なる秘密が潜んで居る、之に向つて進む人生の道筋の危さ、今數多の猛獸毒蛇の棲める暗黑の洞内に入れと命ぜよ、誰か躊躇せずにあられう、されど其よりも猶數層怖ろしき「次の瞬間」に向つて人は不斷に進んで居る、數萬の人畜を一時に殺したるスポンの地震、噴火山の破裂、皆或次の瞬間に起つた、顧みれば世界は數多の刹那を重ね〳〵て「過去」の數萬年を送つたのだ、おもへ、今此次の一瞬間の運命を誰か斷言し得るものぞ、されど嗟呼！我等は一歩も躊躇する事は出來ない、自若として此の「次の瞬間」に向はねばならぬ。

（評）「一寸先は闇」の俚諺はあり、而も斯く痛切に「次の瞬間」の怖ろしきを論じたるものなし、清新と奇抜とを兼れ有せるもの。



花見がへり（賞外）　加賀鶴來町　波佐谷碧子

◎人笛

西備　文華子

世の營みの一日は了りぬ。夜色徐ろに迫りくれば、萬籟寂として、風も通はぬ松が枝の風情、身に泌むばかりのあたりの景色。月は早、城山の峰に更け、入江川の畔、風淸う、手馴の笛に念ひをこめて、幽玄の曲を奏づれば、心は杳としてみ空に通ふ。あゝ此瞬間、我ながらいかに美しきよ。迷ひもなく苦しみもなく、智識も宗教も、文字も、さらに何等の威權を値せず。知る人は知らん、此の微妙の域を。我はいふ。「神よりも尊し」と。悶えに、眠り奪はれたる夜半、孤燈の下に瞑目する人、

人生の意義を求めて、何をか得たる。
神の存在を探ねて、何處にか認めたる。
若かじ。一管の笛に情を澄まし、微妙の境に遊ばん
には。

（評）幽咽また綿綿、絶えんとしては續き、續きては又絶えんとする妙音の響、抑も什麼の福音をか齎す。

秀逸

○罵評

下總　凌霄花子

文士の爭程老婆の絮語の如く、幾回も刺々として繰返さるゝものなからん。理に敏きものには一言にして解せらるべきことも、彼一句、此一句、其の爭や何時果つべうとも思はれず、これ一は成心を以て敵言を迎へ、耳を塞いで目を闘はすと、一は其の爭ふところ嗜好の爭にして道理の爭にあらざれば也。かくの如くいろいろの術語を陳ねて嗜好を爭ふ文士の筆戰には、罵評亦決して忌むべからざるに似たり。但し吾人が所謂罵評は、附元氣にあらず、沈默を以て絮語に對する者の最後の一喝也。

（評）罵評亦尊ぶべきかな。

○奴隷

石川　八幡むら子

予毎に謂ふ、心は主にして體は從也、精神は事を執るの主力にして、四肢は其命を奉じて活動するの一器械に過ぎざる也、故に縦令身は人に屈するも、心は凛として曲ぐ可からざるを要す、形骸は時ありてか他に許すも、一片の氣骨は稜として、秋霜を凌ぐの概ある可し、夫の韓信の股間に屈して天下に伸び、越王の會稽山に辱められて遂に四海に覇たりしが如き即ち是也、昔時人身を賣買して使役に供する所謂奴隷なるもの有りき。

其不德不義焉より太甚しき者なし、米人の義狹なる、彼有名なる南北戰爭の結果によりて此を廢し、彼の憐む可き無數の奴隷をして始めて皇天の雨露に浴せしめぬ、然るに何んぞ圖らん、我日本今日の社會に更に之れより太だしき、惡む可く厭ふ可き一種の奴隷を見る有らんとは、何ぞや曰く黄白を以て精神を賣買する者即ち是也、夫れ泰西の奴隷や只身躰の羈束を受けて使役せらるゝに過ぎず、我國の奴隷や精神の羈束を受け、良心を曲げ、正義に悖り、唯々として其頤指に服す、其陋劣果して孰れぞや、而して今や是等精神的奴隷、到る所に徘徊し、高帽輕裘揚々として毫も恥ぢざる者

の如し、噫豈長歎せざるを得んや、願くはアブラハム、リンコルンの如き一人を得て救濟を謀らんかな。

（評）我が國三百の代議士中斯の文を見て赧然たらざる者果して幾人かある。

○隨感錄

和歌山　たま子

如何程昏い人でも人を責むる時は明かである。如何程明るい人でも己れを見る時は昏い。

其上に事へるや密。其下に接するや溫。其事に臨むや斷。この三つさへ充分行へれば何も失策ることはない。妾はこの三德を備へた人は菅公より他に見出すことが出來ません。

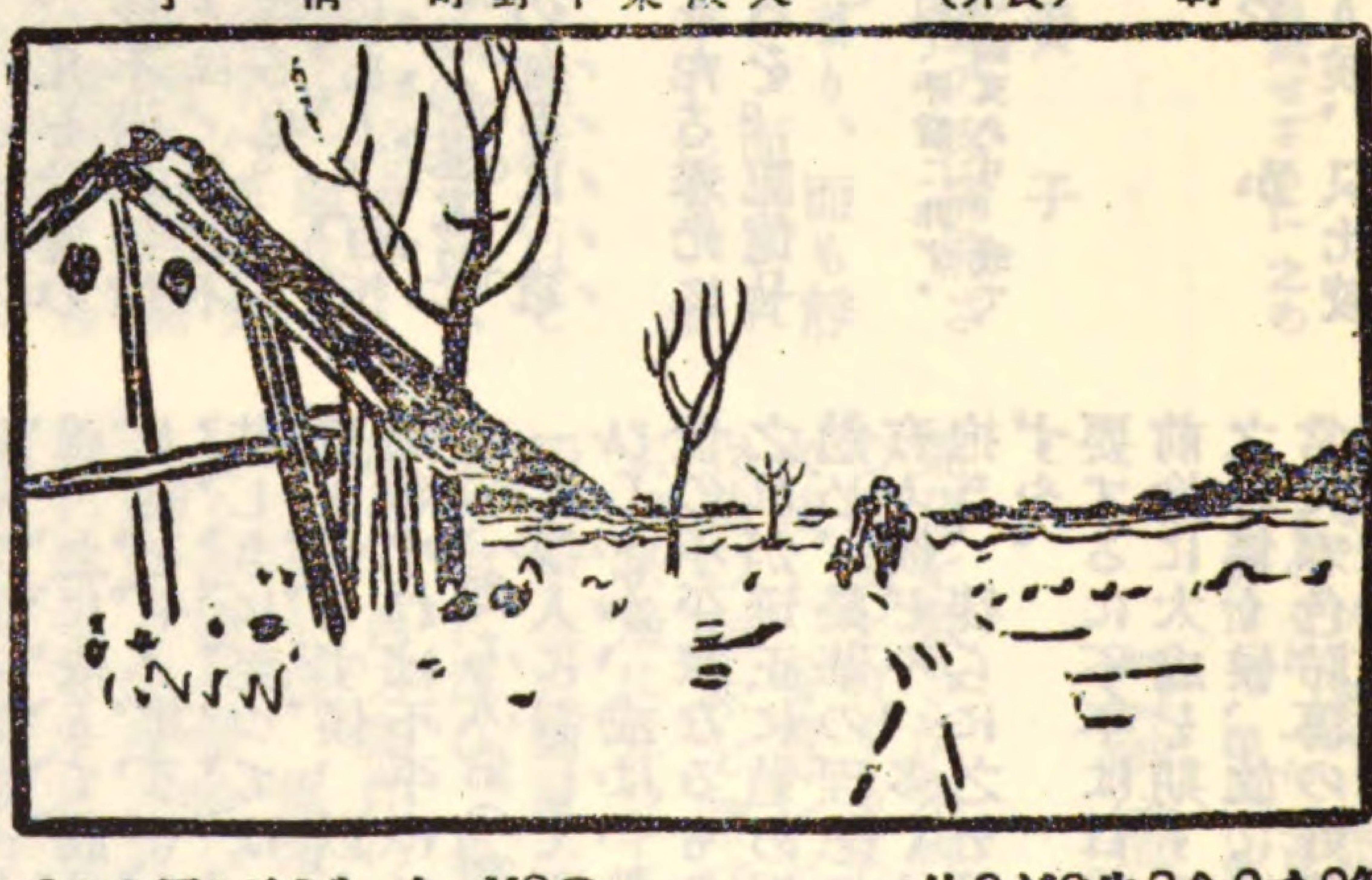
大きな山を寫さうとおもへば數里外でせねばなりません。麓て迂路ついて居ては大躰の大きささへも知ることは出來ません。人もこれと同じく數世を隔てゝからでなければ其人の眞價が分りません。

日月は其光を偏することが出來ません、雷電は其聲を細くして絲竹の聲と合すことが出來ません、大車は狹路に容ることが出來ません、これと同じ事で高士は其節を曲げて世俗と容れることは出來ません。

金は天下の寶である、然れども身を失ふ。劍は天下の至重である、然れども身を害す、用ゐる所を誤れば阿片も命を傷り、醫術も人を殺す。

（評）とりどりに面白し。

朝　（賞外）　大阪東平野町　清子



○不平論

伊勢　一翠女史

◎不平は希望を生じ、また絕望を生ず。希望は人世の春にして、絕望は人生の冬也。春は百花爛漫として艷を競ひ、冬は萬木蕭條として枯死す。希望の生ずる所には人生の花開き、絕望の生ずる所には人生の活動止む。樂觀と成功とは、希望の生む所にして、悲觀と自殺とは、絕望の造る所也。等しくこれ不平によりて生じ、而して相異る事此くの如し。豈に奇ならずや。

◎不平は進取的也。向上的也、賢者は之によりて善に進み、愚者は之によりて不善に進む。これ其の希望と絶望との相反する所以也。

◎不平に生れて不平に死する者は人類也。凡そ社會の存せん限、進化の休まざる以上、人は到底不滿足の境遇を脱する能はざる也。而して世の文明とは、畢竟不平滿々たる心の集合したる結果に外ならざる也。

◎不平に大切なるものは意志の鞏固なるにあり。百折撓まず、千挫屈せずてふ意志こそ、實に成功の基なれ。彼の處世の難を歎じて、自殺を企つる輩の如きは、寧ろ憐むべきのみ。

◎知らずや、蕭條たる冬日の、やがて融々たる春光に回るは、これ自然が人生に敎ふる眞理なるを。記憶せよ『不平は神が汝に與ふる興奮劑なり』と。

（評）不平即ち希望、不平即ち絶望との說、矛盾に似て矛盾に非ず。唯さきに第二號の誌上つゆ子女史の「希望と不平」の論文あり、敢て新しと評し得ざるを憾みとす。

○世の不平家に就て

相模　ゆたか

世のあらゆる事物、必ず一得一失之れ有り候、只比較的益多く、缺點尠きを利とし、之れに反するを不利とし排斥するものに候、人ありて曰く、不平ありて希望起り、而して活動となり、又進歩となると、實に適言に候、然れ共之れ所謂一得にして、翻つて裏面より觀察せんか、又不利なるもの決して尠少に之れ無く候、凡そ天下の萬象一として、不平の種ならざるはなしと雖、之に依りて成功し滿足するもの、果して幾人之有り候ぞや、其多くは力足らず、自棄して志を挫折し、甚しきに至つては一身を、犧牲に供する者罕なりとも覺え侍らず候、以上は不平の大なる一失に候。

熟考すれば不平に二種之れ有り候、一は世の爲めなるもの、即ち人倫の頽敗、國威の不振等に不平なるもの、一は個人に對して不平なるものにて、例へば名譽を失ひしとか、或は、榮華を貪るものに向つてとかに候。世の不平家なるもの、人倫の頽敗等に大不平にして、之れが矯正に勉め振興を促す等は勿論、名譽の挽回に勉め、榮華の理想に向つて、奮勵するもの等幾人之れ有り候ぞや、多くは浮雲の如き僥倖者に對して不平を抱き、徒らに之を羨みつゝ、夢死するもののみに候はずや。

要するに不平は目前の境遇に對して、激する者に生じ、前途に大成を期するものには、決して生ずるものには之れ無く候、故に妾等靑年士女は、抱負遠大にして、常に春色駘蕩の好時期に遊ぶが如く、快活に歩を進めん事を勸めざる可らず候。

人或は不平によりて、一大成功するものあらん、然れ共之れに依りて目途を誤るもの亦尠なからざるべきを

信ず、故に妾は一人の成功者を得んよりも、百人の失敗者なからん事を希ひ、不平は餘り喜ばざる者に御座候。

（評）要は大なる不平を懷抱して而も決して自暴自棄せざるに之あり候。

○病の福音

豐後　花妻子

脈搏百二十、ひとたび病床に座すれば頭蓋の疼痛將さに裂くるが如き思あり。

今や病痾は妾が不戴天の仇敵なり、恨讐なり、而も靜かに其福音を覓む、なんたる背理の對照ぞ、而もこれ聲帶を出でゝ單に空氣に傳はりたる音に非ずして、妾が心の響なり。

感謝す、病痾よ、汝は人生に變化を與ふ、健康を以て晴天なりとせば、病痾は、まさに雨天なり、霖雨連日、鳥は樹蔭に悲み、人は無聊に飽く、さはれ知らずや、新綠滴りて杜鵑一聲の壯快はたゞ其の變化の賜なるを、常に健康なる人は其健康の如何に尊重すべきを知らず、殆んど單調と無趣味とに食傷す、病痾は出沒測るべからざる變化を與へ、以て人生健康の價値をしらしむ、是に於てか思ふ病痾に襲はれざるものは天下に最も不幸の者なりと。

されば人々、決して病痾を恐るゝ勿れ、天下豈頭上に滴下し來る天上の甘露を畏懼するの痴あらむや、病痾はこれ運命によりて賜はりたる最上の珍寶たるなり。

（評）人は餘りに强壯ならんよりは、時に病の床に臥すこそ愛らしきものなれ、一年三百六十日、風邪もひかず、頭痛も知らざる者は、いと面憎し。獨逸に愛病の詩人ある由余嘗て藤代先生に聞けり。

○神壇と佛壇の趣味

京都　井上らい子

荒莚を敷き洗米神酒を供へ、淸淨潔白にして大古質朴の遺風を有するは神壇か、壯麗華美にして金箔輝き燭火眩く、香薰じて紫煙滿つるは佛壇か、神壇はすべて我朝の趣味を帶び、佛壇はいづれも異國の趣味を帶ぶ、祭壇に立つて讀みあぐる神官の聲は、肅として人の心を太古幽寂の神境に導き、敬虔の念湧然として聽者の胸に流れ、高僧の讀經は、直に邪念を驅つて紫雲棚引く西方彌陀の淨土を回想せしむ、神壇の德は現世の立命を得、佛壇の德は身後の安心を得、一は朝暾の如く希望を意味し、一は落日の如く厭世を意味す、嗚呼神壇と佛壇と其趣味の相去ること遠しと雖ども、人世の慰安を求め安心立命を得るの點に於ては、其規を同じうする亦妙ならずや。

（評）神棚と佛壇との趣味を論じ得て奇拔。

新體詩

河井醉茗先生選

天　○姫胡蝶

茨城縣高濱町　小松崎　つき子

天照る神が寵見てふ、姫舞はじめて高園の、
春の宴の花むしろ、第五の姫は羞らひに、
紅の濃染の繪扇を、さとすべらし丶御不興や、
『天宮より永久に逐はむ』とて、大理石の扉は閉されつ、
行へいづこと冷ゆる扉に、もたれて姫は泣きにしが、
あな亂れたり袖袂、二つの翼は背に延びて、
とべば紫摺の山、淺黄の春の若草野、
落し丶扇慕ひつ丶、淋し微笑む姫胡蝶、

「飛べば紫摺の山」のあたり杵屋連中の聲と囃子が借りたい（醉茗）

地　○辭郷の賦

信濃長野市　天絃女

（我に異性の友あり性多感、我弟と呼べば彼又我を慕ふて姉と云ふ）

『寂花影に唯泣きて　唯に老ゆる』と春の夜を
灯に伏しぬ若人が　なぐさめもなき漂零に
たゆたひがちに姉と呼ぶ　あ丶〳〵優し胸なれば
力なき手に縋らせて　詩弟と呼ぶに何の罪科。
異性なればぞつと退けて　涙もつ眼に願望ざれ
とは云へ冷た世は人は　見ずや火影の頬のやつれ
あ丶なほ斯くて間裂きて　形無き太刀に血ぬらして
青春むくろを屠りたる　小狹き地の胸なりや。
泪の人を友と云ふ　裸形の女世は容れず
山むらさきの信を出で　南五十里京に入る
怒よ寂よ悲しみよ　譬へば斧を提げて
狂女緒琴に立ちしごと　十三絃を横に斷つ。

例に依りて力は籠つてゐます、無理に強がらうとするのはいけません、對手なしの氣焔と同じことで、拍子拔がします、何か煩悶があるなら、憤る前に、其悲みをありのま丶歌うてごらんなさい（醉茗）

人　○雲

常陸石岡町　秋山　子

夕湖畔にたゞずみて、　空ゆく雲を追ひし時

姿やさしき白鳩の、　翼の如き雲を見き
朝公孫樹の下蔭に　黄金小扇あさる時
いともくしかる紫の　胡蝶の如き雲を見き

まだ〳〵雲の形容を新しく試みて御らんなさい（評者）

秀逸

○沈誦

桑都雪子

わが秘函の歌反古や、
ながつらかりしかたみぞと、
火にせんときのいまはだに、
しばしと止む人もがな。

なが面影のやせ〳〵て、
何に似たると問ふな君、
こゝにはたとせうらぶれて、
思ひ出しげき世となりぬ。

靨ひ胸内をたちわりて、　其處と泉のわけばとて、
元より破れし古甕に、　愛の滴たりあるべしや。

創作（選外）　大阪府後町　僚文子



あゝ春愁の限りなく、　常春うたふ歌なくも、
夕つめたきわが床に、　波うつ如き追懐でや。

沈着な詩風、情の激しきに似合はぬが、此詩風は一寸到り難い（評者）

○櫻のたゝり

麹町　本野きな子

斧を上げたる杣人の
眼の色をうかゞへば
紅菊咲きしそれのごと
血汐のすじの亂れたり

切りし櫻樹に香のたちて
精の姿は見えざれど
つと走りたる木の間より
怪の雲の起りては

女夫白鳩飛びし後
風一しきり葉をうちて
葉は天を舞ひ地をかけり
森急に火となりぬ

三丈のぼる火の柱　火枝朱なる珊瑚珠の
火の子は小花　大星と　散るや開くや亂るゝや

杣人影をひそめては　赤くなりたる大斧の
五郎の銘は埋れて　櫻の花の歛びたり

着想はたしかに奇抜、火と櫻と壯麗無類の配合、惜い哉句法が聊か整はない(評者)

◎友に贈る　上野　蓮野えふ子

借りし書の間より菊の押し花見出でゝ

玉を展べたる君が手に、つみとられては菊の花
いかにうれしと思ひけむ、押されて猶も殘りけり
ふみに倦みたる徒然を、慰めましと下りたちて
そゞろありきし君が影、ふと吾がむねに泛ぶ哉

花も人もよみがへらず(評者)

◎朝雲　三河　澤田つま子

靈雲は　欄こめて　二めぐり
七十と　七を數ふる　楷や
鐘樓守の　よればたゆとう　靈韻の
あわたゞし　彩扉に馳せて　東雲は
まばゆかる　金流の光　つと流れ
朝雲は　牡獅子の姿と　右左
黃金なす　拉弓たばさむ　日の神が
御殿の　み座めぐりて　高榮ゆる
莊嚴の　曙なりと　一しきり
立ち舞ふや　彩の扉かゞる　黃金朝雲

黃金朝雲の榮ある詩と見ました、五、五の調子も能く整のひました(評者)

◎雛祭　播磨　富原愛子

桃の枝わたるそよ風に　花灯ゆらぐよ雛の間
かしづく妹が衣ずれの　微音にも更くる今宵哉。
金屏榮ゆる吉野雛　おぞやそれかと思へばか
戀人に空似もなか〳〵に　心ときめくほだしなれ。
強いてたうべし白酒に　ほのあたゝかき耳たぶや
水ぬるみたる玉盤に　くれなゐ寫す顏よ。
もの思ひなき末の弟　今歲五つの眼は圓ら
いたいけの手を差伸べて　雛の佩刀を欲しとこそ。

女子の作家は雛の爲に大いに歌ふべき義務があります(評者)

◎海の光　德島　小川なみ子

遠音に響く荒潮や　歷史に殘る絕海の
南、さがしき一孤島　國、獨立の旗あげし
英雄こゝに骨うづむ　椰樹の葉かげに蜷ねむり
淵には猛き鰐臥して　海に泛べる魚の群れ。
靈は不滅に瞬きし　斜めにかゝる新星や
奇しき巨巖にそゝり立つ　海拔高く二千尺

『英雄の紀念』と世に朽ちず　夜の魔を照らす燈臺の
莊嚴の光り、虹射して　『洋ゆく船よ安かれ』と
浪路はるかに輝けり

前半、ただ露骨に過ぎたのは殘念でした(醉茗)

○殘紅集　京橋　黑ゆり

むくろ

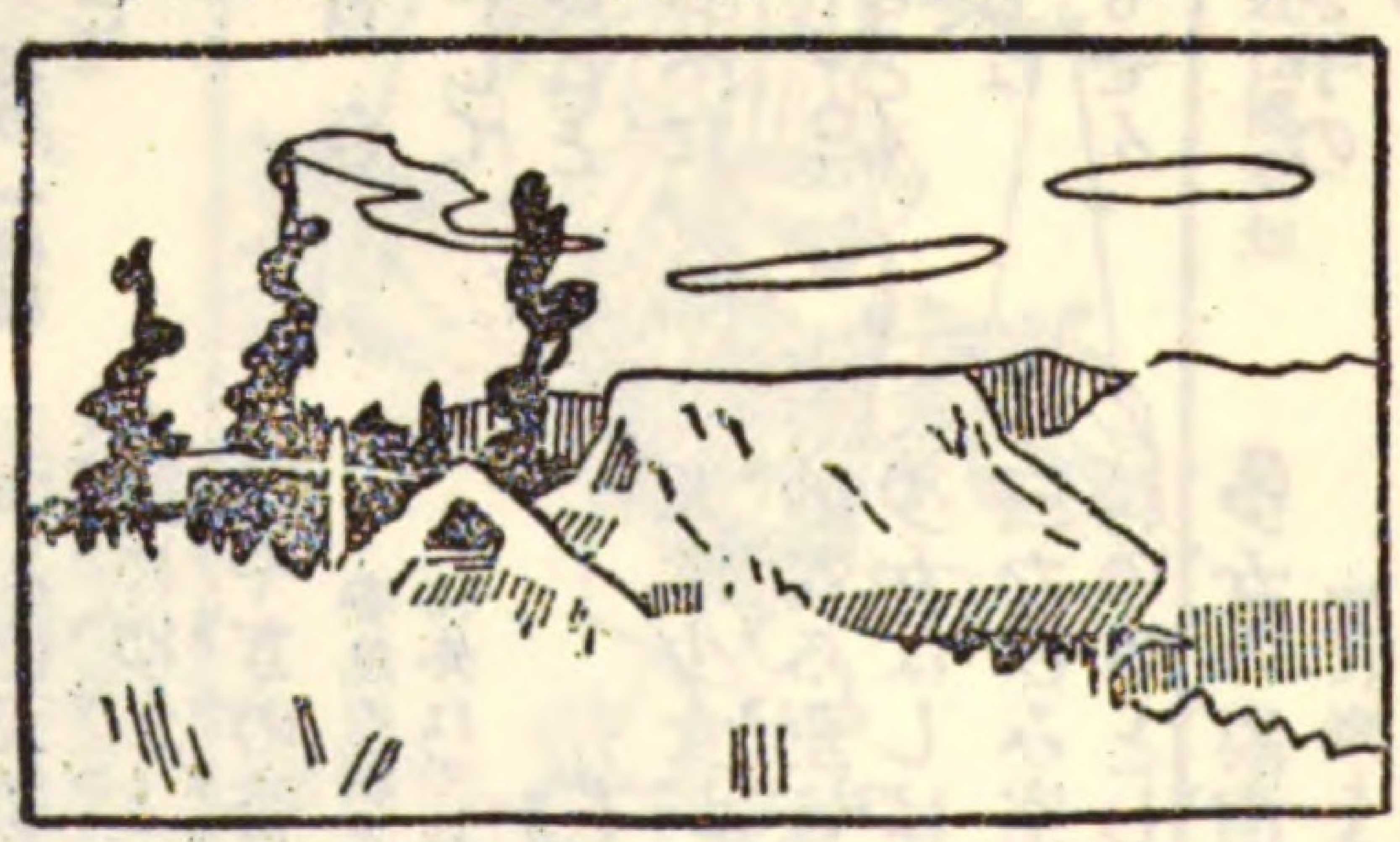
つちにねぶれる君みれば
星眸とぢてひかりなく
おもわさびしき白薔薇
沈む夕日にほひなし

情にもえし胸の火は
うつろのうちに冷えはてゝ
死のかげめぐる形骸のみ
きぬに蔽はれてわれに添ふ

繪絹

春のうたひとうぐひすが
彩羽をさめて塗籠に
やさ音もたてぬ宵闇を　畫堂さびしくさくらちる
灯はともされて玉簾に　ゆふかぜそよぐ西の窓
繪ぎぬにうたの興やえし　あるじ默してほゝえみぬ

春郊（賞外）　京都寺町通　石田ちほ子



尼寺

夕べかねなる尼寺や　讀經の聲はをさまりて
朽ちし小琴のふるふごと　をばしま遠くはぐれゆく
きさらぎ寒の堂ごもり　春にそむきしつみびとが
深きおもひのこもりたる　ひゞきは京に迷ふらむ

才氣ある歌、三つとも(醉茗)

○春の暮　京都　芝田すみれ

軒のうぐひす聲かれて
霞のすそのやぶれ目に
さすや若葉の薄みどり
いま卯の花は盛りなり。

晴れみ晴れずみ雲迷ひ
うす墨なせる天の戸を
山時鳥血に啼きて
春と夏とをわかちたり。

春の情けにあこがれて　神を讃ゆるの歌誦して
靜けかりける春の夜の　星を仰ぎしそれもゆめ。
あゝ草負へる乙女子が　覆盆子のごとき唇に

うたひし歌の一ふしは　綠の野邊に殘れども。
淚ぞかゝる欄干に　啼く時鳥聞きながら
空のあなたを眺むれば　春の光は沈みゆく。

暮れ行く春の恨、悶惱として詩中に泛ぶ想があります、殊の「無絃弓」其まゝの句が一聯ありましたから除きました（醉茗）

○春風のうた

能登　池野白百合

小羊だきて冬ごもり　枯れたる草の上にして
未だうら若き牧人の　圓かの夢の其れのごと
小草廣野を渡りては　佳き人すめる丘のへに。

ゆふべ散りにし花片の　小草の蔭にひそむとも
音なく軟ぐ春風の　暖き香のふれもせば
くしきちからに甦り　羽ある蝶となりもせん。

熱き血潮は冷えさりて　肺をしやめる若き子の
朝の氣ゆらぐ草野にて　音なく軟ぐ春風の
限りなき香のふれもせば　靈しきちからにいえもせむ

女十五の頰のいろ　紫煙るさゝ川の
柳の蔭によする時　甘露にも似たる春風の
其秀つ眉にしみもせば　香に戀やしりもせむ。

苦吟にやせし詩人の、　ちひさき花をかざす時
甘露にも似たる春風の　其紅唇にしみもせば
理想のくにの花園に　香に魂や誘はれむ。

ひと夜天なる花の香の　翠帳もるゝを夢にみて
詩にゆかりの春風に　あゝ限りなく美はしき
若やぎの香をながしては　詩想にふけぬ日ねもすぞ。

春風の歌としては、能く歌はうと思ふ處を歌うてあります、只規則に外れて長いのは今後御注意を願ふ（醉茗）

○奇しき花

靜岡　姬百合子

天津少女が麗はしき　雪の腕をさしのべて
妙なる莖に觸るゝとき　花は異樣に輝きぬ
少女はしばしためらひて　花の姿に心しつ
三たびみ空を仰ぎ見て　神の宣言を乞ひ受けぬ
神のさとしを語るとき　希望の色はあらはれて
少女の姿消え失せぬ　花は萎みぬ永へに。

實に奇しき花、神秘の物語めいた作（醉茗）

○秋の塔

神田　太田葵子

楠樹の大柱に纖指もて、　畫く虫譜やいと崇く、
枯葉に埋る古塔の、　高きは昔工匠等が、
世に誇りたる鑿の跡、　紫龍の靈眼永刧に、
期を待つ樣や身は猶も、　通俗を遁れし銀鱗の、

天に冲せん勢力あり、
苔の床に起き伏して、
我が腕やせて小刀持つ、
青瓦の陰に泣く虫は、
己が身詫ぶる例か、
力に秋の風寒し。

秋の塔、春の塔、咸穆時季に依つて塔の趣の違う點を歌ふのも面白いてせう(醉茗)

○春の夜

和泉　すみれ女史

にほひゆたけき繻絹の、
夕べの幕をもれいでゝ、
影ほのうすき三日月の、
さゝやく聲をよすがにて、
御園すぎ行く佐保姫の、
春の車は華やかに、
かをる小窓に月さして、
歩みはおそき白駒の、
其の艶やけき脊の上に、
ちるや幾ひら花ざくら。
白き光に照されて、
老木若木のそれ〴〵に、
夢靜かなるはなかげに、
それかけぶれる若草に、
くるまの轍はるかにて、
まだうらわかき嘶きの、
かの綠なすびろうどの、
思ひも遠きふたすぢの、
すゑは朧のうすがすみ、
かなたにたかし春の夜。

何となく春らしい(醉茗)

大根ひき　(賞外)



近江國愛知　[illegible]菊千代

○春の曲

羽後　菅原花子

み空綾なす雲のいろ
霞のころも舞の袖
靜けき里のさゝ川に
響くは天の琴の歌。
すゞ風にほふ菜の花の
たかき薫りに打むれて
天津少女が玉琴の
祕曲をつたふ野の雲雀。
あした霞にまがひては
しろき光を羽にうけて
はるの女神のみ車に
しらべの程をうたふかや。

是も何となく春らしい(醉茗)

○春川

千葉　小川連子

桃の宮より吹きなくる、
風かぐはしき春日和、
柳の下のほそ川に、
顔よき村の少女子が
菜洗ふかいなしろ〴〵と
また菜を洗ふ春の川

○雛祭

駿河　古山秋子

聲ほがらかにうたひつゝ、
ほそき消手に拗びては、
取つては崩すをさな子は、
天使の如き顔ばせや、
老も若きもまどゐして、
笑ひどよめくもろ聲は、
前に供へし草の餅、
今日の祝の雛の主、
罪なき所作に打興じ、
酌みかはしぬる桃の酒、

微妙の樂と聞ゆなれ
紫雲たなびく如くにて

○海

鬼や住む小島の影は、
行きかへる船はおろか、
果てしなき海の彼方に、
うつゝ世の迷ひの夢を、

○我鄕の朝

風の露に打連れて、
香爐の峰より紫雲飛び、
女神男神の降下かな、
怪の冠ふりかざし、
百鳥かなでぬ天の譜、
都のちりに迷てし、
卷かる園生は吾が賤と、
天國見ればあなあはれ、
形は見えず瑠璃の空、

○樂園

五彩あやどる雲深き、
薔薇の園生に星姬の、
笑のはづみにつと落ちし、
碎けて散りて忽ちに、
平和の歌のゆら〳〵と、

○軍馬

おゝ高鳴の我馬よ、
汝が蹄も滑らかに、
弟妹のすさびかや、

いとも樂しき此一間
御殿籠こそ床しけれ

滋賀　兒島いと子

恐しき波にかくれて、
飛ぶ鳥の影だにみえず、
夕日影沈むも早く、
さませとや波はさゝやく。

陸中　吟子

花の精とて呼つれば
妙なる譜に時うつり
御劍まばゆ光明あり
天馬片手に微笑ば
只我伏て花枕
悪覺の劍手折るより
默示の中に啓示あり
霞にまぎれたへ〴〵に、
淡きと見ば現かな

加賀　谷村庇子

天津み空の詩の野の、
憧れ出てゝ醉ひませば、
詩のかざしの花蕾、
下界は快樂の湧き出てゝ、
み空に通ふ野と化しぬ。

府下　中村草露

これは故鄕ぞ我家ぞ
あれ見よ旗を飾れるは
還坂昇る旭日子に

召されて行きし醜國の、
命に餓ゑて死なざりし、
皇國の猛夫と歸れるに、
默してばかり居たりしを、
先づ汝をこそ勞りしかな

霜に氷に閉ぢられて
瘦せしばかりの我馬と
我老母は弟妹は
おゝ高鳴の一と聲に

矢名

○をとめ心

風もさそはぬ窓深く
春さしそふる花かざし、
塗行ずりのはぢらひに
にほひこぼるゝ花の袖、
蝶のつばさに風かろく
若き光をなつかしみ、
只かりそめの人目にも
思へばたれか涙なき、

かたりをこめて黑髮に
口紅かくす紅の
花の香うかぶ春の日の
姿つくらふやさしさを

筑前　花田くら子

○曉の賦

我が世新たに時は來ぬと
赤黃紫春雲の
深山の奥に鳥泣きて
雲井の宮の欄干に
輝くみ手を開くとき
磯馴松が枝風添ふて

金雞告ぐるあさぼらけ
濱の眞砂に映ろえば
此の世はこゝに明けむとす
畑のみ神立ちまして
千條の糸よ海に垂れ
呼がは樂しきあけの歌

攝津　和久蕗子

○このはがき

里はなれたる畔道に
其水莖の主やたれ
處女の甘き初戀と
永遠に盡きざる生命あり、
夜々の露にて消えもせば、

一片落ちし此はがき
興さまさじの裏は見ず
詩人の得たる佳句には
受くべき人の手に入らず
いつかはそこに咲出でむ花

○野の花より

久留米　露吉わか子

天乳の幸にもれしもの
小さき胸の愁委も
もとより花香あらざれば
我が世の春は短かきも

闇にさ迷ふ野の花と
君の涙に慰まる
君の情の息吹にて
君故われは誇らるゝ

蝶子より

夢よりさめて夢に入る
君が優しの青春き血に
妾もおなじ身なるもの
汚れし萬象の眠るとき

冬ぶれ野路と呼ばん世を
唇かみて泣きけりな
涙なき世を恨まずば
星のしづくの露は宿らん

○落花

滋賀　辰井夢子

緋桃白桃八重櫻
いづれをいづれ美はしき
汚れある地に厭きにけむ
心の駒の狂ひ出で、
切なる戀を告げてよと
雲雀かしこみ戀の譜を
二世を契りし春雨は
那等嵐をともなひて
一陣さつとあらぶれば

下界に花と生ひ出てゝ
色香をこゝに競へども
御空の星のさゝやきに
一日もたゞへに堪へかれて
侍女雲雀に命ずるや、
青空高く打ち誦すに
口惜しき事に思ひなし
失戀の怨を知れとこそ
あはれはかなき落花繽紛。

○繪絹

岩代　松山薔薇

御堂の池の白蓮に
まことすつべき戀ならば
切なる心とひよるに
庫裡にかくれて又出てず、
翁は物を知るべしと
袋の黄金とらせつる
我手に花をにぎらせて

眉うらわかき僧を見て
その瞳つきて救へよと
僧は面を赤らめて
打水清き前庭に
花うる翁よびとめて
相惡耳のしひたれば
唯ほゝ笑みて去にけり、

止むにやまれぬ戀なるを
川の北なる宿訪へば
此絹もちて山里の
この山里のたそがれに
そめてほゝえむ筆みれば
さてはやさしき繪師の君
人は十九のなつ姿。

慰むすべもおはすかと
情あるかな叔母の君
繪師がりとへとたまはりぬ
秀でし繪師のさらばとて
「戀は悶えて慰めと」
白百合抱いて水に立つ

○旅にて

八王子　小池つれ子

糸より細き春雨の
庵の破戸に音も細う
鐘の響にゆら〳〵と
鶺鴒なきて黄昏るゝ
綾雲夢と消へ去りて
岸の青柳けぶりては

名殘りを桃の香に止めて
桑の花際ひうすれ行く
玉の露ちる桑の月に
馬子唄絶へし川の里
小川にうかぶ星の影
實に歌多き嵯峨の道

○春興

陸中　森子

優しき天使の佐保姫が、
雲井はるかにをひばりが、
こてふは羽衣かろやかに、

布くや自然の花むしろ、
妙なる音樂をかなづれば、
まひの手振のをかしきよ。

○朧夜

金澤　大地波子

迦毘羅城

迷へる衆生救はんと
王宮を出給ふ朧夜や。

悉達太子はかしこくも
王妃の圖は夢ふかし。

野寺

栄たれ花さく湖添の
京の名高き法師來て

村の御寺の賑はひや
善男、善女集ふ朧夜。

文學士　沼波瓊音先生選

叙事文

特別第三賞

○朝の常念岳

信濃東筑摩島内山村方　帶刀きさへ

見よ太古の如き蒼空に聳えて立てる常念の峯を。

東海彩華島の背骨をなせる中央山脈の群峯を脚下にふまえて立てる常念の峯を見ずや。

日は今東の方低き圓き山に出でんとして旭光は此崇高なる山の半面をてらしぬ。

神々しき白衣の靈姿、漸く金色の美しさにかはり行くを見ずや。

あはれ安筑の大野の鎭めと高く聳ゆる峰よ。

仰がずや諸人、御身等此崇高なる靈峰仰がん時、胸琴に觸れて動くものや何。

美しき幽韻か、はなやかなる高調か。

仰がずやもろ人、御身等か此靈姿を仰がん時、心胸の裡一片の邪念ありや妄想ありや。

詩を思はん時歌ならざる時諸人よ仰げ、詩疑頓に滿ち興趣湧くが如きを覺えむ。

汚れたる想ひ濁りたる心起れる時諸人よ仰げ、必ずや平和滿てる心胸の溶釋を感ぜむ。

あはれ我此大野を守りて立つ常念の峯よ。

溫く輝く光に永久の平和を以て誇りとなす岳よ。

崇高なる、清聖き、美しき慈愛の姿を裝ふ英峯よ。

仰がずや、太古に似たる大空に聳えて立つ、旭日美しく映ゆる靈姿を。

（評）雄渾明快にして、氣魄光燄、直隘天を衝くが如し。

天

○緣日

千葉縣佐倉町宮小路百六十五番地　水谷ちとせ

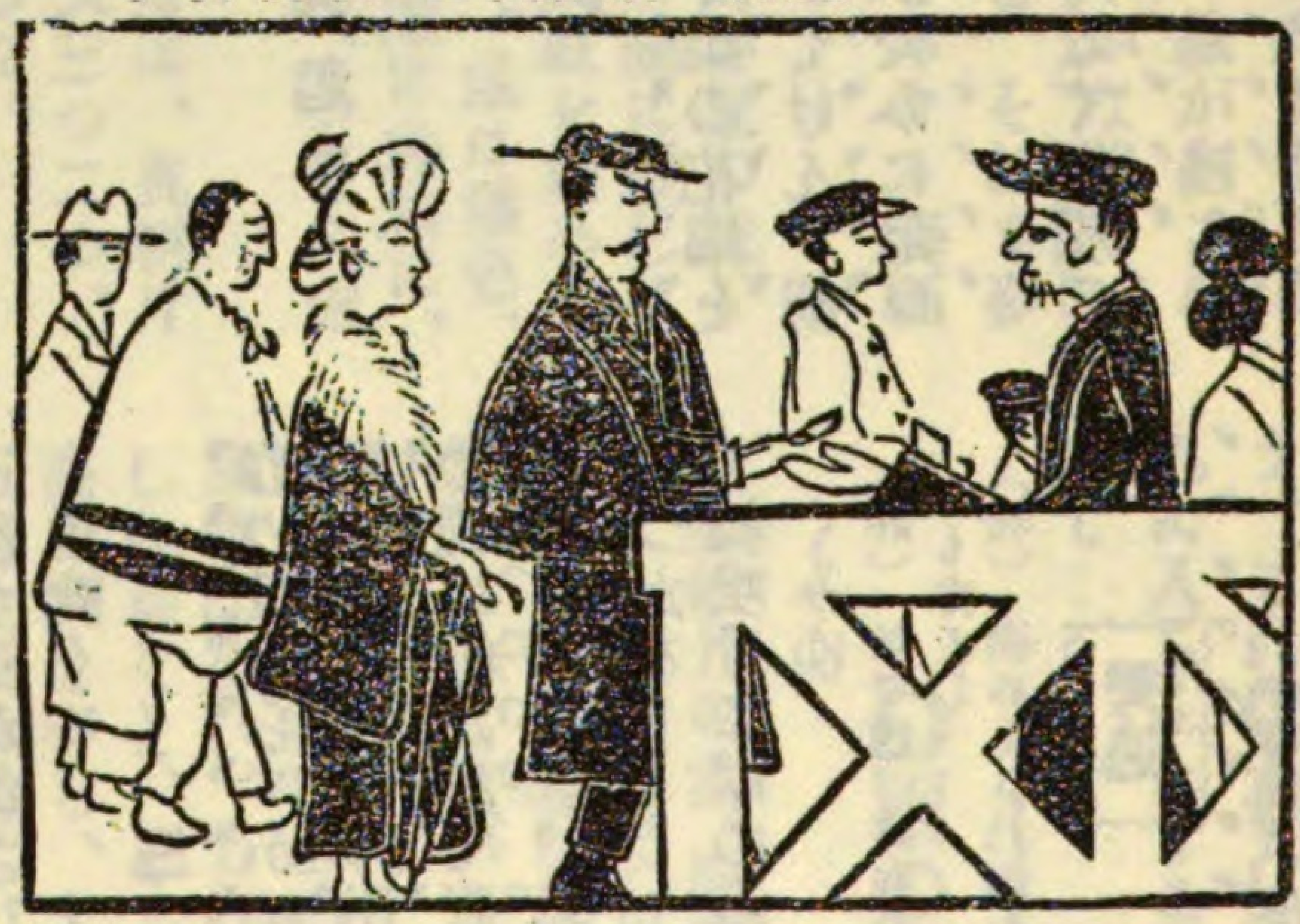
さても凄じき緣日の賑や。油煙の香怪しく鼻を撲つあたり、われは唯離れまじと、弟の手を緊と握りつ、人込の間を縫うて進みぬ。けたゝましき聲に行く人の足を止むる兄弟組の競賣、演説口調の勿躰振つたる齒磨賣、丹波の國で生捕つたる大蛇で御座い、さてはいかがはしき女劍舞のドン〳〵チャン〳〵、右に左に小さき魂を奪はれて、心も空なる弟を促し、辛うじて神社の境内に入りぬ。拍手の音、鈴の響しばしも止まず、いかに萬能の神なればとて、かばかり多き人の祈願を漏

れなく受けらるる可しやなど思ひつ、人の肩ごしに一禮して裏門に向ひぬ。押合ふ人込にいたくも恐れしかば、進まぬ弟を勵して、かへりには濠沿ひの寂しき道を取りぬ。

空はいつしか朧となりて、漂ふ月の影おもしろきに、亂れかゝりし鬢のあたり、輕くも撫づる春の夜風心地よし。弟の唱歌に輕く謳ひ合せながら、夢心地なりし道のかたへ、大きなる柳の下に、燈火のかげ細く漏れて奇しき響の聞ゆるに、心ともなく歩を止めぬ。いかなる人の子ぞ。年の頃漸く六つ計りなる女子只一人、荒き莚の上に、破れ三味線搔き鳴らして、道行く人の情を乞へるなりき。風まだ寒き彌生の夜を、垢にまみれし袷一枚、破れし肩のあたり、肌の見え透きていと寒げなり。切下髪よく似合ひて眼ざし愛らしきが、頰のあたり窶れの見えて、小さき胸の苦勞の程ぞしのばるゝ。

何とはなしに去り難くて、しばし佇む程に、聲を絞りて謳ふを聞けば、父なる人は兵に召し出されて戰の塲

ステーシヨン（賞外）香川縣氷上　安西弘子



に赴きしが、異境の風雨や辛かりけむ。去歲の秋重き病を得て、恨は長き鴨綠江の、行きて歸らぬ人となりぬ。母は嘆きのあまりかりそめの枕につきしが、冬は暮るれど春は立てど、病は重る計りなるに、粥さへ啜り兼ぬる貧しさの、今は年はもゆかぬ一人の愛娘を杖とも柱とも、勵はしや夜な／＼辻に物乞はせては、からくも二つの玉の緒を繫ぐとかや。

餘りの悲しさに胸のせまるを覺えつ。嗚呼われらは、戰を終へて近くに歸り來ますなる父君を、日に待ち夜に待ち過す身なるを。羞含む涙に顏背向くれば、弟は怪しげに打守りぬ。なにがしかの鳥目紙に包みて與ふれば、痩せたる手に、いく度か押頂く慘らしさ。かばかり多く得つるは初めてなり。疾く母を喜ばせんと、莚を卷き三味線さげて、嬉しげに歸り行く後姿、あはれ冥府に眠る父親の見たらんにはいかに。小さき影の月に隱るゝまで見送りぬ。住居はいづら、また明日の夜はいづくに。

種々の想にかられて、いつしか我家に着きぬ。あまりに歸りの遲ければ、いたくも待たれしよと母君の宣ふを聞くにつけても、さきの少女の思ひ出でられてなむ。

（評）輕快なる筆致、よく物乞ひの幼女を描き出して紙上に躍如たらしむ、殊に後半餘日の雜沓と相對して一段の寂寥を覺ゆ。

◯地

◯春くさ

群馬縣碓氷郡東上磯部登城　飯塚美起子

一

わたしや小柳ぬしや糸柳――しだれかかればよれかかる――

霞を漏るる鄙唄のこゑ、足下に咲きつづく菜の花畑そよ吹く風の心地よく、いづこよりか舞ひいでけん、胡蝶一ッ、つづいてまたも三ッ四ッ二ッ、かたみに追ひつ追はれつ、ひら／＼／＼。

さきつづく菜の花畑蝶まひていづくともなく鄙唄のこゑ

二

青柳の長う枝をたれたる、里川岸にものあらふ乙女あり、花のごとき姿、ふくよかなる頰、年は三五か二八か、胡蝶一ッ長閑なる春風にふかれつつ乙女の前後を彷徨ひゐたりしが、やがてそれがつむりの簪にとゞまりぬ。乙女は己が姿を水にうつし何おもひいでてか、にこりと笑みぬ。

乙女子がかざしの薔薇にまふ蝶の羽うごかして春の風吹く

三

春の日うらゝかに、いづこよりか欸乃のこゑきこゆ。見渡せば碓氷の川は溶々として夢の如く、天神山は霞の裡に抱かれて眠れるが如し。菜の花になかば埋れし岸のわらぶき、庭に咲ける緋桃の花うつくしう雞の聲しづかなり。

桃咲ける岸のわら屋に雞なきてさゝ舟一つながれゆくみゆ

（評）敍平穩、筆亦平穩、讀む者をして花の香に醉ふ心地せしむ、歌も亦よし。

秀逸

◯海の夕ぐれ

和泉　竹叟文子

日影はだん／＼にぶくなつた、四邊の情景はやゝに夕めきて、何とはなく靜かである。

まだ消えやらぬ霞は、須寺あたりの松林より、巨人の伏したる樣な淡路島、北は蜒蜿たる六甲山脈も、一面に深く包んで、容易く晴れさうにも見えぬ。

今、一團の淡黑い雲は日輪を覆うた、海の向ふ半面は薄紫にぼかされて、水平線には濃い紫の一線が劃された、他の半面は透き通る琥珀のやう、艶やかな綠で、得も言はれぬ美くしさに、見惚れて居ると、それも夢の如くにうすらいで、雲を放れた光線は、バット海面を照らした。

力ない日光は益々弱つて、果ては大きな丹塗盆の樣、靉いている雲間を縫うて、走りながら波の蔭に沒して終つた、霞は已に消え失せて、西の空は眞紅を染めなした、たゞよふちぎれ雲は、燃えたる紅に、或は樺色、或はカーキ色に、黃色に、彩どられて、彼處に此處に、恰も天の御園に咲ける花叢かとも思はれて、そゞろ床しくもなつた。

須磨、明石近海に漁りして居つた大小の舟は、眞帆片帆をあげて、空と水の間より、一つ二つ又三つ二つ、生れ出て、終には數へ盡くされぬ程になつた。

雲の姿が變れば色も褪せて、動き出せば、一秒每に四邊は暗うなり行き、靑い燈臺は水に煌めいて、港の口は入船輻湊して騷がしい。かくて島のわたりは僅かに名殘の色を止めて、茅渟の浦回は淡闇の幕に閉された。遲れて戻る漁舟の影は、幻の樣に幽かな船歌が白帆の蔭より洩れて……。寄せては返へす波の響、靜かなる闇を破りて、磯の眞砂を洗ふ小波の穗先のみ、唯白う。これより天地は一入靜かさを增して、淋しい夜の色に入らんとするのである。淡き星の光がおぼ空に輝いて……。

（評）海の夕ぐれ晤るやうなり。

○雨の花見

德島　多田秋月

艷陽四月の空、滿都唯花となりぬ、田舍の人の心も皆花となりぬ、吉野の川の畔の人は宛ら狂ふかとぞ覺ゆる明日は日曜なれば、心ゆくまで花に醉はんと宵より勇みて寢に就きぬ、ふと目覺むれば軒をめぐりて雫の音、雨戶押して眺むれば春雨そぼ降りて、庭の枝垂柳ぞ玉を貫けるかと疑はる、かゝる折にこそ花に眞の風情はあれ、これ一重に詩神の、われ等に惠みたまひしみ業ぞと、そゞろ嬉しくて、蛇の目の傘さしかざし高足駄を穿ち、大瀧山へと心ざしぬ、藥師のかたへの石階を數へ盡し、祇園の前に辿りぬ、眞下なる吉野の川は狹霧のごとき雨に蔽はれて、津田の渡しに案山子と見擬ふ渡し守の蓑笠は雨をおび、悄然として棹を突立て、客待つ姿の朧げなるも趣あり、顧れば行手も後もたゞ一筋の花の道にして、兩側より花の枝さし交し

たれば身は宛ら花環の中をくゞるが如し。遠く望めば來る人は花の中より來り、去る人は花の間に姿を隱す、筆にも口にもつくし難き景色、見れども／＼飽かず、去年の春の暮花に分れし夕より、たゞ今日をこそ待ちしか、あな美し邪氣なき我が心は花に染りぬ、あらず我心は花か、花即りて我心か、我は我にあらずして花も花にあらず、無我にして無心、嗚呼われは只管醉へるが如し、花の道踏み盡さんも與なき業とせめて招魂社のあたりまてと思ひ、おもむろに歩みを運べば、雨は猶もしと／＼降りしきり、しばしの小止だもなし、石碑をかこひし兒櫻の枝に、親雀を待つ小雀の寂しげなる聲せしが、風なきに花片四つ五つ舞ひて、我さす傘の上に止りぬ、あはれ今幾日の後花の吹雪となるならむ、寄宿舍に歸り室に入れば風は習々として枝垂柳の枝窓に觸れたり、久しく見ぬが故國の櫻もこの雨に色あせ此風に大方散りやしつらん。

（評）傘に殘れる花片は、これぞ逝く春のかたみならむ。

○ひどいわネ

三河　澤田つま子

心地よき朝月夜、涼しい曉風に髮の零れ毛紛られながら、先づ汲上ぐる釣瓶の水を盥に受けて、雙手の掌に掬び上ぐれば、はらりと散り込むだ一瓣につれて、水晶の滴のやうな花の露が、ホロ／＼と頰へ。まあと瞻仰げると、庭の八重櫻は露を含むでまだ夢から覺めぬ樣、淡紅の彩、日も綾なるを、チラホラと嫩葉に見え透く木膚の色の麗しさ、良い聲の鶯も美しい胡蝶もまだあの花かげに、安らかな眠に入つて居るのであらうよと、恍惚として瞶めた暫くを又はら／＼と零るゝ露のうら若き花の香も籠れるを其の儘頰になすりつけた、せめて姿も此の美しさにあやかれと。

瞻仰れば早麗しい空の化粧、銀鼠に橙の覆輪とりし朽木形の雲が稍に消え行くと、もう鎭守の森の端は猩々緋に燃えて今日も上日和、霞んだ空にお日樣のお出ましも遠くはあらじ、村の後の珖琳風の禿山に銀の鎌のやうな月も落ちた。

お辨當にお酢に蜜柑、楊枝に箸など千代田袋の奥に秘め、さて手鏡に薄化粧して着更へた衣は矢絣の一つづき、書生羽織の撫肩に萌黄の肩掛、是て花見の仕度はすつかり出來たものゝまだ氣懸りが綾ちやん。

椽傳ひ、障子の隙から閨を覗ふと、綾ちやんは昨宵のお約束も忘れて心地よげの眠姿、鈴のやうな瞳は閉ぢて見えないけれど、房々した黑髮を緋の小枕に垂れて紅梅の如き唇、林檎色の頰、はて何樣樂しい夢の境に逍うて居るのか、若し今日花見の樂しさにても耽つて居るのなら、何樣に落膽するのだらうと、迚も連れて

行けぬ路と知りながらも、何となく默つて行くが邪のやうで、茫然して居たが母樣のお呼聲にハッと氣付いて、雪枝樣が御待兼だから綾ちやん勘忍してよと凝と寐顔を顧みながら、さて愈々出立の紅緒の麻裏に白足袋のうつりも良う、「左樣なら母樣行つて參ります。」と、絹張の小傘斜に門まで出るとばた〳〵と追ひ縋つて袖を捉へながら、「アラ 姉樣 ひどいわネ。」と涙ぐんだのは綾ちやん。まあ何うせうか。剎那ゆらりと森の梢を弓杖許り離れたお日樣のきらびやかな影が庭の櫻に照り映えた美しさ、黄金の露、銀の露、花から葉からこぼれ〳〵て、櫻ヶ淵一日千本の花の眺めは何樣であらうかと、流石に行手が偲ばるゝものの、さて綾ちやんへ今日のお土産は何にしやう。

（評）女らしき文なり。

（又曰）題名の面白さ思はず人を釣込ましむ、是れ作者の擒手段。



古寺（賞外）　岡山縣赤羽　古賀柳川女

○榊原の温泉にまで

三重　山田ひさ子

重き病にはあらねど、湯治にてもしたらんには、と醫師のすゝめに、妾は母にともなはれ、車を驅りて安濃川のほとりなる妾が住家を出で、神納南河路などの村々打ち過ぐる程に、堤上の櫻花爛漫として時ならぬ雪の散りかゝるなど、我が行先の長閑さ偲ばれて嬉しさいやまさりける。

遠き昔、擧朝の嫉みをうけ、伊勢の瓶子は醋甕なりとて、其の眇目なるを歌はれける、平忠盛が生しと稱へらるゝ産品村は此わたりにありと聞けど今は探らん要もなく、たゞ其村のみ車夫に敎へられて、桒の黄なる麥の綠なる中をうねり〳〵て乘り行けば、西に聳ゆる經ヶ峯布引の連山おぼろに霞みて、雲雀の囀、鶯の啼く音、さてはひな歌の聲、何れより

ともわかず吹く春風に送られて、翠床しき森の上に長閑に鳶の輪をゑがけるなんど、目もさむるが如き佳境は笑めるが樣に我れ等を迎へて、氣も心もすが／＼しうなんぬ。

吹上と云へる坂路を越ゆれば櫻花道をはさみて、大和心はかくと許りちり敷くかたへに、里人の赤心こめて造りけん凱旋門のすつくとたてるもいとゞ床し。たとへ幵は松の丸木にて粗末のものとは云へ、如何に凱旋の兵士を慰さめつらん、其の門にかく書きてつるしあり。

いや高き神の惠を笠さして
此凱旋をまつて喜ぶ

やがて路は二つに分れたり。我れ等は弓手の方にとりて、轆轤と巖に激し小瀧となり淵となりて、身の毛もよだつ許りの溪流！あるは若草もゆる山又山の間、車に搖られて打興ずるに、程なく四里の道を目ざす里へと着きぬ。湯の瀬川淸う流れて、其の眞靑き淵に櫻のかげの浸せらるゝあたりの景色、今宵の月に如何に美しからん。

（評）月下の逍遙は、如何に君が詩嚢を肥さん。

○花の我が宿

德島　住友登喜子

（春）

見渡すかぎりは菜の花畑、くるふ胡蝶の羽風よりたちそめけむ春風の、色よき花の波よする霞のするに、うきつしづみつ流るゝ繪日傘の眺め妙なり……。

庭にさける櫻の花の、白雲とも見えて大和心と歌はるも理り、ことにねざめ靜けき曙の眺ぞ心地よき。

此方の野邊には、菫、蓮華草の花束つくる少女の愛らしさ……その黑髮に胡蝶の一つとまりしと見しは、折りてさしたる山吹にやあらむ……。げに春は人生の樂天地なり。

（夏）

曙の空に棚引ける雲とまがふは棚の藤、朝露の情に笑むは朝顏、星かげ少くゆらぐ庭の小池に、祝歌を誦して咲くは白蓮、低き垣根の卯の花のけ高さ、淸き泉のほとりの菖蒲の床しさ、凉しき靑葉かげの白百合の淸き姿、父上の賞づる鉢の撫子、庭の牡丹、淸き薫のやり水の匂ひと和して夕化粧する妹の白き肌に泌む思ひするはやさしき夕顏……げに夏の我宿は絶好の詩境なるよ……。

（秋）

そよと音づるゝ秋風に、花も大方散りはてつ、窓近き朝顏も實がちになりて、こほろぎの調べとゝのはむとする頃は、二坪にたらぬ花園に咲き出づるは桔梗、萩、女郎花……殊に菊は色香ゆかしく、そゞろ精神を

高尙ならしむるよ……。

裏山の紅葉色づきそむれば栗梨林檎柿の果實は熟するを、鹿なきて月淸き夕、親しき友と語らひつゝ味ふは、ことに嬉し。

げに秋は閑靜にして、人にやすらひを與ふるのときなるよ……。

（冬）

秋の女神のみ息もいよ〳〵細りつ、木々の紅葉もちりはてゝ、庭の片隅落葉の中に、我世ぞときさ誇れる水仙、あまりのゆかしさに手折らむとすれば、葉の厚みに何となう手さわりぬくき思ひするよ……。

肌もきるばかり寒き朝雪ふり出し木々に時ならぬ白妙の花を咲かせけるに……そが中より淸き香をはなつ、雄々しの寒紅梅……。げに辛苦を嘗めて家を保ちし女丈夫を雪中の梅とはよくも云ひたる。

あゝ冬は人の汚れたる心を洗ひ淸むべき時なるよ。いかに樂しく……面白き……花のわが宿!!!

（評）四季中、春最も可なり。

○春雨のひと日

福岡　土岐てい子

昨夜からふり出した春雨で、折角の日曜を散歩も出來ない、けれども御蔭でお庭の紅梅が大分ふくらんだ、「勅なればいともかしこし」と歌うた人を思ひ出て、何んだか折るのが惜しかつたが、母様の御懇望でよぎなく、小雨の庭に鋏の音を立てゝ、一枝床に活けた、今日こそはと妹の袱布を出して縫ひ初めると、三重様からの御使京の姉様の御越に依つて、うたの會を開くからとの御文、行きたいのは山々だが仕立上げないと、廣ちやんに怨まれるので、其由を書いて梅のさゝ枝に結び付けて御返事する、夕方仕立物は出來上つたが、雨はまだ止まない、外を通る花賣が、花も姿もあはれに濡れて、淋しい聲を立てゝ行く、空はやがて薄墨色に成つて、日が暮れて來た、雨の日ぐらしとは、誰かの作にあつたがと、そゞろになつかしく思つてゐると、時計が靜かに春雨の曲を奏して、名殘惜しい今日はくれた。

（評）流麗。

○小鳥

神戸　佐々木翠子

夜は明けぬ、夜來の暗雲名殘なう晴れて、西の方鷹取山の端に殘星一つ輝きしが、それもいつしか光を失ひぬ、垣根の椿花漸く紅唇を開いて折々吹き來る風にゆらぐ風情は少女が戀に惱むかのやう。

何のなす事もなく、此朝景色を打眺むるほどに遙の大空より、一羽の小鳥、一文字に此方を指して飛び來り、縁先に吊しありし古鳥籠に止まりぬ、是は面白しと餘念なく打守りてけるに、一聲、一聲、又一聲、切りと

啼き初めぬ、朝日はきら〳〵とみ空に昇り、時計の八時を報ずるに至つて、美玉を轉ばす如き妙音は、漸次と細り行き、あはれ秋の寒空に悲鳴する蚊の如く。今にも血を吐かん許りなるにぞ、餘りの不審に、やをら猿臂を伸ばして可愛の小鳥を捕へしが、あな奇縁：：：脚部に絲の結び附けてあるは正しく……我は礑と手を撲ちぬ。

思ひぞ起す我兄君は、一昨年の春、餘寒未だ骨を刺すの頃、何處よりか一羽の目白を得給ひ、朝となく、夕となく、己が子の如くに愛しみ、母上にも鳥狂人とまで云はれ給ひしが、豫ての冒險的功名心抑へがたく、超えて昨年の夏の末つ方、遂に虎嘯くてふ滿韓探險の途に登り給ふこととはなりぬ、訣別の時、彼の小鳥を鳥籠より出し、やよ小鳥よ汝が主は今より無きぞ、運盡きずして歸り來らんには、再び汝が嬉しき顔を見せよ、と、の宣ひて、脚部に絹絲を結び附け、怨めし氣に放ちやり給ひぬ、小鳥は嬉しとも思はざりしか、其後四五日間、絕えず庭の樹立を去らざりき、斯くて兄君は決然笑を含んで門出なし給ひき、其後消息は杳として知るに由なく、われは只管無事を祈りつゝありしなり。

おゝ可憐の小鳥よ、よくも舊家を訪ね來りしよ、されど、汝が主は未だ歸らず、斯く云へば無情に似たれど、早く徃きて廣き天地に遊べよ……。

小鳥は無言に羽叩きして、庭先を三度啼き回り、遂に姿は樹立に隱れぬ。

翌日、吁其翌日、而かも小鳥の啼きしと同時、母上は、不圖今朝來し新聞を見られしに、見る〳〵顔色蒼く、顫く、手は震ひぬ、吁外ならず兄君は、蠻奴の毒刄に斃れ給ひしなり、陰に國家に殉ぜられしなり、我は母上に犇と抱附きぬ、血涙頰を傳ひて、新紙の上に點一點。

吁小鳥よ、異鄕の草叢の下、露冷やけき所、幽明長しへに歸らざる兄君の屍に宿りて啼けよ。

＊　＊　＊　＊　＊

今宵春月、おぼろ〳〵と花枝に懸りぬ、兄君の俤寫しやらで、徒らに物思はしむるよ。

おゝ、あれに聞ゆる怪しの音は、怨むが如く、痛むが如く、憤ふるが如く、愁ふるが如く……又しても彼の小鳥に非ざる乎？

（評）餘りに作り過ぎたるきらひあり。

○ゆく春

（兄上が片見の文箱、春雨のつれ〴〵にかいさぐれば）

加賀　舟岡やま子

幼な心に、我はいたく軍人を慕ひつ。かの長きサーベル、輝く金モール、肥えたる馬、いかばかり小さき心を躍らしめ、皷動を高めけん。わけて、硝煙こむるブ

リッチに、長劍を帶びし艦長が、幾多健兒を指揮する樣の、目にみるごと、叔父なる人に話されしとき、あはれわが心、殆んど堪へがたう覺えぬ。この頃よりぞ、われは海の人たらんと志しぬ。海軍の士官たらんと欲しぬ。

かくて十四の春、中學に入るべく父の許しを得て、從弟なる友と、縣立中學に學びて一と年を經ぬ。しかも徒らに、靑春の炎にもえ、希望にあこがれし身の、いかでかは五年の長き月日、變化すくなき中學の生活に、滿足しうべき、あした尾山城兵營にひゞく喇叭の音を耳にし、ゆふべ出羽町練兵場にとゞろく突喊の聲を聞いては、ひたぶるに行く末のみ急がれ、幾度か夢路を江田島浦回に通はしけん。偶々兄の友なるが東都に遊學すときゝ、共にと强ひて、漸う〳〵に伴はれつ、海軍豫備校にと入りしは、それよ今より六年の昔、さつき末つかたなりき。乳までなる上衣、胸までなるズボン、いかにわが虛榮心を滿たしめ喜ばしめしか。されどそは束の間なりき、まことと我れは脚氣に犯されて、歸省を餘儀なくされし也。かくてまだゝき初めし希望の星はうれたくも此に叢雲に掩れをはんぬ。鄕里に於ける靜養は幾分か光明ある如かりしかど、闇黑裡に葬られん運命は更に他よりぞもたらされぬる。そは脚氣の快癒と共に餘り强からざりし眼の、過度なる書見に近視十餘度を示すに至りしにぞ。

長閑にそゝぐ春日の雨に今や咲かんずらん紅の花の嵐に散らさるゝすら幾多詩人の腸をたつときくものを、まいて醜けき賤男山がつの草鞋にふみにじられ泥にまみるゝを見ばそもいかにか觀ずらん。

かくて世にうらぶれし失望の子われは最後の慰藉を求むべくエンゼル育む身とはなりぬ。今は早や花の如く露の如く澄み渡れる幼子と、あるは月あるは花眺めつ賞てつ共に憂さを語り喜を語りつゝあるなり。さるにても一年を同じ學び舍に過ごしたりし同鄕の二人の友のありけるが今いかにかしけん。あはれ、われと等しくおのが運命をかこちつゝあらざるや否や。

（評）銑とるべかりし手に敎の鞭とれと命ぜし運命は。

○春の野遊び

埼玉　荻島かすみ子

降り續いた春雨は珍しくも今朝は名殘なく晴れて向ふの鎭守の森も見え分かぬ迄朝霧がこめて、庭の紅梅にははや鶯がおとずれて面白さうに鳴いて居る。今日の樣な長閑な日を野邊へ行つて、樂しく遊び暮さうと、今年八つなる妹を連れて遊びに行くこととした、寒からぬ春風は靜かに二人の袖をなぶつて、氣も伸び伸びした樣、恰も花毛氈を敷き詰めた樣な、そして柔かい草の上を踏みながら、幅二尺計の小川に沿うて、

いつしか田圃道にさしかかつた、「あら奇麗、姉さん此れ何といふの」突然妹が菫の花を指さして斯う云つた、「あゝそれ？其は菫といふの」、「つみれ」、「いゝえ、すみれといふのよ」、「すみれ、私またつみれといふのかと思ひましたわ、まあ奇麗ね」といひながら、それを抜き取つて接吻したが、やがて小さい稚兒輪にさした、こんなことをいひながら、いつか野原へ來たのも知らなかつた、見渡せば秩父の連山遙かに、春色淡靄の中に聳え、青々とした野原は、すみれ、蒲公英、土筆などが、奇麗な花形を織り出した毛氈の樣に、此處彼處に咲き亂れて、其の間を蝶などが樂しさうに飛び廻つて居る、又遠くの緑滴る樣な森の處々には草葺の家があつて、まるで繪の樣、そして彼方の堤の上に牛を逐ふ牧童が更に田舍の好景を添へて居る、今迄少しも聞えなかつた雲雀は、一つ、あら二つ三つ、同時に鳴きながら青空に昇つた、すると妹は愛らしい口を開いて得意の「春の野」を歌ひ出した。

「眞白に見えし雪きえて、野はおもしろくなりにけり」其の聲は小川のせゝらぎの音と相和し、雲間に囀づる雲雀の聲に通ひ、餘韻は遠く遠くかつかすかに、菜の花の上を渡つて四方に消えて行く、妾は妹の唱歌を聞きつゝく／＼と天地自然の妙を感じ、眞個にパラダイスの花園を散歩して居るやう、心は唯々清らかになつた。

それから花を摘んで妹に奇麗な花束を作らへてやつた、時計を見るとはや正午過ぎ、驚いて妹を促して歸り路についた、すると何處から飛んで來たか一羽の蝶、名殘を惜んでか妹の持つて居る花束に幾度か接吻するのであつた。

（評）畫中の景。

○我家

伊豆　加藤為子

美しき數々の花はなけれど、父上の好み給ふ、菊畠もあり、我等が好める小さき山吹水仙、さては白萩等一株づゝ植ゑて、姉妹が心づくしの、かひあれかしと、朝に夕に、語りつゝ眺むる面白さに、此の寂しき庭もさのみ憂しとも思はず。

春はほころび初めし梅ヶ枝に宿る鶯の聲を、耳にして好める書など、ひもとき、後の山に紅葉尋ねし秋もあり、涼しき打水の夕、したゝる露の音を聞きつゝ、一家こぞつて、夜更るまで月を眺むる夏もあり、冬は奇しき白銀もて、包みたらん如き箱根の山も吾家の築山の如くして、此の十坪の庭、さのみ小さしとも思はれず。

此の頃は垣の櫻も咲き初めて、早咲きは散り初めたれど、大方は垣の外の川に流れ、三つ二つの花片は、池にこぼれて、緋鯉の大なる口を開きて來るも面白し、

まして、露深き朝、そゞろ歩きの夕、薄靄立ちこめて袂に滿つる時は、氣清く、靜けき庭の一しほ靜けくて仙境のごとし。

茶つむ里の女の、日々右手の表の畠に、茶つみ唄、低う細う、とだえ〳〵て、優しう聞ゆる時は、やり水のさゝやかなるしらべも、いや高う響くなり。あゝさても、樂しき我家哉。學びやより歸りて、花を愛でつ、夜に入れば、皆打ち集ひて、語らふ時は、一日の苦みも忘れ去る。あゝ、さても樂しき我家哉。

三島の町はづれ、東海道をゆく箱根山の麓、溪深うして、淸らけき加茂川の片ほとり、堤の上に柴垣めぐらして、やり水の響、長閑けく漏るゝ一つ家、そは樂しき我家なる。

（評）羨ましきは君が家居。

○平和の里

因幡　みどり子

數しれぬ都會の娛樂をすてゝ、僻陬の地に歸省するは好奇にも程こそあれと、半ばけなしに袖引き止めし友の言葉をも肯はて、都會は修業の地ぞ、田舍は靜養の地ぞ、歸省は汚れたる心の淨めよと獨ほゝゑみて、土產物にかばん膨らめつゝ、車を驅りて懷かしきこの里に我は歸りぬ。

燦爛たる丹碧の飾りこそあらね、仰げば翠色を刷きたる如き山々、俯せば瑠璃を流すに似たる小川は更なり、野面に匂ふ花の色も、梢に歌ふ鳥の音も、たゞよふ雲も、吹き來る風も、凡てみな浮世のものならで、利に醉ひ、名のみに憧るゝ都會の生活に飽きはてたる我は、漫ろに仙境とやらんに遊ぶ心地しつ、こは我が故鄕ぞと云ひしらぬ誇を感じぬ。



答辭（賞外）　韓國仁川　小國敏子

わが里は三面山を負ひ、北なる一方のみ僅かにひらけて日本海に臨む。一村十七戶、村人は農をもて唯一の生業とし、朝に星を戴いて田のもに出て、夕に月を踏んで歸る。里人の情はたとしへなく淳朴にして懇篤なるよ、早くも我が歸鄕を傳へてをちこちより孃樣にとて、名物のつるし柿、密柑、さては自慢の大根、お芋など取りどりに贈りこしつゝそが禮にとかばん開きて、心許りの品入れ置けば、夕餉終りし頃、向ひ隣りの姥たち來りて、今日は珍らしき物頂戴したりと懇なる言葉のべ、少時見ぬ間に妾のいたく大人びたりな

ど語り合ひて歸りゆきぬ。かくも和氣藹々一家の如き里のありとは、到底、虚榮にのみ充ち滿てる都人の、夢にだに想ひ及ぶべき所にはあらじ。あはれ、靜かにして溫き平和の里よ。希はくはこの清穩の風景と純潔の溫情とをもてる我故鄕をして、永久に俗塵の外にたゝせまほしきかな。

（評）我もまた作者と與にその淳朴なる氣風を失はざらんことを希ふ者なり。

○夕ぐれの海

石川縣　白峯ゆき子

暮れかゝる夏の日を、急き立つる樣に啼き送つた蟬の聲、やうやう歇んだのも今し方。渺茫たる太平洋を前にし、名殘りなく沈みゆく夕陽を背に負ひて、われは今とある丘の上に立ちて平和なる夕暮れの海を凝と見まもつた。夕日は今し方瀧尾山の端に、鬱然と生繁つてる森かげに落ちたばかりて、幾條かの金線は雲の斷間を縫うて其所より四方に放射してゐる。

遙かに眸を放てば一望皆碧、烟雲模糊として水平線上一縷の黑烟、わづかに其れと見留め得しが、それもやがて雲の間に消え去つた、白帆のかげは無論一つも見えない、折々白い胡粉色の鷗が、波の上を飛び交はしてゐるのが目に入るばかり、右手は一帶の松原翠色將に滴らんとしてゐる、水鳥の五六羽翼を休めて居る削れる如き岩石の聳立せし所は、嘗て蟹採りに餘念なかッた磯で、寄せくる浪は絕えず碎けてそして四方に飛散してゐる。黃昏の色は刻一刻、靜かに此入江を掩ひ去つて、山も、岡も、海も、一面に夕霧に立罩められ、くれなゐに染めなされた夕燒の空、それも次第々々に薄れゆきて、終には靑く又淡黑うなつて了つた。

二三艘の漁船が引き付けられてゐる白い眞砂路から、向ふの川尻へ續いてゐる並木松、其の向ふに茅葺の家が二軒程見えて、宛然一幅の薄墨繪のそれにも似てゐる、突然寂寞を破つて餘韻を長く浦戶の川面に傳へたのは、最終の下り列車の汽笛てあらう、下手の小田よりは蛙が騷がしく鳴き出した、龍臺寺の鐘の音は途切れ途切れに、と見ると一團の玉兎は何時の間にか、叢雲を排して中空に輝いてゐる、月夜の海岸は又一しほ景色がよい、海面には眩ゆく金龍を躍らしてうねりうねつてゐる、浦戶川は宛も銀蛇のうねるかの樣、そして螢が川面近く、空高く、花火の如く、流星の如くに其俤を水に宿してゐる。

閑寂な天地の靜けさを破つて、はら〳〵と落つる松の雫、思はず見上ぐる頰に一滴、其上を、天津御空に舞ふ天女の、翼の羽音の樣な涼しい風が吹き送つて、腦の中まで浸み渡る心地よさ、あゝ得も謂はれぬ自然の景色！幽艷なる、崇高なる、壯大なる、月下の海岸!!!

（評）圓熟せる筆致。

○妾が平生

千葉　田村瀧子

落日鎭守の森にかゝつて塒に急ぐ烏の聲喧しき夕暮の空、家々の夕餉の煙は霞の樣に立罩めて朧氣に馬牽きて歸る里人の鄙唄が田甫を隔てゝ遠く遠く聞ゆる時、山寺の鐘は餘音を引いて鳴つた。妾は麥の畑耕す手を止めて泥にまみれた衣の裾を拂つて鍬を肩に畔づたひに二三丁我家の軒に急ぐのである。妾の父と弟とは山から仕事を仕舞うて二三杷の柴薪を肩に乘せて歸つて來る。妾は竈(かまど)の下焚きつけて夕飯の仕度にかゝる、父と弟とは座敷の內を取り片付けて圍爐裏に榾澤山折りくべて今日の仕事先きの話などして居るうちに、飯は吹く汁は煮へる、お膳立と云ふても一家三人暮しの極簡單て、大きな木地作りの膳に茶碗と椀と小皿と箸とそれだけてある。今日の仕事の出來高や、翌日の仕事順や、四方山の話しながら御飯を濟まして仕舞ふと、父と弟は仕事に使ふ繩を綯ふべく臺所に筵を敷き、ランプをつける、藁を打ち始める。妾は食器を取り片付けてから薄暗い燈火の下てお針道具を持出して、父の股引の繕ひや弟の筒袖の綻を縫ふのである。父も弟も藁仕事が出來上つたと云ふので座敷へ上つて來る、妾も針道具を片寄せて三人團欒して圍爐裏の側で睦じく語るのである妾は昨日新屋の愛子さん所から拜借した女子文壇を繙き。弟は少年世界を出して挿繪や作文を評し合ふて居ると、父は側に莞爾々々として聞いて入らつしやるのである

(評) 平和なる田園の生活、眞率なる筆によりてよく描かれたり。

○若菜集

伊豫　土居優香子

○

長閑き日影に小川の水ぬるみ、ゆた〳〵と、岸の芹の根を洗ひつ、若草肥えて、羊かふ子の笛面白さ、春は來ぬ、天地有情の春は來ぬ、夢と流るゝ霞の奥は、菜の花一里打つゞきて、紫の煙草の煙のゆらりと尾を引く、頰かぶり、艶なる歌の主かあらずか、白き姉樣かぶりの、ちらほら、見ゆる、たゆまずうまずの歌をささぐる水車の上に、晝の月かゝりて淡く、桃の花つけし自轉車一輛、前の街道過ぎて、霞の奥に消えんとするは、隣の村の桃見の歸りならむ。程近き町の工場の瀛笛、野川を渡り、柳の下くゞり、霞を破れば、いつしか姉樣かぶりや、歌の主は歸りて、足弱き田吾作爺のみ、悠々くはへぎせるに、紫の尾を引きて、土橋の上にやう〳〵少さくなりつ、遂に籔かげの桃咲く軒に紫の煙は止りぬ。

○

夕風冷たう軒の櫻を散らして、其散つた花片をついばむ、庭鳥の、何に驚いてか俄に、コッ!! コッ!! と鳴き出すと、門口にぽつくりの音、はたと止つて優しい聲

て「妙ちゃんお遊びな」、六つばかりの頰の赤い女の子の、メリンスの袂布にくるまつた首を、ちゞめながら、返事ない家の中を、のぞく樣にして、はげかゝりし朱塗のぼつくり閾にコツ〳〵「妙ちゃんお內?」、再び返事の無い家の中は、ひつそりとしてゐる、女の子はおづおづ折戶の口に廻つて開かうとする途端、陰氣な空氣に送られて、「妙や」と甲高な銳い聲は、茶の間にひゞいた、吒驚した樣に後ずさつて、首をちゞめると、强い物音して俄に「アレ母ちゃん御免ちやいよ」とばかり、幽に啜り泣の聲聞えつ、やがて小ばしりの足音して、お下げ髮の頭を袂にうづめた姿が、椽に現れた、「妙ちゃん又叱られて? 私さつきから待つてたのよ」、涙の目で見返つた奧は媚めかしい笑聲と灰吹を打つ音一しきり、後は物靜けし、「妙ちゃん私の內へ入らつしやいな」、下駄を直して手を取る幼き友の、「どうかされて?」と憂はしげの小さき眉ひそめて、妙ちゃんを見上げた、涙含んだ目で、「アヽ」とばかり、雪をあざむく二の腕に、紫の斑點、「マア此樣に」目をみはる友より、さしうつむく妙ちゃんの肩は幽にゆれて……あゝ、冷たき葉かげに生ひし日かげの花、何時かは暖き日に浴する事が出來やう、夕風一しきり櫻の梢を吹いて、ほの白き花の、一片、二ひら、先の庭鳥は無心に、二人の足許に首をかしげて。

（評）　艷なる歌よりも、日かげの花の方、あはれ深し。

○野の花よ（佐保姫より）

栃木　飯塚よね子

汝れよ汝れよ、妾が愛する、汝野の花よ。

早う夢醒めよ、醒めて麗かに照します春の日の惠に浴せよ、おゝ美しき紅の朝霞、淸き花の香の身にしむ事よ、あゝ樂しく榮有る姿が世なるかな、疾く起きよ野の花、愛する花。

見よ、見よ、彼方の野に彳む乙女を、彼の綠の黑髮にかざせる花の紫は、汝菫の色をなつかしみてか。

れんげの赤く美なる花束の姿は、如何に愛らしき稚兒の心や引かん、搖籃の中に罪無き夢路に入れるも、猶放さじとてか、可愛き手にかたく握られぬ。

たんぽゝの黃なる竹籠の中に滿ち滿ちぬ。

かくて汝等は優しき乙女の君の、白く美しき手にあたたかう抱かれつ、明日よりは文に栞に、さては文机のほとりに匂ひて、床しの花よ美しの花よと愛でらるゝ身なるを、幸多き身なるを。

されば花よ、妾が與へし其色其香を輝かせ、平和の光あふるゝ此野に、幸至るを待ちつゝ、小蝶とゝもに、春風と共に。

おゝ夕べや迫り來し、草摘む乙女の姿も見えずなりぬ。

いざ妾も行かなん、春日の沈むところに。

さらば花よ、いざゝらば靜に眠れ……。

（評）　着想の新しきをとる。

佐々木信綱先生選

和歌

天　春駒

陸中國江刺郡野手崎　菊池はせ子

うつくしき新鞍おきて緋桃さく
　垣につなげる栗毛若駒

【評】着想新らしく、結句の調も引しまりたり。卷中の白眉。

地 ◎

浮彫の匂ひも高き層塔に
　落花亂るゝ奈良の夕ぐれ

近江國甲賀郡柏木村泉　辰井ふみ子

【評】くづれたる築地わたりに、笛の調もきこゆべし。

人 ◎

陸中　綾子

つよくいひて別し人のしのばるゝ
　今宵もこよひ月も月なり

【評】四句のいひざまはいまだしけれど。

秀逸

◎ うらぶれの郷にわびしき夕暮を
　枯れし黄菊に夕日つめたき
新潟　小島ゆき子

◎ 春やむかし花に眺めし古郷の
　山なつかしきおぼろ夜の月
上總　節子

出産を祝ひて
奈良　藤田せい子
いさましくなく此聲は年をへて
　世にひゞくべき聲とならなむ

◎ 病める身を窓に凭せて書よめば
　若葉の雨に山鳩のなく
千葉　小川恭興子

◎ 春雨に樓の灯くらき大江の夜
　水をへだてゝ聞く鼓かな
仙臺　南もり子

◎ 讀經やみて眞晝靜けき山寺の
　若葉の庭に山鳩のなく
上總　雪枝子

◎ 窓あけて面ばゆげにも見る人の
美濃　加藤よね子

そでに花散るゆふぐれの風
◎上毛　眞砂壽子

妹ゆきて櫻花散る此の夕
籠の鶯野に放ちやる
◎岐阜　山本靜子

朧おぼろ花暮れ遲き奈良の宵
昔男に似しひともがな
◎秋田　白菊

友去ると日記にしるして夕暮の
戸による袖を秋の風吹く
◎千葉　長谷川重子

草の香に醉ひてたゆたふ小羊の
歩み遲きに鞭あぐる世や

よき歌とおもへど、かゝる着想をいづこかの雜誌にて見し心地す。作者の反省をのぞむ。

◎上野　曉なみ子

待てどゝゝ我背は今に歸り來ず
沖の浪かぜ音たかきかな
◎豐後　渡邊翠子

大原や石に夕日の冷たくて
吾追ふ牛の影もやせたり

冬夜　四谷　梨花

いく度も炭さし添ていたづらに
昔がたりのあかぬ夜半哉

春雨　名古屋　安達はま子

春の雨もの靜なる夕まぐれ
ながむる窓に桃の花ちる
◎豐後　平山良子

夕雲のちぎれたゞよふ野に立て
狂女ほゝ笑む木枯のかぜ

春野　大阪　江口千夏子

ゆかり深き菫に神のひめごとを傳へんとてや黃蝶舞くる
◎紫女史

人知れず垣根の梅の花つみてつゝむ思ひを君に送らむ
◎伊豆　西堀旭山子

長閑さや鷄こもあむ日あたりの桃の眞垣に小鳥さへづる
◎紀伊　米田守子

病ませる母に添寢の雨の宵ともし火戰ぐ撫子の花
◎周防　小澤ちえ子

母上が涙ながらの物語り聞くに堪えぬ夕暮の窓
◎岩代　丹治はるみ子

燈臺のひかり消し海原の離れ小島に月かたむきぬ
◎三重　山田澄子

故鄕の春はかくぞと歌そへて桃花三二片姉に送りぬ
◎備後　池田仙溪子

花に泣き月に哭きて人知れず逝きにし君の寫繪を見る
◎下總　たか子

天つ乙女と月の宮居に語らひし夢ふと覺めぬあかつきの鐘
◎伊勢　金子伊登子

つゝめどもあまる思のほに出てゝ鏡にくもる我がゑまひかな

朝顏　松田たか子

やつれても結び代へれば竹垣の伏しながら咲く朝顏の花
◎千葉　水谷ちとせ

白桃の窗に鼓の緒を締むる若き少女の眉うつくしき

○　武藏　山口邦子
牛ひきてかへる童がやれ笠に花吹雪する春の夕暮

○　亡母の墓前にて　長野　島垣永子
亡き母のみ墓の前に梅の花手向くる袖に春雨ぞ降る

○　新潟　歐子
風ぬるし詩集よむにもよき春や妙義の絲櫻名より濃き

○　舞姫　越後　山本鶯村
高樓の酒宴にはべる舞姫が金糸の裾を吹く春の風

○　澁谷　林田糸子
なつかしき歌の友なる君はいて淋し今宵を雁鳴き渡る

○　安藝　野梅女史
病みなやむ母の面影ほのぐらく山茶花散りし朝月夜かな

思出の寫繪　安藝　箕岡蕗々奇
こぞ今宵逝きたる夫を思出て人目隠してうつしえになく

○　千葉　白井げん子
腰をのし腰をのしつゝ爺と婆が野べに出でたる春日和哉

○　鹿兒島　前田みつぎ
見る度に亡き母君を忍ぶかな情にあつき雛の親どり

○　備中　稻本千惠子
青柳の振さけ髮を梳る櫛美はしき三日の月かな

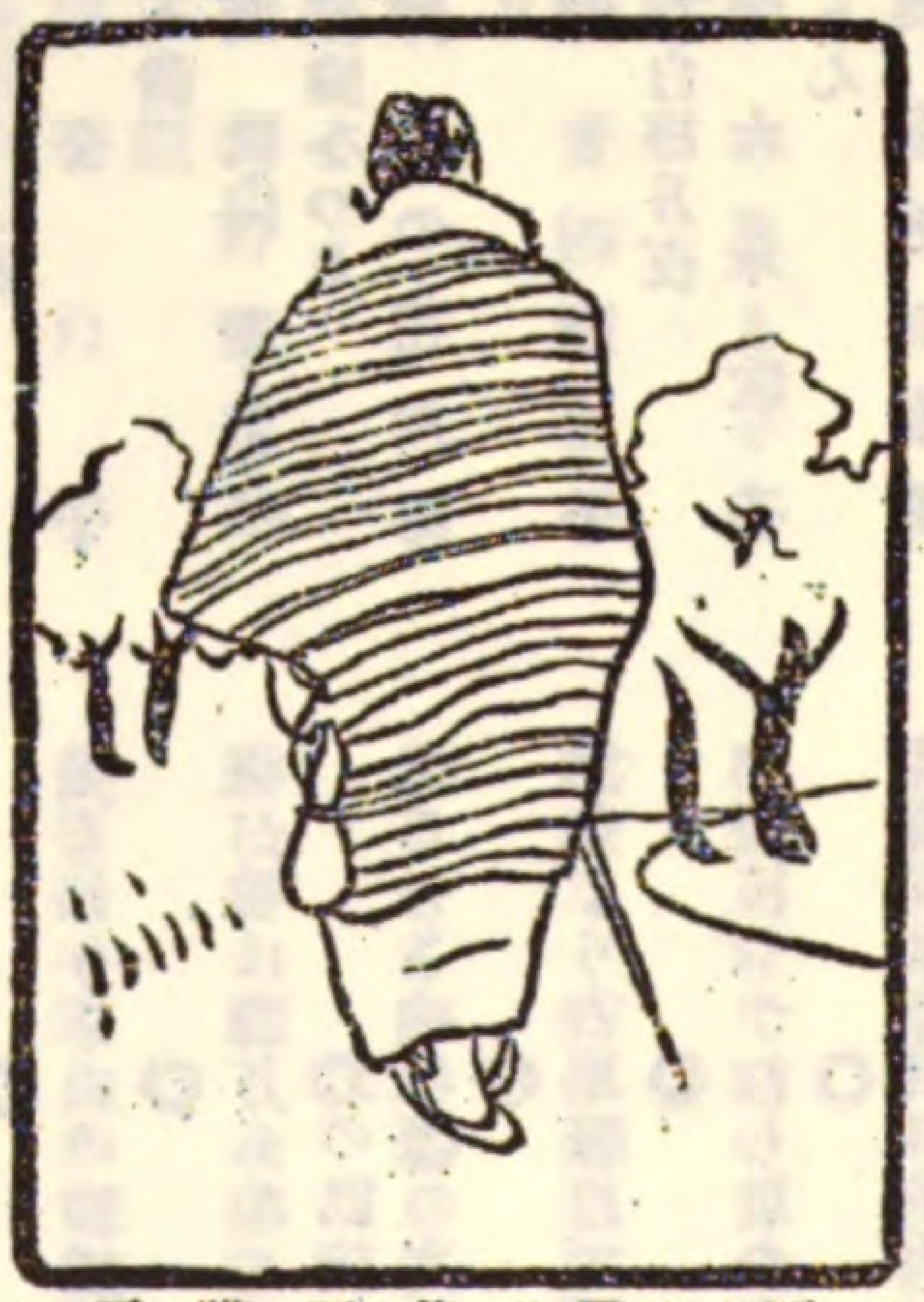
○　芝區　神田たみ子
はろ／＼と東にのぼる學び子よあしき都の風になそみぞ

○　長崎　山田べん子
亡き父と物語りせしゆめさめてさびしき夜半を千鳥なくなり

○　小金井土產　伊勢　平塚民子
小金井の花見にゆきし土產にと草履の裏の櫻はらひつ

親友に送る　山梨　すみ子
八重の山川へだつれどへだてなき君の心にいつか報ゐむ

日和（賞外）



岡山磨屋町　柴田豊子

○　陸中　綠子
さまよひて櫻小ざくら朧夜をうつゝに訪ひし友の門かな

○　長野　美子
白梅や母在る里のこのごろとたびし衣に春はかくるゝ

○　横濱　くれなゐ
和田津海の沖の島山紫に長閑にくるゝ春の海かな

○　長門　長井閑子
死屍を埋めし原の草萌えて紫菫ひともと咲きぬ

○　山梨　若葉
食事するつどに思は宮城なるうへにし人の上ぞしのばる

○　神田　大澤隆子
鈴の音鳩の羽音もしづまりて朱の鳥居に夕日淋しき

○　富山　小林よしえ子
此春はしらきの小野の民草を打なびかせて神風ぞふく

○　芝　山本はる子
なつかしき友と語りし野邊は今朝きえてつれなき曉の鐘

○　下總　たか子
白川の花うり女小唄して京に行く野や朝月淡き

○　ゆき子
磁の瓶に紅梅さしていもうとのよきゆめうつす宵の小灯

○　志摩　敏江女史
夕日さす松原一里人たえて松の梢に百舌なきしきる

○　常陸　酒葉つれ子
獨住も思出多き夜半なれや暗き燈下に淋し風吹く

○　茨城　小松崎つき子
天地に富士と琵琶湖を殘しけり花埋もるゝ春の國原

○　春野白菫
荒海の磯もとゞろに寄する波砕けてわれて花とちるかも
春の夕暮　志摩　紋江女史
里川に大根洗ふ少女子の歌面白し春の夕暮
軒の鶯　水戸　松島ゆり子
鶯もいかなる夢か見につらん初音ゆかしき賤が伏屋に
○　浅草　大沼さゆり
破れ垣をもれくる琴の音はたえて絲の音かすむ春の朧夜
○　横濱　谷戸しの子
城跡に鳥のさけびのしきる殺月に雲ある木枯の宵
友に別る　萏子
何事も語りつくして今更にうら恥かしき吾にぞある哉
○　茨城　秋山さくら子
おぼろ夜を散る花あびてさまよへば鐘の音低うわが胸をつく
渡守　名古屋　卯の花女史
渡守月澄むよべの詫しさに昔を偲ぶ戀の舟うた
○　信濃　とき子
なつかしき君まぼろしのあとおへど追へどはかなし白梅月夜
○　川越　大木歌子
我が庭の花さく頃は兄上のかへりを祝ふ時となるらん
少女子　入間　中村ふく子
朝霞梅散る里を少女子がふし面白くうたふ聲する
○　本郷　しま子
をさなどち唱歌歌ひて籠提げてかへるリボンを蝶の追ひくる
窓鶯　紀伊　島田芳子
窓近くほゝゑむ梅を木傳ひて聲もかをりてうぐひすぞ啼く
春の日　姫路　松下みどり
茶の釜の音のみひゞく竹椽に小猫ねぶりて日かげのどけき
○　大和　小紫蝶子
故里の妹が年始の文に笑みぬ白梅さむき温泉のやど
梅花　横濱　野薗子
れやの戸をあくればやがて梅の香を吹きおくりくる春の朝風
○　上野　暁なみ子
枯あしのうらなり寒き大利根の汀にすてしともなし小舟
○　伊豆　さゝなみ
長閑なる春の日かげにさそはれてさくら見にゆく向島の茶屋
○　南總　石野靜子
長雨に露を結びし柳葉にそよふく風の心地よきかな
○　小倉　松室さえ子
武夫の夢古郷に通ふらん京に長く流れ星のする
○　京都　秋月清子
美くしききぬの彩雲四十九里の波にうたれて佐渡が島見ぬ
○　紀伊　素美麗女史
梅が香に薄月かをる曙の花の下漕ぐ月が瀬の春
君の凱旋を祝ひて　神奈川　吉井せい子
男ましき砲の響の高き名をあげて踊りし君ぞ目出たき
○　伊勢　榊原芳子
雲井より古巣尋れて渡り來てつがひはなれぬつばくらめ哉
○　陸中　中澤久子
初戀にやつれし里の少女子の籠より散れり花の二三四
○　名古屋　原田琴子
うゑになく我が子抱きしめたへかねてよゝと泣き入る母やせにけり
春雨　茨城　富代子
降り初めて晴るゝ日もなき春雨に庭の結繩朽ちやしぬらん
○　大阪　杉田孤泉
ゆけどゆけど花うるはしき桃むらやいづこが村のはてにあるらむ
○　藤枝　入重枝子
薄月夜花桶さげし尼君の紫衣の袂に花吹雪する
春の月　芝　高野やなぎ
薄月夜雲にもまがふ遠山の櫻ぞ春の錦なりける
月下樂　姫路　松下巻枝
笛もちてそゞろゆく手の垣間もることの音よりも細き三日月

行路柳　香川　梅田靜香
道のべに霞の衣おるかとも見ゆる柳の糸ぞみだるゝ
○　茨城　秋山隆子
佐保姫が綾の御衣の美くしう野邊をかざれば蝶いてゝ舞ふ
○　秋田　K　R　子
幼な見の春の野邊をば夢に見て授る乳房花と見るかな
立春　丹波　波多野女
春雨に野山の雪も消えはてゝ庭の梅木に鶯の聲
○　備後　能美律子
わすれんと思へど失せじたらちれの亡き父君を思ふ心は
春遊　深川　勝山三千代
春雨の晴れ間を渡る夕川のきしの櫻は今盛りなり
○　栃木　寺内まき子
梅の花清き姿を朝日かげ歌はせ見ばやうぐひすの聲
春野　武藏　青柳彌生子
君きませ野邊は若草うるはしう緑の床に小羊あそぶ
○　武藏　琴子
草ふかき野川のみづにかげ見えてかたぶく月に水鷄なくなり
うなひご　越後　荻野穗波子
つくゞゝと眠るうなゐを打ち見ればゑめるが如き玉の顔
○　筑前　よ　れ　子
しら雲のにほへる小川たそがれてかすかにもるゝ舟唄のこゑ
○　松山　山脇幸子
金襴の色も褪せたる琵琶袋脊負ふみ僧に白梅の散る
○　三重　山田ひさ子
送らんはあまりに遠きみちのくのみそら眺めて若菜をつみぬ
○　奈良　芳田みさえ
春風にさらし晒せる川ほとり天にひらめく凱旋の旗
○　鹿兒島　前田苗子
待ちわびし母との逢ふ瀬明日となり今宵の空の心置かるゝ
苗代　下總　飯秀嶺
しめはふる小田の苗代雨ふりてみどりの色もまさりけるかな
鶯　紀伊　紫蕊女
朝まだき谷のふる巣をはなれ出てゝ枝つだひ鳴く初音ゆかしき
○　豐前　服部秋子
蛙なく小田の細道人絶えておぼろ月夜に櫻散るなり
朝霧　し　げ　子
ほのぼのとあさぎりかゝる海原に遠近走る舟ぞ勇まし
鷗　徳島　住友登喜子
濱風に尾花波よる秋の野にうづら鳴きつゝ日はたそがるゝ
○　安佐郡　白ゆり
吾が君と別れし宵に似たるかな月は雲間に花は梢に
○　能鹿　外園靈衣
小夜更けて砧の音の絶えゞゝに我に涙の時鳥啼く
○　廣島　野村三千枝
途切なく軒の雨滴夢さめて亡き母君の事をしぞ思ふ
○　神戸　花涙女
太刀かざし舞ふものゝふの袖の上かろくたゝきぬ櫻ふたひら
○　下總　大崎範枝
夕しばま星下る夜を羽衣の姫美しき白百合の花
○　北總　大崎浚宵
白薔薇の深きが中に小羊の夢もあらむを靜かなれ風
○　豐州　紫明
いたづきの君偲ばるゝ此夕べみ空なき行くかりの一こゑ
○　岩代　村崎苑子
櫻木に赤き心を疊て貴き君が宮居を花に拜みぬ
○　麻布　廣瀬にら子
いと強き父の腕に凭れる子は流轉の世とも知らで笑み居る
○　大阪　岡うしを
母逝きてこゝに一年容と云へど鳥は歌はず花は開かず
凶作　讃岐　香川玉の舍
雪白き片山里に日は落ちて門に物乞ふ少女子あはれ

◯　芝　芝野吉江子

夢の間にいつか來にけり丙午嬉しくもあり嬉しくもなし

卒業する友に　宮城　操子

譽ある月の桂を手折り來て懷しき故鄕飾れ我が友

◯　明石　玉島せき子

師の君よしばしとたもとひかへたるこの兒ふり捨ていづこへ行かん

逝乙女　伊豫　得能湯月女

うしと見し世を先立し少女子の罪なき心神や知るらむ

◯　福岡　古屋ちか子

短册に折るべからずの筆の香やかざす小袖に花亂れ散る

◯　奈良　安川よしを

月の夜に友の奥津城おとなへば草葉にやどす露袖におつ

◯　伊賀　釋　壽子

ほがら〳〵月湧きいづる山にして今歡樂の日は出てんとす

◯　羽前　花　汀

餅つきて凱旋の人迎へけり春靜かなる五月の山里

◯　越後　桑野とし子

幸あれと送りし君は歸りきぬむくろとなりてあゝ遺骨となりて

◯　北見　水野蝶子

あか〳〵と夕陽流れし海面を沖に消え行く眞帆片帆かな

◯　三河　澤田つま子

石膏の獅子も眠ると春の夜をかつぎ姿の朧月かな

◯　大分　工藤たまき

出征に送りし庭の梅の花物思へとや又咲きかへる

◯　深川　水谷湖子

春の風月の惠か露姫のやどれる花は心して吹け

◯　紀伊　保　子

町はづれ月朧なる畑みちを人影二つそぼ歩み行く

◯　新潟　渡邊ふじ子

淡影の文字はやせたる母の墓に秋の夕日のさびしう落ちぬ

君を思ひて　越後　紫星女史

戀しさに寫し繪出してながむればいつも變はらぬ君が面影

◯　兵庫　土井かつ子

詩謠してあちこちかける春の山友のわりごに松の花散る

櫻　相模　清水かれ子

隅田川堤の櫻さかりにて人の心も空となるらむ

◯　川越　新井すゞ子

咲匂ふ梅の小枝を飛びちがひいと樂しげに唱ふ鶯

◯　茨城　秋山きみ子

四年前泣て別れし花の下今宵たのしう昔がたりする

◯　本郷　千代子

長恨歌七度誦しぬ雨はれし月にゆかしき梨の花かげ

◯　春野ゆき子

薄紅の繪皿洗へるくれがたを櫻ちるなりかどの谷川

◯　大分　甲斐ふい子

ひとすぢのほそきのぞみもたえ〴〵に春雨ながら春はくれゆく

◯　豐後　稻葉清子

かたわれの柘榴包めるうすものに燃ゆるおもひの歌かいつけぬ

朝鶯　熊本　木村としゑ

朝な〳〵鳴く鶯に夢さめて心のどかに起き出づるかな

夕ぐれ　上總　永野秋子

からすとび里のかりやに炎みえて翁まつやどにたそがれの月

◯　新潟　大崎秋子

紅の雲うすらぎて夕ぐれを海島亂るゝ浦濱の秋

◯　上總　紅雨女史

藤を浸る清水くみます尼君の珠數にも似たり白藤の花

梅　府下　坂本良子

清き香を送る源探りなば誰も答ん太宰府の宮

◯　信濃　清水りん子

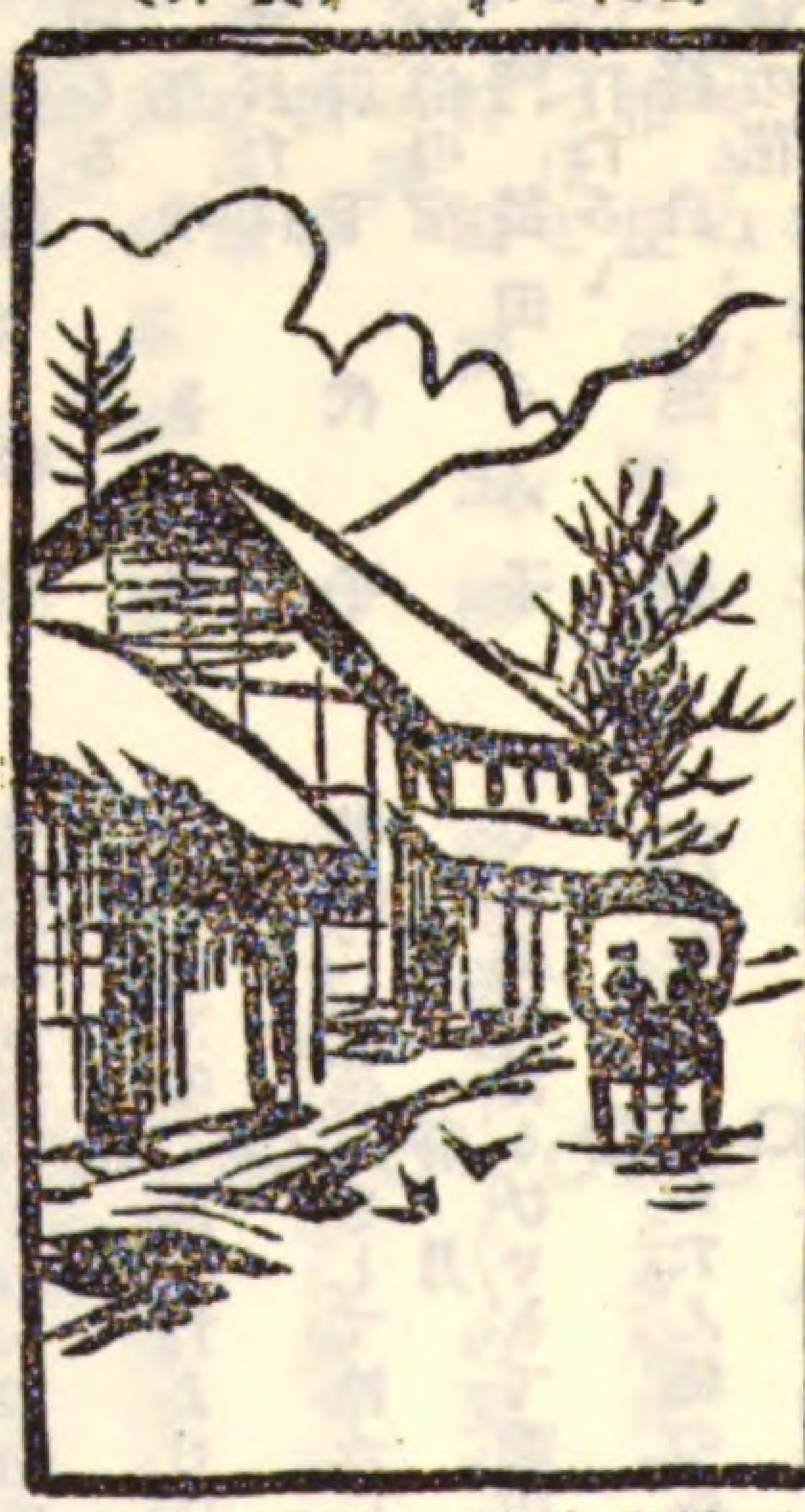
春雨の一雨ごとに綠して色香ゆかしき今朝の青柳

◯　鮫ヶ江　松岡白虹

七寸の花と名こ立つ唄上手お學が家の白藤の花

○ 本郷 照子
訪づれて誰が乗り捨てし春駒ぞ桑の畑つゞき夕日さすかど
春雨 尾張 梅原 湘子
かすかなる春の雨夜のつれ／＼にまたくりかへすはらからの文
雪中梅 大阪 金森 よしゑ
たゞ獨り雪の中にも咲く梅は百千の花の魁の花
○ 美濃 山田 はぎ子
愛らしき思ひに胸の亂れけり手折り來たる小田祭の花
○ 上總 雪枝 女史
七峯に櫻香まよふ夕ぐれに白き駒ゆく山かげの道
○ 越後 土田 哲子
うら／＼と春日かゞやく鳥かごに櫻も散りて晝しづかなり
○ 大阪 四端 芳枝
心だに思はぬ春の山あらし小川のほとり梅の花ちる
○ 美濃 加藤 蝶子
小原女のお茶摘み歌も都ぶる京へ一里の鶯飛ぶ里
○ 神奈川 吉川 常子
たゆたひの胡蝶に似たる繪筆かな彩雲ゆらく桑のはなの岡
○ 信濃 川口 ちか子
花散りて若葉となりし籬園に何をたづれて鶯のなく
○ 大阪 つゆ 姫
まゝごとの手ぶりなかしき里の子の頰にこぼるゝ緋桃の花
○ 上總 遠川 さと子
朝月夜湖にいく羽の水鳥の遊びしと思ふおもだかの花
○ 上總 長谷川 重子
櫻散る栄の欄人絕えて鐘の音低う春の日くれぬ
○ 千葉 呉 いち子

街はづれ（賞外）



下總福島町 土屋なゑ子

君がのる舟は眞菰にかくろひて花藻みだるる美の川
○ 福岡 筑紫 ふじ子
雪拂ふ軒に雀の羽音してさむれば白し閨の窓の戸
春夕 秋田 智惠子
梅が香を送るともなき夕風に匂ふ高殿日はなゝめなり
○ 三重 奥瀬 かすみ子
京へ二里宵の猿重き山路や躑躅に細き春雨のふる
○ 名古屋 伊藤 絹子
行く秋の雲を眺めて山里に若き病みの子うれひ顔なる
○ 兵庫 梅のや みち子
花賣りの行きにし跡の門の邊にあはれ胡蝶のひとりまどへる
○ 伊勢 伊藤 しずま子
高殿に土佐繪かゞやく春の夜や殿は假寢の夢深うして
海 岡山 永原 多計子
立ち出てゝ海原遠く見渡せば千鳥とまごふ舟の通路
○ 大和 桑山 利子
ま夜中に咳入る子をば寢付けして物思ひをればほとゝぎすなく
○ 紀伊 糸川 みち子
ふりわけのかみにかざせし花すみれ昔こひしきふる里の春
春曙 播磨 石井 とみ子
月かげもうすれ／＼て東路は花より明る春の曙
○ 相模 岩田 小春
ふけし夜にれむるともしびかき立てゝやさしき母の御筆ながめん
長尾久子孃を祝ひて 佐世保 い く 子
時のまもたゆまず君がしきしまの學びの花の今日咲きにけり
○ 越中 よ し 子
御神樂の露にひゞきて加茂の朝彩のむらだち白鳩あそぶ

○　本郷　宮内春江
母君の留おくりて歸る野路心細くも螢飛ぶかな
初春草　宅和節子
雪の中に、草萌え初むる小松原春と知らるゝ處なりけり
○　福島　平塚みち子
故郷の春雨景色朝見れば霞の奥も猶霞なり
桃　横濱　藤江しか子
緋桃さく賤が伏家を訪へば椽の日なたに猫いとくる
春山里　美濃　芳美
梅さけど訪ふ人もなき山里に香をたづねきて鶯のなく
○　豊後　森　寧子
童兒の羊よぶ笛ほがらかに霞こめたる野より洩れくる
○　伊豆　ゆき子
別れ行く君が情は世にあれどこひしと思ふ君のすがたは
○　筑前　千代子
ほまれある劍を床にかざりして屠蘇くみかわす紅梅の宿
○　長門　益田うめ子
豆腐賣る翁よあはれ子なくしていくとせ冬の雪に打たるゝ
○　仙臺　白範子
人かげに緋鯉よりくる眞ひる時池にかつ散る白桃の花
○　岩代　植村とう子
別れての後の心はなか〳〵に信夫の里の君ぞ戀しき
蝶　群馬　竹のふし子
おとめ子がかざしの花のさゆらぎにたはるゝ蝶のそて輕きかな
○　德島　花月
老人や腰もゆがみて杖もつき頭そうぜん足には草履
○　群馬　赤石まさ子
夜はしずか閨に語る戀の人もえてやさしき情なりけり
○　奈良　松島千代子
わぎも子が衣をかけし猿澤の柳の糸ぞ風によらるゝ
夢　德島　小野木いそ子
雪にうたれし夢をながく見てさめてうれしき我心哉
冬夜月　陸前　清子
殘りなく木の葉は散りて山の端に殘るも寒き冬の夜の月
○　麹町　赤城壽美江
小窓していとけき折の歌聞きぬ霧雨けぶる春の夕暮
出征　日本橋　秋水女史
君のため國のためにと武夫の門出をいそぐ心雄々しき
○　東京　素女子
墳墓に父懐しとぬかづけば北風寒く枯松葉とぶ
○　山城　重松敏子
黄金にも玉にもかへぬ命すらくににさゝぐる人をしぞおもふ
鶯　大阪　光野ゆき子
うぐひすのこゑをたよりにたづぬれば垣根へだてしうめのこずゑに
○　上總　花枝女子
前髪に櫻花かざして池水に影うつし見て恥かしきかな
春月　群馬　藤生雪子
くる風の音もひゞきて磯山の松影くらし春の夜の月
○　大阪　倭文子
一枝を君にわかたん梅の花ひとりめづるも心ならねば
○　長野　池田和代子
ほの〳〵と霞む霞のその中を小舟棹さす蜑がまの浦
○　山梨　鹽田みつ子
昨日今日やむせもわかず降る雪に緑の松も年老いにけり
○　新潟　大塚美代子
目に片手〳〵に母の文もてば落つる涙や文机の上
江上春曙　印旛郡　金坂さく子
行く船の梶のおとのみきこゆなり霞みこめたる春のあけぼの
影　大和　青山芳子
前すぎて消えつる花の影おもひ歌はずなりね籠の鶯
○　新潟　田村さく子
鐘の音のうらがなしらに消えゆきて雨に暮れゆく穗すゝきの野や

○　　　　柏木村　泉　麗子
春宵や緋桃ひらくを見まほしと閉じたるとびらまたあけて出ぬ

遊學を思ふ　　　筑前　松子
花咲かば都の春にあくがれてちよゝと遊ばん只君とわれ

子規　　　島羽　佐藤のりえ子
むかしみし人のみたみの月影をしのびてなくかやまほとゝぎす

朝鶯　　　新潟　鈴木とよ子
鶯の聲にやぶれし夢の窓いま山の端に月落んとす

初雪　　　久留米　ゆき子
すさみつる讃の嵐さきたえてまだらに白き峯の初雪

初冬　　　石川　手取かわ子
荒れはてしうしろの畑に霜みえて菊さへ散りぬ冬やきぬらむ

○　　　　吳市　庄田擧子
あゝ嬉し思へば今年の夏休み君の歸りを待てば待つほど

○　　　　石狩　高橋玉柳
枕べに笑みて立ちます母君にすがりてさめぬ有明の夢

夕立　　　秋田　春風
傘もたぬ少女のせなにさわぐ子の聲かしましき夕立の雨

○　　　　石川　白峯ゆき子
白雪の積らぬ山もなき物をいづこを越て年の來にけん

○　　　　新潟　大崎きくの
紅梅に朝の日あかき玻璃のまど繪をかく君にかなりやのなく

夢中見花　　　宮城　千葉鉦子
咲にほふ花のいろかにあくがれて夢も野山をはなれざりけり

○　　　　山形　たか子
春風に袂なぶらせ濱の子のもすそかゝげて貝あさる見ゆ

○　　　　神田　片岡初音
へだてなきこゝろは人のまことなり晴たる空の月を見て知れ

○　　　　下總　はな子
小走りに背の霧はらう小羊のあはれ集ひて目をつぶるかな

いまはの母　　　大分　森てつ子
われ沈默いまはの母の枕邊にさじなぐる醫師頭傾けぬ

○　　　　大阪　島田ひろ子
おとなへば君は居まさず美くしき文机の上に白梅かをる

春月　　　陸前　加藤君子
うぶすなの森の夕雨今晴れておぼろにかすむ春の夜の月

○　　　　羽前　豐子
皇國のみいくさ人の魂と四方にあふがるみさくらの花

○　　　　東京　竹田八重子
ものゝふのむかふところに敵はなし勇みてかへる君のひざもと

○　　　　岡山　立岡房野
きのふけふかすみそめたる軒ばよりこゑも匂ひて鶯のなく

○　　　　伊賀　林　妙子
なつかしき友と夕を舟やれば汀の柳我まれくなり

○　　　　米澤　丸山とめ子
御先追ふ下に〳〵の聲ながら館もかすみぬ菜の花の道

○　　　　下總　結城伊佐子
おこされし文を見てはひたすらに待ちにしものをうつしゑの君

櫻　　　芝　平岡すゑ子
庭もせに咲く櫻花美はしや一枝手折りて君に送らむ

新年河　　　水戸　松島由利子
にごりなき君が八千代にならひてかいや遠白し利根の川水

○　　　　芝　難波田うた子
靑やぎは風になびきつ小流はしらべやさしき春日和かな

○　　　　信濃　文子
ちら〳〵と降ると思へば道のべを見るまにつゝむ雪の白布

○　　　　上毛　鳳砂季子
苔靑き岩間したゝる谷水の清きは君のこゝろに似たる

君恩　　　宮城　齋藤しま子
富の山あふげば高し君の恩外國高く日の出づるかな

菫　　　香川　吉田益子
露姫のあさのけはひのみたまにか野おもうつくしゑめるすみれは

○　　　　　　　　　　能登　池野白百合
春の潮ながれてよれる藻の花や島のをとめの戀こもるらめ
梅　　　　　　　　　　栃木　亘　玖子
靑柳に櫻咲かせん人心よそにして笑む梅の一枝
○　　　　　　　　　　宮城　加藤芳野子
いとゞまたやるせなき身のかなしさにほゝゑむ君のうつし繪を見む
○　　　　　　　　　　上總　田村瀧子
爐に倚りて經綫縫ひつゝ學舍に敎を受くる轉寢の夢
梅　　　　　　　　　　府下　中村草露
梅の花咲出ぬれば山里も都戀しと思はざりけり
春山　　　　　　　　　京都　井上らい子
春霞けてかすむ三十六峯の峯のいづくぞ寺に鐘鳴る
○　　　　　　　　　　小樽　梶　水仙子
雪降りの朝うれしみ雪にかけ雪にまろびて犬の子遊ぶ
○　　　　　　　　　　備後　高杉みゆき
梅香る宮居靜けき砂の上に霞たばしる早雲の空
○　　　　　　　　　　讃岐　今井月江
夕暮を草の小路に踏みわけて牛ひきかへる里の少女子
○　　　　　　　　　　千葉　小高淸子
春來ての人の心はもゆるらん淸き香うれし紅梅の窓
○　　　　　　　　　　茨城　小松崎つき子
春日影綾の御衣のゆら〳〵に菫つむ子の眉目麗はしき
○　　　　　　　　　　佐賀　中尾隆子
病む妹を昔話しに慰むればほゝ笑みつゝも眠りにつきぬ
寫眞　　　　　　　　　香川　松永茂子
文机の中より出しうつしゑにしばし昔のわれにかへりつ
○　　　　　　　　　　播磨　富原愛子
けふもまたまちにし君の文みへず思ひにふけし曉のかれ
○　　　　　　　　　　愛知　渡邊霞石子
歸り行く里のうなゐ子子守唄菜の畑三里日はたそがれぬ
○　　　　　　　　　　本郷　山崎䕃子

いとはれし身を果敢なみて水雲の烟冷やゝかに秋の空見る
○　　　　　　　　　　茨城　原　文子
みちのくの凋れる民を思ひなばにしきよそほふ心如何にぞ
寫眞　　　　　　　　　兵庫　ふ　じ子
なき父のあゝなき父のうつしゑに露けき袖を又ぬらしけり
○　　　　　　　　　　上毛　河内千代子
花蔭に菫つむ子は消えゆきて朧にかすむ春の夜の月
○　　　　　　　　　　丸龜　ま　す子
妹が手うゑのすみれ花咲きて可愛き蝶の今日も來て舞ふ
○　　　　　　　　　　下總　佐久間よし子
とりわけて歌よく作る君あるにわれかなしくも歌一つならず
○　　　　　　　　　　成田　渡邊みよ子
曉が家の庭の松竹色添へて君が籬の梅ぞ戀しき
待鶯　　　　　　　　　民　子
春風にまがきの梅もほころばんはやく初音をきなけ鶯
○　　　　　　　　　　陸中　黑澤みえ子
思ひあまり獨り彳む朧夜をおぼしま近く櫻みだるゝ
○　　　　　　　　　　名古屋　中村よし子
蝶は舞ふ鳥はさへづる春の野に日傘さしたる小守子のむれ
○　　　　　　　　　　伊豆　撫子
野も山もあまねくめぐむ春雨に枯れたる草木色そめにけり
○　　　　　　　　　　美濃　宇野しづ枝
朝夕にとひとはれたる言の葉も文の便りと今はなりけり
梅花　　　　　　　　　陸中　な　か子
北野なる神の宮居の梅の花幾千代かけて咲きにほふらむ
○　　　　　　　　　　佐世保　き　わ子
菜の花に白雲低き大和路や笠かたぶけて旅僧の行く
○　　　　　　　　　　小石川　田中佳江
春の夜の孤燈かすかに病める子が故鄕千里何をか偲ぶ
○　　　　　　　　　　加賀　河内むら子
將軍がとりこの島に跨りて歸りたまひしみ姿たかき

○　播磨　藤井邦子
いそしみて成蹊よかれと朝夕に祈るは親の心なりけり
○　多可郡　林さかゑ
亡き夫のみあかし細ふ夜は更けて乳房なき身の子ぞ泣き止まず
兄君の一週忌に　兵庫　梅子
我袖のかわく間とてはなきものを早一とせをいつ過しけむ
○　福岡　土岐てい子
雨こよひ御室の花の濡れ姿歌にやよまむゑにやかゝまし
○　日向　静子
たそがれにかへる少女のにぎはしや皆手にしたるせりの一かご
夕暮　都城　信女
古杭にかはせみ鳴きて日は落ちて、ほの
白う山の端出る
○　能登　千田美芙子
淡路島通ふ千鳥の聲更けて和田の澄守年
老いぬらん
○　津市　齋藤しげ子
うぐひすの聲に對へしゆめさめて庭の紅
梅今盛りなる
○　豐後　渓月女史
うつくしき公達のれる船の上にかつ散り
かゝる櫻花哉
我家へ　豐後　堀芳子
昨日今日つかれし足をはこぶには内に待ちつる人あればこそ
○　大阪　田中れん子
若僧がつく鐘の音もあはれなり鐘樓のほとりさくら散りしく
○　東京　丹後芳子
君慕ふ心の底は糸柳身を知る雨に今日も亂れつ
○　學司
山河をとほく隔てし人風の籠の里ぞ戀しくぞある
○　備前　松本もと子

井戸（賞外）



府下南多摩　中島おちば子

船もよらぬ沖の小島の岩かげに春をさびしう咲く菫かな
○　大阪　銀菊女
彌陀佛の聲も涙に咽かれつゝなきがら守るよ年老いし母
○　福岡　筑紫ふじ子
かけまくも君のみためとすてし背が勝ち得てかへる今日の嬉しさ
千鳥　佐世保　井上知酉子
荒波の中に千鳥は朝夕に親をたづねてチー／＼となく
○　府下　小池つれ子
風に散る岸邊の花に歌かきて君住む川の水に流しぬ
窓の竹　芝　穎川とき子
風ふかば影面白くうつるかな月てる窓の
竹のなびきて
○　周防　權頭りの子
あだうちし手柄ばなしを今もなほかたり
給ふよ爺の脊なでつゝ
○　福岡　筑紫みね子
欄におく霜白き夜な／＼をあはれめしひ
の笛納め行く
○　陸奥　しらゆき子
さすらひの身を浦風に送られて荒磯の夜
半月に泣くかな
○　京都　木村露子
庭先の躑躅一花文に入れ遠き河邊の水戸の露下
○　美濃　木村あさ子
枯れはてし銀杏もいつか青々と之れも兄上歸る兆か
○　岡山　松浦千里
打ち連れて若菜摘むらし少女子が霞の彼方歌洩るゝ
○　豐後　花妻子
愁しみに百合の花束頬にあてゝ涙ぬぐはんすべもなき身よ
埋火　秋田　粲みき子
折々は崩雪の音を聞きながら埋火かきわけ讀書する夜や

櫻　　京城　奥田恵以子
春雨の晴れ行く庭に咲きそめし櫻に思ふ志賀の山里

梅　　長野　小林栢枝
梅の花亂るゝ園に鶯のかつ〴〵啼きて日は暮れむとす

○　　茨城　小泉濱子
星影に笛吹く僧を見つる山あさたちくれば梅の花咲く

元旦　　讃岐　今井月江
常盤なる松と竹とに〆かけて千代よろづ代と祝ふ初春

夕眺望　　岩代　植村とら子
夕鴉はるかにかへる影見えて迺さびしき山里の夕

○　　山口　つき子
積りにし雪の中より咲出てゝ軒端に通ふ庭の梅が香

○　　明石　蘭花
み軍のあと夢むらん武夫が戎衣にかざす梅の一枝

○　　伊豆　加藤露子
野路行く駒の鈴音高うして桃の花ちる薄月夜かな

○　　豐後　泉子
やよ君は何追想に惱みます花野の小路暮れむつの鐘

○　　淸水　英子
春の日に笑ひし山も夏來ればないてうれしき杜鵑かな

○　　橫濱　吉川霞峰子
瓶にさしてつく〴〵見れど紅梅は姫ともならで淋しき春や

○　　靜岡　宮城梅子
つゝじ咲く山の岩影夕榮へて山鳩しばし啼きむれ遊ぶ

○　　越後　小林孝子
日傘ゆく川添ひ小道春風に柳かすめてとぶ燕かな

○　　信濃　壽美禮子
人知らぬ笑をもらして花影に立てる少女の何思ふらん

○　　牛込　西端若葉
去年君とこゝに來なきて春の夜を白梅ちりて雲ところ〴〵

遠江　河村秋子
朝露のそれかあらぬか山櫻我が行く小路花にうづめて　　越後　中林ひで子

春夜
歌かきて君いれまさぬ春の夜の櫻の小窓月朧なり　　羽後　鈴木じゅん子

○
面白き歌のあるじやそれならむ松原過ぐゆく人のかげ　　高知　竹村實喜子

○
さかりなる我庭もせの桃の花昨宵の嵐にけふや散るらむ　　秋田　佐藤ひさ子

曉星
牧場守る優さ少女子のやさ夢をとはに秘めませ曉の星　　豐前　楓女子

○
螢狩にはしなく妹とむつみしは三年の前の今宵なり兒　　滋賀　兒島いと子

○
送らるゝ文見る每に思ふ哉過ぎし昔の事のさま〴〵　　肥前　黑岩きい子

鶯
春霞立ちて何處とわからねど聲ほがらかに鶯のなく　　島根　河野婦美子

○
よひにやりし友は來らず春雨の湖添ひの宿ひとり淋しき　　岡山　三村ますず子

○
よそながらみすがたそれと見てしよりゆめにもみゆる君のおも影　　橫濱　齋藤とし子

○
うなゐ子の春を病みたる丹頂に頰なづる日のいとあたゝかき　　相模　喜久子

○
わが部屋の丸まどおせば富士見えてにはの紅梅いまさかりなり　　德島　高木菫子

○
鶯よ啼き惜むとも一枝はわれにゆるせよ妹が手向に　　金澤　大地波子

○
明日待たば父も歸りて愛でなむを惜しや櫻の風にちるなり　　伊勢　嶽本靜子

○
繪に似たる二見が浦の夕ぐれに日かげうすれて白帆ゆく見ゆ　　臺灣　志波梅子

○
笑顏もて秋わかちしふるさとのたらちね戀しあめの夕暮

○ 埼玉 名なし草
やれ堂に落葉の音のものさびて孤児ひとり椎の實ひろふ

○ 新潟 小林園子
玉簾に花影ゆるゝ牡丹宮美し春の光りながるゝ

○春雨 本郷 荻野よし子
春雨や心してふれ今しばし御園の梅の匂ふかぎりは

○汽車 下總 さゝえ
一とすじの煙のこして見るからにくるまは遠く行きすぎにけり

○ 千葉 旭峯女史
うちなびく御旗ゆたかに海こゑて滿洲千里秋の空たかし

○ 京橋 黒ゆり
山の御神海神訪ふとわたります橋かもあしたまばゆしよ虹

○ 府下 青木たか子
朧夜に紙燭を持たぬ廻廊の被衣の人をなつかしみ見る

○ 下關 杉山愛子
初春や深山路深く分け入れば谷間を渡る鶯の聲

○ 新潟 田村紅子
紅梅の花ちる椽に毬なげて小さき猫よぶ少女かわゆき

○ 下總 川奈部寧柱子
小羊のむちうたれつゝ春雨の降る野を行くと見し夢さめぬ

○ 岩手 蟲森子
朝まだき仰げば清き曉の空有明月に烏うそぶく

○胡蝶 四谷 しらぎく
うすくこく霞こめたる春の野邊菜の花がくれこてふとぶ見ゆ

○ 東京 川島ぬい子
散る花の下にたゞずむ少女子の袖ひら〳〵と風渡るなり

○ 成田 武田たき子
いれやらず思はぬものを思ほえて去年わかれし友の戀しき

○ 麻布 五藤すみ子
武士が猛き功の微笑みに鶯鳴きて梅の花散る

○ 群馬 吉田きみ子
扇うる人はきたりぬ今日もまた雨にぬれたる若竹の宿

○ 小石川 佐川貞子
金色のをさな胡蝶がくちつけぬ梅の小窓を春風のふく

○ 茨城 中西芳子
待宵の人しのびぬる爪聲に誰ぞ笛合はすせこかあらぬか

○ 水口驛 龍井文壁女
銀瓶の牡丹くづるゝ春の宵雙の孔雀は羽を廣げぬ

○白梅 壺 よれ子
都なる友にまゐらす此文に汝が香うつせ庭の白梅

○ 下野 中山久子
なれも又昔を忍ぶ友なれや君が植ゑにし梅の初花

○ 伊勢 宮崎みち子
あれ庭にたゞずみ立てる白梅に獨さびしき春の夜の月

○ 安藝 千鳥
母君のお髮をけづる南椽夕日まばゆく梅の香かをる

○ 陸奥 名久井さえ子
待ち侘ぶる君はきまさず小夜更けて窓もる月にうらみかけぬる

○ 本郷 中島綾子
花の香に迷へる夢の見果てぬにあわたゞしくも春はゆくかな

○ 岩代 安子
おのが住む山にも春は來にけるか軒端まづ問ふ今朝のうぐひす

○ 大阪 白萩女
牛ひきて歸る山路たそがれて霞に淡し春の夜の月

○ 羽後 菅原花子
雛棚の前の銀燭かげふけて蒔繪の膳に桃の花ちる

○ 金澤 砂山可觀
紅の色は盛りと盛りけり河のあなたの姫百合の花

○ 静岡 紅秋
大空を鳴き行く雁の聲聞けばそゞろ戀しき古里の空

冬月 陸奥 愛園女
さよふけて闇に積れる白雪に光りさし添ふ冬の夜の月

沼波瓊音先生選
文學士



特別第二賞

○冷たき笑み

岩代國賀川町　服部貞子

市人の冷たき笑みに、我はまたこの馬の背の米を賣らで歸りぬ。

富に媚び、貧にほこれる其の顔に、うかべる冷たき笑みよ、我が此散髮の亂れ可愛しと嘲笑ふか。さはれ聞け、北支那の原に銃とりたゝす我背の君が、君の御爲め、御國の爲めに、盡す御身につゝがなかれと、祈る心に斷ちきりて、神に捧げまつりし我黑髮なるを、身につけしつゞれの布を、あまりに薄しと、眉うちひそむるか、さはれこは、み情け深き姑君が、己れ稻こく其傍に、行燈の灯かきたてゝ、老の手もとの覺束なくも、その一針一針に、眞心こめて給はりし、いともあたゝかきものなるを、紙より薄き世の人心のなどて味ひ得らるべきかは。

馬の背につけしこの二俵の新米よ、背の君が留守を、女の纖手に心細くも辛うじて得たる、尊き、尊き、寶なるを。價高し、の一言に見向きもせぬ市人。さは人の汗の賜をひそかに盜めるさもしき人の手より買ひね。我か米はさる汚はしきものにはあらぬを。

市人よ、笑はゞ笑へ。我は再び市には出でじ。榮華の夢を貪る人々にはまみえじ。

たゞ老いませる姑につかへむ。愛らしの馬を勞はらむ。かくてやがてかへりまさむ背の君を、われは待たむ。

（評）言々句々肺腑より出てゝ憤怨の氣迸る、此の文を讀んで泣かざる者は誰ぞ。

㊝

○哀調

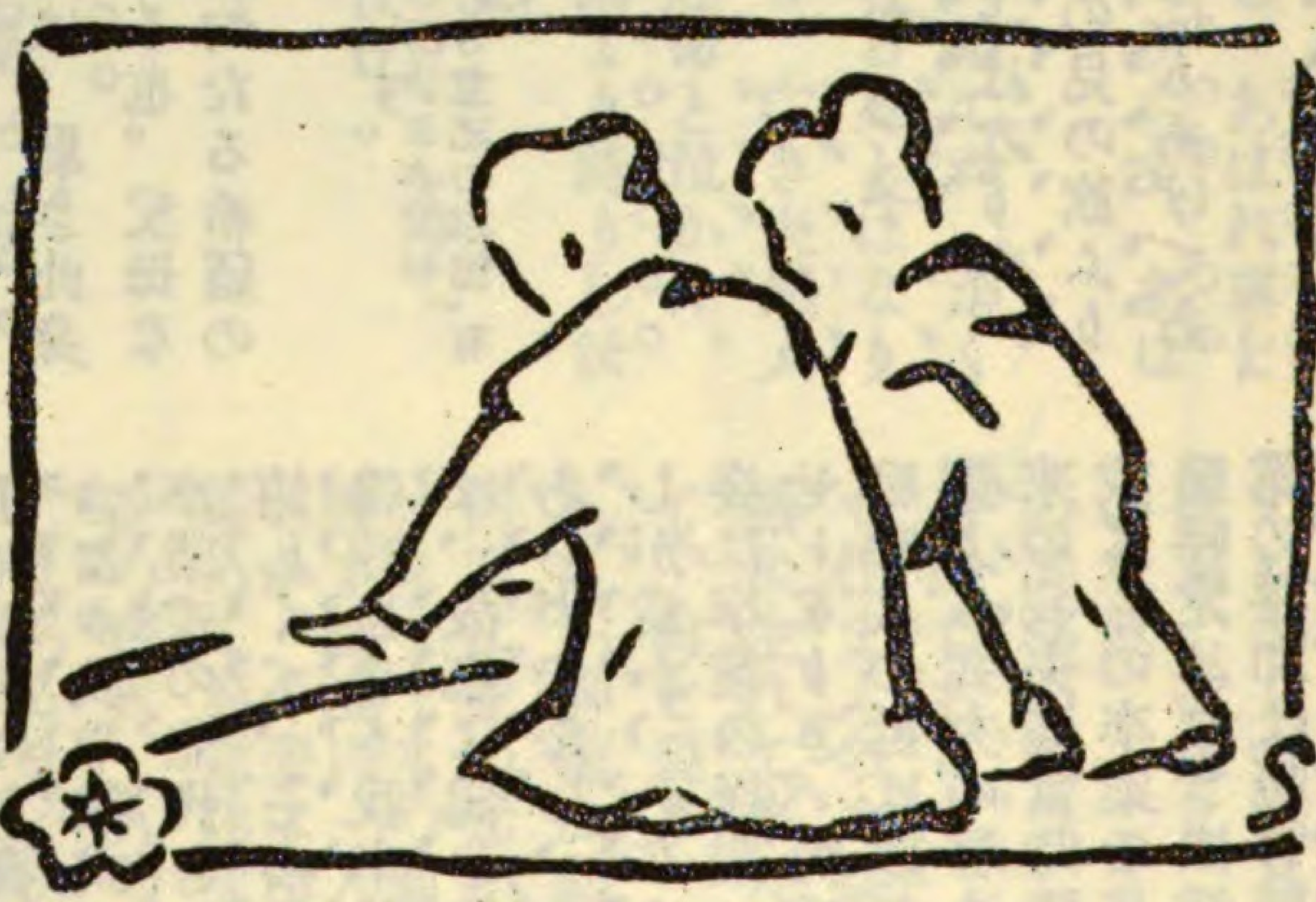
上總千代田村岩山内田方　夏村女史

いざよひの月は、中空に冴え、磯洗ふ波の音は、夜と共に沈みつ。今宵は彼岸のつくる夜、遙かなる入海の上、漁り火の一點だになし、汪々と滿ちたる潮は、砂濱の罅隙を呑んで、音もなう陸地へ長く、獵師町を分けて、水深き小川をなせり、そこに橋あり、手欄なく廣板を並べしなり、ぞよめきは、疎らに續く茅屋根のかげに聞えて、程もなく、逞しき獵師の群れ、白髮もつれし老翁を先きに、若き壯んなる、十人あまり、滿ち封じたる月の光を劃つて、橋の上に並み立ちぬ。老

翁まづ、寂びし聲あげて、哀しげの調べ謠へば、皆々是に和して高く唱ふ。あゝ、その調の、歌ことばこそ解し得ざれ、——あはれ深き悲しの響さよ。舟破れて、逆捲く濤の底に消えし、さきつ代の、同じ代の、亡き靈を吊ふものなるべし。唱ひ終り、うたひ續けて、曲調はいよゝあはれに、我は聞くとなう聞き、人は唱ふとしなう唱ひぬ、月色愛ひて、暗く、波、音をさめて、黒く、歌はいつとなう絶えぬ。あゝ、この宵、この磯邊に、この悲しの歌調よ、しづかにも流れて、遠き沖の底へ、泌みてはそこに湧く潮に、夜半鳴る音を、磯邊にかくよとぞ歎へけんか。

（評）夢幻の境に引き入れらるゝ者、ひとり作者のみに非ず、文に一種人を魅するの力あり。

彈琴（選外）　仙臺　木村しく子



地

○幸ある身

岩代國　若草女

妾は今他家に寄食せる孤兒也。世廣く時限りなしと雖ども、我世の限り父よと叫び母よと呼ぶこと能はざる身也。西念寺畔草深き所、冷き墓石の下、褥を並べて安らかに睡り給ひしより幾星霜、泣いて墓前に呼べども答なく、便なき孤兒の身は、世より人よりも輕視せられ侮辱せられ、度外視せられて、外は同情聲援の士に乏しく、内は慰藉督勵の人なきを悲しむ。ゆくべき所にも到らず、思はぬ所に身を投じて、不遇に泣かざる可らざるを嘆く。況して力弱く資産なく地位なき女の身也。輕跳浮薄なる社會は、弱きに愈辛く、幾多の壓迫を加へて猶其頭上に鞭打たむとす。氣は猛く意は堅しと雖ども、嗚呼！夫れ弱き女の身を如何せむ。半夜孤衾に悵然として、思ひ此に至る毎に、獨人知れぬ涙に咽ばざるなし。

翻つて想へば、此人世悲痛の一大恨事は、亦妾が身の一大幸福たるを覺ゆ。辛きは人の心、情も人の心、慾あり、無慾あり、賢に似たる奸あり、愚に似たる率直あり、僞あり、誠あり、鬼の中にも佛あり、浮世は

さま〴〵、生きたる一の活書也。此間に處して、辛さ悲しさ、憂き樂しき、世の面影のさまを知るを得たるは、父母なき不幸兒の身に、天より惠み給へる賜なり。學んで得ず、望んで到る可らざる活學問は、弱き此身を琢磨せしむべく、身邊に蝟集しつゝある也。父母なきを憂へず。親なきを悲まず。かくて赫灼たる希望の光明は、昭々乎として前途に輝く。

さなり幸ある此の身、勉め勵まざる可らず。

(評) 苦惱の裡に慰藉を求め、失望の中に希望を認むる意志の牢固、有爲の男子をして後へに瞠着たらしむ。

〇卒業式

兵庫縣揖保郡岩見港八番地　土井かつ子

幸なき身のわれは、今寒村の小學校教師とはなりぬ。今日は我校の卒業式、彼處に凛々しい男の兒の旗ふりかざし、此處に愛らしき女の兒のうた聲はりあげてあそぶ。

懷ふ昔、ああそゝ今は三年を過ぎぬ、妾の博愛女學校を卒業せし時なりき、嗚呼卒業式、いかに樂しかりしよな。

妾が郷は、水淸きも、綠濃きも、眺望はよきも、妾がごとく物學びするは稀なりき。錦の衣着飾りて今し家路に急がばいかに、村人驚きて賞賛ふならん、歲月育まれし父上母上のいかに待ち詫び給ふならん、その父上に母上にと喜びしものを。

さなり我卒業式は樂しかりき、剩さへ拙き身の、そが卒業式の惣代として答辭すべき身の、耻づかしくも又嬉しくて、その日の今も尙思ひ出さるゝにぞ。

嗚呼さなり我卒業式は樂しかりき、さはれその樂しさは、故鄕に錦を飾るの爲か、父や母の喜をまちてか、あらず未だし、さらば嗚呼がましけれどその秀でたりしが爲か、いなさにてはあらざりき。

妾は卒業の後樂しきホームをなすべく許嫁の人の御座せしなりき。嗚呼それよ、我卒業式を樂しみしも。

嗚呼人の世は夢なりけり、實に塵の世のうたてさよ、我戀ふる武夫の君はその四月陸軍大學に入りぬ。實や未來の我夫は當時陸軍中尉として、有望の一士官なりき、我はその卒業の日をまちて契らんと誓ひぬ。

嗚呼定めなきは浮世なる哉、そが翌年二月なりき、日露の平和は頓に破れぬ。

そが剎那、妾の胸には無限の悲音の聞ゆるなりき、妾の耳朶にはいひしらぬ涙の曲の響くなりき。

柳櫻をこきまぜて都の春は錦織りなす卯月中葉、一封の書信を枝に我戀ふる武雄の君は第二軍司令部付とし

て遠く異國に出征しぬ。あはれ封書のうらめしきかな開けば悲し良縁を求めてよと、噫。

かくて夫の君はその十月、沙河の大會戰に空しく芳名をとどめて敵の矢丸に斃れ給ひぬ。あはれふくよかなりし肉は徒に知らぬ異國の草を肥やし、あはれ露を含める白薔薇の如き君が面はまた見るべからず、あはれ妾が胸の奥のなげき。

世は無常情は泡沫、妾は青春の血も枯れ果てぬ、かくて小學校敎師として、わが寒村につとむる身とはなりしにてこそ、ああ卒業式、いかに悲しきよ、亡き夫戀ふる我身には、いはじ語らじ、我は天の運命と泣かん、さても可憐なる童男よ、少女よ、神の國より降りし汝よ、わが胸の煩悶知るや知らずや、ああ。

（評）哀恨の心、傷惋の情、兒童を配して、更にその切なるを覺ゆ。

秀逸

○惱みの胸を

豐後　花　斐子

何んとなく思ひ亂れて……、

行く雲の方のみ慕はしき夕暮どき、想ひの翼、擴がり行きて、更に、過去の心なかりし歷史を思ひ、世のさまの果敢なきを慨きては、たとしへもなく人の身の力なきを感じて、只たゞ燃ゆるは熱き胸の想ひ、裂きて開きて、此の苦しみを解く人あらばと、またしても妾は憂愁の惱みに掻き亂されて……。

われ知らず眺めやる夕雲の彩！

次第、次第に、褪せてうすれて、はては寂しき死の影の灰色……さてもなんの啓示であらう、そこに何んの神秘が籠つて居るであらう……。

自然である！榮えて褪せて、暗黑の夜の幔に閉されて仕まふのも全く偉大なる自然の力である、さはれ自然に生れて來た人は世は、僞りの涙もて、假面の惱もて、肉を裂き、血を啜り、骨までえぐらうとするのである「神樣は助けて下さる」と斷念めやうとしても、何處に愛の光が燃えて居る。

ゲッセマネの園、橄欖樹の蔭に佇みて、月の光の仄かに照す幽境に「人の子」も尚ほ血を流して泣いたではないか、今妾は冷かなる人に世に倚つて、極めて不自然極めて無意味なる生存を續けて居るのである。

愛の靈火、人の心中に燃えてこそ、人は始めて聖き者ではあるまいか、いとう美はしく、慕はしきは聖なる愛に醉ふを得る人ではあるまいか、肉をはなれたる靈なる愛に醉ふを得る人ではあるまいか、斯くて始めて人は世は平穩和樂ではあるまいか、妾が胸は今憂愁と

苦痛とに鎖されて居る、悲哀と煩悶とは、愛の不足に對する、心情自然の發現ではあるまいか。

斯かる思ひに耽つて居た間に闇の幔は既に張られて、四面寂然、またしても言ひ知らぬ思ひが募つて來るのである。

（評）纏綿の情の凝つて成れるもの。

○紫

和泉　辻林　みどり子

赤か？否、奥に青色のひそむあり。青か？否、つゝまれたる赤、中にあり。暗き中に光あり。輝ける中に沈める色あり。艶か？否、あらず。淡か、否、然らず神、その色なり。人は、これを紫と呼べり。

紫、その色！友人を慕はしむる彩雲、故郷を戀はしむる山、みな紫なり。

心儚せしとき、思ひを紫花さきみだれたるあたりに運ばしめよ。心忽ち光を得む。心汚れし時、思ひを白衣紫袴にはこばせよ。心忽ちすむべし。

この大なる力をもてる紫、その色をもて己が色とし、紫の王となれる花あり。

胡蝶舞ふところ、霞たなびく比、萌え出る草の緑の中に美ちやん歌はずや？

　すみれの花の紫と、可愛い笑は神樣の、
　　仰つしやつた事がありますよ。
　神さんどうぞ頂戴な、
　　奇麗でゆかしいすみれ花、
　　　その御禮にわたくしが、
　　　　いつもの唱歌うたひませう。

花の形は、胡蝶のむつるが如く、その色の紫は、一つの魔力をもてり。

この魔力は人を招き、人をして樂しく長閑けき感あらしむ。

春の日、草のへによこたはりつゝ、菫の花を見よ。心は天にある如く、そこに平和の奏樂あらん。

あゝ菫、すみれよ！春すぎて夏となりし今日は、汝のすがたをも見る能はずなりぬ。

いづ地へ行きし？神のみそばに行きしにや？

紫の雲は、が？　再び、人の世に降り來よ。

われは歌はん。

菫のちから、吁！われかく呼べり。

色は何ぞや？紫なり。

紫——神の色なり。

（評）あけを奪ふをにくむといはれし紫をとらへて神の色となす。

○梅ちやん

羽前　豊　子

いつも莞爾々々した顔で妾の學校の歸りを、迎へるのは梅ちやんなのであつたが、今は兎ても見る事は出來なくなつた、緑の黒髪の房々したのを、燃えたつやうな緋の「リボン」で結んて、バッチリとした愛くるしい

眼光、林檎のやうな頬は艶々として、そして無邪氣な涼しい微笑を何時でも含んで、其れは其れは可愛い子でした。

晝なほ薄暗き杉村の中の青苔の下に、たとひ身は冷やかな夢を結んで居ても、優しい母樣のお膝元で樂しく遊んで居るのでしやう。

梅ちやんは妾とは從妹なので、いつも活活とした丸顏に、何處となく愁の雲を漂はせて居るやうに見えるのである、そしてお家は村での資産家で、お父樣は種々の公共事業を計つて村の爲めなどに盡し、梅ちんは其一人子で風にもあてられないで、蝶よ花よと育てられたのでしたけれど、去年の青葉涼しい夏の始め、慈愛深きお母樣はいとしい子を殘して、魔神の手に導かれて、彼の世に旅立ち給ひぬ、その時梅ちやんは泣きに泣かれて、餘所て見る目もいぢらしく、皆涙をこぼしたのである、それから今のお繼母樣が入らしたので、お繼母樣は人目をこそ飾れ、自分から隔をつけて、それこそ梅ちんにはつらくつらく當るのでしたけれど、梅ちやんは大人も及ばないほど、お母さんお母さんとなれ染むのであつたが、……

噫、梅ちやんは常に斯う言つて涙ぐむのでした。

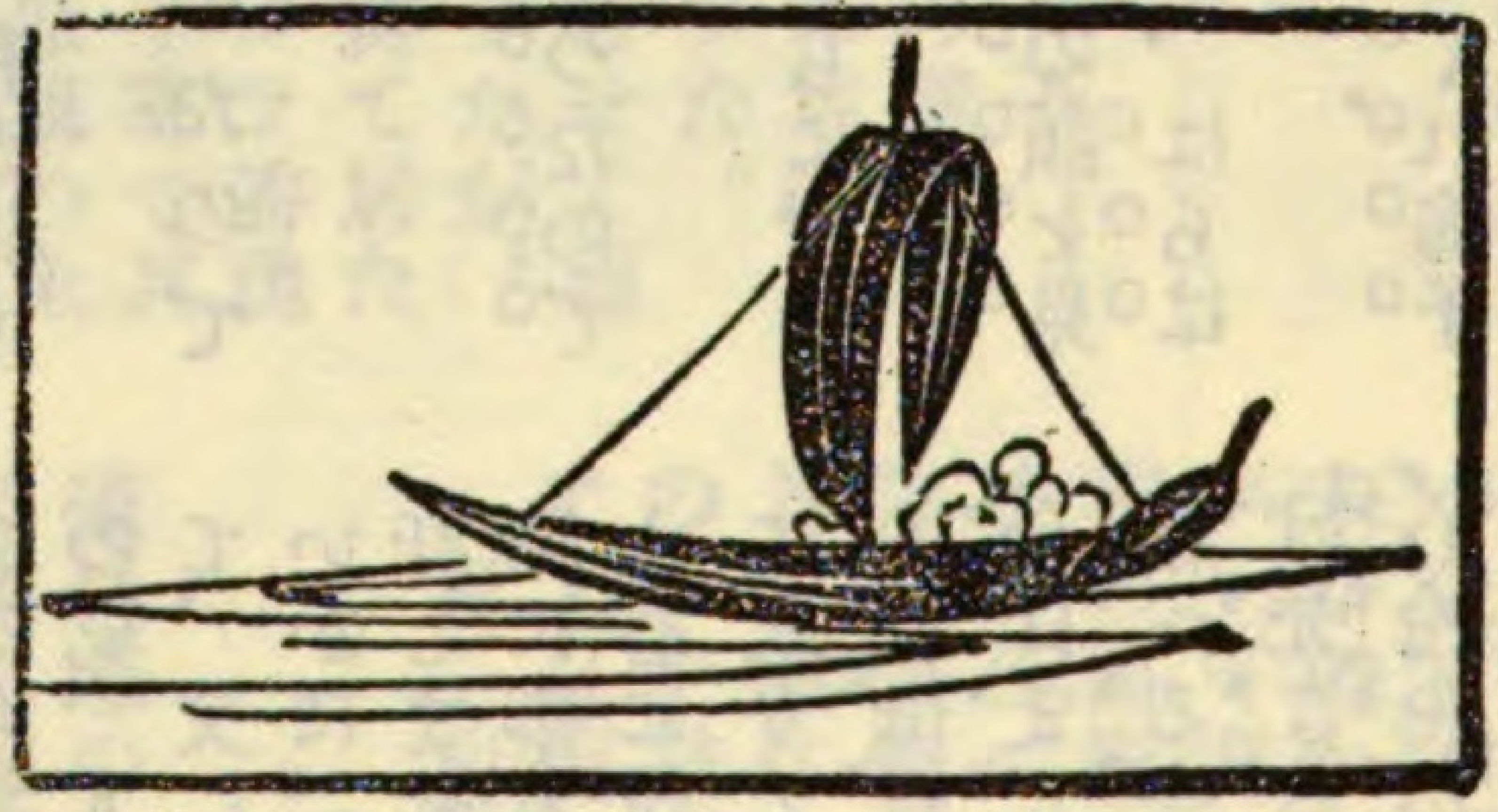
ねえ姉さん何故人つてものは、母ちやんの樣に死ぬのでしやう、いつても私母ちやんが見えるやうてよと、また私どうすればお母樣に可愛がられるてしやう、こんなにね、お庭の梅なんか奇麗に咲いて居ると、ひとりでに悲しくなるの、あゝ母ちやんと姉さんと私と一所に、去年の今ごろはお花見にいつたのねと言つて、思ひ胸に迫つてか知らず聲を出して泣くのです、

これが斯う八歳の子供ではありませんか、如何に怜悧の子であるといつても、未だ頑是ない筈です、それだのに、繼母のつらさにかくまで胸を痛めるかと思へば、吁々側の妾だつて泣かずには居られませうか。

ねえ私お金も美い衣服も要らなくつてよ、いくら貧乏でも樂しく暮したいと思ふは、あのお隣の徽ちやんなんか毎朝お花賣りに行くんですて、それでもいつも樂しいと言つて居らつしやるの、眞個だは私もう何も要らないたゞ毎日お母樣に可愛がられて居たいの、あゝ薔薇の花のやうな美しい唇から、かゝる語の出づるを思へば、妾は一言の慰めやうも知らないで、たゞいつも梅ちやんと一所に泣くのみでした。

花の如き梅ちやんも、世は草木も笑ふ春、遂に病の侵す所となつたのである。

征舟（課外）　京城　彌田三舟



＊　＊　＊　＊　＊　＊

梅ちやんうめちやんてば……漸く聞えたのか、細き目を開いておゝ姉さんと妾の手をにぎつたので、あの美しい豊かな頬は窶れて蒼白いのに、亂れ毛が二すぢ三すぢ、死の魔と戰いて、總ての哀れさを此處に集めしめて、かつて蕾の薔薇とたとへた唇は秒一秒かはりゆくのである。

この有様に滿座そゞろに涙しげく、濕りきつたのである。

お母様……と突然弱り切つた細い聲で、ご機嫌ようといつたのである。

あゝ世は春ながら春ならで、花の嵐はいたづらに、小さな靈を蕾のまゝで散らしてしまいました。端然と座して瞬きもせず、昵つと淋しき少女の顔を見て居られたお繼母様の、眼よりは露か時雨か、はらはらと。

あゝこれこそ我非を悔つた美しい涙！宥してくれ梅子とたゞ一語。

（評）巧みに人情の機微を寫し出されたり。

○雲の流れ

周防　楓子

咲き匂ふ一本櫻、白う霞める橋畔の今や曉近う。

さらばと見返る柴のとぼその、今更に名殘りの惜まれて、有明月のやう／＼に淡う照せるわが家の窓、あゝ御夢やすらかに在すか、父君、祖父君。

十有七とせ、海山限りなきみ惠みに露しも報い參らせざるのみか、いつまで、あゝいつの世までかみ心痛めまゐらするのわが身ぞ。あはれこの不幸の子、我まゝの兒、人の子として赦されまじき不孝の罪を重ね／＼て、又してもこの夜、み許しだに乞はて、この姿は！いかに。

許しませ父君、祖父君、昨夜もくれ／＼のみ諭しの、腑に落ちずとは、いかで、誰うれしう忝なういかばかり心に泣きてこそ承り參らせしか。さはれ又しも臥戸に入りて後、思へば／＼、いづこの里にか涙に過させ給はむ母君のやつれさせ給へるみ姿眼のあたりに浮びて今日まで十とせ、たちぬひに、よみかきに、み心盡し給へる今の母君怨み參らすとにはあらねど、ともすれば先なる母君なつかしさに、世の運命拙きをかこちて心冷やかになり生ひにしわれ、ひとたび父君祖父君のみ心安め參らするを得ばとて、ふたゝび、わがごと心冷やかに世を怨む子の出でざるにはあらじかと、唯それのみの苦しさに榮あらむ生涯もひとり住みにとて思ひ定めしわが心。かくていつまでもみ許にあらむはなかなかに涙のみぞ勝る不孝の身、數多き弟妹にみ心慰めまして定まりし命十七とせ、世になき子ぞと思して許

しませこの罪。
今こそと見返れば、あはれなつかしき慕はしきわが家十あまり七とせの樂しく華やかなりしわが生涯を包めるわが家はおぼろの月にかこまれつ、かくて行方定めず出て行くわが身の寂しく長き未來はいかに。雲の流れ、水の流れ、等しく東の方をこそ指せ、風は吹きに吹くものを、浪は荒びに荒べるものを。

（評）哀れなれども物足らず、今少しありたし。

○山吹の殘葩に對して

松山　山脇幸子

降しきる雨は怒るが如く狂ふが如く妾が書齋の障子を叩き去り襲ひ來るのであつたがやがて庭の竹に葉擦をさせてソヨと吹く溫い風に雨は漸く小止となつた。妾は「アノ黄金色の……」と早小さい胸を躍らせて雨に晒されし山吹やいかにと急ぎ小庭におり立つたが、アハレ昨日まで美しう咲き亂れて榮華の夢を貪て居た可憐の山吹は無常の雨風に枝をはらはれてアタラ香魂を泥土に委ねて居るのである、妾は思はず走り寄て其花葩を拾ひ集めて書きかけてあつた憂愁記の原稿の上に載て机上に展げたが青春の血は熱して哀れな悲しい思は情にもろい自分の胸をついて來るのである。一片の花葩斯も妾が情を傷ましめるのであらうかと思はず目を閉ぢて思に沈めば、黄金色の振袖長うソと吹く風に飜させつ楚々たる佳人が髣髴として立て居るのである、けれどもその珠の唇は紅消え豐な頰は肉おちて玉の眸は冷たい涙に濕うて居るのである、鬢のほつれのいと亂れたるは風の爲であらうか、翠の眉の褪せたるは雨の爲であらうか、痩せ衰へた躰は支へる力なく、やがてはそこに倒れんとするのである、進んで扶けやうとすれば、忽然として影はうせ机の上には花葩の露未だ乾かず原稿の文字をにじまして居るのである。
アヽ可憐の山吹は一夜の風雨に散はてゝ今は只斷腸の花の面影を止むるのみである、彼が香魂は今何處にさまようて居るのであらう、哀れ不遇の山吹よ、妾は滿腔の同情を以て汝が爲めに一掬の涙を惜まないのである、願はくば妾が机上の尊き聖書の間に安らけき永劫の夢を結ばれよ。
アヽ叉篠を亂して降り出した實に恨多き雨である。

（評）山吹の精を描き出したるあたり、流麗にして婉約。

○朧月夜

伊豆　土屋松江

破れ窓のもとに文机に向ひ讀書に耽りゐしが、頭頻りに重く胸ぐるしく心すゝまぬまゝに、柴の折戸を後に歩みいでぬ。
春風肌に心地よく、東の山のほとりより耻かしげにいでたる春の月うすき霞の衣を纏ひ淡き光線をなげつ、折しも櫻花の二ひら三ひら、はら／＼と舞ひ落つる樣月の光に映りてほの白く時ならぬ雪かと思はれひとし

ほいみじう覺ゆ、夜のふけ行くまゝに花には露を帶び月はやゝさえゆきて、香り清く眠るが如き花の影をうす明るき地上に印するゆかしさ、げに一刻の價を千金といひしも此の景色のあるがためならむ、ふとあたりを見やれば寂として人影もなし、えもいはれぬ風情よとみとれたりし瞬間、朧ろに照らす月光の何となく物悲しげにみえ向ふの丘に墳墓の姿かすかに現はるゝにつけ、あゝ妹はかくも一片の石とかはりはてたるよ、思へば浮世は夢なれや。

妹の名はゆり子年はいまだ三歳なりき、妾より云はむは何となく後めだけれど世の綠子には立優りていと愛らしかりしまゝ近きわたりの女の子らが寵愛一方ならざりき、まいて妾は仕事の暇毎に妹とゝもに樂まぬ日とてはなかりしかば彼女もいたく昵みて物わきまへぬ幼心に親とも思ひしならむ妾も亦子とのみ思ひけり人生は夢の如く無情の風吹き荒みうき世は幻に似て不定の雲いと深し、かくまで人も愛て妾も寵せし妹も時の障をやさけ難かりけむ、ふと風邪の心地にて褥に着しが病はいや重りに重り行きて、五日目の卯の刻計りに十五夜月の全く山の端に落つるをも庭の小草の朝露のひるまをも待たでつひに歸らぬ旅人となりぬ。

あはれ、み墓の妹よ妾はせきあへぬ涙の雫を汝が上にそゝぐをゆるせよや、されど妹よ妾の心をくみなしてゆめ世に降る春雨の冷たき雫とな思ひぞ。

あゝ！たえぬ思ひにふけゆく夜半もしらざりしが、いつしか月も雲間にいりて、花びらの音もなくひら／＼と、涙にそぼちし妾の袖にかゝりぬ。

（評）艶麗にして凄婉。

○夕ぐれ

熊本　田山紅花

ふら／＼とたゆげに浮べる夕雲の今花やかなる入日を浴びて雲母の如く閃きつゝいづこをあてとや徐々と流れゆくを、行方遠く意味もなう瞻視れる妾、芝生に座せし身の平和けさに似ず、胸はひたすら無言の哀想になやみ、そこはかとなく心の闇を辿りゆくにて候。

吁、兄樣、妾は悲しく候、澄樣は遂に昨日上京せられたるにて候。

薄墨色の木の葉影、涼しき風に打ちそよぐ夏の夜も、白く香りなきみ空の花の、片々散りくる冬の朝も、或は婀娜たる菫さく野邊、楚々たる野菊笑む里川堤に、話題はいつも同じき若き希望の、共に床しき感想にうたれては、必ず／＼と契りし東都遊學、あはれ一握の淡雪と消え果てし妾が身、只何とはなしにはかなう悲しう候。

昨日彼の君の、いてたち見送りて停車場に至りし其折よ、愛深き母君に伴はれ、幾多の友におくられ、さらでも冴えたるまみ、美しう希望に輝かし給へる彼の君、活き／＼したる面はに微笑を含み、喜びにみちたる姿の一層奕々たるを見ては、妾は思はずあつき涙のとゞめかねて候。決して／＼彼の君の幸福をうらやむとに

はあらず、我身の不運をなげくとには候はねど、湧きくる涙は止めがたく、人目なきを見てはいく度か、罪なきハンケチ裂けよと計りかみしめ候ひしよ。

又一つには日頃朝に夕に、それをのみのぞませられつる彼の君の願ひの叶はせられたれば、いか計り嬉しき思ひに胸をどらせてかと思へば、妾もうれし涙は止めがたく、一つには歎きの涙、一つには嬉しの涙、吁妾の、この小さき胸に二つの涙はいかゞ致すべき。

妾は思ひ出てゝは今又ひたなきに泣くにて候。かゝるよわき情はいつ習ひけんと驚かれ候へど忍びし昨日の涙も只今日はのこさじとばかりに……。

吁、思へば榮ある成功を夢みて甘き現實に醉ひませる彼の君と只いたづらになすこともなう、故郷の泥土に埋もるゝ果敢なき妾と、そもいかに人目にはうつり候やらん。そこに人世の解し難き秘密とやらは、こもりたるにて候はんか。

都にゆくのみが學問にもあらねば、と强ひて心を靜め書よみ筆とり候へど、ともすればまた死灰燃え上るとか云けんやうに、心の奥より、吁、我も父君在さば……



小春日（選外）

徳島　荒井秋子

など思ひ出られ、今も其思ひに堪へて一人この芝生を辿りたるにて候。あゝさても長からぬ一年の春秋、人生に與ふる浮沈の大なることよ。妾はいかにすれど父君在せし去年の戀しう〳〵偲び出さるゝにて候。

あはれあてやかなりし夕榮もうつろひて、さかりすぎたる梅の一片、二片、風なきに散り亂れ候。さらば夕餉の用意も忙はしきに……。

兄樣許させ給へ、胸にあふるゝ思ひも語る友なき身のさびしさに終には堪え得て、御業しげき兄樣驚かし來ちせつる妾が深き罪を。

吁、かゝるも女の淺はかなる愚痴とやらにて候べし、今は只兄樣の、華やかなる成功の桂冠いたゞかせ給はん日をのみ、小指折りつゝ母君と共にまち上げ候はん其折こそ、吁其折こそ、安き世の運命の神の寵兒とこそ其温かき、御ふところへ飽く迄うれしく眠り候はめ、さらばいたつきまさぬ樣、いそしみ給ひてよ。

（評）悟りたるが如く、迷ひたるが如き、却々に女らし。

○蝶と花とを見て

和泉　竹叟　文子

人にも戀ありと言へど、そは果敢なき戀よ、僞り多き

戀なるよ、朝日影に消ゆる露のそれにも似たるよ。春闌に陽炎もゆる野邊に來て見よ、淸き美くしき戀の香に充てり、蝶にも戀あり、花にも戀やあらむ。日ねもす蝶は彩羽を翻へして、甘き花の蜜に醉ひて舞ひ、夜もすがら花は蝶に宿をかして、和らけき夢に導く、春逝けば花散りて土とならん、蝶は骸となりて土と化しなん、短かき春に生れて、暫らくの運命を、麗かに、華やかに終らむとする、蝶よ花よ、幸なる哉。況してさがしき靈ある人よ、この美くしき蝶と花の戀を見て恥ぢずや、深き神の惠みに浴して、世に生れながら、何ぞ終日終夜罪の淵に沈み、僞りの戀に憧がれて、苦き鞭を當てられては、失望の境に沈まんとはする。

悲しみある時は、自然は凡て悲しみの色に見え、喜びある時は、自然は凡て喜びの色に見ゆ、斯くの如く自然は悲喜を共にせむとするに、人は何故に、自然即ち神の情を解せず薄情なるや。

春には花咲さ、夏には果實を結び、秋には果實熟して落ち、冬には淋しい枯木となりて、百度千度操り返して、人生の幸なる行路を示すに、人は花も咲かず、果實も結ばず、咲かむとして散り、結ばんとしては落ち、終には淋しい冬枯の樣に、宿世を果敢なみて終らむとす。恥ぢよ人、春の野邊に來て蝶と花との美くしき戀を見て、麗かなる運命を見て、僞多き世を恥ぢよ、罪深き身を省みよ、自然は吾等に幸なる運命を與へむ。

（評）僞多き戀に惱まんより若かず去つて自然の美に憧れんには。

○月見

下總　菫々栞女史

漸く憂きになれたる旅寐の軒に、芋と粟とを一と皿づつものして、これも名は月見の宴、南向きの八疊、書齋、客室、寢室を兼ねたるに、椽さきは三坪ばかりの庭、ところせげにひろごれる芭蕉の葉かげくろ〳〵と地に映りて、折々、風にゆらるゝを見やれば、さながら浪の上なる心地ぞせらるゝ。其影の漸う短くなり行くまゝに、月は垣一重なる隣の家の屋根をはなれて、いとまどかにさし出でたり。其色の年毎に光りいやますやうなるはうれしけれど、積れば人の老となるてふ言の葉を思へば、垣根にすだく虫ならねど、われも自らねになかるゝなり。幼なかりしほどは、いとも今宵のうれしくて、心もそらにやなりたりけむ。文机の上なる花すゝき、めづらしげにもてあそびつゝ指切りては泣き、團子つくるよとて、あらぬまねびにありし祖母君の興じたまひし事もありしが、今はそれも昔となりにけり。あはれ悲き月、嬉き月、月よ、なれは幾世の秋を眺めつくして、また幾世の春にあはむとはする。

（評）なげゝとて月やは物を思はする。

巖谷小波先生選

俳句

特別第一賞

奈良市押上町二三藤田方　西湖女史

菜の花や小役者とまる草の宿

〔評〕田園の清趣見るが如し、絶唱。

特別第二賞

陸前國登米町河内活版舎内　猪股きつ子

梅寒き断食堂の二月かな

〔評〕雄健にして而も清雅。

特別第三賞

長門國豊浦郡長府村　益田式子

蒲公英に菫に過ぎり春の水

〔評〕一幅水彩畫を見るが如し。

天　埼玉縣川越在谷中三　大野こと子

こゝ三筋何れも花の小徑哉

〔評〕艶にして大なり。

地　越後國中頸城郡寺野村　藤原竹子

柵朽ちて蕨のびたる馬場かな

〔評〕面白き見付所。

人　内藤ゆき子

小菫や蝶のはなれしほのゆらぎ

〔評〕纎巧可愛。

秀逸

初蕨山の幸とぞ囃しける　越後　藤原菊子
三ッ越せば乳母の里なり春の山　相模　倉橋よしゑ
桃多き村や晴耕雨讀の士　武蔵　錫子
春の日や奈良に旅して雨ごもり　豊後　太田蝴蝶
犬塚と覺しき土堤の薊かな　越後　西山清繁
君が代を肥太りたる角力かな　大阪　武藤てふ子
烏帽子子が馬にて訪ふや梅の門　岡山　柴田豊子

包むほど春を見せたる霞哉　大阪　陰山瀧子
さめて追ふ夢や餘寒の置炬燵　近江　岸本かず子
鏡賣る奈良の町家や海棠花　滋賀　片岡露子
相逢ふて櫻にかたる月夜かな　上總　森涙香子
鍋洗へば我背を撫る柳かな　山口　行友やす子
ものしりの僧住む寺の銀杏かな　長岡　雪女
棟上の幣に吹なり春の風　深川　阿部川雪子
鳳凰のきしる大路や風光る　栃木　松本玉仙女
小羊の夢あたゝかに春の風　群馬　江葉巴女
船下る舞妓の袖や春の風　岐阜　熊崎やゑ子
好き人とそゞろ歩きや朧月　周防　島津いち子
下京の琴三味線や春の雨　信濃　神津貞子
故を温ねて燕巣つくる酒屋町　越後　藤原鶴子
電線にもの言ふ燕二つかな　信濃　藤岡三輪子
たつ鳥を覗けば落る椿かな　加賀　白峰雪子
月圓し星に角ある冬の宵　北見　高橋たんする
散りそめし緋桃の下や鯉跳る　埼玉　大野こと子
凱旋の艦ゆく海や夏の月　伊賀　大津きみ子
春の海霞みて遊き白帆かな　靜岡　姬百合子
血のたるゝ魚にも添へて初櫻　神戸　水越輝子
鶯の籠を洗ふや春の水　金澤　砂山かしく
春の川木屑流れて通りけり　日本橋　松澤雪子
奈良霞む三笠の山の彌生かな　京橋　梅澤星香女
初虹や花水榴の秋より　神田　中川千代子
春雨や鶯かくるゝ石燈籠　遠江　宮城蝶々子
梅の花奈良の兄より手紙來ぬ　埼玉　小林きやう子
春の川美しき石を拾ひけり　日本橋　植村幸子
歸路に馬乘り替へる長閑哉　上總　森香波子
春雨や机に夢の置きどころ　土屋葉々栄女
藻にふれて鱗こぼるゝ金魚かな　筑前　花田くら子
山猿の折りては投る氷柱かな　阪本　秋月萩子

灰汁鍋にぽつりと落ちぬ赤椿　豐後　安藤良子
打並ぶ小舟靜かに霞みけり　高知　岡村たづ子
藤の花咲いて庵の小雨かな　新潟　本間みよ子
蟲干や俳諧袋獣ぶくろ　越後　武井春子
騎馬の兵葦の原を過ぎにけり　土井かつ子
初東風に櫓太鼓のひゞき哉　常陸　板橋きく子
糸柳十八町に五六本　播磨　林さかえ
京の蛙江戸の蛙と語りけり　京橋　矢代あづま
青柳や鳳輦過ぎし京の街　信濃　山際美貴代
梅の月光琳の畫に似たる哉　本郷　山崎緑子
櫻ばかり咲きほこりけり關の跡　筑前　少女
啼く水鷄聽くぞをぬしが戀しいぞ　尾張　渡邊霞石子
飛石や椿こぼるゝ寺の庭　攝津　和久磨珠子
桃咲くや村を離れし穢多の家　福島　門間紫苑子
電燈の邪魔な柳や夏の月　豐前　楓女史
梅が香や料紙賜はる長局　千葉　小高清子
春の月柳搖つて見たりけり　陸中　菊池はせ子
反橋を渡る女や藤の花　奈良　藤田そめ子
籠にして日白興ずる小春かな　備中　佐藤郁子
落椿孝女の墓を尋ねけり　伊勢　米山靜子
菜の花に白き蝶々の止まりけり　茨城　花子女史
金色の春を寒がる佛師かな　愛媛　岩崎さと子
春の月磯馴松にかゝりけり　岩代　丹治はるみ子
咲き出し桃の若木や新邸　上總　秋葉文子
將軍の征途に詩あり陣の梅　小石川　近藤愛香子
人戀し雨の夕の櫻花　赤坂　川島文子
籔入や爐臺暗き物語　岡山　日置高子
行く春や机わびしき古日記　越後　玉野苅萱子
長き夜や二番煎じのかぜ藥　岐阜　山本靜子
春風や京で逢ふとの置手紙　山武郡　大矢とし子
手も足ものべて浮發の蛙かな　備後　佐藤光子

天 ○嫁ぎて後故郷の母に

石狩國由仁村　白菊子

咲きも殘さず散も初めぬ櫻花、今を盛と時しりがほなる今日此頃、皆々様如何御消光遊ばされ候や、妾事こちらへ參り候てより、殊に暖き御膝許のみ慕しう、明け暮れ西の空眺め遣りてはお懐しさに忍ず候折柄、過ぐる日、みや子よりの文にて承り候へば、父上様には御風邪の氣味にておはしまし候由、其後は如何に入せられ候や、一日も早う御全癒のほど神かけて祈上げ候、御膝許を出て候ひしはきのふの様に覺え候へ共、早くも月は三度めぐり申候、彼の南窓の下にみや子と向ひ合ひては編物の勝を爭ひし折など思ひ出られ候ては、何やら夢の様な心地致し候、其後はみや子も嘸かし寂しからんと察し申居候、實家にありし頃は何の心もなく尊き月日を空しく過し候ひしが、今となりて家政てふ重き務を擔ひては、萬づにつけ初々敷き事のみにて扨ては兼て母上様のみ言葉など思ひあたる節のみ多く候て、料理のみちも今少し習ひ置きたらば、裁ち縫ひのわざをも少し熟練致しおきたらばと、何かにつけて後悔致し居候、さりながら當家の母上様は誠にお優敷きお方様にて、何やかとお教へ下され、世の常ならぬ嫁きて幸多き身よと喜び居候まゝ、御心安う思召給り度候、主人事は早朝より出かけ候へば、留守中は誠に寂しく、折々母上様に小説など讀みて差上る外は、こわ音も絶ゆるほどに御座候。五時頃歸宅致し候へば、例の快活なる性にて、夕餉の卓も殊に賑々しう、色々面白き話など承り慰られ申候まゝ、母上様と夕暮のみ待ち遠き思ひ致し居候、猶申上度事はつきず候へ共、只今お隣様にて御不幸これ有り候由知せ參り候まゝ、惜しき筆留め申べく、別紙妹の笑ひ草にお願申上候、かしこ。

（評）平和なる家庭のさま、さては此の文讀みたまふ母君の面に浮ぶゑみさへ、まのあたりに見るやうなり、老手といふべし。

地 ○僕悲しいよ

横濱市山手町共立女學校　山口直子

姉ちやん僕ほんとに悲しいや、だつて世界中で僕は只一人ぼつちだもの、阿母さんは去年の秋に死てしまつたし、僕を可愛がつてくれる姉ちやんは他へ御奉公、

それから直に顔も知らない他の叔母さんが來て、僕の阿母さんになつたけど、僕いやだ、あんな阿母さん、始のうちは武坊々々つて可愛がつてくれたけど、此頃は一寸なんかするとすぐに打つたりつねつたりするの昨日もね正ちやんや義ちやんがピカ／＼光つてるサーベルを以て戰ひつこして居るから、僕にもあんなの買つてと云つたら、此子はほんとに生意氣だといつて買つてくれないの、僕欲しいや、だつてサーベルがなければ大將になれないんだもの、だから最一度願つたら、なぜそんな解らずやなんだつて、僕を押入の中へ入れちやつた、僕大きくなつたらエラィ軍人になるんだから泣くまいと思つたけど、知らずに涙が出て泣いてしまつた、お父さんも先にあんなに可愛がつてくれたけど此頃は阿母さんと一所になつて怒るんだもの、昨日だつて僕がいくらないても父さん出してくれないの、姉ちやんが居ればすぐに出してくれるんだけどねえ、だけど姉ちやんきつと家へ歸るんじやないよ、姉ちやんだつて家に居ればきつと僕の樣にひどい目に逢ふから、僕姉ちやんとこへ行きたいな、姉ちやんはやつぱり先の樣に可愛がつてくれるね、だけど僕道を知らないからだめだ、ぢやあ僕はやつぱりいつまでも／＼一人ぼつちかなあ、姉ちやん、僕悲しいよ。

（評）輕妙なる筆、幼兒の眞情と繼母の無情とを巧みに描かれたり。

人

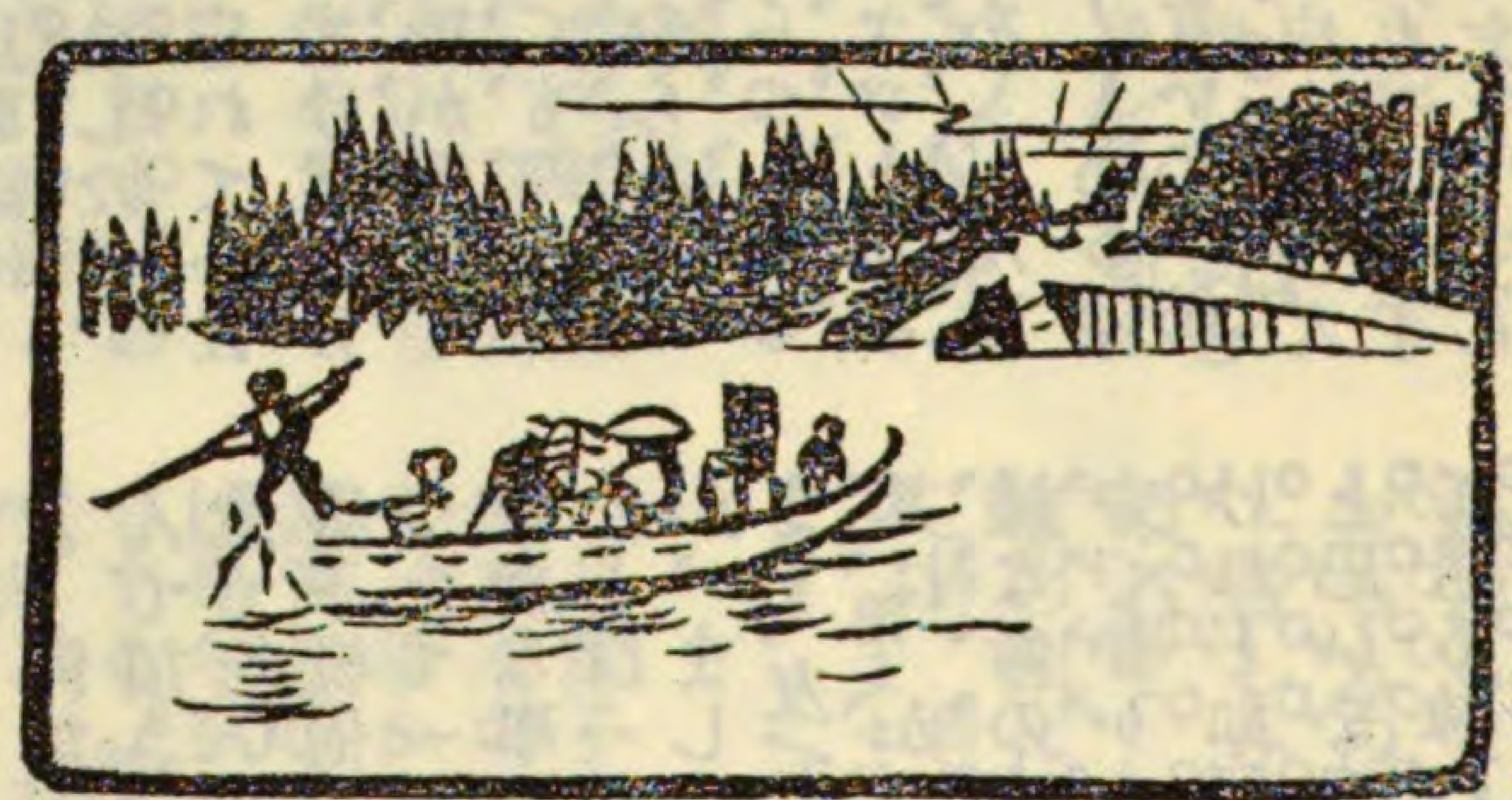
○洋行を思ひ立ちし友に送る

京都京寺町四條上仙石方　金田露園

春風ゆるう吹きて、若柳寢よげに見ゆる時、妾は二階の窓に倚りて、道行く人を眺めつゝある折しも、主婦の持ち來りしは懷かしきあなた樣よりの御玉章にて候ひき、いつも美はしき御水莖の跡、今日のみは何故かく亂れさせ給へると、いぶかりながら封押し披いて讀みゆくまゝに、妾の眼には時ならぬ露の宿り申候、日ごろ優しきあなた樣のこたびの御決心は、よく／＼の事と御察し申上候へ共、そはあなた樣の御心得違かと存じ候、假に妾の身に遡りて御熟考なされ度候、兎角世はまゝならぬものとは申しながら、妾は七才の秋に兩親を失ひ、伯父のもとに引取らるゝ身と相成、風吹く朝、雨の晝、日夜父母を戀ふて、涙にぬるゝ袖は乾く間もなく候ひしが、漸くにして高等小學を了へてより、おさへ難なき功名心に、妾は只前後の考もなく伯父の家を飛び出し候てより、西に漂ひ、東にさまよひ、この花の都へ參り候ひしは、桐の一葉の落つる頃、馴れぬ旅路の嵯峨の里、持病に苦しむ折しもあつき／＼御介抱され候はあなた樣と御母上樣とにて候ひき、それが緣となり、今は通信事務員として郵便局に採用せ

られ、日給貳拾六錢を受くる今日に至るまで、さしたる失敗もなく暮し候は、天にも地にも便り少なき妾を蔭になり陽になり御護り下さるる御母上樣のみ情に外ならず候、申すもをこがましき事には候へ共、妾が三とせ以前、數年の鴻恩を捨て丶家出仕候その時、その時の理想は決して決して今日の如き賤しきものにては無之候ひき、されど〱繊弱き女の身には暗黑なる社會に一の光明を認むる事すら叶はず、妾が理想はとはに〱冷たき骸と相成り果て申候、幸少なき妾は理想と現實との一致せざるものなるを始めて相悟り申候。

天涯萬里の波濤を踏んで、故國を後にせらるてふあなた樣、兎も角も春秋玆に十有八年、蝶よ花よと育み給ひし御母上樣の心、ましてや逝かれにし御父君樣の御遺言、妾は常々あなた樣の御母上樣より承り居候、さるに斯る御企に、馴れ給はざる旅路は遠し異國の空もしやいたづきにても起りまし候はゞ、故國にある御母上樣の御なげきそもいかばかりに候はんか。



渡船場（選外）　登米　高橋みよし

人は生れながらの天性あるもの、其性に從うて身を立てん志を抱いて遂げ行はんとせらるゝを、妾の如きはしたなきものより斯る事申上候ては、定めて御腹立もおはしまさんと存じ候へども、世間にはよくある習慣、「立志出郷關學若不成死不歸」てふ男性すら、往々失敗に終らせらるゝに、まして女性の世なれ給はざるあなた樣に、悔いて返らぬ事の出來候ては、御母上樣の御なげきの程察せられ候まゝ、ぶしつけとぞんじながら妾が思を筆に言はせ申候。

書き終れば日は山の端に傾き、天には一つ小さき星のきらめき始め候へば、精神籠めし文も是に筆止め申候、かしこ。

（評）諄々として說くところ、對手をして首肯せしめずんばやまざるの槪あり、前半やゝ冗長に流れたるを惜む。

秀逸

○結婚せんとする姉の許に

長崎　古岩井操子

姉樣花曇とても云ふのですか、何だか鬱陶しいお天氣です事、姉樣今日は日曜でせう、だからね、私敎會から歸て來て別に御用もないから、ぢつと御机の前に座つて、色々姉樣の事やなんか、考へまし

たの、此間の御手紙には、姉樣いよ〳〵御嫁にいらしやると、ありましたわね、て、私ほんとに嬉しい御目出度と喜んだ御手紙差上は致しましたもの、實は何だか悲しいやうな、口惜しい樣な、姉樣の旦那樣になる方がにくい樣な、羨しい樣な、氣がしましたの、だつて屹度々々姉樣はもう私の事なんか、忘れてお仕舞なさるだらうと、思つたんですもの、ですけど今日は私、あゝ姉樣が御嫁にいらしたなら、兄樣が新しく出來る、さうして姉樣が、可愛い赤ちやんでも御産みなすつたら、私奇麗な帽子やら、くつ足袋やらあんで上げやう、さうして兄樣にも、御役所にいらつしやるのに御寒いからうと云て、ゑり卷とか、シャッとかあんで、兄樣へと書て小包で、御送りする、あゝどんなにうれしく樂みでせう、それからまだいろ〳〵あるのよ、で今ではもうたゞ嬉しくて〳〵たまらないの、姉樣早く御嫁入して、兄樣と御二人で可愛がつて頂戴ね、あらとう〳〵降り出してよ。

(評) 可憐なる少女の感を描ける、語婉にして情切なり。

○過てる友に

但馬　小西菫子

優子樣先日の御返しも上げないで、突然こんな御手紙上てはどんなにかお思ひなさるでせうが、親しい間と許して下さい、私も貴女も愛讀して居ます女子文壇剽窃詩文の注意欄で毎月貴女の御名を拜見致します、如何なる御心で御注意なさるのか伺ひ度くて。

剽窃者に有つた罪を悔いて頂くお考でなさるのか、記者樣に喜んで頂くお考て有ますか、私の目から見ますと、何だか、違ひましたら許して下さい、記者樣に喜んで頂き、一方には其人をそねむと云ふ所から出た注意て無いかと思はれます。

優子樣何て剽窃と知れたら紙上に書立つる前に其人について一言のいさめ遊して上なさらんの?

彼樣な事書立てゝは本誌の名にかゝるては有ませんかたとひ一面識もない他國の方でも同胞では有りませんか、まして誌友で有ります、親しく無い迄も友て有ります、友て有たなら、何ぞ惡事をいさめなさらんの?

其は、かりにも他人の作を盜んで迄名を出して頂き度樣な考の方は、誠に見下げた心の方でせう、見下げた方で有りますが、人には思違と云ふ事が有ります。けれど如何な罪も心の底から悔悟したら、罪は消えると思ひます、法律はどうか知りませんが、私等の信じて居る神の教はさうて有ませんか、消たなら元の清い友てせう、よし如何程さもしい心の方でも、神の教と同情とを以ていさめたなら、悔悟なさるでせう、神は何處迄も情て交れと教へるては有りませんか、私の目から見ますと一點の友情が無いかと思はれます。

優子様のやうな淑女の行ひとは思はれません。
優子様此事のみは貴女の平生の御心がけと違つては居ませんでせうか、何て一言の戒遊ばして上げて下さらないのでせう、其上改めなさらねば仕方有ませんが、何處迄も戒めて上げなさるが友の情かと思ひます、どうか考へ直して見て下さい、違つて居ましたら許して下さい、幾重にもお詫は致します、此様な事申上げてさぞ心地悪う思つて下さるでせうが、どうか親しい間と思つておゆるし下さい、春なほ寒き此頃お身を大切にさらば。

（評）剴筍交を投ずるものにも、そを注意するものにも、よき頂門の一針。

○耳しひの君に答ふ

羽後　菅原花枝

「あゝ或るときは我が心、あらゆるものを拋ちて、世をあぢきなき淺茅生の、茂れる宿と思ひなし、身は術もなき蟋蟀の、夜の野草にはひめぐり、たゞいたづらに音をたてゝうたを歌ふと思ふかな」句に何の力ありて人をなやましむる。

思へば君、身の全からぬ君よ、耳しひ玉へる君よ、ああさすらひにし山の里、水美はしく、風清き、そこよ君が家。

人に言はるゝ言の葉は、しひたる耳に入らじとも、敏き君は知り玉へり。

まことと人の生を君は解せり。

胸のいたみ、そは人の子の若き迷ひなりけり、君は自ら不過は幸なり、なやみは慰藉なりと識る。

あゝ友、とし子の君よ、君は耳しひたるが故に、人たるに缺けたるに非ず、君は耳しひたるが故に人たる事を得たるなり、形骸またきもの世は大かた然れども、人たるもの少きを見よ。

「苦しみの間に眞の道は得らる」あゝいかに美しき君の心ぞ、君よ永遠にさちあれ、妾は君に云はん、神は君の頭にあり、其心はまことなる事を忘れざれ。

（評）猜忌、嫉妬、怨嗟の聲をよそに過したまふ耳しひの君の、却々に羨ましくもある哉。

○寫生畫に添へて

三重　山田ひさ子

八重子さん私ね、夕方庭先を散歩して居ますと、妹が姉さんお手紙が來てよ、と云つて來ましたものですから、誰からと聞きますと、あなたからなのですよ。私眞實に嬉しくつて取る手も遲しと拜見致したの、承れば學年試驗も優等で及第せられたさうで、お羨しい事ですわ、勝つて冑の緒を締めよと云ひますから、油斷せずにどうぞ勉強して頂戴、老婆心からですよ怒らないてね、而して此のリボンまづいのですけれど、私のほんのお祝ひ迄に……笑つては厭ですよ。

八重子さん、おん地の春景色寫生でもして送つてよつて、私下手ですからお斷りしやうと思つたのです、

けれども折角ですから二三枚書いて送りました。お芋が轉つてる樣なつて笑つて頂戴な！。

一番上なのが三本松橋なんですよ。夫れ去年の今時分でしたのね、あなたと弘と美代ちやんと土筆とりに行つた歸りに、此處であなたが下駄を流して、洗ひ物をして居たお婆さんに拾つて貰つた事がありましたのね、僅か一年前の事ですが、あの時の事などまるで夢の樣ですわ。それも其筈です、あなたも美代ちやんもお出ないのですもの。お、此の橋の下を流れて居る清い水！安濃川！橋は朽ちて畔りの松林はだん〱切り取られて、世はぢきに移り變るのに、變りもせぬのは此流れとあなたのお心とですよ。ね、八重子さん此後とても一層親しく頼みますよ。

其の次が鎭守の八玉子さん、其次が私の家ですの、さう見えなくつて？二つともあなたと私が姉妹のやうに遊びもし、勉强もした處ですから種々な感じがしますのね。

八重子さん末筆ながら皆樣に宜敷言つてよ。先づは此れて御免を蒙ります、かしこ。

（評）三本松橋の寫生畵、密、情致を以て勝れるもの。

○野の白百合へ

栃木　中野貞子

春雨の音も頻に更くる夜の、影さへあはき燈火かきたて筆の跡おぼつかなくも進んじ上げまらせ候。扨も御前と妾とは同じ野に姉妹と生れ候ひしに、ある日妾は野遊びあそばされし姫君に手折られて、玉の殿の奥の間に、七寶の花瓶にいけられ候へ共、はかなさは妾の命にて、今日か明日かの玉の緒と思へば、曇る空の色、ふるは春雨ならで我が身の上、乾くまもなき葉袖の涙、蕋もしほれ、花片もくち候て、中々に野邊の故里戀しく候や、有爲無情の習、盛者必滅の掟、それは人間の身、ましてやはかなき花の身のこし方行末を忍ぶにつけても、羨しさはお身の上、空を仰いて悠々の思やみち候はん、實にも美は婉麗ならて中々に清楚の内にこそ候へ、さればお前樣には優しき面もて、つかれし旅人の慰めとなり、やがては名のなき里のうなゐに手折られて、又捨られて、運命にほゝゑんでたふれ候へ、これぞ誠のけだかき花の務めに候はん。

（評）なさけなきは姫君のなさけにこそ。

○「久しく音信せざりし友へ」の返し

小石川　奈美木翠子

峯のもみぢば殘りなう散り失せて、虫の音も絶え、日の光りもまた物悽うなりて、人目まれなる此處赤葉山麓のわび住ひ、うら枯れし今日此頃の秋の色、目にふるゝもの皆哀れを催さゞるはなく、憂き事多き妾が身

には一しほ淋しう、如何計り君の戀しかるべき、蕭々と降りそゝぐ雨の日の夕、妻戀ふる雄鹿の鳴く音をきゝては亡き妹の昔を偲び、くまなく照らす月の夜半、過ぎ行く雁を仰いでは、君戀しさの想ひを寄せ、一人心を痛めをり候、今日また寂しく暮れ行く西の空を眺めやりつゝ一人懷ひに沈み居り候折から、御なつかしき君が玉章を拜しまつり、妾が身の起きふし詳しう告げ參せよと、何時も變らぬ厚き御情けのほど、身に泌み／＼と只々譯もなう涙に咽び申候。朝には薪採りにと山路に分け入りて、松風悲しき谿間に、怪しき鳥の音に腸を斷ち、夕には負籠充ちて歸る道すらが、早くも差し登る月影に、我れと我身の果敢なさをかこち候ては、亦君が御住ひの何時も洋々と春の海の如きを御羨み候ことも屢々に候。斯くこそ妾はその日／＼を淋しく繰り返しをり候、あはれ、共に寫眞撮りし昔の誼み捨て給はずば折り／＼お便り給はりたく、まづはお返しまてかしこ。

（評）穩雅にして流暢。

○遠國に去りし友の許へ

（妹の死を知らすとて）

津市　松尾はな子

美智子樣！

今宵妹の病俄にあらたまりて安き心とても無く一同眉ひそめ候ひしが、只今うつら／＼と熟睡に落ち行き、ほつと胸撫で下し候。然し醫師の言の葉にては最早餘命も永からずとのこと、庭の小松に宿る月影も、折から空ゆく奇しき怪禽の叫聲にも只胸躍らする計りに候、今枕邊の椿の花ぽたりと碎けて落ち候。あゝ！妾は只心の中に「妹の身安かれ」と神に祈り候。さらば！



寄まち（宮小）　學習院[illegible]　寄井とな子

（花に狂ふ蝴蝶の畵の面に）

今宵くだけて落ちし枕頭の椿と共に妹も遂に逝き候。今は只何事も申すまじく、將た何事も御尋ね被下まじく皆夢にて候よ、只濕ほひたる八ッの眼の中に菫色に褪せし脣細う開いて「美代ちやんわ？……」と貴孃樣の御妹の名を尋ねたる儘、永久の眠りに落ち行きたる可憐の妹が面影御偲び下され度、此旨美代ちやんにも御傳へ下され度候。別封なる椿の花片、其折の名殘の一片にて候。涙の筆を取りてかくは……。

（花と死を共にせし蝴蝶の畫に）

今宵、佛間に一家聚つて亡妹の靈を慰さめむとて佛寺を開き候。震へたる僧の君の御聲も聞くからに悲しく、ふと沈みたる頭を上ぐれば「釋、尼妙智」と書かれたる新らしき位牌のみ目に着きて悲しき涙思はずはら〳〵と濡れ候。苦しき妾が胸の中御推し被下度候。

（淋しき哀れなる雌蝶の翁に）

（評）凄慘。

○若菜にそへて山里にすめる友の許へ

米澤　樋口季春

昨日よりも霞は深うなり侍りぬ、御住居のわたりはかけひの氷も打ちとけて、春の長閑さをさゝやきてや侍らんかし、谷の戸出る鶯の初音は、いかに御朝いの枕を驚かし侍る、されど此方もさすがに垣根の梅のけしきばみ、いぶせき野守が宿近き野面の若菜もやう〳〵下もえ侍るを、今幾日ありてともとはせ給はゞ嬉しさはまづ袂ゆたかにと思ひ給ふるを、打つけながらかくなん、かしこ。

（評）流麗にして、雅健。

○磯邊より

土佐　多村倭子

あゝ死、こは妾にはいとも樂しく嬉しき名にて候よ、そは何故ぞと、問はせたまふな、あらゆる罪に掩はれ汚れにみちたる現世の苦しみを去りて、清き清きエデンの園に遊ばしむべく、神の下し給ひし、福音にて候ものを、君よ、よも忘れ給ふまじ彼の靜なる夕、白き砂美はしき手結の磯邊をさまよひてかたみに己が不幸に泣きし末、七彩の雲はしき空を眺むればキラリ希望の星はきらめきつ恰も無限の秘密をもらして我等の成功を囁くが如くに、君と我と思はずたそがれの磯邊に立ちて、それより涙の眼もて莞爾と微笑みぬることを、あゝ其時より、妾は悲哀にみちたる限にも猶ゆく手にかがやく希望の光は微かに認め候ものを、あゝ、今は何も何も歸らぬ夢と成り果てゝ候、運命の神は、どこまて妾に拙う候やらん、先つ頃より世にも恐ろしき、肺病とかに罹りて日々に重りゆくのみ、今はたゞ一刻も早く、死の神の御手に抱かれんことの待たれて候、あはれ君よ、妾は氣も狂ふばかり胸の痛みに堪へかねて、バイオリン抱きてありしまゝなる夕の磯にかなでしはそれよ、日頃最愛の「夢」の一曲。

あゝ、日は薄るゝ手結磯の畔、空の大氣は憂愁の波を漂はせて、妾が悲哀の調はそが中に咽び入る樣、颯たる松風の音、今は恰もサタンの凄き笑聲の妾を嘲けるかの樣、あはれ絶望の夕、彼方の空にまたゝき初めし星の光のさてもうすく候ことよ。

（評）多恐多情。

○師に結婚を祝ひ奉る

信濃　帶刀きさえ

樂しき夏は來らむとして世は清新の趣味湧くがごとき青葉若葉のこの頃をいとゞ芽出たきことを承り候ものかな。

師の君には此度いとよき赤繩得たまひて君が常々慕ひたまひし幸子の君とうれしき契り結ばれ候由ても目出度き事に候よ。

彼の君も又師の如く才色秀でさせ給ひて殊に泰西の文學とやらに深き趣味もたせ給ふとかあれば、定めし今頃は密月遊の御準備忙はしき頃と推し上げ參らせ候、湘南沙白きところ江北水清き里に恩師御新婦が詩嚢必ず重かるべくと存じ候、詩化せられたる田園山海の吟咏、首伸ばして待ち上げ申す可く候。

謹んで御二人が和胸に湧く愛の泉の永久に絶えざらんとを祈り前途の洋々として春の海のそれにも似て荒風なかれかしと希ひ奉るとともに御結婚をばことほぎ上げ參らせ候、幸子の君にも宜敷傳へ被下度候、かしこ。

（評）洒脱

○庭の花

筑前　花田うらの

一

庭の八重櫻はいと美しう咲き申候。晨、曙の露を宿せる花の一片そとうけて、情けあふるゝ接吻を與へ、戀しき君に贈るにて候。

花の色香は日ならずして褪すとも、何卒々々永久に此の花のみは、詩集の中にお挾み置かれたまへかし。

二

師の君の別れの會にいたく醉はされ、朧の月を仰ぎつゝ家に歸り、東の丸窓そと押せば、花はほろ〳〵と我が袖に亂れぬ。

ほろ醉の櫻散る夜に句三昧など口ずさみつゝ、源氏物語を繙けば、興おのづから湧き、小き詩の琴線に觸れ申候、筆取りて斯くは。

夕暗に蘭の香高き欄干や
　妹がかなづる琴の音もるゝ
寂しとて漫ろあるきの夕ぐれや
　大野を渡る鐘の音低き
春の夜の花散る窓に文くりて
　漫ろ興ずる吾れは歌の子

三

明田の山は今花盛り、寂しき我が里も、昨日今日は行きかふ人も多くして、何んとなく、心も浮きたつにて候。

優さしきうなゐ子と共に一日野に遊び申候。

あゝ上野、向島はさぞかしと、漫ろ都の空懐かしうお許様の起床を偲びをるにて候。

（評）女子のいたく醉ひたるは餘りみよきものにはあらず、恐らくは作者例の「名のみの女子」にはあらずや。

○熱海より貫一様に

岩代　高澤愁葩子

今宵は一月の十七日、熱海の月は曇りて候よ、あはれ君、君は尙哀れなる宮さんを咀ひ給ふか、幵は餘りに情知らぬわざに候はずや。

君が靑雲の希望と、人生の名譽とを捨てゝ、忌むべく嫌ふべき高利貸とまで身をおとせる胸の中は、さこそとお察し申上候。

さりながら宮さんも、今日と云ふ今日は、家庭の眞味の、黃金と權力以外に存するものなることを、よくよく悟り候て、是非貫一さんに一度面會致し、罪の數々謝し奉りし上、打つとも切るとも、罪の笞を受くとも御胸の晴るゝやう、御詫仕る心なりと泣く泣くも申し居られ候よ。

幵を咒ふとは、餘りに無情なる業に候はずや、若しも君よ、君にして、昔其儘の血潮一滴だにもあらば、涙に彩られし熱海の歷史は、たゞ浮世の夢とあきらめて再び人間界に立歸り、宮さんをして平和なる家庭を得しめ給へ。

君とても昔は血も淚もある、眞の丈夫と歌はれし身に候はずや。

（評）紅葉白玉樓中の人となりて、悲しや貫一のこゝろは永遠に解けざるなり。

○小學校に奉職せる友に

無名子

春の名殘りを惜しみしは、昨日の樣に思はれ申候へども、早や五月雨降る時となり、寂しさやる方なく、訪ひ來る人もたえはて申候へども、池の蛙のみうれしげになく昨日今日、御許樣にはいか樣に暮させ給ふらん同じ學びの窓の下に敎草つみし頃は、一方ならぬ御世話に預り、誠に／＼かたじけなく存じ奉り候、前より一ひらの御禮狀さしあげんと存じ居り候ひしも、日々の事に追はれつゝ本意なくも今日まで御無沙汰に打すごし居り候ひし罪、偏に御ゆるし下され度願上候、扨うけ給はれば御許樣には、こたび御地の小學校に御奉職遊ばされし由、誠に／＼御目出度存じ上候、御在校中は御學業御性行共に優等にて、いつも人の上にたゝせ給ひし御事とて、御敎授の法にも御熟達遊ばされ、御校にてもいかばかりにか御仕合の事と存じ上候、さりながらいまだなれ給はぬ上に、幼き子供の敎訓はいかばかりか御困難の御事と察し候、申までも御座なく候へども、唯熱心の御心をもて、何事も兒童に信用せられ給はん樣に、且は幼なき小供の事なれば十分面白みと活氣とを加へて、御敎授遊ばさるゝ樣願上候、私この間當地小學校に參り、少しく感じ申候まゝ、御悅びに打ちそえて、御參考にとて無禮をもかへりみず一筆申上候、かしこ。

（評）これ作者の經驗より獲來れるもの、机上の空論に非ず。

廣津柳浪先生選

短篇小說

天

○朧月夜

大阪市東區東平野町五丁目百五十六番地　横山春子

中寺町より谷町へとさしかゝる折しも、向ふよりやうやう十二三と見ゆる小娘、何か包を小脇にかゝへて足早に通掛る、行違さま廿歳ばかりの女は顔見合せて何か思當りし樣子、二足三足通過た娘を呼止め、「チヨイト京ちやんじやアないかヱ」思掛なく聲を掛られ娘は不思議相に立止り、此方を振向たまゝ又もや行掛る、「京ちやんじやアないの」重て呼れて娘は立止りて暫は無言なり、女は猶も進寄りて、「京ちやんかヱ、妾だヨ」「ヱ誰何」「アイ妾だヨ」と被し手拭取る時、生憎に雲掛りて月は暗し。「ヲヤ姉樣」「京ちやんは今時分何所へ行くの」「二ッ井戸まで買物に、そして姉樣は」と不審さうに打見やるに姉は流石に耻かしくや暫は俯首て詞なし。「ヱ今迄何所に居たの、ヱ姉樣」と問ふも無理かや此姉は、去年の春父と妹を後にして我から戀しき彼の人と走りし事、今更思へば〳〵面目なし、賤が伏屋に月はさすとも、床しき人と新世帶、樂しう思しは夢の間なり、不義不孝の報は其年の暮より足腰立たぬ男の病、其日の烟立やうすべはなし、兎にも角にも夫婦二人の身の上、洗せんだくや人仕事、されど次第に募る男の病に今は三度の食事も碌に食べ兼るに、其から思ついたる燐寸會社の職工募集に應じたるも耻も外分も厭ふべきにあらず、かくまで落魄はてゝ圖らず此所に妹に逢ふ、懷かしさ面目なさ、暫は詞なく顔を背けしまゝ袖にはら〳〵と他には知れぬ時雨なり。妹も暫は姉の方を見詰て居たりしが、「姉樣」と呼掛られて姉は力なく、「アイお父樣は腹を立てゝお居でだらうネ」「イーヱ、あんな不孝な奴は親の罰で今に困るに違ないと云つてお居でだヨ、だけどネ、夜になると溜息を吐いてお居でだから、お父樣何うしたのと聞くと、ア、お袖が居つたらつて眼に泪を一ぱい溜てお居でだから妾も何だか悲しくつて……」と云ふも後や先、不孝のお袖骨も碎る思なるべし。「堪忍してヨ皆妾が惡いのだから、妾が居なくなつて家の用は誰がするの」

「お父樣も早く起るけれど掃除や何か妾がするの」「それじやア大變だネ」「今姉樣は何所に居るの」「妾の家はアノ久寶寺町」「そんなら今度の日曜にお父樣と一所に行うネ」「エヽ、來ても好いけれど」其れより姉樣今夜は妾と一所に家にお出な」「今夜は少し用が有るから」不孝重ねし身にて、のめ〳〵と親の敷居が跨らるべき、薄き緣の唯我身恨めし「アアお父樣が案じるから、モウおいてヨ、そして今夜妾に逢つた事は默つておいてヨ」「お父樣に言つては惡いの」「アヽ近い中に尋て行くから、まつてお居て、ネ」「そんなら姉樣、きつと」「アヽ、きつと」姉は去りもやらず後見送る、妹は五六間行過て見返り、見返り、幾度か下駄踏かへしつ、横町に曲りて姿は見えずなりぬ。



路の片側に消もやらぬ雪まだらに白し。

作法も舊式であるし、何處か間の拔けた處はあるが、會話にわざとらしい筆づかひなく、一種、人をひきつける力のあるのは、此作者が何ものか藏して居る證據て、選者は第二の作に於て、一躍發展せられんことを祈るのである（選者評）

（地）

○手風琴

深川區佐賀町臼井方
松永かつみ

「まあ美いちやん、大層上手になつたこと」姉の芳子は斯う云つて、物憂さうに手風琴を、傍に置いて、ほつと幽な溜息を洩らしました。

綺麗に淸められた、閑靜な座敷、暖い春の太陽が疊の上迄流れて、到つて長閑な日、姉妹は今手風琴を奏つて居たのです、妹の美いちやんは、阿父さんよりも、阿母さんよりも、姉さんが一番好て、學校から歸ると

姉さんと遊ぶのを何よりの樂として居るのです。
時は四月の上旬、お庭には櫻が今を盛りと咲き匂つて子雀が嬉しさうに囀り交して、枝から枝へと花の中をくゞつて行くたびに白い花片がひら〳〵と散ります。
「姉さま、今度は孝女白菊の歌をやりませうねえ」
「えゝ、お茶を頂いてからねえ」
美いちやんは、やさしく頷きました、芳子は今しがた下女が持つて來た、お菓子を美いちやんの前に置きまして、自分はお茶を呑みながら、深い物思に沈みました、美いちやんは何か思出したやうに、姉の顏を覗いて、可愛い手で膝を押へながら。
「妾姉さんと何時までも一緒に居たいのだけれど」
姉は美しい口許に笑を見せて。
「好いわ彼家へ嫁つてからだつて、美いちやんと一緒に遊ばれるわ、ねえ好いてせう、そうしたら、亦手風琴をやりませうね」
「だけど、他の家へ嫁くと好いのね、妾あの秀雄さん大嫌よ、何だか恐い眼光ね」
「眞個よ、妾も可厭なんだけどもねえ、世の中の義理て仕方がないのよ」語尾が掠れて。
「まあ義理つて何? 義理の爲にお嫁に行くの、義理なんかないと好いのねえ」
「……」姉は無言てした、美しい二重瞼には露の玉が宿つて居ました。
芳子の父は、昔高橋と主従の間柄でありましたが、中年から暇を取つて、一家を持つたのてしたが、思はぬ災難から、路頭に迷ふ境遇となりましたのを、高橋の助を受けまして、今ては左に右人に知られた財産家になつたのです。
芳子は高橋から秀雄の嫁にと望まれました、芳子は高橋へ行くのは死ぬより辛いので、始は可厭だと云つて居ましたが、義理がたい父は、涙を流して賴みましたから、芳子も仕方なしに、承知して、二三日内には結婚する事になつて居るのです。
「さあ美いちやん白菊の歌をやりませう」
姉は思ひ出したやうに云つて、話を轉らそうとしました。
「姉さんは、什麽してもお嫁に被行るの?」
「もう那麽話はよしませうねえ」
堰き來る涙を咳にまぎらして、そつと眼を拭うた。
「姉さん! 泣いてるの、奈何したの」とおろ〳〵聲。
「いゝえ、泣いてなんか居やしなくつてよ」

と手巾を取つて、顏を見せながら、故意とらしく微笑んだもの〻、浮かぬ色は見えるのでした。

「ね、涙なんか有りやしないでせう」と投げるやうに云つて「さあ孝女白菊の歌を……」

手風琴を取上げて、奏で始めたので、美いちやんは氣遣はしい目で芳子を見ながらも、蕾の口を動かして。

　阿蘇の山里秋更て……

天女のやうな芳子に操られた風琴の音は冴えて、玉を轉ばすやう、庭の櫻がはら〳〵と一陣激しく散り敷くのでした。

事がらは悲しいが、ゆつたりとした文章で書かれてあるから、無理に讀者の泪を絞らうとしてかゝるやうな、厭味がない。悲しい小說も此れ位の處が、最も短篇に適して居るやうである（選者評）

人

○春の宵

神田　多歌子

『あらッ、秀さんとお喜美さんのやうだわ。』

火燈し頃の小川町通、今し東明館へ這入つて行く、男女の後姿見送つて、斯う呟いたのはお政である。

あゝさうに違ひないわ。眞逆虛言だらうと思つたら、矢張昨日裁縫のお師匠さん處で聞いた通りなんだ。えゝ口惜しいッ、くやしいッ！

身を震はして紅もゆる襦袢の袖を、ビリヽとかみ裂いたかと思ふと、もう一切夢中、何處へ行くのか、何處へ來たか、何も知らず、地を踏み鳴らし遮に無に前へ馳けるやうにして行つた。口惜しいッ、人でなし、何うしたら、何うして遣つたら、と思ふは唯其事のみ、波立つ胸に面は變じ、目は輝き齒を喰ひしばつて、物狂はしく先へ〳〵と足に任せて……。

石につまづいて、危く轉びさうになつたので、ハッとして心附けば下駄の前齒は折れて居るし、いつの間に取落したのであらう。櫛と簪が影も形もない。先刻買つたばかりの根掛と半襟さへも。

銀杏返しの根はがつくり落ちて、熱した頰へは、生溫かい夜風になびいて、後れ毛が三すぢ四すぢ。

秀さんも餘りだわ。ひどいは。薄情な、今は一人前の職人におなりだと思つて……私ばかりかお父さん迄踏みつけにして……。其はお喜美さんはお金持の地主の娘だわ。私は何せ貧乏人の子なのだから……。

朧なる春の宵の、織る如に行きかふ電車のベルの音冴えて、燈火の光唯美しう花やかなる、神保町の通を、

お政は深い想に沈みつゝ、家路を辿つて行く。

＊　＊　＊　＊　＊

『ぢや、岡村の若旦那が、お政を貰ひてえッて云ふのて……。』父の清造、長火鉢越相手の年増を見た目は、異様に光つてゐる。

『えゝ親方さうなのですよ。今も途中でお政さんに話したんですがね。』と傍に伏眼になつてる、お政の横顔チロリと見やり。

『何しろ、岡村は町内一の財産家で、御承知通り若旦那は立派な方だし、支度金は望み次第ッていふんだから、此様な良縁は又とあるまいと思つてね。實に政ちやんも如何に幸福だか知れやしない、彼いふ家の奥様と崇められるんだもの。大した出世だよ。』得意顔に說き立てるのは、其出入の魚屋の內儀である。『折角の御深切は有難てえが、まあキッパリ斷つて貰ひやせう。』謬もなくいつて、横を向く。

『あら、お父さん私嫁く氣だわ。』お政は面も赤めず、鋭どく云つた。『な、なんだッ。』

『ほゝゝ親方何ですよ。其様な恐い顔してさ。政ちやんは嫁く積りだッてえのに……。』其れ見た事かと云はないばかり。『何だ、最う一度云つて見ろ、唯は置かねえぞ。』拳を握つて、詰め寄つて。『手、手前はそんな腐つた根性なのか。手前がそんな了見ぢやあ、例へ口約束でも、秀太に對して乃公の顏が立たねえ。』

猿まわし（外選）　靜岡　鈴木はな子



『だッて、お父さん……。』尚ほ云ひたげに、唇を震はしたが、胸が迫つて後が續かぬ。

『大工の清造は、土地に生れて四十年からこうして居るが、憚りながら欲得ぢや渡つて來ねえ。』誰にともつかず云つた。面は宛然朱を注いだやう。

『……。』お政はつと面を向けて椽に出た、が湧きくる淚拭ふともせず、尙も忍び音に泣き出した。

花曇りであらう。空は一面どんよりと打霞んで、風に連れてか花の香がそこはかとなく……向の二階家＝＝お喜美の家＝＝からは艶なる女の笑ひ聲。續いて仇つぽい三味の音が、夜の靜けさを破つて洩れて來る。

觀察の細い點は何うしても女性の作たる事を現はして居る、今少し書くべき分量が多かつたらと思はれるが、何しろ六十行に制せられて、事件の波瀾が單純になり過ぎた、併し小説らしい事は一番てある（選者評）

秀逸

○春は我宿（上）

秋田　唐錦女

親兒揃ふて行く樣見ればアわしやもなりたや濱千鳥新川橋の彼方から微かに響いたのが、漸々近くなつてやがて唄の主は橋袖の嫗が茶屋の前に現はれた。

「おゝお照さんかえ、何時も好い音聲だのー、今出市るところかえ」と六十路餘の茶屋の老嫗が聲をかけた

「あゝ今出市る處よ」と嫣然言ひし聲は微かに、白い手拭に包まれし美しいのは颯と羞含んで見えた。

「歸途には些とお寄よ、是非聞きてい事もあるんだしなあ」と屈曲た腰を伸々、松葉脊負行く娘の後姿を見送りつゝ聲高に叫んだ、やがて座に戻り態「眞個に彼娘も可憐想に」と私語いた。

「何と良好音色の娘だね、實際腸に泌み通る樣だ、夫に些と見た處標致も仲々最上想だが什だね、老嫗さん」と今迄澁茶を啜つて居た男が眞實感心想に斯樣言つた

「諸々旦那樣、標致なら何なら此新屋町中はおろか、秋田市中にだつて又と二人は無いんでがんすが、誠に可憐想な身の上で」と、涙に洟を交々老嫗の語を聞けば彼娘の家は元名望家で新屋町の遠山といへば誰一人として熟知ぬ者もなく、資產も隨分あつたのが、今から恰度七年前彼娘が八つの時に、父親は腦充血で急に死去なり、折から產後間もなき母親は、愁傷の餘精神に異狀が出來て、新屋濱邊の藻屑と消えて終つた、跡に取殘されし彼娘、親戚多からねば從來は餘り親交からぬ當時高利貸の叔父に遺產と共に引取られた、其當座は夫婦共隨分優しくして學校へも昇して呉れたのが、元來が良からぬ夫婦の事故一人息子さへ、愛想をつかして家出をした程だから、此頃では彼娘をすら厄介者視して、學校には滿足に通はせず、兩親の墓詣する香花の錢さへ呉れぬ樣になつたので、僅か十四の彼娘は、程近き濱邊の松林から落葉を搔き集めて、二里近くの秋田市へ日毎に賣りに出て、其錢で香花を買ひ書籍も買つてみるといふ悲慘な狀態、世間では叔父夫婦を惡口む者いよ〳〵多く、而し彼娘を不憫がる者また夫丈多く、現に遠山の菩提寺なる憐正院の和尚さん

などは一層彼娘の心根をいとしがり、近い中には自宅に引き取つて將來立派に教育して見せると言ッて居るげな。

（下）

大空は紺碧に遠山は紫に近くは綠に晴れ渡りて、舞ふ鳥の音さへ樂しげに、何處よりともなく窓に吹き込む梅の薫得ならぬ今日、某師範學校にては旋て卒業すべき生徒のため、廣大なる講堂に於て音樂演奏大會が開かれたのであつた。

午後一時に開會かれたのが大方終つて、最初に才色共に校中の華といはるゝ遠山照子の獨唱が殘つた。今しも演壇に立ち現はれし彼女、少し瘦形にて丈高く、眼は涼しく鼻隆き顏面は、飽迄氣品は高いが何處となう寂しく、例令はゞ白梅の雨含める態にも見えて、大花瓶の紅梅とは餘程よく調和して居る、で數多の觀者をしてたゞ恍惚せしめ、今は堂内の動搖一時に靜まり返へつて呼吸の音さへ聞えぬのである。

旋て彼女の眞紅き唇漏れて「春は我宿に再とかへらず」と唱ひ始めて、「戀ひしき我母‥‥戀ひしき我父」と唱ふあたり、抑揚の巧手な事、恰ながら玉を轉ばす如く、聽衆はなほ呼吸を殺せり、「父は何方ぞ母は何處ぞ獨り孤兒を玆に殘して」と唱ひ續くるや聽衆にははや啜り泣の聲す「返へせ我母を海の遠方より、返へせ我父を元の住家へ」あゝ彼女の情緒は既にせまりて或は咽ぶが如く或は訴ふる如く或は悲しむが如し。

「父はかへり來ず母は來らず、たよりなき此身磯に殘して月影寂しく今日も暮れぬ、見渡す海原怨恨果てもなし‥‥」と終局も果てず、石膏の如き彼女は動とばかり卒倒れたのである。

＊　＊　＊　＊　＊

昨二十四日、世人の羨望む名譽の月桂冠を頂きて、首尾よく師校を卒業せる遠山照子は、此度特に選抜せられて、某音樂學校に入學を命ぜられた事共、世にありとあらゆる讃詞をもて今日の新聞紙上に發表せられた是と同時に彼女は憫れむべき孤兒なりし事、音聲美しかりし往年の松葉賣る少女なりし事等、一層大方の世人を驚嘆かしたのであつた。

松葉賣る好い聲の子が、後に音樂家となつたと云ふ甚だ詩的な物語、之を若し今一層寫實風に書いたなら、猶ほ詩味が多かつたらうが、（上）は稍說明に過ぎた、惜むべし（選者評）

○鶯の聲

京都　濱部郭公女

「俊ちやん」と仙太郎は急に沈んだ調子で、

「噫、僕は……僕は自分が自分で意氣地が無いのを悲しむよ」と靜かに腕を組で吐息をついたが。

「然れど俊ちやん僕は思へば思ふ程腹が立つよ、今日も學校から歸りがけ彼處の土橋の所迄來た時向ふから君子さんが來たので僕は口をきかうとしたんぢやないか然るに失敬なッ見て見ぬ振りして橫道へ曲つてしまうのだもの……僕は其の時思つたよ、噫々今の世は金だッ、金さへ有れば馬鹿な紳士も尊敬され醜男も金有れば美人を求める事が出來て金無き者は如何に學者でも賢人でも鬼の樣な奴に頭を下げる世の中ぢや無いか」と思はず天井を睨んだ。

俊子は今しも縫ひかけて居た針の手をやめて

「マー兄樣君子さんが其麼……私は今迄斯麼優しいい方は無いと思つて居たのですよ、今に私の姉さんに成つて被下るのかと私は信實に喜んで居たのに」

仙太郞は妹の言葉を遮り。

「ナーニ俊ちやん今の女子の多くは皆君子さんの樣な畢竟其の人には嫁し無いてダイヤモンドの指環だの財產と結婚するんだからナ、僕は其麼輕薄な女は御免だむしろ僕が小學敎員と成つたのが幸福と成つたかもわからないよ」と淋しく笑つたが又沈んだ調子て。

「然し僕は俊ちやんに對して濟ま無いね、唯一人の妹に恁麼苦勞をさして……俊ちやん、今暫らく辛棒してお呉れよ、いつ迄も恁麼他家の針仕事なぞは爲せては置かないからね」

俊子は狼狽しく兄の言葉を遮り。

「アラ兄樣、萬望那樣こと仰有ら無いで下さいましな恁うして兄妹二人がお互に助け合つて働いて行くのですもの甚麼に嬉しいかわかりませんわ私は些とも苦痛とは思ひませんのよ」と力強く謂つたが流石は下を向いた、俊子は猶も言葉を續け。

「ナー兄樣今貴方が今の世はお金だつて仰有いましたが信實に左樣ですね、然れど又一方から私考へるとお金で買へ無い者も有ると思ひますのよ、ソラ兄樣此の村中で一番お金持だと謂はれて居る高野さんの息子を御覽なさいまし彼の方はお金は何程でも自由に成るのですから藝者を妾にして不慊に成ると又取替へなんかして思ふ通りに我儘をして被居るのですけれど未だ彼の方が滿足と謂ふ言葉を仰有つた事が無いと私は聞いて居ります、ですから私はいつも心の快樂は決してお金では求める事が出來ないてしようと思ひますの……兄樣恁樣して兄さんと二人が何の心の苦しみも無く樂

しく暮して行くのは、私、何よりの幸福だと思ひます」
仙太郎は俊子の言葉の終るや、やをら俊子の手を取り
「俊ちやん僕は感………感謝するよ、お前が其麼見上げた精神で居て呉れるとは……あゝ僕は其の言葉を聽いて甚麼に嬉しいか心强いか……」と感極つてシカと俊子の手を握りしめた、折しも何處よりか可愛らしい鶯の聲がした、俊子は耳を傾け。
「兄様、今の聲をお聽きなさいましたか、恁麼花も何にも無い荒れた庭でさへ鶯が來て鳴くじや有りませんか」と俊子は嬉しそうに兄を見上げた。

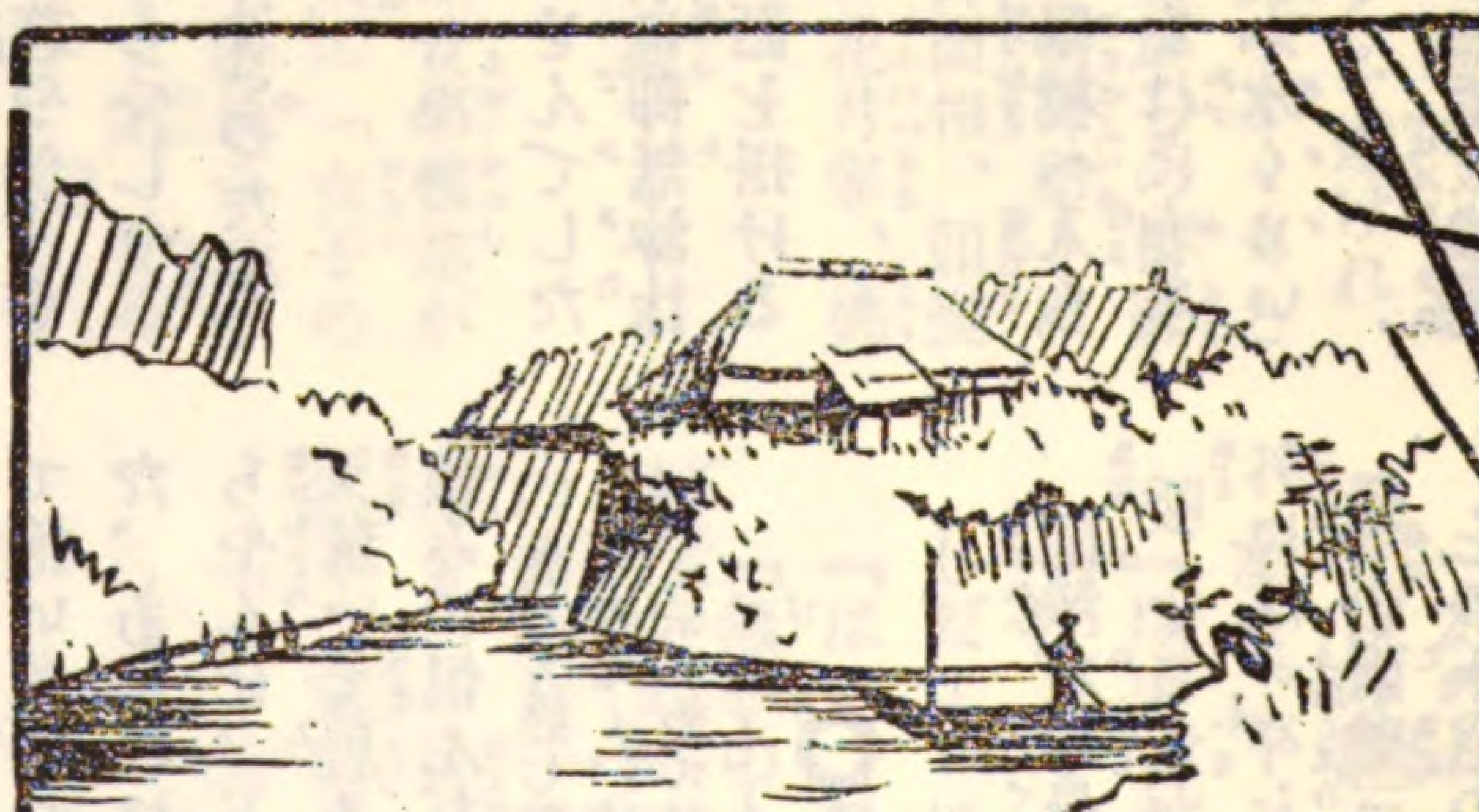
すらりと書かれてはあるが、兄妹の對話は少し理窟が多い、餘り作者の考が勝ち過ぎて、却つて思ふた人物が出ない憾がある、終りの鶯の聲も稍つけたりの嫌ひがある、若し初めの作とすれば無論上乘ではある（選者評）

○逸れたる鞠

河内　松尾むらさき

「姉さん」たしかお隣の春ちやんの聲。て妾は直ぐ、
「お入り、障子を開けてお入りなさいよ」と、云ひながらふりかへると、早や可愛らしい丁度小指の先で押した様な靨を表して春ちやんが立つて居る。春ちやんは今年明けて八つ、尋常二年生なので、妾が妹の様に可愛がつてやるので、姉さん姉さんと毎日遊びに來る。

家門（選外）　筑後　富安眞砂



「春ちやん、そのゴム鞠どうしたの」
「兄さんのお土産にもらつたんだわ」
「え！兄さんのお土産に！ぢや兄さん歸つていらつしやるの」
「はあ、昨夜晩う歸つたのよ」
「そう！ては一寸その鞠お見せ、兄さんに買つて頂いたのなら、妾が毛糸で包んで上るよ、ね、だから大事になさいよ」春ちやんには雜誌とビスケツトとを與へておいて、妾は直ぐ奇麗に包んでやつた。
「おゝ奇麗な、奇麗な事よ、妾兄さんに見せて來るわ、必と兄さんも喜んでよ」云ひながら早や嬉しそうに走つて行つた。
あゝ波雄さんもひどいわ、昨夜歸られたのなら、今朝

ても一寸知らして下さればいゝに、妾があれほどお歸りを待つて居つたのに、ちつとも知らして下さらないんだもの、ほんとにひどいわ。

妾は庭に出た。空には夕日が輝いて最早や暮やうとする。と、お隣の庭を春ちやんと散歩していらつしやる波雄樣、三年程見ぬ間に大變立派におなりなさつた事、まるで見ちがへる樣に。

「兄さん、お隣の姉さんがゐてよ」

「やつ、文子さん、長らくお目に掛かりませんでしたね、でも御壯健で結構ですな、どうも非常に御無沙汰しまして失敬でした。それに妹が大變御世話を掛けるそうで、いや實に感謝します」

「ハイ、あなたも御無事で……」

あゝ、まるで以前の波雄樣でないわ、美術學校へ入られる迄はもつと親切でいらつしやつたに、それに春ちやんの事なんか禮を云つたりして、何んだか水くさい事よ、あんな約束までして置いて。

それから妾は毎日々々樂しくなかつた。そして波雄樣と成るべく逢はない樣にしてゐた。それから三週間程すぎた時、妾は意外な事を聞いた。と云ふのは波雄さんが近々お嫁さんをもらはれるとの事。妾は決してそんな事はないが若しやと思つて或日春ちやんに尋ねると、あゝ、無邪氣な春ちやんは嬉しそうに「内にも姉さんが出來るのよ」と。妾は悲しさくやしさがこみ上つて抱いて居つた春ちやんを突きやつてワッと泣きふした、あゝけれども、何にも知らない無邪氣な可愛い春ちやんを、どうして今更不親切に出來よう、直ぐ妾は又驚いて居る春ちやんを抱きしめて泣いて／＼そして恨みに恨んだ。

決して熟した文ではないが、天眞が發露されて、思つた通り、かざり氣なく、波雄を恨む少女の面影が現はれて居る、是等は上手の文と云ふのであらう（選者評）

○あらまあ!!

徳島　みどり女

閑淨な四疊半の一室、南面の小窓に午前十時過ぎの暖い日光が射して眩しいほど、細目に開けた障子の外には、今を盛りの老樹の紅梅色鮮かに、折柄來鳴く鶯の兩聲三聲。

その小窓の下に据えられた唐木の机、机上には金文字燦爛な洋書、帙入いかめしい和書漢書の數々、堆かく積み重ねられて、主人の博學多識を誇り顔である。が、さて判らぬのは、机の邊り縱横に算を亂した大小

の雜誌――新聞紙なンど、そのいづれも擴げられた頁頁に、○、△□の朱筆の印し。

火鉢を傍側に引き寄せて、座に就いたのは此室の主人、乃ち當星山家の令孃すみれ子その人である。年齡二十二三、色は白いとよりは寧ろ蒼い、鼻こそ矮けれ、口こそ巨きやかなれ、顴骨の尖つた、眼尻キリヽッと釣り上つて、眉は始中終顰めがちの、白眼がちの目許に女の愛嬌のあの字の影も無く、あはれ一朝御怒りに觸れなばいかにと、嘸や嘸想ひ遣らるゝ御面相、頭髮は赤ッちやけた縮れッ毛を、手束ねらしい花月卷、桃色リボンが目立つて見ゆる。

やをら坐を占めた菫子は、軈て何をか打案ずるやう良暫時。

『えゝ……、十五、六、七と、今日は女學雜誌が到着る日だよ、えゝと、彼雜誌には論文に「女子の天職」と、それから美文に「落花の夕」が投つてあるのだ――左樣だ、天職の方はまア……第一賞の價値は充分だ――落花の方だつて二等……第二賞ぐらゐは慥乎だよ……しかし何うだらうね、待ち遠しいねえ、早く來れば宜いに……。』

と、沈吟して居たが、

『清や――清や。』

『ハーイ。』

下婢の清が顏を出す。

『あのね、正午の郵便にね、雜誌が來たなら直ぐと妾しの許へ持つて來るのだよ、大急ぎて……宜いかえ。』

『はい、あの……だッしつて何ですの……。』

『ほゝ、何云つてるの、だッしぢやアない、ざつしだよ、ほら例每來る御本だよウ。』

『はい、ほゝゝ判りました、へい〳〵。』

『無學のものッちやア仕方が無い』呟きながら、菫子は又机に向き直つて、更に机邊に散亂してゐる件の雜誌を一冊每取り上げて、この印しを着けてある部分を、一行一行叮嚀に手帖へ筆記をはじめた、而して頻りと獨語ちながら。

『まア此の春野花子さんの文章は巧いのね……ほら此の一行なんぞは眞實に何とも云へないは、それから森中白百合さんのは何うだ、これも些と妙いよ……これも又白百合さんのか……藪川椿といふ人のもうまいね。――

――しかし何だねえ、それにしても妾なんぞはまア

大した教育も受けて居るのでもないし、だけれど文學の方には眞個に天才があるんだから……怎麼歷歷の人達にも負けず劣らず、同じ大きさの活字で組まれて、印刷されて、雜誌になつて、若干かで購はれて、多數の人達に見られて、而して賞められるといふのだもの……天才で無くつてねえ……。あの「才媛叢誌」の記者も「此文故一葉女史が俤あり、孃の如き鬼才を出すを得たるは本誌の光榮とするところなり―」なんて讃めちぎつてるし……鬼才、鬼才、ほんとに左樣かねえ、故一葉女史だつて、巧妙いには、巧妙いに相違ないが――厭味だよ、舊式だよ――それに引換へて妾の文章は花やかだね、そして瀟洒としてるわ……「女學雜誌」の記者が「絢爛陽春三月の花のごとし、而かも艶にして浮ならざるところ此文の生命たり、孃の風丰想見すべし」つて……彼の記者、何だか猥らしいやうだわ、併し全くのところ事實なのだもの、先日才媛叢誌へ出した「うかれ猫」も好評だつたね「菫子女史の文は號を逐うて益々進めり、斯くの如くんば方今第一流の稱ある女流作家の壘を摩するも又將に近きにあるべし」さ、ほんとに怎麼僻陬に燻つてるのは我ながら惜しいものさね、それにつけてもお父さんやお母さんの頑固にも困るわ、何かと云ふと「詩を作るよりも田を耕れ」なんて、那麼ことは既早耳にタコが出來てるよ……。」

* * * * *

『お孃樣、々々々、郵便が參りましたよ。』

『どれ、さ、早くお見せ。』

例の淸やが持つて來た一封の雜誌、殆んど引ッ奪るやうに取り上げた菫子は、呆れた淸やを後眄にかけて、封をべり〳〵破り捨てゝ、先づ卷頭の目次欄を蚤取眼。

『まあ何うしたらう、見えないわ……。』と慌だしく繰返す頁の下端の六號活字。

『星山菫子は先號來數回、他人の文章辭句を剽窃せること判明せり、依て誌友名義を删除す。』

『あらまあ―あらまあ―。』

今少し嚴しく諷刺の意味を含ませて欲しかつたが、穿つ事は能く穿つてある。此れを讀んで剽窃家が翻然志を改めるやうになつたら、誠に賀すべきことである(選者評)

○なさぬ中

八王子　志茂紫女

彌生の空は紺靑に晴れて、高尾山の頭に只一片、綿をつかんで投げた樣な横雲。麥は靑く、蓮華草は赤く、

菜花の黄なる田舎道を、春風に袖を飜して行く二人の少女がある。雲雀の聲も長閑けく、花に舞ふ胡蝶も愛らし。

少女等は何事をか樂しそうに、ひそ〳〵と語りつゝ、とある橋上に立ち止まつた。

折柄彼方より走つて來た、三四人の男の子、「竹島の繼子やあい……泣虫やあい」と、憎まれ口たゝきつゝ逃げて了た。

鴇色リボン結んだ少女は、何か思ひ出した樣に早や涙ぐんだ。

「あんな輩あんな惡い輩相手にしないてとよ」と、宥め〳〵オリブのリボンを結んだ少女は、左の手を相手の肩にのせかけて、道を右へ替へた。

今しも今日の務をなし終へたのであらう、鼻唄歌ひながら歸つて來る農夫等は二人の少女の後姿を熟と見送つてゐる、腰切半纏を着てゐる、六十ばかりの老爺と洗洒の盲縞の筒袖に、淺黄の古股引をつけて、草鞋を穿てる、三十許りの男とであつた、二人の脊には小山の樣に草を負つて、手にはぴか〳〵光る鎌を持つてゐる。

野遊（選外）　京都　玉川嬰子



「何と美な娘子だなあー、一躰何處の子だえ」、若者は老爺を顧た、「あれさあー、ありや靑木さんの孃樣と、竹島さんの孃樣だあな」「それぢや何だなあー、よく繼子々々といふなあー、あの孃樣の事だんべえ」老爺は聲を曇らせながら「そうだあーよ、あの孃樣の身になつたら、なんぼうか辛かんべえーよ、實の母樣が生てゐた時なんざあー、隨分可愛がられて育たもんだがのー」。

老爺は目を瞬叩き〳〵今更思ひ出したように、歩こうともしないて熟と何物か見詰めてゐる。

「俺そんな事知んねえーだが、藝者とか何とか引込んで置くだあーとよ、先の奥樣といふなあー、それを苦に病んでとうとう昨年の春死ぢまつたんだあーよ、俺人の事でも憎くつて〳〵、そうしてあの可愛らしい孃樣を、その女子が毎日々々酷つたらしう苛めてやがるんだとよ、死んだ奥樣も行く所へ行かれめへぢやねへか、俺眞當に憎くつて憎くつて」、老爺は

語尾に力をいれ氣が喘んで激するように謂つたが、落窪んでゐる目からははら〱と涙を流しほつと溜息を吐いて空を仰いだ、若者は老爺の話に引込まれていつか聲も濕んでゐる「だがのー、詰り旦那どんがその女子に甘いからだんべえー」「全くだあー、それだが孃樣は賢え者だて、旦那どんには苛められるのを話た事ねえだとよ、眞當に感心な子だのー」。老爺は下駄音に弗と心付いて振向いた、二三間先に人影を見とめて、急に若者の袖を引いた、口に葉莨をくゆらしながら、八字髯卑しからず、凛とした年の頃四十二三の脊の高い紳士である、餘念なき二人の話に耳傾けながら歩んで行くのであつた。「竹島の旦那どんだ」、若者は小聲に、「聞えたんべえーか」、老爺は輕く默頭ながら、「きこえたんべえーよ、惡い事したなあ」と、二人は急ぎ足になつた、遂に木立の蔭に見えずなつた。

＊　＊　＊　＊　＊

程なく竹島家よりいぎたなく罵る聲はきこえずなつたそれと同時に繼子々々とはやされた、君子の顏は活々としてゆたけき頰には涙の痕が見えぬのである。

農夫の立咄から竹島の主人が微妙な運び出した處は、此種の筋として一寸變つてゐる、また二人のまゝ子がなにごとも語らなかつたも面白い（選者評）

○妻戀橋（上）

名古屋　卯の花女史

『ピス、ピス』と僕は飼犬を呼び立て乍ら、街道筋を一散に馳けて行く、だら〱坂を降りて、物の三町も走ると、もう村外れて、其所からは並木松原、左右は廣々とした田圃で、遙かには柳瀬の堤が一線書いたやう、妻戀橋も微かに見へる、

『時雄君ッ』と不意に横手で呼ぶ者があるので、

『はつ』と、振り返ると、夫れは敏郎君であつた。

『うむ君か吃驚した』と歩調を緩めて、

『君！、何所へ行くの？』

『僕か、妻戀橋へ姉さんを呼びに行くんだ、毎日だよ僕はほんとに困つちまう、君の兄さんが戰死した事を姉さんは知らないものだから、毎日あの橋に立つて、歸つて來るのを待つてるんだよ、父樣なんかは知つてるけれど、姉さんに話したら乾度、氣狂ひになるだろうから可憐さうだつて、態と隱して居るんだ、それを毎日迎へに行つて、厭がるのを無理に連れて歸るのが

即ち僕の役なんだ、姉さんは其度に泣いてね』
『敏ちやん、時ちやんの兄樣は今日も、歸らないんだよ、あゝ、何時……何時歸るだろう』つてね、僕も悲しくなるもんだから、もう直き歸るだろうつて、言ふけれど、死んだ人が步んで來る理があるもんかね、ね－時雄君、君何とか姉さんに言つて吳れ玉へな、僕も父樣も、本統に困つてるんだから、何とか、ね君』
『さう？』と僕も困つて、
『じやあ、斯うしたら如何だね、君の姉さんは非常に僕の母樣が好きだから、今日は僕の家へ伴れて來て、母樣に何とか甘味く話して貰つたら』
『さうねえ』と敏郞君は嬉しさうに、
『さうすると屹度いゝかも知れんよ、君賴むから今日は僕と一所に伴いて行つて吳れ玉へな、ね君、御願ひだから！』
『うむ諾とも、僕はどうせ遊んでるから』
『有難う!!』
『ぢやあ君、走ろう』
『あ、』
僕は振り返つて、又も忙しく、
『ビス、ビス』

（下）

二人は走つて妻戀橋へ行つたが、敏郞君の姉さんの姿は其邊りに見えなかつた、茶屋の媼さんに尋ねると、夫によく似た女が、旅人が榊原上等兵（兄さんの名だ）の戰死の樣の勇ましかつた事などを高聲に話しながら行くのを熱心に聞いて居たが、やがて淋しく笑つて堤に添ふて上つて行つたと言ふ。
僕は此時ふと此川上に惡魔が淵といつてよく人の死ぬ恐ろしい所のある事を思ひ浮べて『もしや姉さんは死んだのではあるまいか、夫れ程兄さんを思つて居て吳れたのなら、或は力を落して夫れが爲めに』と思つて顏を上げると敏郞君も力のない目で水の面を見詰めて居る。
所へビスは女向の下駄を片足咬へて走つて來たが、敏郞君は夫れを見るが否や。
『あッ、姉さんの下駄だ』と顏色をかへて悲しさうに叫んだ。
あゝ、敏郞君の姉さんは眞實に死んで仕舞たろうか。

或は穉氣ありと退けるものもあらう、一脉に話の筋が、物語的であるから、情のうつらないと云ふ損な點もあつて、一概には看過し去れない、何處やらに熱した血が流れて居るやうて少女の作としては寧ろ歡迎すべきものであらう（選者評）

○花咲雪

津市　松尾花子

（一）

東北三縣の飢饉救護の爲、今宵有志者の發起で此花園座に慈善音樂會が開かれたのであつた。

東山誠は今しもふらりと此劇場から現はれたが彼は此地の小學校に音樂の敎師として崢々たる物であるので矢張同じく演奏者として招かれたので、

「あゝ、宜い月だ……」

思はず空を仰いだ彼はかう獨語ちた。

誠や、瑠璃の樣に晴れた空にはちぎれ雲のをり〳〵物うそうに流れる計り、やゝ西に傾いた十日の月も冱えに冱えて、神の秘事や囁く星の影もきら〳〵と今にも降つて來そう、何處かで遠く犬の吠ゆる聲が聞える。

「それはそうと、もう何時だらう？」

東に折れて石橋を渡つた時又かう呟き乍ら色褪せた洋服のポッケットを探つて大きな懷中時計を取り出し、

「おゝ、もう九時だ」

思ひ付いた樣に足を早めて絃歌洩れ來る高樓を放れて東に、暫く畦路を辿つて漸くに瀟洒な己が家に入つて行つた。

（二）

手早く木綿の衣服と更めた彼はいそ〳〵と妻が病室に入つて行く。

「美保さん、今歸つたよ」

今迄燈火の影も暗き所にうつら〳〵と夢みて居た妻は、驚いた樣に細う目を開けると夫が枕邊に座つて居る。

「おや、御歸りで御座いますか？」

美保子は重そうに顏しかめ乍ら起上らうとするので。

「いや御前は起きなくても宜い、御母さんわ？」

「あの、昨夜の疲で次の室でもう寐みましたが……」

「おゝ、そうかそれならば宜しい。今夜は却々面白かつたぞ……」微笑み乍ら、

「美保さんにも出來るならば聽かせたかつたね」

今更にやつれた妻の姿に見入り乍ら思はずほろりとする。美保子も強て微笑みつゝ、

「そうでしようね私も何なら……」

「いや其身では諦めて置くさ。而し私が奏つたのが案外て乘が囃し立てたには赤面した位さ……」

「そう、嬉しいわねえ」

此時、不意に喝と計り咽せ入るので誠は驚いて背に廻つたが、さすり乍ら、

「大分話したのが惡かつたんだね。」漸く靜まつて、

「いえそうじやないんですけれど。貴郎濟みませんが私にも其曲聞かして下さいな」

誠は快よく諾つて次の書齋から明笛を取出しながら、やをら歌口濕しつ「花吹雪」の譜を奏し初める。緩く急く高く低く優しい音は玉を瑠璃盤上に轉ばするが如く、聞く身の美保子は思はずしのび泣き乍ら夫の手を固く握つた。

「貴郎、免して下さいな」はら〳〵と涙を落し乍ら。

「その樣な御技量が有り乍ら此田舍に住まつて居て下さるは皆私の此肺病からですわ。貴郎御願ですから私に關はずに出京して下さい、ね、ね、」只咽び泣く。

「又初まつた、美保さんそんな話しはもう止そうじやないか、御母さんが御目醒になるから、ねえ」

氣強く慰め乍らも目は濕むで其手は何時か美保子の痩せた手を握つて居た。

夫婦の愛情も一通りはうなづかれる、近頃好んで小說中に肺病を持出す樣な傾向もあるが、家庭小說に肺病がつきものゝやうになつても、面白くないから、少しは外の病氣にした方が宜しからう（選者評）

編輯局選　はがき文

特別第二賞

○今年の御褒美

羽前　みわ子

妾が試驗に優等點を取るといつもお父樣から御褒美を戴きます。尋常科から高等科へ上る時は京人形とお針道具、一年の時は病の爲め貰ひ兼ね、二年の時が言海一部にばらの簪、今年は褒美に女學校に入て戴くの。

最後の御褒美はお嫁樣に。

特別第三賞

○青蛙

石川縣鶴來町 力の五十四　白峯ゆき子

濃綠淺綠滴るゝ計りの後園の樹蔭露を含める朝靄の風涼しく葉洩の旭は金色をゆらめかし昨夕釣捨しハンモックには青蛙二ッ三ッ我もの顏にゆられて居る。

筆端に若葉の香あり。

天

○前庭

肥前　みどり

萩垣の裏門を入つて一面苔むしたお庭を飛石づたい左に折れて築山に登れば赤き鳥井が有る、石燈籠は羅漢柏の下に而して右を下ればつゞじ植たる奧庭に、左は山吹垣のお池の側つくばいは厚皮香の下。

あづまやに入りて女子文壇を讀む。

地

○孝子

小田原　久風

私の家は小さな酒屋、毎日夕方になりますと六才位な少女が身にはつゞれをまとふて「お父ちやんのお酒を頂戴」つて來ますの、私何となく可愛いのでいつも此子には澤山やります。

いつもお孃さんに。

人

○妾の務

安藝　千鳥

お父様のお口髯を剃るのは私の職務なので其の度毎に幾程注意しても必ず一二個所は傷つけますのよすると、お父さまがね、「芳子に剃らせると根本的に剃るから容易伸びない」と云つて笑はれます。

御自分の眉は根本的に剃り給ふな。

秀逸

○我が希望　京都Ｔ生

人と生るれば、何れは死なねばなりませぬ。私はいつ死でもさしつかへない、至極安樂な身ですが只一つの望は自分の力でよむ事の出來る書物を皆よんで、それから死にたう御座います。

朝聞夕死。

○烟　筑前渡みつ子

飯焚く烟、菜煮る烟、豆煮る烟、炭燒く烟、紅葉焚く烟、藻汐やく烟、汽船の烟、火山の烟、野を燒く烟、嗚呼、今にも思ひ起して悲しきは花子さんの逝かれし時の只一片の野邊の烟。

東京は砲兵工廠の烟。

○風　相摸ゆたか

沖の眞帆片帆孕ませて送る、春風の懇さは言ずもあれ鬼風頼む春風頼むてふ、凧揚げの童にのみ便與へて、樂む姿の羽子を飛ばし、さては紅の裳を飜へさんとすさりとは餘りに罪ぞかし、心して吹けよ風。

馬耳東風。

○渡し船　八王子乙幡秀江

渡船に乘つた時、船中を見渡した處、商人、大工、旅僧、職女、農夫ありて其の風俗の變りたる者一時は船中に集りたれど、船岸に着するや其人思ふ處に歩を進めて散亂す、私し思ふ學校の卒業後は是れに等しきか。

更に學校を出ても、第二の渡し船に乘るのみ。

○軍旗　京橋香子

陸軍大歡迎會の時、軍旗を見た妾わ、此旗もやはり私達の爲に、かたちもわからなくなるまで日本國の、ためになつたかと、思ふと妾は我知ず、涙を、こぼしたのです。

冥せよ、聯隊旗。

○凶作地の小學校　磐城雙葉波子

一ケ月後の今日、又調べて見たのに欠席生、辨當持たざるもの、此寒いのに足袋もはかざるもの、學用品の持たざるもの、女子のバテン製工業に従事するものの多くなつたこと。

僅に金六拾圓なれど誌友の志也。

○嬉しかつた事　和歌山　森本かう子

待ちに待ちたる成績品展覽會も今日となり勇ましく會場に行き自分が七日餘りも心を苦しめ力限りに編みて出せし寫眞掛はいかにと思つて第一着に美術品の所を見しに最良と明かに書いた札網膜に映じた時のうれしさ。

誰が姿をや掛る。

○私の空想　猪の津ゆり子

私の望は決して美味を食たい美はしい衣服を着たいと云のではありません又繍繪や板額の樣に力持になりたいと云ふのでもない只私は強男の子を百人程産みたいそして皆それ〳〵ナポレオンの樣な世界の英雄に教育したいのです。

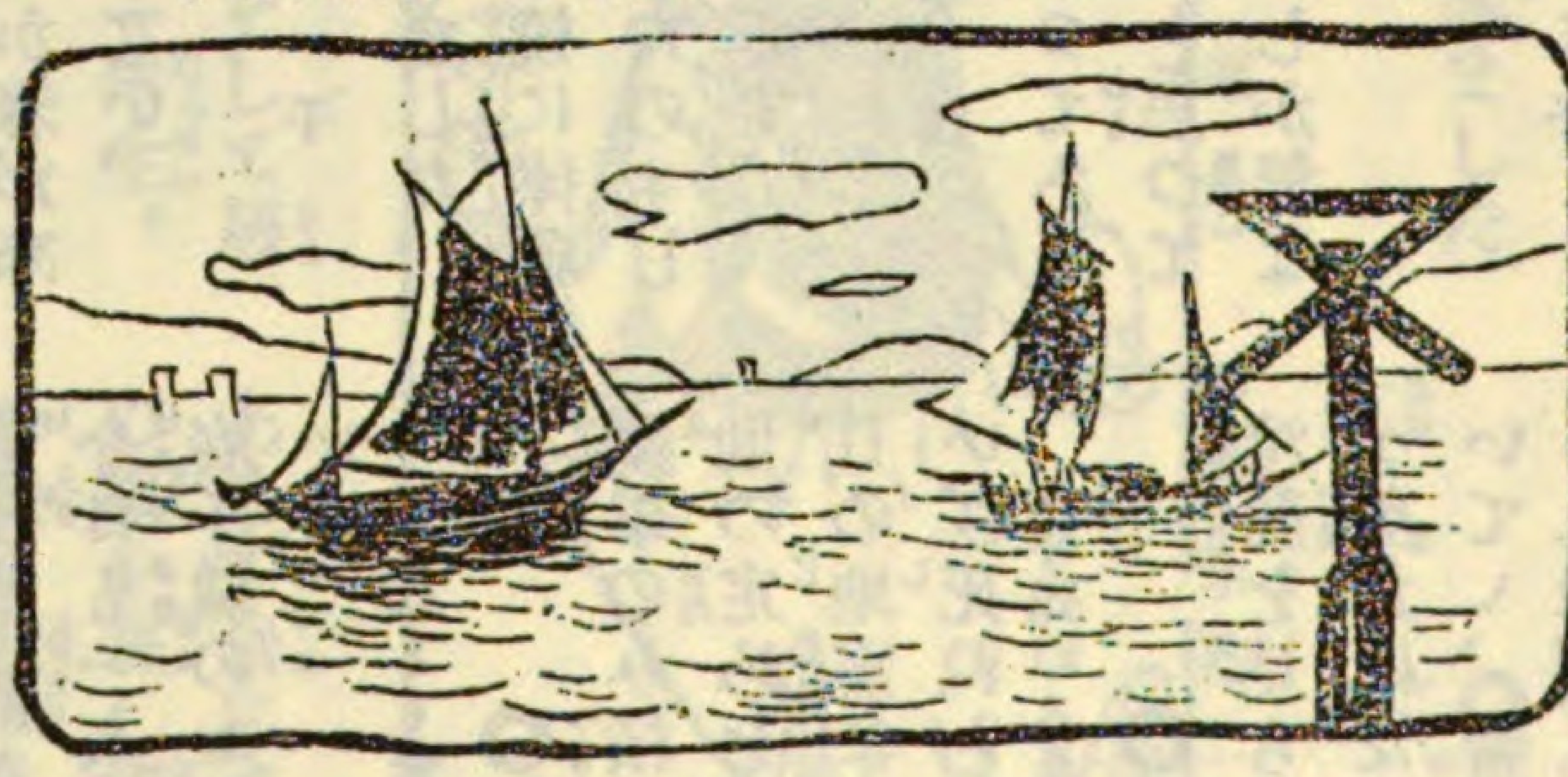
身體がお丈夫と見えますナ。

○家庭の感化　備中　ゆかり子

小い子等四五人柳の下でま丶事の最中です不意に花ちやんと云ふ子が、私質を入れにゆくよ、あなた質屋になつて頂戴と云ふたのです、花ちやんは六つお家は貧しいので御座います。私は家庭の感化におどろきました。

駿ヶ橋に幼稚園の必要あり。

阪越港　（選外）　播磨赤穗　高谷はな子



○姉さん　信濃　中島いちゑ

妾の家は村中一番平和な始終陽氣な家でした、だけど一番働く一人限りの姉さんが東京へ行くと云ふ遺書を置いて行つてからは、皆氣が沈んで終つて淋しい家庭になつて、…噫！　妾は何處へも行かずに孝行しよう。

さうなさい。

○栗　羽前　梅月

私の家に一本の栗の木があります昨年は大變になりましたところが双子の栗が大變澤山有りますのでなんてまあ此樣だらうと申して居りました所が此度うちの姉さんにくり〳〵とした男の双子が生れました。

人生の一面は滑稽なり。

○櫻御殿　埼玉　大野こと子

遠く望めば一團の白氣湧出するかと疑はれ近く見れば高樓遙か奧に萬朶の櫻は今を盛と五萬餘坪の園に燎爛たり。正門固く鎖されて人聲年久しく絶えぬ。傳へいふ夜な〳〵怪しの聲を聞くと。此處櫻御殿。

一條のお家騷動あり。

○父さん　信州　わかば

太平洋のはこの美しい燕黒島に居る燕も春が來ると故郷へ戻つて來て樂しく子供を育てるけれども父さんばかしは何して歸つて來て下さらないのだらうか春が來ても秋が來てもそよ吹く風のたよりもなさらない。

太平洋よりも遠き海は何處。

○結婚後　筑前　春子

夫は婚禮後直ちに東京高等工業學校にまいりました、妾は内に居て老たる父母の守りの傍或學校に奉職して居りますが御兩親の健に御座のと夫からたのもしいたよりの來のとて覺ず勵むものは仕事なのです。

遠くて近きは男女の道。

○水菜　大阪　西端芳枝

姉様が此度お歸りになるからと思つて畑に作つてあつた水菜成だけ好いのを殘して、姉様に差上樣と思つて居つたのに、今朝方見れば大切な水菜はいつしか無なつて、土だけ凸凹になつて居る。

水菜は關西語、東京では京菜と云ふ。

○燒跡　栃木　若林とよ子

可懷しき友の病めるを見舞はむと、日曜待ちて訪づれしに、家は數日前類燒せりとて、丈高う杉檜の半ば枯れ果てあたり寂しきが中に、小さき家は建てられぬ。哀れ、妾が友はこの中に。

丙午の歳は火事多しとかや。

○春子樣へ　尾張　井口登代子

春子樣、あなたの大好きなお庭の山櫻がよく咲いてよ、今日も一人であの櫻の下にたつて居ますと、かすかに春子樣のお聲がきこえたのよ、春子樣は御きげん好いの。

それとも鶯の聲か。

○死　小田原　三四

憂事のみ積り樂しき事とては無き妾の身餘り拙なき浮世の定めを恨わび幾度か死をはかりけんさるに過にし日の地震には一番に胸をとゞろかせつゝ飛出しぬあゝいざ死ぬとなりては。

今死ぬる身にも恐ろし犬の聲。

○きまり惡かつた時　陸前　八崎りん子

泣顏を見られた時と、往來でお友達かと思つて他の人へ聲かけた時、若き男子方に聲かけられた時と路を歩いてゝ、帶のとけて皆に調戯われた時。

十三四才のきまりわるさ。

○深呼吸　信濃　紫美女史

天の岩戸のあけ初むる頃、妾は例の通り千曲川の邊りに龍が岩の頂に立つて深呼吸をする、と、今自分の口か

ら流れ出た息が次第々々と天に登つて、山から山、月から月、星から星と、はては宇宙を一つにこめた。

同じ着想が嘗て本誌のハガキ文にあつたから必しも新しくない。

○想ふた事　　西都　竹　雨　子

ポン、ポン、ヽヽヽハイ——下女が飛んで來ました一寸腕車を、こんな樣に暮して見たい。

妙。

○硝子窓　　岩代　松山薔薇

て、僅か一寸四方の硝子窓よりみゆるものは何、庭木、堤、里、野邊、川、靈山、雲、空、はては自然の景、宇宙の美。

人間の眼は一寸を出でず。

○述懐　　肥前　さゝ波

私が小學で同じクラスのお友だち、或人は大學の英文科に、或は已に女學校卒業生、おそくも今は四年生、そして級中の才媛とよばれた私は、田舎の女子師範の一年生。

他日、女子高師の優等生。

○四夫婦　　德島　玉　緒

妾の村に今年百一歳になる翁さんがある、ごく健全で畑に鍬を持つて働いて居るが、其子が八十歳、孫が五十八歳、孫の子が三十九歳て、其子が十八歳て今年嫁をもらつたが、八十歳の子の夫婦以下四夫婦あるが、實にお芽出たいと羨ましがつて居る。

自註に曰く、實際なりと。



つみ草（選外）　神戸　水越たつ子

○黄昏の神　　常陸　酒葉良子

紅、黄、樺、紫、其の他色々の美しい御衣を着けた神樣が、西のみ空から現はれまして、今迄眞白な富士山を紫色に染めて、そして錦の御袖にお日樣を包んで行つてしまいました。

小さきお伽ばなし。

○敎を求む　　芝　小野綠子

吾が落ちし失望の谷は如何に深きぞ前後左右皆突兀たる岩、絶壁として立つのみ、登るべき道あらず岩にすがらんか岩碎けて落つ草に力を得んか草の根や殘し何によりて希望の山にいたらんか情に富める友よ敎へてよ。

谷を攀ぢんとする者は幾度も道を變へよ。

○朝の勤め　　下總　武田たき子

妾の家の父上は四時が打つて起て朝戸を開け次に母樣

と妾が起き母樣は飯と茶の仕度をいたし妾は雑巾がけ弟はそれから起きて庭を掃き終れば皆なで團居して御日樣の出ないうち朝餉をすますのが常です。

入時に垂んとし起出づる余の如きもの、一讀して背汗三斗。

○よく似てるもの　芝　潁川とき子

活潑と亂暴、自由と我儘、注意と小言、用心と臆病、柔和と病身、經濟と吝嗇、進物と賄賂、夫れから西洋人の鬚と蜀黍の毛。

借問す、寫眞で拜見した潁川さんの、お小さい時と今とは。

○下女の日記　兵庫　柳田白百合子

昨日奥樣から頂戴した月給二圓の内例の如く一圓を父樣のお酒の代に差上十錢で女子文壇を買ひ四十錢を今月のお小使に殘金五十錢は銀行へあづける處だが輕少で恥かしいけど喜捨金募集の女子文壇社へ送つた。

奥樣、却つて義捐せず。

○わたしの望み　岩代　丹治はるみ子

春は花の咲かない、夏は暑くなく、秋は淋しくない、冬は寒くない國にせめては少くとも三年許り住んで見たい。

三年は何處から割出した勘定てせう。

○悲？喜？　因幡　みどり子

人はたゞ嬉しいと許り云ふ、妾は嬉しいとも悲しいとも云ふことの出來ん一日がある。それは、妾の誕生日であり、母の祥月命日である三月三日、雛のお節句の日。

御挨拶にも困る。

○春　大和　坂上きぬえ子

私は春ですが、私の行く所はどこでも、すみれさんや、なたねさんや、櫻さん等は美う御けしやうをし、鶯さんや、雲雀さんは、それは〳〵面白い、お歌を、うたうて、お迎ひに、來てくれてよ。

才氣あり。

○私の一家　伊勢　一翠女史

父は村長、母は婦人會の幹事、そして弟は小士官て、妾は小學教師。私の一家はかう夫々盡すべき義務があるのです。

○わがまゝもの　廣島　桐流月

私は座敷に居れば襖のたて縮りのわるひのが氣にかゝり、臺所へ行けばお釜お鍋のふたのねぢれが氣になる、外出してかへれば着物の塵拂に二十分、いつも母樣から、其なに我儘ては世は渡れませんと。

○試驗前　筑後　宮本はつの

朝も早く晩も遲く迄さらひ父上母上から早く寢よと云はれては漸く床につき、けれど何かに氣にかかり母上今ちよつと其本をと、すかして見うつらうつら眠につけば毎晩同じ試驗の夢ばかり。

○逃たる目白　上毛　新井すみれ女

私しの弟が昨日梅の木へ止つた目白を刺うとして拔足刺足忍び行よく狙ひ竿を送ると目白は驚いて何處へか飛びさつた竿に附たのわ梅の花ばかり弟は心惡るげにぼんやりと梅の木を見つめて居た。

○越の雪　上野　佐藤静江

三日三夜降り續きし雪は今朝やみぬ、目につくは松のみ、家は皆棟のみわづかに見へ、道も小川も、丘も野も、田も畑も、一面の雪の野、埋沒せる家三棟死二人ありしとのこと、今しも汽車は雪中に立ち往生せり。

○汽車の中　横濱　野菊子

後には田舍者が大聲して話をして居る、右隣は凱旋兵がしきりに戰爭談をして居る、左隣は男女學生が英語交りて人のうわさをいふて居る、前は一番端が商人風次が母樣窓の近くに小頭のはげた老人、ピカリ太陽の光線が。

○大嫌　下谷　伊庭いそ子

私の一番きらいなものは地震雷火事と下駄の齒の減つたのと爪の延びたのと口中のくさいのと猫と犬と道を歩いてじつと顏を見られるのと袴のひだのくづれたのが何より大きらいですわ。

○當惑　土屋葦々栄女史

久し振りで去年逝かれし愛君の墓所を掃除旁參詣に四歲の妹を連れて行くと「愛樣は此所に何して居るの」と問ふから「眠って居らつしやるのよ」と答へた。「土の中は何時までも夜が明ないの」と質問された時私は當惑した。

○朝　宮城　秀月子

目がさめたは六時過、白梅かほる小窓をそと押せば、パッとまばゆき日の光、最早太陽は東の山を一尺餘も放れた、そして金色の征矢を四方に射てにつこりされた氣高さ、思はず仰いで頭が下つた。

○春の寺　紀伊　淑子

讀本のおさらいをしてからペチをつれて御寺へ遊びに行きました、石川五衛門の手植だと云ふ紅白咲分けの椿の大木の下に古筵をしいて一人の若い女乞食が三味線をひいて居りました、どこの人でしよう。

○春の夕ぐれ　土佐　田内つる喜

一羽の雲雀が大空高く舞ひ上つたが、やがて雲にかくれて聲ばかり、三五の月はひな歌の節面白く家路に歸る若き農夫の鍬にかゝつた。

○鶯　大阪　勝野敏子

或朝庭に出て見ると、昨夜の嵐に梅の花は殘りなく散らされてあつた、此時一羽の鶯、今日も梅を尋ねて來たが、ほう、の聲を出し懸けて直何處へか行つてしまうた。

○極彩色　兵庫　富士田章子

椽端で庭木の寫生をしてゐると、突如垣の外で「まー可愛らしい」といふ聲がするので、一寸手を休めて向ふを見ると、お祝ひに出すのであらう、極彩色のお振袖を着た七ッ八ッの愛らしい娘を鼻高々と、母親が連れて行くのであつた。

○寫生　八王子　乙幡秀江

一日寫生を企て寫生具辨當を用意して、先づ目ざす田舍へ步を進め、四五枚の寫生したれど思はしからず、尙ほ行きて橋の袂に村童の群遊せるを見る、是れこそ能きスケッチ、歸宅後は直に女子文壇に投稿せん。

○芝居　長崎　林房子

鶴ちゃんは今芝居の觸れ事聞いて歸つて來た、峰子はさつき乾した双紙を取りに行かふとして裏庭にでると「姉ちゃん何處へいらつしやるの」「あの、双紙」「御母ちゃん姉ちゃんは芝居見に御出るってよ」

○春の夢　福岡　白仁玉子

菊子さん、芳子さん、靜子さん、濤子さんと、二三の學友を誘ひ會ひ、朝早う何處ともなしに出掛けた、すると、ふとした處に櫻花爛熳、はつと思たら突然夢は破れた、すると、床上植木鉢の櫻は二三輪咲いて居た。

○彌生ちやん　秋田　KR生

私とお隣の彌生ちやんとは赤坊の時からお友達で、學校へ通ふにも遊びに行くにも嘗て一人行く事はなかッたのよ……アお友達に鶯鶯と謂はれて居つた、突然、お嫁に行つたので私口惜くつて淚が出てよ。

○桃　石川　八幡むら子

聲音優しき快樂の唄をしるべに來て見れば、女神のちぶさによりそいて、靜かに眠る稚兒がごとき桃の花咲く窓に少女機織れり、おゝ少女よ、誰に見せむとて結びし髮ぞおゝ少女よ、誰が衣を織れる笑みながら。

○お返事　沼津　八代美代子

大山大將から拜領のお菓子を兄さんへ送る時、あまり箱が立派故、實は上ます箱は妾に下さい、と書て上たら僕は箱より中實がほしいよ、是から何でも中は僕ので空はおまへのとしよう、と御返事が來た。

○無邪氣　赤坂　吉村まき子

長き夜の徒然に、家内一同火鉢打圍みつゝ、種々話の末、今年六才になれる妹に、「ちーさんは何處へ御嫁に行くの」と問へば、「私れあの運動會に」とあゝ此の無邪氣なる言葉、我は思はず彼の頬に接吻した。

○美術學校入學の友へ　秋田　たゞし子

御熱望の達せられて御目出度う。御愧かしい事よ妾のみは丸髷姿に、陽神は幸多き御身の爲に寫生の幕を今に開いて下さるのよ。君健かに歸とり給へや。夏休みにはブックの中に丸髷の姿をも。

○分らぬもの　津　翠香女史

政事的時事論と云ふ字の解釋、剽竊する人の心、女子文壇記者先生のお顔、の東京の有樣、人の賢なるを、ねたむ人の心、人の行末と、幾億年を經ての地球の有樣。

○いやな羽織　水戸　山口更月

私の一番きらいの縞おめしの羽織を、お母さんが持て來て「花ちやん寒いから之を着なさい」「いゝえ、少っとも寒かなくってよハックショッー」

○田舍の生活　秋田　鈴木ひさ子

私は遠く都を離れた片田舍の土百姓です、朝は早く父と鍬を擔いで出て、蝶や雲雀を友とし、畑中で樂み、晩は月を戴き、小川で足を濯いで歸り、暗い燈の下で、親子笑話しつ麥飯を食べて、一日の勞を慰めます。

○たから　加賀　三井棠園

妾の財布に今一厘錢が殘つてゐるあゝ此錢や實に富に誇れる人の手より餓たる孤兒の手へ投げ渡された事もあつたろう御祭の時田舍の乙女が清い心を捧げて賽錢ばこの中へ納めたこともあつたろう。

○梅　陸奥　しらゆき子

姉樣が御病氣でいらつしやるので何か御花を御目にかけたいといつも思つてるが今は雪ふりの最中何處に何の花があらう？　けれど私は窓の梅がまだ蕾かたいのに毎日々々溫い息をかけては眺めてる。

○姉樣　肥前　慧子

今日學校でお友達に、姉樣とお仲よしの淸子樣の御縁談を聞いたから歸つて姉樣におきかせしてよろこばして上げやうと急いで歸校つて姉樣に申したら「そう」とおつしやつたなり横をむいておしまつた。

○妹ののぞみ　備後　白菊子

今年六ツの妹に、欲しい物は何と問へば赤いリボンと、ごむの手毬と美しい繪本と、赤い鼻緒のコッポリと、大きな人形と、それからお隣の芳ちやん方のやうなお母樣、とがほしいと、まあ、いじらしい事。

○今の世　青山　原雪溪

東歐の風止んで東亞の雨となり、今又西歐の風雲急なるを傳ふ。殺人？ストライキは到る處に行はる。時三郎、男三郎の輩は續出して、世は益々暗々裡に葬られんとす、全能の主の臨り玉ふる日は、果して何時!?!

○佐保姫　靜岡　姫百合子

いとも崇高きみ炎姿の嚴めしく天降り給へる佐保姫の君。奇しき彩雲の御笠戴きて霞の衣纒ひ給ひ長閑なる花の褥にましまして美妙なる自然の音樂を緣深き春のみ空に奏て給ふ。

○遊びにおいて下さい　筑前　大塚松子

皆樣よ！　お驚きな玉ひそ、妾が住家は、天地の中間、すべてゞある。大平洋などは其池で、築山の最も高きを、「エベレスト」と名づけ、而して、天國や極樂は、妾の別莊であります故、皆樣よ、遊びにおいて下さい。

○病氣　美濃　木村竹雨子

妾は人から見られると極壯健な樣、足も達者、氣も達者、悲しき事には生れつかない不具者、昨年から病室住ひの身となつたつらさ。

○妾は孤兒　北見　だんすい子

お隣りの蝶子さんは琴は大變好きであるそして毎夜妹に歌はして自分が曲を合せるのである、妾は姉妹なして琴を弦ても誰も歌ふて呉れる人はな

い、あゝ姉妹があるならと思ふて眞實に羨ましいのよ。

○家づと　石狩　白菊女

今日は殊に寒いのに背負ふて出た薪木も悉皆り賣て、歸途についた時の嬉しさ、疲れ果た足も急がれてお酒二合病みます父上に、半紙一帖と鮭一本弟への家づとゝした。

○あはれ母上　平子ゆき子

始めて乗つた二人引をあやうく降りて其の儘病室に飛込めば殆んど昏睡せる母上はあはや注射の一分時の生命に妾の歸郷を待ち受たのである唯驚いて枕邊に兩手をつけば微かに笑んで「立派な人になつておくれよ」

○思出　京都　照子

朝の運動は、いつも吉田の山、今日も積る雪を履み分け登りましたが、愛宕の山にたなびく、朝霧の絶間より、故郷の空を眺め、思はずも、玉の露て枯葉の雪を溶かしました。あゝ今日は母樣の七七日！

○無學　播磨　せい女

私は今夜も投稿を書かうと、机に向ひましたが少しも想は浮ばず、出るものはあくびと溜息ばかり、つく〴〵我身の愚かさを悔んで居ますと、パッとランプの火が消えて四邊物凄き闇となりました。

○雲　小石川　近藤愛香

青い雲と白い雲、青い雲がよいか、白い雲がよいか、同じ雲でも妾は白い雲よ、白い雲、どうしてネ、分つて居ますア、我が儘氣儘に空を飛ぶぢやありませんか。

○白梅　茨城　中西芳子

妾の庭には白梅があります未だ蕾がかたい頃から毎朝起ると直に息吹してやりました其が此の二三日暖かなので吹き初めました其色が餘に清く冷たくて神の世の物とも思はれる程妾は紅筆でそつと彩つてやつた。

○特待生に　小石川　佐川貞子

机上はいつもより賑華で若梅を生けた花瓶の傍に貼つた規定に今朝も六時に起きた。英語の習も終つて今日は文壇を御へ作文の稽古明日は理化に讀書其翌日は算術に歷史よ。まだ今年も特待生にと思へば獨り習もなかなか樂しいのよ。

○田園生活　飛驒　田舍乙女

私に二人の親友がありますの、一人は東都へ。一人は中京へ、物學びに參りましたので私獨殘されて毎日泣き通して居りましたが、此頃漸やく光明を認めまして田園生活と決めました。

○五年忌　小樽　京戸春子

今日は御祖母樣の五年忌で夫れはそれは眩がするほど忙しいです然し蔭張進まないで御祖母樣が御出の時可愛がつて下すた事など思ひだしたら急に悲しくなりました。



はなの里（選外）　岡山　柴田菅子

○水車　佐賀　渚小舟

都會に居ますお孃樣方は、水車々々と、詩の國りてても、あるかの樣に、仰せられますが、噫恐しいこと、昨日も若き國民一人、無慘に敷き殺しました。

○妾の弟　淺草　柿沼かれ子

世の中に兄弟ほど善いものは無いと申しますが妾の弟には困つてしまひます、何か云ふと妾より大きな躰でけんかしかけるのですもの、たまりませんわ。

○困つた春　高尾山　のぶ子

私の方で山仕事を業とする細民は今年の樣に雪や雨ばかり降つて居ては實に困る「あゝ今年はよく〳〵貧乏人泣せの年だ」と云つて皆くよ〳〵とこぼして居る。

○忘れた　府下　坂本貞子

御母さん家の時計は二十五分進んで居てよと云ひつゝ床に付きました翌朝起きたら八時十分驚て學校へ行きましたら未だ八時十分前。

○雪　廣島　一少子

妾が文机に向ひ、何氣なく、外を眺めて居ますと、小さい小さい雪がちらちらと降つて居ます、お隣りの主人は布哇へ稼ぎに行かれるので、見送りの人々と出てられる、その後にお内儀さんが、三つになる兒を負ふて泣く〳〵見送つてをられます。

○田舍者　山形　たか子

山出しのお三日く、奥樣！　東京つて山形よりまだ廣い賑かな所で御座いますつて？

○山百合　秋田　一少女

一日……舊城に登る。不圖見付けたのは美しい山百合であつた。そこで叮嚀に根から堀り。家に持ち歸り。庭に植ゑ付けました。毎日其花に通つて居りましたが。悲哉……大雨の爲め。次第々々に。枯れ始めた。

○男子　廣島　風露女

男の方は何故彼樣に無情なのでせうね？　女にはやれ操を守らぬの再婚をしたの何のと云ておいてて御自分は奥樣が亡なられると直後妻を貰て平氣だもの少しは男の方も操を守たら如何ですか。

○古き井戶　牛込　本多しげ子

井桁は已に朽ちはて、側には苔むした柄杓と閼伽桶一つ、上よりは蔽ひ被さる樣に椿が、花は小さひが澤山咲いて居る、やがて白いのがぽちりと落ち、庵には思ひ出した樣御經が始まつた、午になつたのであろう。

○二人の愛　高知　岡村田鶴子

咲き笑ふ花の香を受けて、靑々とした麥畑の中で若き夫婦が樂しげに語ひ乍ら働いて居る、他目も羨やましそう、而も彼等が手入れして居る靑麥の稔る頃は、二人の手に愛らしいベビーが、抱かれる事であろう！。

○肌着　岩代　服部貞子

「オヽ肩の凝つたこと……母樣の肌着にとメレンスのはし切もて、はぎ合せた肌着の、數も丁度お年の數ほどの六十。今度だけはまあ若い者のくせに肩が凝るなんて……とお笑ひもなさるまい。

○何故　愛知　棃清女史

東京の諸孃の詩文が當選されると私口惜しくつて〳〵。たまらないのでつひこんなものがと。もしも當地の人が出るともう嬉しくつて〳〵はなされないのよ、何故でせう。

○山ぶみの歸り　京都　秋山すゞ蘭

妾は今山麓美姫村指して下山しつゝ、越し路の暗黑に陰れて名も恐ろしき帶取池に付き、老僕與作が物語る神話の樣な昔語をいぶかり乍ら、ふと見上れば銀鎌の夕月樹梢に懸つて亦千古を語る樣。

○蝶々　堺　しぐれ

彌生の花野を、十二三の少女子が、すみれか何かの、小さな花を持つて、『虫に生れた蝶々でさへも、好きな花へと』と細う高う『飛んで行く〳〵』と遠くまで響て。

○燕の巣　奈良　津崎玉子

秋の內へいつのまにか燕が巣を作つて毎日々々出て行たり還いつたり、中々忙がしくして居る、子を可愛がつていつも餌をさがしに行つては歸つて食べさせてゐる、書齋で作文をして居ると窓の外へ來てチク〳〵と囀ずる。

○水滴　播磨　久子

雪のちら〳〵降る寒い日でありました、先生のお宅で平家物語の宇治川の先陣の處を聞いて居ますと、先生はしきりに鼻の音をさせるので、そつとお顏を見ますと、お髭の中を水滴が。

watch has stopped.

B. It is just half past five by my watch, and we shall be in Numadzu within a few minutes.

A. Must we change car there?

B. We were told so.

A. What a nuisance! If we did not miss the ten o'clock train last night, we might be somewhere near Shizuoka by this time.

B. For my part, I am glad that I took this late train, or else we should have had to stand all the way down to Nagoya. But here we have plenty of room, even to lie down if we wish.

A. You are so good to see the bright side of every thing.

B. Oh, just look! How beautiful Mount Fuji is!

A. Indeed! Does not the morning light fall very softly on the snow?

B. See how a white band of cloud encircles the top.

A. We can enjoy the mountain from the station while we wait for the train.

B. Are you not glad now that we missed the train last night?

の懐中時計は止まりました.

乙. 私のでは丁度五時半で御座います. もう直ぐに沼津に着きます。

甲. 其處で乘替へをしなければなりませんの?

乙. 左樣だそうで御座います.

甲. 本當に面倒で御座います事. 若し昨夜十時の夜汽車に乘後れなければ, 今頃はもう靜岡附近に居りますものを

乙. 私から申すと. 私は後の汽車に乘つたのを却て喜んで居ります. マー左も無ければ, 名古屋まで, 立ち續けて居らなければならなかつたかも知れません. 此の汽車なれば, 横になり度ければ足を伸ばす場處も充分に御座いますから。

甲. 貴女は, 何時も何事に依らず好い方面計り御覽に成ります。

乙. 一寸, マー御覽遊ばせ. 富士山が何んと綺麗でしよう.

甲. 本當に. 明方の光がほんのりと雪に當つて居るではありませんか.

乙. 白雲の輪が頂上を卷いて居る處を一寸御覽なさい.

甲. 乘替の汽車を待つ間, 停車場で富士見をして樂しみましよう。

乙. サー, 昨夜乘後れたのを今は却て御喜びではありませんか。

summer thoughts can pour into them. Light again, leaf again, life again, love again.

But a summer in which the sun shall blaze fiercely down, and dry up the happy, roaring torrent beds, and leave our land a withered and desolate place is like those men who are daily selling their souls for gold on the exchange and ruining their fair name in the theatre and the saloon, and like, those women whose only care is to have their names in the public print and whose only auxiety is for the body what they shall put on. On the other hand earnest workmen, generous employers, honest tradesmen, honorable politicians, truth-loving teachers, fearless preachers, upright administrators are like the summer whose sun shall bless all life of plant or animal or man on which his genial warmth falls. The summer is coming. What manner of summer shall it be?

Mc Fadyen.

In the Train.

A. What time is it now? My

す. 如斯にして光明, 青葉, 活氣, 愛情は回復すなり。

然れども熱天鑠地以て大河急流の水源を涸らしめ, 蒼林を變して荒野の形態を持ち來たすの夏は之を何に譬へんや. 之即ち相場にて金錢の利を以て彼等の靈生を賣り, 演劇, 酒舗にて己が家名を瀆がす男子の如く, 或は新聞紙上に己が姓名の掲載をのみ冀ひ, 何を身に纒はんを以て日々最大の懸念憂慮となす女子の如し.

是に反して熱誠ある勞働者, 豪俠なる雇主, 正直の商人, 廉潔の政事家, 眞理を慕ふ教師, 剛毅の說教者, 高節の行政者は恰もかの植物, 禽獸, 人類の差別なく萬物に其恩澤を施し以て成育繁茂をきたすの夏の如し。夏は既に近づけり. 其夏や如何なる夏ならん?

車中にて

甲. 今何時て御座いますか. 私

Ceaseless aspiring,
Ceaseless content,
Darkness or sunshine
Thy element;

Glorious fountain!
Let my heart be
Fresh, changeful, constant,
Upward like thee!

Lowell.

The Summer is Nigh.

The air is trembling with the prophecy of summer. Any day you may see the buds burst; you may almost watch them grow from hour to hour. Hope and joy and dawning life are everywhere around. Winter has changed to spring, and spring, we know, will change to summer. We see deep into the glory of the heavens above and the earth beneath. Our hearts thrill in glad response to the changing majesty of the seasons. While the earth remaineth, seedtime and harvest, summer and winter, shall not cease, this melting of the spring into summer brings thoughts of hope, and our poor hearts need all the gladness that

闇に日向に
斷間なく
稱へて昇るは
汝が氣質。

雄々しき噴水
我をして
高潔，進取，
堅實に
昇らしめてよ．汝がごとく！

夏は近づけり

夏の前兆既に空中に滿てり．日毎に芳葉の發芽を視て，刻一刻彼等の生成を知るの感あり．希望，歡樂，活氣，吾人の周圍にあらざる處なし。嚴冬去つて一陽來復，春又綠蔭の夏に化せんは當然の理也。仰いで蒼天の宏壯視，伏しては地上の光榮を知る．斯くて我等の心は四季變遷の精嚴巧妙に感應して雀躍たり。凡そ地球の存在せん限りは播種，收穫の期は繼續し夏と春とは絕えざるべし．此の春の夏に化せんの期は常に希望を人心に回想せしめて止まず，而して吾人の寂寥たる心情，夏てふ思慕の注がん限りの希望と喜樂とを要

女子文壇第二卷

英　文

津田梅子閲　河井道子述

The Fountain.

Into the sunshine,
Full of the light,
Leaping and flashing
From morn till night!

Into the moonlight,
Whiter than snow,
Waving so flower-like
When the winds flow!

Into the starlight,
Rushing in spray,
Happy at midnight,
Happy by day!

Ever in motion,
Blithesome and cheery,
Still climbing heavenward,
Never aweary;

Glad of all weathers
Still seeming best,
Upward or downward
Motion thy rest;

噴水

輝く日光
身に浴びて
終日踏りつ
閃きつ。

雪より白き
月影に
花かと紛ふ
風吹けば。

星の光に
水烟(キリ)立てゝ
眞晝も夜半も
樂しめり。

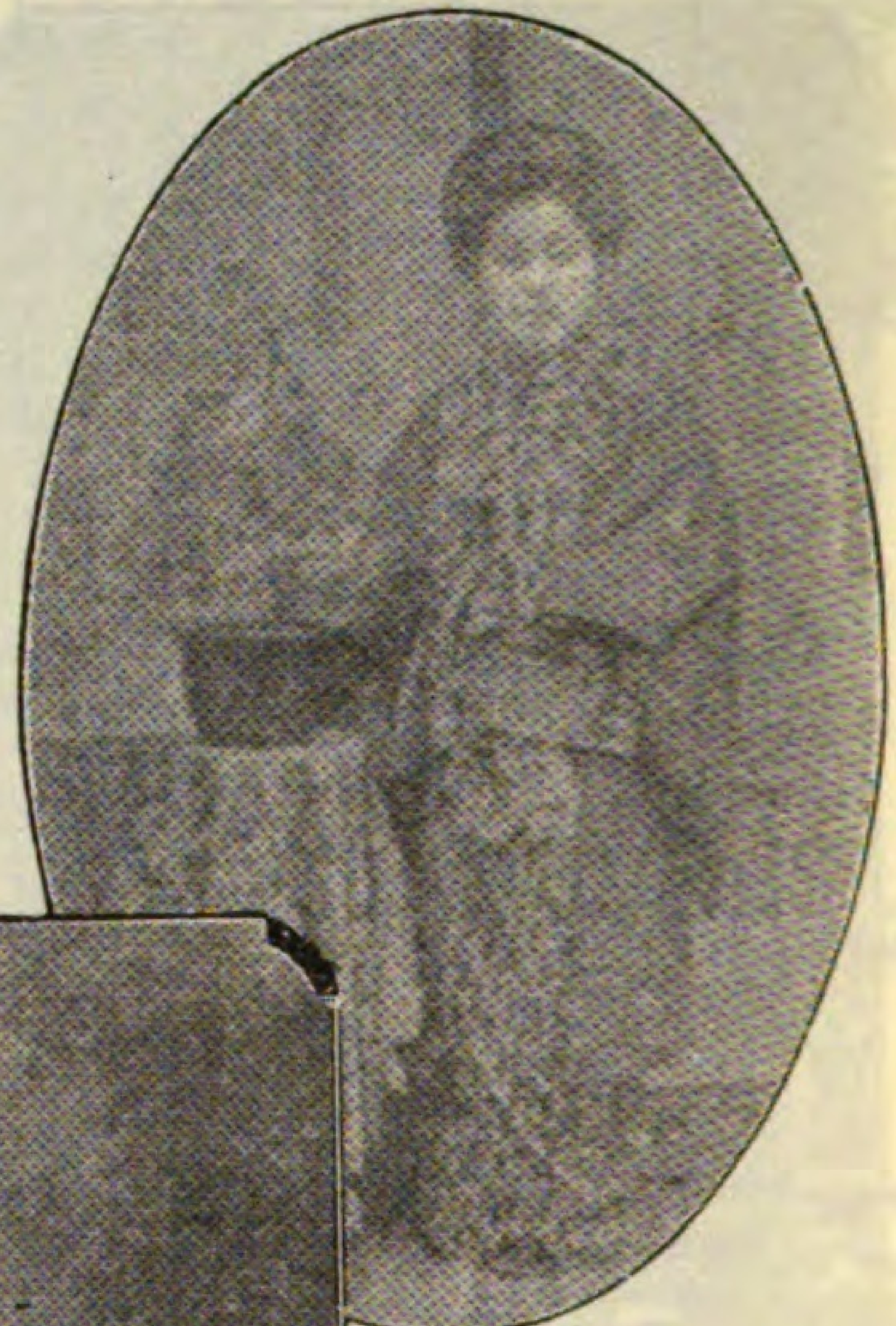
絶えず休まで
爽活(サワヤカ)に
天指し昇る,
倦みもせで。

吹くも暴るゝも
謝して受く,
汝が靜止には
活氣あり。

誌友おもかげ（其四）



備後　福本惠子君



埼玉　山口邦子君



秋田　（左）高橋はつ子君
（右）若林きつ子君

備後　小林衛法君





岩代　後藤久子君
弟　竹雄君

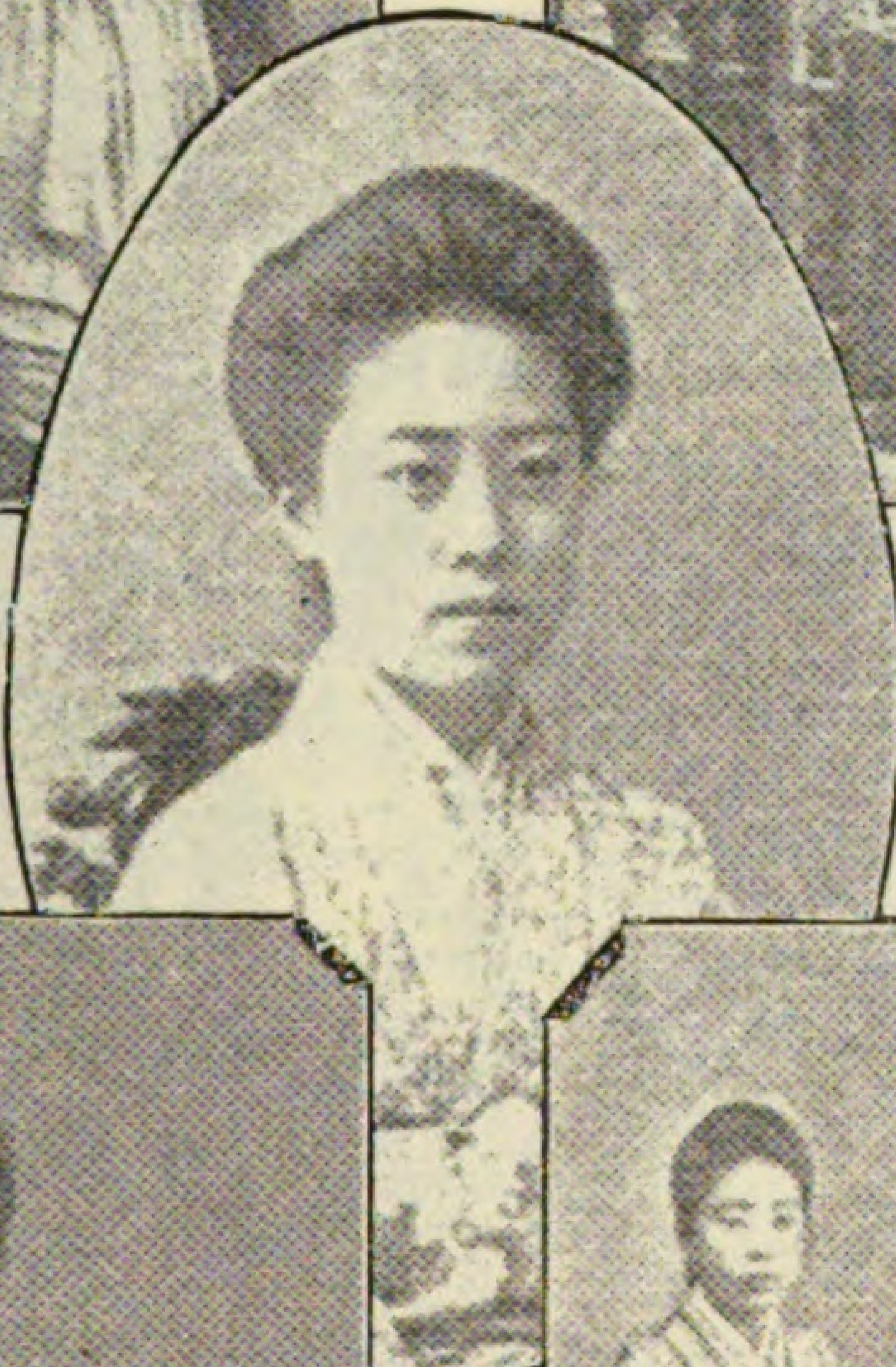
誌友おもかげ（其五）



讃岐 （左）藤森ふさ子君
（右）香川千重子君



岩代 渡邊みわ子君



京都 濱部郭公君



韓國 小國敏子君



鹿島 （左）上野はる子君
（右）森 とみ子君

誌友倶樂部

▲御覽なさい！

▲誌友倶樂部は何時も原稿が餘つて載せ切れないやうな事になりますが折角の通信を、餘り遲くなるのもお氣の毒だと思ひ、紙面の許す限りは載せて居りますが諸孃も何卒公徳上、原稿は短く願ひます。

▲繪ハガキ交換の如きも成る可くなら二十一字二行に書いて頂きたい、已むを得ぬ條件のあるものに限り二行以上になつてもよろしいが普通二行にしたいと思ひます、それで二行の分は書式も左の通りにします。

○東京京橋區大鋸町十一　女子文壇社内櫻野はな子（萬國繪葉書の交換を望む詩歌記載の事）

▲繪ハガキ交換の外に寫眞、編物と造花の交換欄を新設します、いろ〳〵の交換を一つに望まずに、成る可く別々に望んで下さい、原稿整理上、餘りいろ〳〵の望を一つに書いたのは沒書します。

▲終りに臨んでます〳〵誌友倶樂部の賑やかにならんことを祈ります誌友諸孃、幸に御健全に御勉强なさい。

▲卒業式寫眞＝都下有名女學校の卒業式の寫眞は本號には頁を增して揭載しましたが尙ほ澤山集つて居る分は來る十五日の增刊「たちばな月」にも同樣口繪として挿入いたします。

○我が愛讀書（課題）

○　伊勢　竹村操子

「聖書」、喜につけ悲につけ、救の主の深き愛には唯、感謝の涙あるのみ。「萬葉集、古今集」、四時折々の自然をうたひし、古人の思想に憧がれて。

○　本郷　豐子

私の愛讀書は、落合先生の「國文讀本」よ、「十六夜日記」などは、やさしくて大好です。

○　函館　月香女

私の現在にも未來にも愛讀する書物は「聖書」で御座います、其は大能の神樣が色々な敎や、又聖き人々を通して神の御言葉が記して御座います、私が其を讀みますと、リボンも他家の令孃が着たりはいたりする美衣も望みません、又仇も憎いと思ひません、私常に讀みます所は馬太傳五六章で御座います。

○　秋田　B K生

愛讀書は机の右に「紅葉全集」と「青春」と三十九年度の當用日記のみ。

○　本郷　山崎義子

小説では「不如歸」と「乳姉妹」どちらも妾は大好きです浪子さんの夫を思ふ情は洵に妾たちの手本ともなるべきです乳姉妹の房江樣も自身の戀をすてたなど同情すべき事が澤山ございます又「伯爵夫人」と「思出之記」もすきです。

○　金澤　みのる

雜誌外ですきなものは、理化學書數學書です、私は以上の書籍をよむとよく母樣に、しかられます、それは、本をよんだからではなくて、お尻が重くなるからであります。

○　四谷　成瀨愛興

餘暇に愛讀する妾の本は三種あります少し古本て、文章の材に大町先生の「女學生訓」文學的にも妾の樣なおてんば者の敎育にもなり升。

○　常陸　香坂雪子

妾の最も愛する本は伊藤銀月氏の「日本海賊史」木村鷹太郎樣の譯されたバイロンの「海賊」及奴之助氏の「海賊大王」等です。

○　滋賀　辰井琴瑤

第一詩集「塔影」は淡雅なる點に於て「金帆」は清新なる點に於て「春鳥集」は幽婉靈活なる點に於て「耶蘇の戀」は詞藻遒麗なる點に於て「夏花少女」は絢爛なる點に於て「悲戀悲歌」は幽遠なる點に於て「二十五絃」は冥想的なる點に於て「戀衣」は奔放なる點に於て「舞姫」は才華煥發璧光渾然たる點に於て「藤村詩集」は溫籍なる點に於て各之を愛す而して愛讀措かざるは舞姫戀衣悲戀悲歌春鳥集最も厭な詩集は露伴の「はつしほ」

○　芝　ときこ

妾は日々敎科書を愛讀して居ます、夫れから、「家庭憲法」著者は津田房之助の君。

○　盛岡　江刺家つや子

「即興詩人」のアントニオの生涯が美しくつて愛讀します。

○　磐城　誰謡

私は蓮如上人樣の御述べなされた「御文章」と云ふ本を愛讀翫味致して居る者で有ります其の理由と云ふても別に深い意味あつての事でも無いが私の如き愚痴をこぼし腹を立てやすきよこし

まの心のみち／＼てある者に取りましては此の有難き書物を眼に透すと煩惱も沈まり精神の修養ともなる好讀書でありますから皆樣にも御すゝめ申ます。

○　　矢　　名

「不如歸」を讀みて浪子に泣き「金色夜叉」を見ては貫一に同情をよせる私ですもの…噓と御思召すか知れないけれど實際「不如歸」十六回「金色夜叉」五回反復したの殊に春雨作の「無果花」は私半生の最大福音で常に敬慕してゐ其他紀行文俳文逍遙氏の「かぐや姫」。

○　　備後　　順　　子

私が常に愛讀してる書は落合直文氏編「女子國語讀本」大橋乙羽君著「紀行文集」「馬琴傑作集」之は最も好讀の書です其外大町先生著の「きゞく白ぎく」大和田建樹先生著「雪月花」「歷史字典」此外にもまだ／＼ありますがかゝれません尾道の書店には一寸もありません故借りて讀んで居ます。

○　　美濃　　中島　よし子

尋常科卒業したばかりの土百姓の娘ですもの愛讀書なんて、何にもありませんわ、お笑ひ下さるな、強ゐて擧ぐれば小波著「お伽噺」「裁縫敎授書」「雁のゆきかい」「十二ヶ月料理法」「園藝叢書」「懸賞文集」「父母と子供」こんなものです。

○　　名古屋　　たか子

妾は草村北星先生著の「露子夫人」を一番愛讀しました一人なのなぜつて云へばれー妾の姉さんの境遇に丁度そつくりなの……。

○　　秋田　　B　N　生

田舍に住んで居る妾の愛讀書たる者は、面白き者計り左の通り？金港堂の「戀のなやみ」「ハイカラ競」「二人孤兒」「一夜夫婦」春陽堂の「魔風戀風」「金色夜叉」「黑裝束」「多情多恨」「天うつ浪」「英米十三年」誠之堂の「普通婚姻論」弦齋著の「食道樂」博文館の「深山櫻」「新式速算法」「紅葉全集」「裁縫と編物」「女學生の栞」貴社の「懸賞文集」。

○　　越後　　上野志摩子

本年二月隣家燒失の時、早くも懷中へ入れて、馳せ出した一と包みは村井弦齋著の「食道樂」でした。

○　　相摸　　若　葉　子

私は未だ年も若い故書は多く讀みませんが、三輪田眞佐子女史著の「女子の本分」「處世論」小說では木下尙江著の「火の柱」蘆花の「思ひ出の記」西洋のでは「噫無情」「小公子」などです。

○　　土佐　　弘光芳子

現在の愛讀書は高等小學校第二年級敎科書「孝經」及び「小學外篇」で將來の愛讀書は「論語」「文章軌範」です是は兄上よりの御訣を聞き理想として居ます。

○　　下野　　梅　月　子

我が愛讀書は「新約全書」である實に此書は學生として一日たりとも机上に缺くべからざる好書である何ぜかと云ふに我々の如き山郷苦勉學の身であれば吾が身心に堪へ難き心苦勞は度々あるのであるかゝる時に此好書を一讀すれば忽ちに「イエス」樣がお引受け下され給ふのである。

○　　東京　　花　江　子

不束な妾に是と云ふ愛讀書はありませんが桂月さんの何々訓や蘇峰さんの國民叢書や小說では「女夫波」「乳姉妹」「不如歸」を見たばかりで至つて讀書眼の卑いはした女です、折々武香陸頭の寮歌集を繙きますが唱歌本が大好きですが詩集はきらいです。

○　　岡山　　中野玉子

まだ澤山書物を讀んだ事のない妾で元より外國の書などは解しないですが、獨逸の大詩家シルレルの詩を譯した詩歌集は最も愛讀して居まして、妾の机の上には常に飾つて妾のまづい思想を高めて下さいまして有難く思ひます、又ゲーテのも好きです。

○　　岡山　　中野波子

妾が讀みし書多きそが中にて法華の宗祖日蓮の偉業を記したる書こそいとも愛して讀む書なれ、上人の業の壯大、心の豪勇、古今を通じ、東西にならびなき英傑をよくも表はしたる哉。

○　　本鄕　　照　子

我愛讀せる書は古き物にて式部の物語、納言の草紙、新しき物にて蘆花の「不如歸」、一葉の「一葉全集」、晶子の「亂髮」「小扇」。

○　　香川　　松永茂子

妾の愛讀書は美文集、詩集、歌集、紀行文、お話等色々あります。

○　　佐賀　　東島　たか子

書物の中にて、一ばん好な書は、地理本です、高等小學になつたはじめに地理を習ひましたが性旅行好の私此時より、一層旅行を好み、天氣よき日などは、心あひの友打つれだちて、花咲

く野邊鳥歌ふ山に、小旅行をなしゝ事も、度々ですよ、私は旅行好であるから地理が好いてゐるが地理を好てゐるから旅行好であるか、我身では分りません。

○　北總　野菊女史

我が最も愛讀する本は「文章軌範」です妾は小學校を卒え女學校に入らんとては片山氏より無之然ればとて遠く笈を負ふの資もなければ其節より晝は田畑に行き夜は青燈の下に兄上に敎り古人の作りし文を讀が第一です若々しき小說は大嫌ひです。

○　名古屋　林田糸子

妾の最も愛讀する本は國府操子女史の著した「貴女の栞」が一番好きよ。

○　小石川　なゝし子

妾十五の年から今日迄四年間坐右を離さず愛讀して居る書は只「バイブル」のみ、妾にとりては此本は生命です、妾は之に由て救はれ之に由て生き之に由て步む事が出來るのです、あゝ煩悶苦痛の時或は虛榮心ムラ〳〵と起る時妾が眼一度之に投ぜば玆より無限の慰藉を得て無限の快味を覺えます故に妾は終生此書を離さない覺悟です。

○　岩手　森　三光女史

妾、本を澤山持ちませんから、蔵く申すことは出來ませんが、文學書では、文學士大町桂月先生の著が、妾如きものには、解り易くつて面白くて、知らず〳〵讀む氣になります、小說では村井弦齋著「小猫」それから花袋の「ふるさと」妾二三度も繰り返して見ます。

○　羽後　菅原花枝

總ての蔵書中尤も愛讀するものは、加藤咄堂著「冥想論」木下尙江著「良人の自白」久保天隨譯「エルテル」等です。冥想論に曰く「身は明窓淨几の下にありて心は遠く白雲流水の間に遊び云々」と冥想の必用と快感とはこの書によりて與えられた賜物！。愛なき結婚により演出せられし一場の悲劇と社會主義の痛快なる他の及ばない同情を引くのは小說「良人の自白」でせう。若きエルテルに於ける社會の束縛と良心の攻めにより世にもいとしきロッテの君を捨てしは原著者詩聖ゲーテなるを…あゝ多情多感なる境遇の生み出せる詩！かゝる詩に接してはどうして泣かずに居られませう、私は讀んでは泣き、泣いては樂むのです。

○　伊賀　桔梗花

妾の最も好む書は國語でありまして落合直文先生の御著しになりましたのでありますが故は我國古有の言語を研究したいからであります。

○　金山䑓　紫女史

妾の愛讀書は小杉天外の「魔風戀風」なのよ、理由つて別にありはしないわ、シンパシイに富んだ夏本京吾の親切とチヤーフレンドの芳江が厚意とに對する萩原初野の心中が哀れだわ。

○　羽後　もみぢ

私は紅葉先生の「金色夜叉」鏡花先生の「風流線」「黑百合」柳浪先生の「あやめ草」「仇と仇」を愛讀致します金色夜叉には立派な數へがふくまれて居ると思ひます風流線黑ゆり共に何となく永がく忘れる事出來ませんあやめ草のおあや仇と仇の八千代どちらも私の理想に近い女です。

○　豐後　堀芳子

私の第一なる愛讀書は私等が使用して居る「博物敎科書」であります著者は理學博士齋田功太郞先生ですこぶる趣味があります其上智識が付きます第二は美當一調氏の著したる軍談の書物で實戰を目擊するが如くありて誠に面白くあります。

○　尾道　小林御法

妾はすききらいと申す事がありません哀な文が一等好きで小說はあの「ほとゝぎす」で其の中でも浪さんが「良人早く歸つて頂戴」と云ふ所は幾度讀むか知りませんそれから「多武峰少將物語」を愛讀いたします。

○　津市　山田ひさ子

私の愛讀して居るのはバイブルです、今丁度ポーロの章を讀むで居ますが、どれだけ有益で且面白いでしよう、私は皆さんにお勸め申したい、小說でも讀まれる時間を此の一頁なりとも讀むのに割かれん事を。

○　山城　繁松敏子

私は何でも愛讀しますが「明治和歌集」と村井弦齋著の「食道樂」が、何より面白く有ります、每日每日一度は必ず獨稽古して樂しんで居ます。

○　大和　坂上みどり

私は、きらいな本とては、一つもありませぬが、中にも小說が、最も好きです「不如歸」とか「已が罪」とか、「魔風戀風」など。

○　福井　ともゑ姬

妾はなんでも書と云ふ書あらゆるもの讀む事は

皆好きですが一番「聖書」が好きてどんな悲しいつらい事が有つてもどんなに失望した事が有つても神のめぐみによつて救はれますから次は誰の作でもかまいません詩集が好きてす讀んで見ても悲しい時なんかはなんだか自分に同情を寄せる樣にも思はれます。

○新課題

△お國自慢（五月五日締切）

△委細は前號に在り

△好きな人嫌ひな人（六月五日締切）

△何う言ふ人が嫌ひで、何う言ふ人が好きであると考へを主として書いても宜しく、斯う言ふ人が好きて、あゝ言ふ人が嫌ひであると、人を主として書いても宜しい△實際にある人でもかまひません△何う言ふ點が好き嫌ひの處か、其點を明かに書く事も必要です△好き嫌ひは擧動にも由り容貌にも由り又は言行にも由り性質にも由る、夫等の點を簡單明瞭に認められたい△原稿は半紙を用ひ七行以內とす、其他は凡て前の課題にならつて下さい。

○諸嬢と記者

○記者さん誠に馬鹿なことを御尋ねしますが投書しますのに自分の名前を記者樣だけに御知らせ申したい時には狀袋へくわしく私の名をかいて原稿へ雅號をかいたらよろしいのですかどうか御答へ下さひ（ゆかり女史）（記者曰、原稿のかたすみへ別に小さくお書き下さるのが一番よろしい）○記者樣私は去年の三月から御誌を愛讀して居りますしかし私はまだ高等小學を卒業したばかりの小供てすから諸姉方のお仲間入はてきません後日御世話になることもあるてせうから其時は宜しく御願致します（岩代五十嵐のぶ子）（記者曰、他日の大成を祈ります御勉强なさい）○記者樣お耻かしう御座いますが妾不明てこまりますから何卒御敎へ下さい爲替は幾錢より取扱ができるの壹圓以下でも取扱ができますか又小爲替の區別を御知らせ下さい（一少女より）（記者曰、小爲替は五圓以下、何錢からでも扱ひます）○記者樣妾は何か投書したいと思ひましても思ふ樣には出來ないので上ないで居りましたが此度からは差上升から左に付いて御敎示を願ひ升葉書文は葉書でいゝてすか又小說は一題を上下として二卷へ投書していゝてしようか（水戶在、白梅）（記者曰、ハガキ文はハガキでもよろしい、小說は一回讀み切りに限ります）○記者樣に一寸お伺ひ申上ます御多忙中何共恐れ入りますが原稿が十枚二十枚或は其れ以上の多數を出します時は開封にして何錢位で宜しうございますか封筒に入りませんときは如何して出すのてございましやうかお敎へ下さいまし次號て（女子文壇愛讀少女）（記者曰、二十枚位なら二錢てよろしい、三十匁まで二錢てす、封筒に入らなければ、半紙て包めばよろしい）○記者樣文章をよく作らんと思つたらどうしても多作にあるもので御座いませうか又多讀にあるもので御座いませうか誠に申し兼ねますが御伺ひ申します（記者曰、讀むは多きを妨げず作るは少きを厭はず）○記者先生に一寸うかゞひます、閭鑑は其の土地の風俗としてある事ならなんでもよいてすか次號で御敎を願ひます（上總秋葉ふみ子）（記者曰、風俗に限らず何でもよろしい）○記者先生私しは投書を始めてしました是れて投稿規則通りになつてゐますか此欄で敎へてください（德島富田紙藏町笹川方齋藤菊子）（記者曰、宜しうござり升）○私は女子文壇が來るとすぐ一ばん先に卷尾の誌友倶樂部を開きますがいつも記者樣の御親切の御敎授には感心致して居ます不及ながら何か投稿して見たいと思ひまして書いて見ますけれど一向思ふ樣に出來ませんから悔しくなつてすぐ反古になしてしまつてゐましたしかしこれからは勉强して投書しようと思つてゐます佐賀縣の愛讀者は多いてせうかそれが心配てすどうか敎へて下さい（筑紫のはて文の舍）（記者曰、佐賀縣のお方と申した處が、そんなに澤山ありますまい、何うか御遠慮なさらずに作物をお出し下さい）○記者樣に一寸お尋ね申ます寫眞は當選者でなくても愛讀者てありさいすれば紙上に揭載して下されますか何卒次の誌上て御敎下さい（長野縣上水內郡柏原竹田湖水）（記者曰、愛讀者なら出します）○記者先生一寸お聞き致しますか必ず次號て知らして下さいれ當地のよい景色の寫眞を送りますから文壇に出して下さいませんか、（田舍紅葉）（記者曰、よければ出します）

○記者樣先達ては俳句御出し被下まして有難う御座ります又ちよい／＼投書させて頂きますからよろしく願ひます(品川小林野婦子)(記者曰、何うぞ御熱心に)○記者樣一寸伺ひますが原稿を誌友倶樂部のと同封にしては不可ないのですか又誌友倶樂部に出すのは何行ときめてないのですか何とぞお教へ下さいませ(臺北安藤直井子)(記者曰、同封でよろしい、行數は成る可く短く)○記者さん！妾の級では今度皆が相談しまして女子文壇をクラス全体が讀むことになりましたのそしたら先生も女子文壇なら讀むてよろしいといつて賛成して下さいました(大阪北區天神東四川村とし子)(記者曰、女子文壇愛讀クラス諸孃の健康と祝福を祈ります)○記者樣寫眞は愛讀者のでなければなりませんか小供の寫眞はいけますまゐか紙上でおこたへをお願ひ申上ます(すみれ女史)(記者曰、可愛らしいお子さんなら御送り下さい紙上へ載せます)○記者樣一月に投書いたしましたのは屆きましたでせうか、沒書は覺悟してなりますが、せめて誌友倶樂部へてもとたのしんで待つてなりましたがまだ出ませんので、實に心細う御座います(はる子)(記者曰、御もつともです、投稿は天井につかへる程澤山たまつて居りますから自然後れますが、お作が良ければ必ず出ます)○此度都合によつて、一志郡久居から、津へ轉居しましたから一寸記者樣に申上て置ますされば此迄に變りなく宜しく御願ひ申上、又私の見ぐるしい姿を御送り致さうと思ひますが、一枚しか有ませんが返して戴けますか、又變つたのを二枚送つても宜しいてすか(伊勢津竹村操子)(記者曰、一枚しか無い大切のお寫眞をお貸し下さる由、直ぐお返し致しますから何卒御送りを願ひたいです)○記者樣妾しは東京の兄樣より本誌を送つて頂きますが投書してよろしうムりますか、夫れとも直接の購讀でなくば投書する資格がありませんか御面倒でも御教示を願ひます(美濃國武儀郡神淵村大橋中島よし子)(記者曰、お兄い樣からお送りになつても、つまり愛讀者の方ですから、御投書は差支えありませんとも)○記者さんいつも澤山の文章や和歌ほんに御面倒てしようれえまあよく御世話して下さいますれあたし深く御禮申しますわ以後もよろしく御世話さまん願ひます(石見濱田三明糸子)(記者曰、澤山に來る程愉快てす、何うして面倒どころではありません)

◎諸孃の交際

○初めて繪葉書交換を望み又初めて皆樣の御熱心なるのに驚きました、誠に妾は申上ぐべき力もありません、そは父が突然去月廿九日東京であの世に旅立ちましたから一日より母と共に上京し昨十二日歸宅致しましたに皆樣の繪葉書が四十三枚ありました然し左樣に多くの寫眞は手許にありませんから只美しき葉書御送の御方に十三枚送りました又混雜中紛失せしものあるやも知れずそれて一寸之にて御詫申して置きます(佐賀古川久子)○誌友令孃諸君、何卒御交際を願ひます、又繪葉書交換も願ひます(大和吉野郡南芳野村島住中西芳子)○誌友の諸姉さま、私は父母は二人共健全になられるのですが姉兄妹弟はなく、淋しく會社の方へ勤務致して居る者ですから宜しく御交際下されい(神戸市兵庫大開通二丁目太田とし子)○繪葉書や寫眞の交換がいたしたいてす賛成の御方は送つて下さりませ必ず御返事はいたしますから但し男の御方は御斷り申します又諸孃樣でも雅號の方とは御交際いたしません。(淡路國津名郡物部村九五其浦たけ子)○長崎古川みさ子松岡漂子樣同市で御懷しう御座いますから御交際を願ひます又御遊びに居らつしやいませ(長崎市勝山町七野瀨あい子)○私は本誌の愛讀者ですがいつも此誌友倶樂部で皆樣方の御投書を拜見しましてなつかしく思ふて居りますどうか此後は御交際をして下ださい尚又繪はがきの交換も願ひます(大阪府西成郡中津村ノ內下三番和田九十郎方和田桃里)○私以前山梨縣東八代郡祝村に住居中は非常に御厚情を辱ふしました少々勉強の爲三月廿三日上京致しましたから其の後は御交換の繪葉書は拜見致しませず御答することが出來ませんから悪しからず御願ひ申します(東京澁谷にて內田政子)○此の間私が二三日不在の時越後の石黑樣から御手紙を下さいましたさうてすが如何したか見當りませんから恐入ますが今一度御住所御知らせ下さいましそれから栃木縣の愛讀諸孃方私も同縣の者てすどうぞ御交際を又他の諸孃方も願ひます(牛込區簞笥町二十二中村五郎方馬場あや子)○皆樣下手てすけれど間に研究して居りました繪が五六十枚溜まりました巾一尺五寸の丈は二尺位の唐紙てすお望みなら何なりと交換致しますから下名迄申越下さ

い但し畫は美人と花鳥斗りの日本畫で派は寫生の京都派で御座います（神戸市二之宮町四丁目六六德永みれ子）〇妾は豐後の別府へ入湯に行つて居ましたから交際も怠りがちでありましたが今後はき〳〵と文通致しますからお許し下さい（呉市北小原一四六武內文子）〇諸孃よ妾は始めからの愛讀者であります以後御交際をねえ又寫眞を下さるかたは妾のもさし上げますよ又富山市の小林よしえ子さん石童丸の歌と云ふのはどんなのですか妾は一つ知つて居りますのよ（尾道市土堂町郡役所前佐々木ますよ）〇滿天下の諸孃樣がた私は片山里にすむ、甚だ無學の者ですが玉章繪葉書の御交際を御賴致します（岩代郡山字十日町渡邊美和子）〇御なつかしき諸姉さま御手紙で御話が致しとうございます何卒御文御めぐみ下さいませ（神奈川縣横須賀中里角田うめ子）〇ゆかしい諸孃方のうちで繪葉書交換やお手紙のとりやりして御交際して下さる方はありませんか妾も屹度御返し致します又殊に寫眞など送つて下さる御方には妾の寫眞を送りまして御禮申します（京都府相樂郡加茂村字錢司五十三番石井己之助方石井文子）〇趣味ある繪はがきに俳詩若しくは和歌などをきれいに書いて下されし方々へは自製の拙きものなれど絹編みの栞を差上ますから御きゝとり下さいまし（秋田市楢山本横町庄司錦子）〇皆々樣御面倒ではありましようが御交際下さいませ、又繪葉書交換も！私は（神戸市楠町三丁目二四ノ一石井方石井愛子）〇私は琵琶湖畔に住む愚かもので御座いますが以後は宜敷、皆樣御不用の雜誌お持ちでしたら送つて下さいませんか、私も相當御禮は致しますから、又寫眞、栞等も、（近江國長濱町南船十一番地中山すて子）〇御姉上樣方よ私は誠に不束者で投書家では御座いませんが何卒御交り下さいませどうぞ繪葉書の御交りも御願ひ申上ます（和歌山縣那賀郡下神野岡本忠子）〇妾は皆樣と御交際するのを誠に何より喜ばしう存じますから何卒親しく玉章編物土地の雜誌風景寫眞等を、交換して頂戴な（名古屋市小島町七一淺野方たか子）〇誌友諸姉よ妾は今迄澁谷分院で傷病兵の看護に勤めてましたが此度救護解散になりましたので名古屋へ參りましたドーゾ相變らず御交際下さいな（名古屋糸子）〇妾は御料理好きで此頃新發明の食パン製法の書物を求めまして至て有益と思ひますから熱心の方に進呈します御望みの方は最も優美な繪葉書に和歌亦は俳句を書いて申込んで下さい但し三拾名限り（東京府北豐島郡巣鴨村池袋、村山權之亟方上野志摩子）〇私は下野の田舍に居りまして此の度初めて皆樣に紙上で御目にかゝりますどうか以後御文通を願ひます（下野大田原町大手通三宅敏子）〇皆樣妾は三度の御飯よりか繪の方がすきなのですどうか繪はがきや御自作の繪畫などを御送り下さいませな妾もすぐ御返事いたしますから（近江國蒲生郡玉緒村瓜生津那須勝子）〇皆樣私は女子文壇と、西も東も知らない樣なをさな子を友としてやるせなく日を送て居ります、御心の御有なさる方々何卒御交際を御願ひ申ます（信濃小縣郡西鹽田村小林蓮子）〇諸姉樣方度々御手紙下さいまして有難う此後も宜しく御願ひ申します（京都岡崎町滿願寺裏秋月清子）〇皆樣私はほん田舍ものです今年小學校を卒へて女子文壇を朝夕の友として居ります古書十五冊圖畫五十枚其の外繪葉書シヲリ寫眞等持つて居ります故御のぞみの御方は寫眞書物繪葉書シヲリ等各自交換致しませう先著の方には琴のつめ入り一個と外御望みの品を差上げます只先著の方拾名迄外五名迄蟬の腰さげに御望の品をそへて御送り申します（筑前若松堺町三丁目三六二陣トミ子）〇姉上樣何卒御交際御願ひ申上ます御寫眞繪端書の交換もして頂戴な（肥前國伊萬里町鎭西場大坪敏子）〇愛讀者諸孃樣何卒御交際下さいそれから台北の愛讀者皆樣に申ます妾此間の午後九時頃やむを得ぬ用事の爲一寸出ましたそのかへりにあるさびしい處を通りましたそこに書生風の人が居り妾をけがさんと致しましたから妾は大變と思ひ袖をふり切つてやう〳〵逃げました皆樣けつして〳〵夜はお出かけなさいますな（台北すみれ子）〇松尾花子樣下野きよ子樣坂口隆子樣福永美都子樣方私も同樣なる身でございます何とぞ御交り下さい皆樣にも御ねがひ致します（北海道渡島國龜田郡七飯村大字七飯官舍伊東錦子）〇皆樣私も本誌の愛讀者で時々投稿も致しますから失禮ですが御交際を願ます（品川新宿五五鈴木方小林のぶ子）〇愛讀者さんふつゝかな妾へも玉章繪葉書で御交際下さいませ先着者五名の方へは美くしい、リボンを一尺五寸づゝ差上ます、然し一時てきの交際はいやよ（備後福山東町矢野品子）〇賢明なる本誌御愛讀の諸孃樣へ御願申升妾は

奥羽の或る片田舎に住んで居る者ですが此度本誌愛讀者の一人となりましたから何卒御交際を願ひます（羽後國横手町七軒丁岩根政吉方前田久子）○皆樣！私も二卷一號から愛讀者となりましたから宜敷御交際を願ます（長門國豐浦郡長府村字黑門長井あや子）○皆樣！葉書にて和歌の交換を願ひます但しあまり御上手の御方、一度雜誌へ投書せし古きものは御免（長門國豐浦郡長府村字黑門、長井古琴女史）○おなつかしき姉上樣私は此度女子文壇愛讀者の御なかまに入れて頂きましたのですからよろしく御交際をなすつて下さいそうして玉章、御寫眞、繪葉書、栞などの御交換をして頂戴先着の御方へは私の寫眞を添へて相當の物で御返事致します（奈良縣宇陀郡松山町上新島田淸子同繁子）○雛子樣あなたよく愛讀者におなり下さいましたそれ〲こそ私も御紹介申たかひがあると云ふものです以後ふるつて好愛讀者好投書者となつて下さい尙ほ記者樣はじめ誌友諸孃の健康と幸福とを祈ります（上毛十九子）○皆樣妾しは北海のはなれ島に世をはかなく暮し居るものですから何卒玉章や繪葉書のお餘りを下さいな妾し早速御返事を上げます（北見國利尻郡沓形村水野蝶子）○誌友の皆樣折入つてお願ひ申します、妾誠に音樂趣味を有つて居ります、つきましては學び舍でお敎りになつてお出での詩的優味の歌一つ二つ葉書なり紙切れへなり寫してお送つ下さい、お禮はきつと致します（陸中和賀郡三光院森森子）○澁谷分院の林田糸子樣お懷しう御座いますお忘ても有ますまい去る年士官病室三の側に勤務して居る頃私を非常に御慈愛下すつたのは只今は片田舍て本誌を愛讀して居りますから無見捨御交際を又直接文通や御寫眞の交換なして下さいませんか（上野新田郡藪塚本町伏島雛子）○皆樣以後宜しく御交際を願ひます何卒新聞の交換をして下さい（豐後臼杵町園田重子）○妾ごときにも繪葉書あまた給はり、眞に心嬉しさ限りなくあつく御禮申します、尙相變りなう御交際あらんことを（廣島市天滿町北裏西川方玉川浪子）○皆樣妾も先々月より本誌の愛讀者になりましたから拙なき妾どもへも永久の御交際を給はらんことを尙給はがき寫眞の御交換を！妾よりも屹度かへします（廣島市天神町百二十一伴愛子）○本誌愛讀の姉上樣たちよ何卒今後は御見捨なく親密の御交際を願ひ升サヨナラ（上野新田郡太田町入町大沼方曉なみ子）○皆樣每度御手紙やゑはがきなど有難う、私ネもう直接文通は以後かたく御ことはり申ます併紙上では何卒したしく御交際願ひます、又ヱハガキ交換もよしますが本所の菰田瀧子樣御親切は有難うホントニ美しいのネ…（竹田光枝）○私も盛大なる女子文壇の愛讀者となりました下手ながらも投稿致します皆々樣宜敷御交際を願ひますまた私の畫いた繪葉書だの美しいのも澤山ありますから交換して下さい（茨城縣猿島郡境町藤沼佐久子）○あの皆樣御手紙下さいなやさしく書いてそれてないと無學な私にはわからないの、拙文でも屹度御返事いたしますから所は（若狹遠敷郡雲濱村反保方長谷川英尾）○誌友の皆樣！今度私は左記の處へ轉住いたしましたから鳥渡お知らせ申します（大阪南區空堀町江口千夏子）○やさしき誌友諸姉さまよ、秋は信濃の山里に侘しう暮してゐる者、皆さまの畫はがきや栞などを戴きたうございます、何卒御送りを願ます（信濃國下伊那郡大島小學校にて佐久良子）○親愛なる諸孃方よどうか御文通なすつて被下い拙い乍ら妾はきつと御返事を差上ますから（北海道後志國歌棄郡熱郛村字白井川小杉房代）○妾の居る處は福島の町から二里許り南にある極く山中の小學校であります每日花のやうな可愛らしい子供等を相手に樂しく嬉しく暮して居ります福島町に御出の際はお尋ねを願ひます（岩代國信夫郡平田第一高等小學校丹治はるみ子）○皆さん繪葉書栞編物押花交換願ひます（廣島縣高田郡甲立村深瀨見玉球子）○皆さんどうぞよろしく御交際を願ひますヱハガキや玉章や御寫眞などの御交換をなすつて下さい必ず御返事を致します（大和國宇野郡松山町上新岸田かず子）○やさしき諸孃樣お手紙や繪葉書やさうして御寫眞などの御交換をして下さいな妾きつとお返事を差上ますから（奈良縣宇陀郡松山町上新津崎玉子）○博學多才な諸孃樣妾も文壇の仲間入りをしましたから不惡御見しり合ひを（三池炭山の里木村千代子女史）○妾は田舍に住むでをりますので何も存じませんが不慣と思ふ諸姉樣方繪葉書の交換や御文通をして下さりませ（下總印旛郡臼井町角來兼坂重太郎方さく子）○皆樣面白い家庭小說御送り下さる御方へは不細工て御座いますけれど自製のハンカチーフ若くは狀さし寫眞ばさみなど御望みのもの御禮します（羽前小

松町竹内せん子）○皆様美しいカード繪ハカキ又は書簡寫眞抔の御交際を願ます其の代り奇麗な刺繍の栞を御送り致します模様は大略動物とか植物とか御申越下さい然し餘りむづかしい物は試驗後に送ります（仙臺市東四番丁泉田孝子）○妾の妹は高等小學校第四年なりしに去月四日拾五歳を一期として病死しました女子文壇愛讀者の諸姉あはれと思召さばはがき文なり新體詩なり歌なり俳句なりを葉書へなりと繪葉書へなりとしたゝめて送つて下されませんか御禮としては少國民學生倶樂部さくら青年世界等數部ござりますから差上ます（三重縣志摩郡立神村小林善五郎方小林敏江）○皆様私は語ろ御友達もなくまことにあはれなものでありますから繪端書や玉章等であはれな私を慰めてくださいな私はよろこんで御返事あげますから（千葉縣印旛郡富里村中澤山崎花子）○皆さんふつゝかな者ですが御仲間入りを願ひますつきましては繪葉書なり玉章なり寫眞なり其他何になりの御交換をなさつて下さい決して無法な事はいたしませんから是非御たのみだわ（千葉縣印旛郡富里村中澤相川雪子）

○繪葉書交換

○諸孃様私は畫圖に彩色したのを五十枚程持つて居ります故、繪葉書、編物、シチリ三種の内どちらでもおくつて下されば私も御送り致します又先著の方々五名には巾一尺長さ一間内外の掛繪にて、その畫は老木の梅で又一つは稻葉に螢のとまつて居るのでありますあと四十五名の御方には順々先著の方からよいのを差上げます（筑前若松堺町三丁目陣富子）○繪はがきの交換及びはがき又は手紙の交際を望む先着者二十名には雜誌を差上ます（麴町五丁目三森田方多田みの子）○諸姉様方私はまだ高等小學に通つて居る少女ですどうか私をお導き下さいそして繪葉書栞の交換を永遠にして下さいませすぐ送ります（京都市室町通り一條上ろ川原重野）○皆さん繪葉書交換なり文通なりして下さい妾喜んでどんなのにも直に御返事いたしますそして先着者十名に雜誌やシチリを御送りいたします（福島縣田村郡三春荒町村上榮子）○妾は平泉中尊寺の名勝繪はがき五枚一組五組ばかりありますが皆さん紀念の爲め自製の栞を送て下さい、したなら私も紀念の爲め送つて上げます（陸中一關一〇五淸野秋子）○親愛なる文壇愛讀の諸令姉よ有名なる神社佛閣の印影を葉書にして御送り下さる方はありませんか必らず御返楽は致しますす又美しき繪葉書の御交換もして下さい（岡山市南方三一三中野波子）○諸孃様よ妾は繪葉書が大好なのです何卒御交換を願ますすぐ御返し致ます（横濱郵便局私書函百四十七番鈴木操子）○愛讀者の皆さん繪葉書の御交換をなして下さい而して俳句とか和歌を書いて下さい（紀伊海草郡貴志村中牧野平三郎方岸みどり）○皆さん私は本年一月から本誌愛讀者となりました繪はがき交換致ますから下名の所まで（沖繩縣那覇區東龍琴子）○どうぞ私も上等の繪葉書交換して頂戴すぐにそれは〳〵よろしいので御返しいたしますかられ（肥後國八代高等女學校内櫻子）○今後諸姉の寫眞か繪葉書を交換致しませ

を妾も好いのを差上ますよ（山口縣柳井町尾上彌富音吉方ひで子）○繪葉書の交換を致したふ御座ります何卒御送り下さい妾自筆で御返事致しますよ（長崎市高野平八五本多柏葉子）○皆様繪葉書有難う御座います何うぞ今後も御變りなくどし〳〵御交換を切に御願致します（熊本市外島崎六一一平岡信子）○どうか皆様妾とも肉筆繪葉書の交換して下さい若し印刷のでしたら三錢以上位の者で皆様御願い申してよ（東京市芝區高輪臺町七福井方、栗田しづ子）○繪葉書交換大贊成で御座ります何卒私にも珍奇な繪葉書を御送り下さい先着者には「寫眞畫報」を呈します（神奈川青木二七二鈴木月恵）○繪はがきの交換寫眞の交換もして下さいお賴申ます（大阪松屋町内平野町北安藤文玉堂内ふじ子）○諸姉様御手紙繪端書御寫眞の御交換を願ひます私何時でゝよろこんで御かへし申ます（廣島縣双三郡八次村田邊白露子）○私は田舍もので繪はがきの交換を大に希望して居ります何卒皆様美しいのを送て下さい甲斐風景繪はがき「猿橋御嶽精進湖」其外いろ〳〵有りますから直ぐ様御返事いたします（甲斐國東八代郡右左口村笠井照子）○諸孃よ妾は栞其他の編物を集めて居ますが、此度栞又は他の編物を送られた五十名限りへ一々番號をつけて置て妾の年齡と同一のを一等として小說「伯爵夫人」を進呈しそれより前後へ二等二人は「文海」「連翹」を三等四名へ「女學世界」を四等十名へ「秀才文壇」を其他を五等として他の雜誌繪葉書を進呈致します（香川縣大川郡三本松町字北町松永あやめ子）○願くは美しき玉章並に繪

葉書御送附あられんことを乞ふ(熊本縣八代郡八代町字北小路山本のぶ子)○皆さまに繪葉書の交換を願ひます、併しあまりなんですから男の方はお斷り致します、粗末の品には失禮ながら答禮致しませむ、(牛込區築地町十九、河合方、翠野夢子)○諸姉さま私は友戀ふる片山里の一少女ですが以後よろしく御交際を願ひます、御寫眞や繪端書など何うか御送り下さいまし、私すぐさま差上げます(廣島縣双三郡八次村田邊白露子)○御約束の水戸名所寫眞は二十四名から申込がありましたけど先着者六名に上げましたの、後の方には返事を上げなかつた方もありますから一寸お知らせいたします(茨城縣水戸上市風露ノ下山田千代子)○私は田舍者で世にたよりない者でおりますが仕事の間に拵へたしをりや寫眞や繪葉書を何卒交換をして下さい(出雲飯石郡赤名後藤小雪)○皆さん繪葉書交換して下さいなきつと御返事さし上ますから御自筆でなくつてもよろしい事よ(府下品川新宿五五番地鈴木方小林のぶ子)○文壇愛讀の姉様方繪はがき及寫眞の交換を願ひます、(和歌山縣那賀郡粉河町増田露子)○繪はがきや御手紙の御交際もねがひます私は何時でもよろこんで御返事致します(本所中之郷竹町二十番地三森富士子)○諸姉様方私下關のほとりに住む一少女です以後末長く文通繪葉書の交際をお願ひ申します(下關市西南部町山本花子)○皆さん私も本誌の愛讀者の一人でありますが何卒繪はがき、寫眞の交換を願びます(本郷春木町一丁目十八番地中島綾子)○妾は只今編物を習つて居る處ですが諸姉の內御持ち合はせのお方はどうか惠んで下さいませんか妾はこれを手本として習ひとうございます御返禮は屹度致しますから(伊豫國喜多郡山鳥坂村宮脇朝香)○妾は本號より御仲間入を致しましたからどうか宜敷御交際をなして下されましな又繪葉書寫眞の交換も是非願ひます御送り下されました御方にはすぐ御答禮致します決して失禮の事は致しません(東京本郷區新花町卅九番地山崎方山崎義子)○繪はがき及び寫眞交換願ひます喜んで早速御返事致します上等て(駿河富士郡傳法村遠藤周太郎方平山榮子)○私、編物を集て居りますお送り下さつた方にはクリスマスカードを十人限り差上ます(備後福山町字西ノ宮下賀留藝氏方中尾愛子)○皆樣壇友として繪葉書の交換して頂戴(加賀鶴來町ヵ五四番三非方白峰ゆき子)○私も愛讀者ですが繪はがきの交換を願ひます(甲府市工町二丁目木內くに子)○皆樣どうか繪葉書の交換の仲間入をさして被下いましな私も景色や風俗繪をたくさん持て居りますが御望の方は下名まで(名古屋市東主税町太田つま方秀子)○皆樣繪はがきや文通を致したいですからどうか御交換を願ひます繪はがき送り下されたる御方には必ず耶馬溪繪はがきを以て送ります(豐前中津殿町服部秋子)○繪葉書の交換をおねがひ致しますそれから皆さんの內で伯爵夫人をおもちの方どうぞ妾に下さるわけに成ませんか臺灣の風ぞくだの其他色々の繪葉書をお送り申ます(臺灣臺北書院街六丁目廿四番戶地法法院官舍安藤元節方同直井)○皆さん繪はがきの交換を願ひます(紀伊海草郡宮前村中島島田芳子)○何卒宜しく御交際を願ひます又繪葉書の交換も願ひます(岩手縣盛岡市葺手町五番戶堀田安子)○妾しは北海のはなれ島に鷗を友に世をはかなく暮し居る不肖者ですが本誌の諸姉方よ哀れと思召さば繪葉書か書狀にてどし/\交際して下さいな下手ですが自家の繪葉書にて御返事を上げます(北海道北見利尻郡沓形村水野蝶子)○皆樣繪はがき有り難う妾は皆御返事を上げた積りですが届きましたか若し届きませぬなら御一報願ひます葉書は合計六百餘通ありました而して餘り多くて妾の兄さんから二百枚書ひて頂きました故若し男の手と御思召す御方は御安心爲さいまし(越後紫星女史)○舶來繪葉書の交換を切望致します、多くの方の如き不德は誓つて致しません、(境市櫛屋町鷲見かすみ)○妾は千葉縣ですが此度び帝都の女學校で學ぶことゝなりまして唯今下名の所に居ります愛讀諸孃樣は勿論千葉縣の人々と末長く交際致したう御座いますから、どうぞ繪葉書を送つて下さい着次第妾は順次返送致します(芝區新錢座町八番地鶴岡かつ子)○流行の繪葉書や玉章の交換大好きよ未だ友達が多くありません(神奈川縣高座郡田名村渡邊八重子)○繪葉書の交換を盛に致しませう、其れから皆樣、和歌、俳句、作文、何んでも半紙へ書いて御送り下さい先着の方には、つまらないのですが栞を差し上げます、(淺草清島町三竹田光枝)○本文壇の愛讀諸女が盛に繪葉書を交換されて居らるゝそうですが私も其の一人に入れていたゞきたいのですて繪葉書を送つて下さつた

御方には給壽なり他に色々な雜誌を御送呈いたします（兵庫縣淡路國津名郡洲本町細工町六十八番の八眞野大策方三山きし子）○私に繪はがき交換して下さつたお方が大變ありましたが實は妾の家が宅交へした時混雜した爲に不明になつたのがありますがそれは分明次第御返事さし上ますから諸姉樣何卒あしからず…左樣なら（新潟市小島ゆき子）○諸孃よ妾は自筆の繪はがきや寫眞の交換は最も好きです皆樣の內御のぞみの御方はどし〳〵送り下さいませうつしゑを送つて下さつた御方には四名先着へ妾のを差し上げます（千葉縣山武郡瑞穗村砂田秋葉ふみ子）○皆樣妾地理研究の爲め古切手の中にある消印中の國名分明したもの即ち武藏の東京とか薩摩の鹿兒島とか日本全國どこでもよろしい御送り下された御方に十枚に付繪葉書一組の割合て返禮致しますどうか御惠送下さい（青森縣西津輕鰺ヶ澤漁師町三宅嶺子）○繪はがき交かんを遊ばしてよ御望のお方にレースのしなりやあみ物をさし上ます繪はがきて御申込下さい（府下南多摩郡原町田、山村くに方山村とき子）○諸孃樣高尙な繪葉書へ詩、歌、俳、川、の內自作一首を染めて送つて下さい返信には先着者三名へ佛國製上等繪葉書三枚及び妾の寫眞一葉宛添へ尙他二十名樣へはがーた勳章紀念繪葉書一枚宛順次差上ます（芝區新錢座町八番地岩佐方鶴岡勝子）○妾れ栞を澤山持つてるのよ、諸姉樣の中てお望の方は繪葉書て申込んで下さい、先着十五名へは其外に、馬琴妙文集ムラサキ女學世界情の恐生なんな五冊女學講義六冊の中一册宛上げる但し六十名限（羽前西置賜郡小國町そめ屋方小澤あいの子）○本月中に寫眞寄贈のお方へは言海繪葉書（俳句を書く）寄贈のお方へは弦齋著女道樂抽籤にて差上ます落籤のお方へは舶來花鳥繪葉書にて一々お返し致します（紀伊國日高郡藤田村吉田阪本春松方喜久子宛）○妾大變繪葉書すき交換を願ひます（備中小田郡城見村大宜松浦千里）○諸孃よ見にくき妾の寫眞と皆樣の寫眞と御交換してください御禮は必ずします又繪葉書の交換は是非してください成丈良いのに何か書いて送つてよ、先着の御方には不出來なれど栞十八同りボン附四梅形のヒヤつき三ありますから差上ます尙洋磁を以て御返事致します（新潟市寄合町十番戸岩瀨方花野文子）○愛讀の諸姉樣每度繪葉書有り難ふ扱妾事この二三ヶ月の間は多忙の爲繪葉書交換中止、あしからず（武藏越生町字上野六四山口邦子）○皆樣御肉筆の繪葉書御交換下さいまし亦た御寫眞を御惠み下さいますれば雜誌類か書報等て御禮致します（福島市仲町二橋方、花野芳江）○諸姉樣繪葉書御交換を願ひます栞も（陸中一關大手先及川代志子）○皆樣繪葉書の交換又は文通をして下されましな又御寫眞の交換も致しませんか先着十名の御方には妾のカビネ形の寫眞と編物か文學書類かどちらかをつけて差上ます（東京市本鄕區新花町三十九番地山崎方山崎義子）○諸孃樣妾は片田舍に住むて居る極々つまらない者てすがどうか諸孃樣の內て栞御持ちの御方あらば何卒御惠み下さいな賴みます先着廿名迄は無調法な者てすが妾の寫眞壹枚ヅヽ差し上升又繪葉書交かんも賴みます（近江國滋賀郡阪本村作道仲之町石川方石川里子）○皆樣どうぞ繪葉書の交換をして下さい（埼玉縣大里郡久下村大字久下島村しげ子）○皆樣ゑはがき交換をねがひます栞御送り下さる方とあみ物御送り下さる方と寫眞御送り下さる方とにはおとぎばなし差上げます（東京芝區車町八十五、難波田うた子）○繪葉書へ短歌俳句をかいて送つて下さる方へは女學世界ムラサキ婦人界を進呈致します但先着二十八名へ（安藝國山縣郡上殿村野澤八重子）○諸孃樣風景及び自筆畫葉書の交換を願ひます（三重縣度會郡濱鄕村黑瀨世古口勘吉方靜子）○誌友諸姉樣よ美はしい繪葉書三葉以上同封にして御送り下さい妾の及ぶ限り面白いものにて御禮致しますよ（千葉縣山武郡土氣本鄕町下大和田字兆久九番地大塚よし子）○高等肉筆及び美術繪はがきの交換を願ひます先着十名限り當地風景繪葉書六拾壹組差上候但し用文は一切書かず詩歌の類を細に美しく書いて下さい（新潟市古町二番町浦澤方水谷八重子）○皆樣妾舶來の繪葉書交換致します（陸奧西郡鰺ヶ澤町漁師町三宅頁子）○自分の寫眞を送る方には寫眞て繪葉書を送る方には繪葉書て相當な返禮を致します繪葉書を送るときは開封にして下さい（岩手縣一關町西新町千葉方鈴木保子）○みなさん、あたしも仲間入りさして頂戴女學校の畫ハかキ持て居ますから御望みの方は交換してください（石見那賀郡濱田町縣內三穗樣方三明糸子）○繪はがきの交換を願ひます必ず御返事致します（小樽區色內町參番地京戸春子）

○圖書換讀

○中等教育日本歷史要解お持の方はお知らせ下さいましな、私は（新撰作文問答）と（同倫理教育問答）の二册と交換を願ひたう存じますから、但し先着者と交かんしてよ、夫れから（神皇正統記校註）お惠贈下さい私は女（學生訓）並に（明治才媛文集）の中お望みのを差し上げ升。（北海道龜田郡七飯村松井長子）○諸孃樣よ繪端書の交換をして下さい、又次に擧ぐる書籍不用ですから繪端書にて『望交際』とのみ書いて下名の宛にて通知して下されば先着者二十五名に限り見計ひ各一册づゝ送ります『不如歸の歌、美人千態詩、新體詩作法、山色水聲、美文斷篇、源平盛衰記、作歌の栞、十六夜日記、土佐日記、枕の草紙、徒然草、太平記、平家物語』其他數種、（群馬縣碓氷郡九十九村大字小日向村第六十九番地横田廣治郎方横田よね子）○左の書籍不用になつて居ますから御望の方は申越し下さい至急は直き送り致します、藻かり舟、白露集、花紅葉、暗香疎影、寒村行、檜木笠、天然と人、風雲漫錄、處世訓、學生訓、續學生訓、格言辭典、文章形容辭典、漢語大辭林等（和歌山縣海草郡和佐村布施屋木村たき子）○親愛なる誌友諸孃よ私は琴歌を少し研究致し度く候へば諸孃の中にて御持ちの方は如何かその愛を裂いて下さい。勿論報酬は及ばずながら致します。（宇都宮市松ヶ峯町十九。山田春波）○文藝倶樂部か新小說の不要のものがあれば御送り下さい必ず御返禮致します（熊本市細工町花里鶴子）○親愛なる諸孃方今後の水彩畫の繪端書栞及び皆樣の御寫眞の御交換を御願ひ申しますよ妾すぐ返しして よ亦妾は先年の女學世界と秀才文壇、女鑑を四十册持て居ます是は優美なる繪はがきの先着者四十名に返しの繪はがきと一所に差し上げます後れるとなくなりますよ妾は出廬、魔風戀風、萬朝小說傑作集、紅水仙、白玉姬、一葉全集、今紫、黃菊白菊、戀と戀、暮雲、花守、磯馴松、若葉集等を持つて居ります諸姉の内に藤村詩集二十五絃紫泉集等を送られなば妾所有の內何れなりとも御返し致します（越後三條局新保神千島內西里玉子）○私方に不用の女鑑（但し明治廿四年より同八年迄）五十册程ございますから美しき繪はがき或は栞にて御申込下さい、先着五十名の御方に差上ます（神戸市兵庫西出町井上周子）○私は魔風戀風前編、中編、紅葉全集卷五、妾の半生涯、理科辭典、ヘーグ奇怪塔、堀江先生の作文教科書卷一、卷二、乳姉妹前後編、其他澤山書物を所持して居ますが紅葉全集卷六、青春、天うつ浪、我輩は猫である、等の書物及其他の本とかへていたゞく事は出事ないでしようか（安藝國高田郡長田村、片村隨風）○諸孃樣誌上で色々と、面白い、理想や意匠の交換があつて妾はほんとうに嬉いですが今一つ唱歌の交換を記者樣のお取次で誌上てか又直接てでも願ひたいのですがどしてせう（兵庫縣飾磨郡白濱村ノ內松原小學校內稻澤隆子）○本誌の昨年のぶん第十一號御不用の御方樣は私へ御讓り遊ばされ度其かはりに私は御禮としまして繪葉書の美しいのをお送り申し上げます御不用の御方樣は左の處まて御知らせ下されたく願申します（廣島市三川町六有田內坂田まさ子）○諸姉樣達の內で漢和大辭典御不用の御方は下名まて御一報下さい相當の代價又は書籍と御交換致します（和歌山縣海草郡和佐村木村こいと）○私は（大町桂月著、黃菊白菊、小杉博士修、美文摸範國語作文、讀賣社の歸省、宮內省藏版の婦女鑑六册全、美文集輕快舟及復活の曙光）不用ですが皆樣の中に（二十五絃、金帆、其他何にても詩集御不用の方あれば交換して頂きたいのです（高知市追手筋八十三春野ゆき子）○皆樣の內女學生訓か女學生の栞、お持ちの方は、下名へ御送り下さい、女子文壇、女鑑、ムラサキ日本の家庭の內どれでも、お好みを差上げます、（茨城縣眞壁郡下館町本城町伊藤濱子）○落語大全及菊花壇と三十六文豪とを所持して居ますで繪葉書先着者三名の方へ進呈いたします繪葉書の交換も御願ひいたします（兵庫縣城崎郡港村の內三角五郎太夫方西澤こう子）○（二十世紀の家庭、婦人畫報三、四、六號、女學世界六卷一號）等不用になつて居りますから皆樣の內でリボンヤ編物よい繪葉書と交換して下さい（長崎市勝山町七野瀨あい子）○行く春、白玉姬、小扇、毒草、あこがれ、花がたみ、花守、睡蓮、藤村詩集、出廬、はつしほ、行く雲、青海波、ユゴーの詩、金色夜叉の歌、西吟新譯、テニソンの詩、シルレル詩集、ロングフエローの詩、虹のかげ、（以上の詩集）反つき影、草枕、不二山、詩劇海堡技師、和譯「アースト」以上の中で何れにても御送り下さいます方には不出來て御座いますが自製の肘突、紙栞、亦は新曲浦島、二十五絃、春鳥集、戀衣、舞姬、耶蘇の戀、金帆、銀鈴、まひる野、

ゲーテの詩、不如歸の歌、塔影、及び天うつ波、夏子、にせ紫、哲の卷、やどり木の中で御氣に召すのを御返し致し升（江州甲賀郡柏木村出泉百廿五番地順治樣方にて泉つゆ子）○妾は小說「夏子」歌集「みだれ髮」「英詩研究」その他英語小說等を所持して居りますが誰か小說「伯爵夫人」か「頁人の自白」（英文の方でもかまひません）がその他の新小說か新派歌集と交換して下さいませんか（大阪市鹽町一丁目松尾ふさ方つゆ子）○私手許に新體詩集「心琴」と外「新婚」と云本を所持して居升諸姉樣の中小說「極樂村」お持の方は御交換下されまじくや（石狩國由仁村小川初子）

○剽竊詩文の注意

例の通り諸方より注意ありし剽竊詩文を左に列載す。

▲二卷五號の部

▲下總、芳竹女史。論文地賞下總多古町山麓芳竹女史の「人に長たるもの」は大町桂月氏著「續學生訓」五十八頁人に長たるものを全然剽竊したるものなり。

▲岐阜、紫女史。論文秀逸岐阜紫女史の「快樂」は同じく桂月氏著「學生訓」八頁人生の快樂と云ふに二行の「されど……」より十三行の「……人生は」をつぎ足して出せしものなり。

▲相撲、霧生かめ子。抒情文秀逸相撲霧生かめ子の「おゝ我が人よ」は一昨年の「帝國文學」に出でたる文中の一節なり切拔きを持てる人あり。

▲羽前、案山子女。敍事文秀逸羽前案山子女の「春の水」は三十七年五月發行「中學文壇」天賞の剽竊なり。

▲磐城、佐藤榮子。消息文秀逸磐城佐藤榮子の「ABCかるたを贈る文」は三十五年五月發行「少年世界」伊勢濱林生之助君の「角力雙六を贈る文」と只二三句の相違あるのみ。

▲芝　陳すみ子。小說秀逸芝區陳すみ子の「弱き者」は三十七年二月發行「文華」二號一七一頁大阪今村春山作小品文「小夜しぐれ」の剽竊にして篇中人物の名だけを變へたり。

▲熊本、鶴の聲。はがき文秀逸熊本鶴の聲の「御嫁入」は世に同文の存在せる事實あり何より剽竊したるかは未だ明瞭ならず。

▲楓女史。俳句秀逸楓女史の「おぼろ月……」の句は「中學文林」一ノ二地位伊規須翠楊氏の句と只梅花の字が櫻とありし相違のみ。

▲二卷四號の部

▲川島輝美子。消息文秀逸川島輝美子の「試驗に落第せし人に送る文」は奥野松子著「新撰女子書翰文」百八頁の同題の文と終結の三字が違ふのみ全然剽竊なり。

▲和歌山、森井熊枝。消息文八十三頁和歌山縣森井熊枝の「母より寫眞を送られし返し」は女學世界三卷四號花錦四十九頁にある信濃錦織幸子君の文に同じ。

▲臺灣、波江野紫子。新體詩三三頁臺灣波江野紫子の「落日」は三十六年三月發行「女學世界」增刊花にしき中、名古屋市大原ゝゑ子君の作天賞の「落日」の第三節を拔いて剽竊したるもの。

▲神田、はま子。新体詩三〇頁神田はま子の「湖畔の夕暮」は「中學文壇」五年七集天賞石狩たそがれ君の作「暮春の湖畔」を剽竊せしものなり。

▲播磨、佐野秀子。和歌天賞播磨飾磨郡英賀村佐野秀子の「下京や……」の歌は本年一月發行の雜誌「學生」和歌欄天賞のを全く剽竊せしもの。

▲二卷二號の部

▲尾張、千代子。論文地賞尾張千代子の「長幼の序」は德富猪一郎氏著「生活と處生」中よりの剽竊なり

本號に於ても亦以上の如く十四人の人間の屑を發見したるは全く忠實なる讀者の注意に依ることゝ其芳名を左に發表す。

○茨城縣、綿引早子○堺市、磨井仙花○正直の子○播磨、愛讀女○富士子○弘前、櫻幹女史○新潟縣、上野志摩子○頓寬堂○長崎市、田中すが子○陸奥、白雪○上毛、秋峯女史○美濃、中島よし子○肥後、八代榮子○麴町、早阪頁子○巖手縣、菊地嶺岩○小波瀨河畔、NN生○氣仙沼林女○美作、巴子。

▲取消。二卷二號圖畵天賞藤田そめ子君の作は剽竊にあらざる事本社に於ても之を認むる故剽竊云々は取消す。又二卷一號消息文特別三賞上毛好月子君の故鄉の友へなる一文は剽竊にあらざる旨細々と申込ありたれば併せて取消す。

廣告料金下記の通改定す發行部數に比較せば最廉無比

募集課目

選評大家（文學士沼波瓊音先生、鷹津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

○論文　○抒情文　○叙事文（各半紙廿四字詰三十行以内）
○消息文（半紙廿四字詰二十行以内）　○はがき文（半紙かな付廿四字四行）
○短編小説（半紙總かな付廿四字六十行内）　○新躰詩（半紙一句以内）
○和歌（半紙半枚一首）　○新歌謠（全上）　○圖畫（一寸の二寸判風俗景色）
○新舊俳句（端書又は半紙半枚一句）
但背色無用日本紙の薄きもの
○誌友倶樂部（半紙を用ひ一行廿二字詰の判に認めらるべし）　▲各欄「題」隨意一人佳作一章宛の事

賞與品

○論文○抒情文○叙事文○消息文○小説○圖畫の當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし
▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢
▲特別賞▼（正金を呈す）
一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢
○新體詩○はがき文○和歌○俳句○新歌謠の當選者へ贈與品左の如し
▲天賞本誌三ヶ月分　▲地賞同二ヶ月分　▲人賞同一ヶ月分
▲特別賞▼（正金を呈す）
一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢
右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽賞状を添へ贈呈すべし
【投稿〆切＝毎月十五日】

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に渉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『原稿在中』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圏點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし、○各種の原稿（全封）取纏郵送するときは開封にして壹出せば卅匁迄二錢にて事足れり

【最寄書店にてなければ直接發行所へ注文を乞ふ】

定價

女子文壇（毎號水彩畫繪端書寫眞口繪數葉挿入）　毎月一日發行

一册（大判六十頁以上）	前金拾錢
六册	前金五拾七錢
十二册	前金壹圓八錢
十六册（定期増刊トモ）	前金壹圓四拾四錢

直接申込に限り郵税全廢無料

定期増刊四回　二月五月八月十一月

注文心得

○本誌は前金の外送本不致候○領收書は一切差出さず候○御注文毎に何號より何册及御住所氏名等は詳細に御認め可被下候○郵券〔收入印紙謝絶〕代用は必ず定價の壹割増に願上候○御問合は返信料付に願上候▲御申越の號數賣切の時は近刊の分を以て送本仕候▲缺本にならぬ法▼…前金拂込むに限るべし

廣告料金　改正

特等	一等	普通
一頁三十圓	一頁廿五圓	一頁廿三圓
半頁……	半頁十三圓	半頁十二圓
一行……	一行……	一行四拾錢

申込發行前十五日

【備考】特等場所は表紙二、四の面なり○壹等場所は表紙三の面、色紙刷各畫別の始終の頁、本文第一頁の對面、石版と寫眞口繪の對面なり○普通場所は本社が適宜に刷込むものなり▲廣告面一行は五號活字廿四字のと半頁は（一段）卅二行分、一頁は（二段）六十四行分也

明治三十九年四月廿八日印刷
明治三十九年五月一日發行

定價金拾錢

（二卷第六號）

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　合名會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十一番地　電話〔本局六〇七番〕　女子文壇社

特約發賣元
東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目弐　東海堂
東京市日本橋區呉服町十六番地　北隆館合資會社
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鎗屋町九番地　道明堂

明治三十九年五月一日發行（毎月一回一日）

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】



パール定價 大瓶金四拾錢 小瓶金貳拾五錢

（女子文壇の廣告により御注文の節は其旨…）

女子文壇 最廉無比 定價金拾錢 郵税壹錢 本社支辨

（東京秀英舍印刷）